
TALES OF HETALIAN

睦月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T A L E S O F H E T A L I A N

【Nコード】

N 6 1 8 1 I

【作者名】

睦月

【あらすじ】

平和な村で暮らす少年フェリシアーノ

彼の祖父は大英雄だがフェリシアーノは危険のない平凡を望んでいた
だがある日空から降ってきた少女によって、その平凡は非凡へと変化していった…

注意書き（必須）

フェリシアーノ×アーサーのRPG連載です
タイトルの通り、テイルズの要素を借りています

注意

アーサーは見た目は普段のままな女体化つまりnotによりあな女体化です

フェリアサですが、他×アーサー要素もあります

ブリ天がアーサーとは別人として出ます

ブリ天も女体化です

イタリア兄弟とは別によりあなイタリア姉妹が出ます

たまに捏造&オリキャラ出ますアーサーの身長が縮んでいる

以上がダメな人はカムバック

OKな人は続きの設定をどうぞご覧ください

人物設定

フェリシアーノ・ヴァルガス

16歳 / 172cm

小さな村に住む平凡を望む青年

爺ちゃんは大英雄で家は貴族の坊ちゃん

両親を亡くしている

兄がいる

今は妹二人と三人暮らし

アーサーには一目惚れした

アーサー・カークランド

17歳 / 166cm

突然空から降ってきた少女

自分の身分を語るうとしない謎の多い人物

なんやかんやで優しいツンデレ

なかなか心からの笑顔を見せずにいる

そして時たま流す涙は…？

フランシス・ボヌフォア

22歳 / 175歳

自称アーサーの騎士

アーサーとは付き合いが長いようで？

ルトヴィツヒ

16歳 / 180cm

フェリシアーノに無理やり旅につき合わされた苦労人
遊び回ってなかなか帰ってこない兄がいるらしいが？

本田菊

??歳 / 165cm

アルフレッドと一緒にいる忍者

ある人物を探しているらしい

アルフレッド・F・ジョーンズ

16歳 / 177cm

通称アーサーの弟

アーサーには冷たくしているが理由があるらしい

イヴァン・ブラギンスキ

??歳 / 182cm

強力な魔術師

寒い氷上都市の教会の司祭

王耀

??歳 / 169cm

彼らがピンチの時に現れた人物

菊とは親密な仲のようだが…

謎の多い人物その2

その他によたりあ&捏造キャラ

デイジー・ヴァルガス

フェリシアーノの妹

姉御肌で兄思いで面倒見が良い

ロビン・ヴァルガス

フェリシアーノの妹

ツンデレ気味な優しい子

アーサーと兄ロヴィーノを気にかけている

ロバート・カークランド

アーサーの兄貴

度が過ぎるツンデレ

かなりブラコン

エドワード・カークランド

アーサーと歳の近い兄貴

優しいけど腹黒い

妙な行動をする

フィリア・カークランド

アーサーの姉

エドワードの双子姉

穏やかで優しいがどこか好戦的で腹黒い

アーサーの話によると故人らしいが…？

00:プロローグ

とある王国

この国は今国民全員が祭のように騒いでいた

王国城の中ではメイドや召使いが忙しそうに走り回っている

「今日は第二王女様と王女様専属騎士様の婚約式ですよ！！早く準備を！！」

今日はこの国の王女と騎士の婚約式があるらしい
きっと国民達が騒いでいるのはこのせいであろう

「王女様…さあ綺麗におめかしできました」

「綺麗ですよ王女様」

「あ…ありがとうございます」

王女と呼ばれた少女はメイドに綺麗におめかしされ、少女の身に纏っている黄緑色と桃色の妖精のようなドレスは少女が動く度にふわりと揺れる

「王女様のご入場！！」

大臣らしき人物の掛け声と同時にファンファーレが城内に鳴り響く
それと同時に豪華な扉が開き、先程の少女が綺麗な付き人と共に真っ赤な絨毯の上を上品かつかるやか歩く

少女の向かう先には、今日彼女と婚約する騎士の姿

「（…今日で…運命が決まる…）」

少女はゆっくりと瞳を閉じて騎士の元へと向かった
だが

「！！！！！」

突然大きな魔力を感じた少女は突然目を見開く

それを見ていた騎士や人間達も何事かとざわざわと騒ぎ出す
すると少女の目の前の空間がぐにやりと歪み、中からは仮面を被り
黒いマントを纏った人物が現れた

「！！！！…誰」

「…………お前があなの…」

少女はその人物に恐怖を感じ、一步後ろへと下がる
黒いマントの人物はじっと少女を見つめる

「そいつに手を出すな！！！！！」

それを見かねた騎士が今にも少女に手を出しそうな黒いマントの人
物にレイピアで挑もうとするが

「！！！！！」

突然黒い突風が起き、突風が消えた後には黒いマントの人物に捕ま
えられた少女の姿があった

「お前っ！！！」

「こいつは俺の主に必要な道具だ
貰っていく」

「嫌…っ！！！！！離…」

嫌がる少女を捕まえたまま、黒いマントの人物は歪んだ空間と共に
消えた

「*****！！！！！！」

パニックを起こし騒ぐ空間の中、残された騎士はただ一人、王女の
名前を叫んだ

n e x t s t o r y

01：空から降ってきた少女（前書き）

サイトの方では結構前からBLEFエリアサの方をやっております

こちらはアナザーストーリーみたいなEfみたいな…

そしてやっと本編入ります

良かったら感想よろしくお願いします

01：空から降ってきた少女

ここはラテン村

小さな村だが綺麗な自然や建物が多いせいか、観光客が多い村だ

「なんか楽しいことないかなー」

そんな村の中を脳天気なこといいながら歩いている琥珀色の瞳と髪を持つ少年がいた

彼の名はフェリシアーノ・ヴァルガス

この村に住んでいる貴族の少年である

「こんな天気の良い日には運命の出会いがありそうだなー」

ちなみにこの言葉

彼は毎日言っている

「今日は丘の上の木陰でシエスタでもしよー!!」

彼は彼なりに平凡を楽しんでいた、なによりも平凡が一番である

フェリシアーノは鼻歌（まるかいて地球）を口ずさみながら、丘の上についた

今日は日が照っているが、丘の上の大きな大木がそびえ立っているその大木を強すぎる日の光をいい感じに遮ってくれるので、大木の下はとても快適な空間だ

「シエスタシエスタ」

嬉しそうに木の元に向かうフェリシアーノ
だが

「ヴえっ」

突然、空が優しい白に光りだした

「なっなに…?!」

フェリシアーノは慌てて空を見上げるその時、空の光は一つの塊に
まとまり、一瞬にいつそう強く光ると何かが飛び出し光は何もなか
ったように消えた

そして、その何かとは

「って……えっ……人ー!？」

人だった

しかもフェリシアーノに向かってゆっくりと舞い降りてくる

「……ヴえヴえっ!!」

フェリシアーノは舞い降りてくる人にどうすればいいかあたふたす
るが、とりあえず受けとることにした
手を伸ばし、ゆっくりと降りてくる人を受け止め…そして、そのま
ま転けた

「いってて……」

でもなんとか受け止めることができ、フェリシアーノは舞い降りて

きた人を見る

「うわあ〜……天使みたい」

舞い降りてきたのは天使……いや小柄な少女だった

n e x t s t o r y

02：俺と妹（前書き）

あまり進まない…

今回はイタちゃんの妹登場からです

本家の竹林のイラストの 伊の口調にしようと思張ってこのありさま…

02：俺と妹

空から舞い降りた天使：いや少女をフェリシアーノはじっと見つめた。

簡素な白いワンピースを纏っている少女の肌は美白と言えるほど白く綺麗で、頬はほんのり桃色を帯びている。

閉じられた瞳には長い睫毛が縁取られており、つい瞳の色は何色なんだろうと楽しみになってしまう。眉毛は少し特徴的だがこれはこれで魅力的である。

短めのくすんだ金髪は触り心地がよさそうだ。

「それにしてもどうしよう…この子放っていくわけにはいかないしな…」

フェリシアーノは丘の上で一人慌てていた。

どうしたものかと考えていると下から声が聞こえた。

「お兄ちゃん！何しているんだい？」

「うわっ…デージー」

丘のすぐ下にはフェリシアーノの面影があるポニーテールの少女がいた。

彼女はフェリシアーノの妹のデージーである。

デージーはフェリシアーノが自分に気づいたのと同時に軽々しく丘を上ってきた。

「…びっぴっクリした」

「よつと…何？お兄ちゃん

ビックリするほどやましいことでもしてたのかい？」

「いやいやいや！…！してないしてないよお！…！俺の童貞も健在だよお！…！…！」

「冗談だつて」

デイジーはけらけら笑うとフェリシアーノの腕の中にいる少女をじつと見つめた

「可愛い子だねえ

お兄ちゃんの彼女？？それにしても見かけない子だねえ？」

「違うよーこの子は空から降ってきたの」

「は？」

意味分らないという顔をするデイジーに、フェリシアーノは少女が降ってきた時の出来事を話した

「なるほどねー」

「それでどうしようかつて…」

「じゃあ、うちに連れて帰ればいいんじゃないかい？うちで寝ていれば目を覚ますと思うし」

それにこんなところに放っておいたら汚れた獣共に食べられちゃうしね」

「……………そうだね」

確かに早く連れて帰らないと少女が…いや少女の貞操が危ないよう
な気がした

フェリシアーノは腕の中の少女を背負った
ふらふらだが

「あ……………」

そこでフェリシアーノは気付いた

「……………この子凄く胸がつるぺただ……………」

少女はつるぺただった。

確かに背中に感じるものは女性の柔らかい胸の感触だが。あまり胸
の発育がよくないようだった。

n e x t s t o r y

03：不思議な少女（前書き）

未だにアーサーの名前が出てない件について

次話には出したいです

あと、早くルート出したい

03：不思議な少女

真っ暗な闇に自分がいた

真っ暗な闇から聞こえるのは恐ろしい声

「コツチニコイ」

やめろ…嫌だ…

「ニゲラレハシナイ」

こっちに近づいてくるな…来るな!!

「モテアソバレ、コロサレル
ソレガオマエノ運命」

…!!…!!

運命…

ああ、そうか…そうだった…

自分の生きるシナリオなんて運命なんて…

そんなの決まっていたんだ

最初から

「モウジカンギレダ……」

自分にはもともと生きる選択肢なんてないんだっただけ……

「そんなことないよ」

「……!!」

突然現れた人影は自分に笑いかけながら手を差し伸べてくれた

はっとして目を覚ました。

「…夢か…」

少女は白いシックなベットの上で寝かされていた。
見た夢のせいか、いやな汗が背中を伝う。

「………」

「ねえ！大丈夫？」

「………」

少女の目の前にひょっこりとフェリシアーノが顔を出した

「だっ…誰だ」

「誰って…俺はフェリシアーノ・ヴァルガスだよ!!」

「いや、聞いているのはそういうことじゃ……………ってどこだここは!」

「どこって…俺の家だけど」

君、空から降ってきたから…」

「…空…から…?……………!!!!」

少女は頭を抱えこんで唸らせた。

しばらくすると目を見開いたので何かを思い出したようである。

「……………すまない」

「いや、女の子には優しくしないといけないしね!」

「……………」

申し訳なさそうに誤る少女にフェリシアーノがにこりと笑いかけた。

その時だった。

「ちょっといいかね?」

初老の男が少女とフェリシアーノがいる部屋に入ってきた。

「村長！！なんでここに…！？」

「フェリシアーノお前が見かけない女の子を連れてきているという情報が入ってな」

「……えっ！？なんで」

訳がわからず首を傾げるフェリシアーノを後目に村長は少女の方を見る。

「さて、お嬢さん

あんたが空から落ちてきた人かね？」

「………はい」

「一体、何をしたか知らんがやめてもらえないか」

「村長！！この子は別に何も…！！」

「フェリシアーノ、お前は黙っておれ

さて続きを聞こう

お嬢さん……君はどこから来たのか？」

村長がそう聞いた途端、少女の顔が困惑した

「それは……言えない」

「それは困る

君は勝手に村に入った部外者だ
答えないといけない義務がある」

「……………」

「さあ、答えるんだ」

「……………」

「……………」

「……………無理だ……っ……！」

少女はそう呟くと、ベットを抜け出して部屋から出て行った

「……！……！……！……！……！」

フェリシアーノも少女の後を追って部屋を出て行った

一人残された村長は彼らが出て行った扉を見つめていた

「言えないか……………そんな言葉が出るような所はこの世界に一つしかない」

……………魔法の国ブリティッシュユランド「

n
e
x
t

s
t
o
r
y

04：涙を笑顔に（前書き）

やっとフエリアサらしくなった

やっと…

あーポケモンBW発売が待ち遠しい（だが関係ない

04：涙を笑顔に

「ちょっと！！待ってよ！！ていっかなんで逃げるのー！？」

フェリシアーノは少女を追いかけていた

しかし少女はそんなフェリシアーノにはお構いなしに彼から逃げ続ける

少女が森へ入ったところを確認するとフェリシアーノは慌てたように大声で叫んだ

「森に入っちゃ駄目だよー！！！魔物がいるんだから！！！」

しかし少女は走り続ける

なのでフェリシアーノもしょうがなく彼女の後を追った

未だにフェリシアーノが自分を追っていることに気付いた少女は急に走るのをやめて、そのまま立ちすくんだ
それを見てフェリシアーノも止まり、ゼーゼーと息をする

「なんで……お前は追いかけてくるんだよ」

「……なんでって……」

「……！！！！じゃあ追いかけてくんなんよっ！！！！！！！！！！」

「えっ……でも……」

「……………どうせ……俺は怪しい奴だよ……安心しろ……この村から
はすぐに出て行く」

「えっ……」

「……俺なんか……いない方がいいんだ……」

フェリシアーノは目を見開いた
なぜなら、彼の視線の先には雫が落ちて地面のしみになっていたから
その雫とはそう、少女の瞳から零れ落ちた涙であろう

「……………」
「……！」

フェリシアーノはそんな少女を後ろから抱きしめた
少女は目を丸くし、驚いた表情でこちらを見上げる

「……………何してんだよ」

「…泣いてる女の子を放っておけるわけないよ」

「……………！」

「君が何が悲しくて泣いているのかは俺は知らない
…けれど、俺は君を笑顔にしたい」

「……………！！……………っのキザやろ……………うっ……………！！」

フェリシアーノは少女の顔面を自分の胸に優しく押し付けた
それを皮切りに少女は声をあげて泣き出した

「……………君の名前教えて」

「……………っ……………」

「…俺は教えたのに君が教えてくれないって不公平だよ」

少女は口を小さく動かした

「……………やー」

「…？」

「…アーサーだっ…アーサー・カーランドだっ…！！ばかあっ」
顔を真っ赤にしてそういうアーサーにフェリシアーノはちいさく笑った

「そっか！アーサーっていうのか！アーサー！」

「なっ…何回も言うな！！ばかあっ」

「はははっ可愛いなあ〜」

ぎゅっと抱きしめてくるフェリシアーノにアーサーは顔を真っ赤にしてばかばかと良いながら軽く彼の胸を叩く

フェリシアーノはそんなアーサーを見て幸せそうに目を細めた

「（…………俺…もしかして…」

…………一目惚れかもね）」

新たに発覚した事実にはふにやりと笑いながらアーサーを再び抱きしめようとしたその時

「フェリシアーノオオオオオ！！！！！！」

凛々しい男の声の耳の中へストレートに入ってきた

がさっという茂みの音と共にムキムキで威つい無愛想な青年が現れた
青年はこちらを見るとまっすぐとこちらへズカズカと歩いてきた

「フェリシアーノオオオオオ！！！！貴様！！森はキケンだと言った
だろっ！！！！」

「うぎゃああああ！！！！だって仕方なかつ…うぎゃああああ！！！！」

ムキムキな青年はフェリシアーノにコブラツイストを食らわせながら怒鳴り散らしていた

「……………」

「あらまあ、ルートったら相変わらずだねえ」

ぼかんとそれを眺めていたアーサーに後ろからデイジーが慣れたように言う

「…あ。アタシ、フェリシアーノ兄ちゃんの妹のデイジー！よろしくね！」

確か…アーサーだね？」

「え…なんで知って」

「さっきお兄ちゃんが名前連呼してたのが聞こえたから」

「…!!」

さっきのやり取りが周りに聞こえていたという事実を知ったアーサーはかあっと顔を赤くする
しばらくプルプルと震えると涙目で叫んだ

「フェリシアーノのばかあああああ!!!!」

n e x t s t o r y

05：旅の準備（前書き）

やっと

旅が始まりそうです

05：旅の準備

あれから、少しのやりとり（ルートヴィヒがフェリシアーノを
めてるやつ）の後

彼らはフェリシアーノの家へと移動した

「…さて、これからどうするかだな」

と、ルートヴィヒはアーサーの方を見る

「全てとは言えないが…話そうと思う」

「……………本当にいいの？」

こくりとアーサーは頷く

そしてアーサーは口を開いた

「……………俺はここからは遙か遠い魔法の国ブリティッシュランドの
間だ」

「ブリティッシュランドって…あの周りとの交流を持たない絶対中
立の魔法の国か？」

「ああ……」

「ねえ？どういうこと？」

「お前な……………まあいい」

簡単に説明してやる

フェリシアーノ！この世界には2つの国があることは知ってるな？」

「うん……」

「それが俺達に今いるジャーマン帝国と魔法王国ブリティッシュラ
ンドだ」

そして、アーサーはそのブリティッシュユランドの国の人間ってわけだ」

「なるほど……」

フェリシアーノが納得したのを見るとアーサーは続けた

「俺も気が付いたらここにいたんだ…なんでかは知らない…」

「そっか…」

「だから、その理由を知るためにブリティッシュユランドへ戻らないといけない」

「まあ、それが先決だろうな

お前の家の人間も心配しているだろう」

「……………うん」

「……………？」

家の人間という言葉にアーサーは少し表情を曇らせた

「だから、俺は国に帰る」

「ブリティッシュユランドへの道分かるのか？」

「それは……………分からない

…悪い

ブリティッシュユランドから出たことがないから」

しゅんと落ち込むアーサーにフェリシアーノは何か思いついたのか、突然声をあげた

「じゃあ……！俺がアーサーをブリティッシュユランドまで送るよ！

！」

「……………えっ」

「女の子の一人旅危ないし……！」

「でも……フェリシアーノ……いいのか？」
「うんっ！……！」

そんな二人のやり取りを見ていたルートヴィツヒはため息をついた

「お前…プリティッシュランドへの道分かるのか？」
「分からない……！」

ルートヴィツヒは頭を抑えてため息をついた

「じゃあ、どうするんだ」
「ルートも行くんだよ……！」
「おっ…俺もか!？」
「うんっ」

どうやらフェリシアーノの中ではルートヴィツヒも同行するのが決まっていたらしい
そのことでフェリシアーノを説教するルートヴィツヒだが、旅に同行するのはまんざらでもないらしい

「じゃあっ!!今すぐにも旅の支度しないとね!!……！」

ガチャツと扉が開くと共にデイジーと彼女にそっくりな緋色のヘアバンドをつけた少女が入ってきた

「デイジーとロビン……！」
「？」
「あの子もフェリシアーノの妹だ」

どうやらロビンと呼ばれた少女もフェリシアーノの妹らしい

ロビンはアーサーの方を見ると、ツカツカと近づき彼女を指差した

「そこにあんた!!!」

「えっ……」

「ちよつとこっちに来なさい!!」

「ええ!?!」

ロビンはアーサーの手を引っ張ると隣の部屋へと連れて行った

「さっ!!お兄ちゃん達は旅の支度して!!」

デイジーはそう言うと、アーサーとロビンが入っていった部屋へと入っていった

「……………」

「とりあえず……準備するか……」

「……そうだね」

残された二人は顔を見合わせると旅の準備をし始めた

n e x t s t o r y

06：旅の始まり（前書き）

今回こそ、旅が始まります

遅くてすみません

06：旅の始まり

白を基調としたワンピースは聖職者の服ねようで、膝丈のスカート部分には膝上20センチのスリットが入れられており、そのスリットから見えるのはこれまたスリットのいれられた膝丈の黒のギャザースカートが見えた

際どいスリットからは黒いニーハイに包まれた白い太腿が絶妙な絶対領域を作っていた

脚は白のショートブーツ

上半身の肩の部分にはまたもやスリットが入れられており、白い肩が見え隠れしていた

そして、首もとを飾る赤いスカーフはリボン結びにされており、アーサーの可愛さを引き立たせていた

「……………」

「あつ…あんまり見るなよばかあつ!!!」

「可愛い!!!!!!」

「抱きつくなばかあつ!!!」

新しい服に身を包んだアーサーにフェリシアーノは抱きついた

「どうよ？アタシとお姉ちゃんが作ったんだよ？アーサー可愛いでしょ」

「当たり前でしょ!!!私がデザインしたんだから!!!」

自慢気というデイジーとツンとしているが自分のデザインした服を着たアーサーが可愛いと言われたのが嬉しいロビン

「ありがとう…二人とも」

「いいわよ別に…！…楽しかったし」

「そうそう！アーサーの胸揉めたし」

「…！！！！！！」

「コラ！デイジー！」

「だってアーサーが胸小さい気にしてるから

揉んであげたんだもん…！！」

デイジーの爆弾発言に顔をこれかというほど真っ赤にするアーサーとデイジーを怒鳴るロビン

男二人のフェリシアーノとルートヴィツヒはちよっと戸惑っていた

「………まあ…話は変わるが…アーサーお前は護身術はできるか？」

「ああ、護身術に魔術を心得ているし、治療術もできる」

「そうか…ならこの杖を持っている

この杖は折りたたみ式でコンパクトに持ち運べる」

「あ…ありがとう」

ルートヴィツヒから杖を受け取り、アーサーは嬉しそうに微笑んだ

「フェリシアーノお兄ちゃんも昔爺ちゃんに剣術習ったんだから、アーサー守ってあげるんだよ」

「まあルートヴィツヒがいるからお兄ちゃんの出番なんてないと思うけど」

「…ひどいなあ」

「でも…」

「…「…「いつてらっしやいお兄ちゃん…！！」」

「………うん！…いつてきます！」

妹二人に見送られ、フェリシアーノは元気よく返事をした

「さあ！！二人とも！！行こう！」

フェリシアーノの言葉にルートヴィツヒとアーサーは頷いた

「目的地はブリティッシュランドだよ！！！」

フェリシアーノは腰の刀を掲げた後歩き出した

こうして彼らの旅は始まった

「次にフェリシアーノお兄ちゃんが帰ってきた時にはアーサーがお義姉ちゃんになってたりしてね！」

「…そうね」

「……………やっぱりまだ心配なんだ」

「うん…」

「一体どこにいるの…ロヴィーノ兄ちゃん」

n
e
x
t

s
t
o
r
y

07:アーサーの秘密(前書き)

ていうか、このタイトルはなんかエロゲーぽいな

ちなみに別タイトル

変態じゃない兄ちゃん現る

07：アーサーの秘密

「ヴェー

大分村から離れたよねー」

「そうだな、大分暗くなってきてるな」

「もう少し行っただころに街がある

今日そこで宿をとろう」

ルートヴィツヒの提案にやったあとフェリシアーノは声をあげる

「それにしてもさー

アーサーの魔術凄いよねー？風がこつピュツとカッターみたいにさ」

「…あの魔術は昔…幼なじみっていうか…腐れ縁に教えてもらった魔術なんだ」

「へえーそうなんだ」

「昔自慢されたのがムカついて必死に練習したんだ」

「なんかアーサーらしいな」

ヴェヴェッとフェリシアーノは笑った

そんな他愛のない話をしているうちに街へとついた

「わあー俺のすんでる村よりおっきい！ー！」

「当たり前だろ」

「田舎者丸出しだな」

「アーサーの住んでるとこはこれより大きい？」

「ん……一応王都だからな…大きい」

「すっげー！！」

「じゃあ、今日は宿をとってゆっくりするか」

ルートヴィツヒがそう言つて宿へ向かおうとしたその時

「ふざけてんじゃねえぞ!!!」

怒号が聞こえた

三人は聞こえた方を見ると、そこには野次馬に囲まれ、その中には高貴な服装をした男を取り囲んだ不良達がいた

「はあ…これだから美しくない奴はやだやだ」

「んだと!!!てめえっ」

「だから女の子寄つてこないんじゃねえの?」

「つてめえ!!!」

美しくないという男はウェーブがかった長髪に青い瞳という誰が見たつて美男子だった

確かに彼に言われたら悔しいだろう

「その顔めちやくちやにしてる!!!」

不良達は一斉に美男子に襲いかかった

しかし、美男子は冷静なまま呪文を詠唱すると余裕綽々の笑みで魔術を繰り出した

「ウインドカッター」

「ぐあっ」

「がっ」

「ぎゃっ」

風の刃が不良達に襲いかかり、不良達は美男子に傷一つつける前に地面と仲良しになった

「……すご……あの魔術ってアーサーがさっき使った……」

アーサーは驚いたように美男子の方を見た

「魔術が使えるとは……あの男はブリティッシュランドの人間か……それともエルフやハーフェルフか？」

「……」

ルートヴィツヒは珍しいものを見るように言った

なぜなら、この世界で魔術を使えるのはブリティッシュランドの間かエルフかハーフェルフしかいないからである

「……」

「……アーサー？」

黙っているアーサーにフェリシアノは声をかける
それと同時に美男子がこちらに気付き近付いてくる

「……！！！」

「久しぶりだなアーサー」

「……え？知り合いなの！？」

「……久しぶりだな

ミスターボヌフォア」

「やだなあ、いつもみたいにフランスってよんでよ」

美男子フランスはどうやらアーサーの知り合いらしい

アーサーは気まずそうに視線を逸らす

「いきなり消えてビックリしたよ

アーサー王女？」

「っ！！！！！」

「えっ！！！？」

アーサー王女という言葉にフェリシアーノは驚いたようにアーサーを見る

「…王女………？」

「なんだお前…言ってなかったのか」

「…どうということなの？」

「……俺が言ってるよ

こいつはブリティッシュランド王家の娘…つまり第二王女アーサー・カーランドだ」

「えっ！！！？」

フェリシアーノとルートヴィッヒは瞳を見開き、アーサーは相変わらず気まずそうに視線を泳がしている

「…アーサーが…王女様？」

n e x t s t o r y

08：我が儘

「…アーサーが王女…？」

フェリシアアーノは驚愕した表情でアーサーを見る

「っ…ごめん…悪気があって隠しているつもりじゃなかった…」

「…アーサー」

「ごめんっ…フェリシアアーノ」

アーサーが今にも泣きそうな顔で謝罪する

「で、お前は何者なんだ」

「俺はアーサー専属護衛親衛隊の隊長フランス・ボヌフォアつまり、アーサーの騎士だ」

「なるほど…それでアーサーを探しにきたのか」

納得したように呟くルートヴィッヒ

フランスは溜め息をつく、泣きそうなアーサーの手をひく

「…！フランス」

「…今からブリティッシュユランドに帰るぞアーサー」

「…！！…でも」

「…みんな心配してんだよ

突然目の前でアーサーが消えたから」

「…………っ待ってよ」

フェリシアアーノはフランスに今にも連れていかれそうなアーサー

のあいてる方の手を掴みフランスを見た

「……何か用かな？坊や」

「……アーサーは俺が送っていくことになっているんだよ」

「……そんなこと知らないな」

こちらはアーサーの兄から直に命令されてんだよ

……こいつはブリティッシュランドの大事なお姫様なんだ」

「……！！！！」

フランスの言葉にフェリシアーノは言い返す言葉がなかった
そんな中今まで黙っていたアーサーがフランスの方を見た

「……いい加減にしるフランス」

「……アーサー？」

「……兄さんや国の人間が心配して探しているのは《ブリティッシュランドの王女》だ」

「……そうだな」

「……でも……その中で誰も……誰も……」

《アーサー・カーランド》を心配してる人間なんていないっ！！
！」

アーサーの悲痛な叫びが街中に響いた

通行人は驚いたようにアーサー達の方を見る

「……」

「俺は……フェリシアーノと一緒にブリティッシュランドに行く！！」

「……アーサー」

周りに野次馬が増えることに気がついたフランスは舌打ちをす

ると、ゆっくりとアーサーを見た

「……………アーサー」

「っなんだよ！！！！」

「…少し……………我が儘がすぎるぞ」

「っ……………あっ！！……………」

フランシスは軽く呪文を唱えるとアーサーはフランシスに向かってたおれてきた
ピクリとも動かない

「アーサー！！！！」

「魔法で眠らせたただけだ」

「…なんで」

「少しは自分が王女だと自覚させないといけないな

お前らはとつとと自分の家へ帰りな

こいつは俺が責任持って連れ帰るから」

「ちよっ……………待って！！！！」

フェリシアーノを無視し、フランシスはアーサーを抱えて移動系魔術でどこかへと行ってしまった

「……………まさかアーサーが王女だとはな」

「……………」

「……………お前これからどいするつもりだ」

冷静に事を見守っていたルートヴィツヒは冷静なままフェリシアーノへ質問した

「……アーサーは俺が送り届けるって言ったんだ」

「……」

「……だから、アーサーが王女だからって関係ないよ」

「………そうか」

「…ルート」

「なんだ」

「今からアーサーを探そう」

「ああそうだな、移動系魔術は確か…そんな遠くへは行けない
だから二人はまだ街中にいるはずだ」

「わかった！」

フェリシアーノが頷くと同時に二人は別々の方向へと走っていった

だが、そんな二人を見ていた人間がいたことは誰も知らない

「……あのキザ野郎、ブリティッシュランドの騎士だよ」

「しかも、あのかわいいこちゃんもブリティッシュランドの王女」

「………これはあのキザ野郎に仕返しができるし、色んなものも手にはいるチャンスだな」

「ああ」

男達は目を合わせるとにたあつと笑った

n e x t s t o r y

08・我が儘（後書き）

1日1話更新頑張ってます

文化祭の準備が忙しいです

09：彼女の気持ち（前書き）

フェリちゃんは普段はヘタレでもアーサーのためなら勇敢に戦います

ルートは普通に勇敢です

常に勇気凛々です

09：彼女の気持ち

簡素だがどこか快適な部屋のシンプルなベッドの上でアーサーは目覚めた

目覚めた途端、視界に移るのは険しい顔をしたフランス

「…大分落ち着いたか？」

「……」

無言で頷くアーサーにフランスは溜め息をつきながら言った

「…探したんだぞ

いきなり連れ浚われるから」

「……ごめん」

「…まあお前も一国の王女だ浚われたりする場合もあるさ」

申し訳なさそうに謝るアーサーにフランスはぶつと吹き出す

「何お前…今日は随分素直なんだな」

「………そうだな」

「おいおい、なんだよ

いつもみたいに「うるせえばか!!」って返さないのかよ」

「………」

「…え

お前本当にどうしちゃったわけ？」

いくらからかって、俯いたままのアーサーに違和感を感じたフラ

ンシスはさすがに心配になるが、アーサーは相変わらず俯いたままである

「……フランス」

「なんだ？また罵声か？」

やっぱりいつものアーサーかとフランスはほっと胸をなで下ろすが、予想外なアーサーの発言に再び驚愕することになる

「俺………ブリティッシュランドには帰らない」

「?!」

その頃フェリシアーノはアーサーを探し回っていた

「ヴェー……アーサーどこにいるんだろ……」

と、街中をウロウロしながら溜め息をついていた
そこヘルートヴィツヒも合流する

「……こんなに探しても見つからないってことは……もう街にはいないのかな？」

「いや、必ず街の中にいるはずだ

気を失っているアーサーを連れただま外には出れないはずだ」

「じゃあ……どこにいるんだよー」

「…冷静になつて考える
アーサーは気を失っている
ならば休ませるのが先決だ」
「……………ということは…」
「今奴らは宿にいますということだ」
「…！そっか…！…！じゃあ宿にいるんだね…！」
「そっだ…！」
「じゃあ行こう！」

フェリシアーノの言葉にルートヴィツヒは頷いて同意を示す
こうして二人は宿屋へと向かった

宿屋に着くにはそれほど時間は掛からなくて、着くとすぐにフロントへ向かい二人がいるであろう部屋を聞き出して、すぐにそこへと向かった

「あそこだ…！」
「うんっ…！」

ルートヴィツヒに促され、フェリシアーノは二人がいる部屋の扉のドアノブを握り、開こうとしたその時

「俺は…ブリティッシュランドには帰らない」

「!?!」

アーサーのその言葉が聞こえたのである

「え……………」

フェリシアーノは状況が分からず、ドアノブを握ったまま扉の前で立ちすくんでいた

すると、扉が激しく開きフェリシアーノは扉に押される感じで尻餅をつく

扉を開けたのはアーサーだった

「……………!!フェリシアーノ」

「…あーさー」

「……………もしかして今のを聞いて……」

「……………ねえアーサー」

今のごういことなの?」

「……………ごめん……………ごめん!!」

「えっ……………アーサー!?!」

アーサーは泣きそうな顔をしてフェリシアーノに謝罪をすると逃げるようにその場から去っていった

next story

10：王女の立場（前書き）

予約機能でいつも日付がずれてるし…

毎日更新できてないし

ちなみに毎日朝の10時に更新しています

ストーリーが進むの遅いです

そしてアサにツンデレが見当たらないし泣いてばかりです

アサは多分この話で一番の不幸な人も…

すみません

早く他の枢連を出したいです

10：王女の立場

フェリシアーノは尻餅をついたまま、アーサーが出て行った方をしばらく見つめていた

「……アーサー」

「……」

「……」

そんなフェリシアーノを見ていたフランシスは自嘲するかのよう
に溜め息をつくとフェリシアーノに言った

「……アーサー……きっと苦しんでいたんだよ

王女という立場に」

「……アーサーが……」

「……なあ、あいつのこと知りたいか？」

「……え」

「全部とは言えねえが」

「……アーサーのこと……か」

フェリシアーノは苦笑しながら呟いた

考えてみれば、自分はアーサーのことを全然知らないのである

彼女が抱えている苦しみも悲しみも全て

アーサーのことを知らない……フェリシアーノは薄々は気付いていた

自分がアーサーの旅に同行することで彼女の抱えている悲しみや苦

しみが消せると思っていた

しかし、それは違っていた

「……アーサーのこと教えてください……」
「……わかった」

フランススはフェリシアアーノとルートヴィッヒを部屋のベッドの上に座るように促すと、話し始めた

「……あいつは知っての通り、ブリティッシュユランドの王女だ」

「……」

「……だけど……あいつは小さい頃からずっと一人……孤独だったんだ」

「……孤独……？」

「……そうだよ」

あいつの両親……つまり前国王夫妻はあいつが生まれてすぐに亡くなっただんだ」

「……」

フェリシアアーノは悲しみをこらえるような表情をした

自分にも経験があった

自分も幼い頃、一番下の妹を産んですぐに両親は亡くなってしまった
その時は凄く悲しくて寂しかった

けれど、祖父や兄、そして妹二人がいて支え合って生き寂しいこと
なんてなかった

「……アーサーには兄が3人、姉が一人いたんだ」

兄3人は両親が死んだのをアーサーのせいにして、あいつをいつも
一人にした

姉はアーサーに優しく接していたが、姉は国外に滞在することが多
くてなかなか会えなかった」

「……そんな」

「そして、あいつが十歳の頃に事件が起きた」

「事件……？」

「ああ、アーサーが誘拐された事件だ」
「!!!!!!」

フェリシアーノはルートヴィツヒと共に目を丸くした

「あいつは歴代王家のどの人間よりも…初代国王と同じぐらいの膨大な魔力の持ち主だし、しかも、王女だしな
ブリティッシュランドの敵にとって、これほど美味しい餌はないだろ？」

「……………」

「それで誘拐されたんだよ
だけど、その後ブリティッシュランドの魔法騎士団達に助けだされ
事件は幕を閉じたと思われた」

「まだ何かあるの!？」

「ああ、あるさ」

フランシスは一息をついてサイドの髪を顔から払いのけると続きを話した

「その事件を皮切りにアーサーはその日から悲しみばかりに襲われることが多くなって…」

…そして四年前に笑顔を失った」

n e x t s t o r y

11：素直な奴（前書き）

今回もアーサーは出ません
すみません…

次回は出ます

次は枢連の中の誰を出そうか…

11：素直な奴

「アーサーは笑顔を失っている……？」

フェリシアーノが呟いた小さな声は静まり返った部屋の中では酷く大きく聞こえた

「……なんでそんなの……」

「……」

「……アーサーは笑ってたよ」

「……それは、偽りの笑顔だろうな」

「……」

フェリシアーノは大きな衝撃をうけた

出会った頃に関心に向けてくれた笑顔とよべるほどではなかったが、どこか愛らしいアーサーの笑顔を偽物だったということに

フェリシアーノはベットからゆっくり立ち上がり扉の方へ向かった

「……どこに行く気だ」

「……アーサーのところだよ」

「行っても無駄だと思っぞ」

アーサーはお前の顔を見た瞬間逃げ出すだろうな」

「……それでもいいよ」

フェリシアーノは強い意思の籠もった琥珀色の瞳をフランススに向けた

「アーサーが逃げ出そうが、俺は何度も何度もアーサーの追いかけるよ」

だってそれが、今の俺がアーサーにできる唯一のことだから」

「!?!?!」

フェリシアーノはフランスにそう言うと再び視線を扉の方へ戻し、扉をあけて部屋から出て行った

「……………」

「…全く本当に計画性のない奴だ」

フェリシアーノとフランスのやりとりを見ていたルートヴィッヒはしょうがないと溜め息をつきながらも、まんざらでもない顔で扉の方へ向かった

「…だが、根は真つ直ぐで馬鹿正直で素直な奴だ
そんなところに信頼を寄せてしまったんだろうな

…俺も…アーサーも」

そう言い残すと、ルートヴィッヒも部屋から出て行った

「……………馬鹿正直か」

1人残されたフランスは窓の外を眺めながら、そう呟いた

「…俺もあいつと出会った頃はそうだったな

…ああ、あと『アイツ』もか」

フランスの頭の中ではアーサーを慕っていた金髪碧眼の人物が浮

かんでいた

「…さてと」

フランススは溜め息をつくと、騎士の隊長格の上着を着て、細刀を腰に差して扉の方へ向かった

「俺も素直じゃないお姫様を探しに行くか」

フランススはドアノブを力強く握った

n e x t s t o r y

0A：トークをしよう!! (前書き)

番外編的な

キャラ崩壊と変態ネタ注意です

OA：トークをしよう！！

説明しよう！

これは登場キャラが織りなす本編一切関係無しのカラ崩壊全開の変態ギャグ多目の会話文である

ちなみにこれからも本編の間にちよくちよく挟んでいくから注意なのである

それらには話数がアルファベットが入るから、嫌ならスルーするのがよろしいであろう

以上バツシュだったのである

フラ「バツシュかよ！！」

アサ「いきなり始まったな」

フラ「ちなみにお兄さんは司会らしい

理由はテイルズでの中的な人的な意味で

あと、本編に登場していないキャラも出てくるよ

まあ本編関係ないけど」

フィリ「ていうか捏造キャラのキャラを上手いこと説明する会話文ですが」

アサ「！姉さん」

フラ「え…アサのお姉さんのフィリアちゃんです」

フィリ「私本編設定じゃ死んでるからこういう出番しかないと思うので、思う存分ここで暴れます」

フラ「暴れるの前提！？」

フィリ「大丈夫ですよ

アサ「には傷一つつけませんから」

フラ「俺達には傷つけるんだ」

フィリ「いや、折ります」

フラ「骨折!？」

フィリ「いや、身体を真つ二つにポキリと
フラ「恐っ

言つとくけど、キャラ崩壊だからね!!!」

ロバ「未恐ろしい妹だ」

アサ「!!!につ兄さん」

フラ「よっ久しぶりだな」

ロバ「おう

あ?なんだアーサー?震えて」

アサ「……っ」

ロバ「震えっぱなしなら、こんな格好させんぞ?あ?」

《こんな格好》

お色気担当の魔女っ娘の黒フリルと黒レースたつぷりの際どい紐ビ
キニ

ちなみに下はTバック

オプシオンで魔女のトンがり帽子と表地は黒で裏地は赤のマントと
ガーターベルトのストッキング地の黒ニーハイ付き

備考:少し食い込んでる方が刺激的でエロくて萌えて理性が飛びそう

フラ「いやいやいや、お前が着せたいだけだろ

お兄さんも見たいけど

すぐく見たいけど」

ロバ「別に見たいに決まってるだからな!!!」

フラ「ツンデレできてない!!!」

フィリ「いいですよね魔女っ娘

ちなみにこの世で一番萌える魔女っ娘は?(アーサー以外)」

ロバ「縁寿」

フラ「ベ아트」

フィリ「見事にバラバラですの

2つともうみねこですが」

アサ「……………（上の衣装見て呆然）」

フィリ「さあ…アーサー」

アサ「??？」

フィリ「着よつか」

アサ「!!?!?え…」

フィリ「さあ、お脱ぎなさい!!?ていうか脱がす!!」

フラ「じー」

ロバ「じー」

フィリ「その馬鹿変態二人こつちみんな！折るぞ！」

二人「すみませんでした!!?!?!」

フィリ「さあ!!アーサー!!服を全部脱いで!!」

アサ「あつ…………やめつ…………!!?!?!」

フィリ「下着も脱がすから!!?!」

アサ「へっ…………ひぎゃっ!!」

フィリ「これですべて脱がしました（凄いスマイル）」

アサ「…………姉さんあまり見ないでくれないか…?」

フィリ「なんで?（さらに凄いスマイル）」

アサ「胸…無くて…………ぺったんこだから」

二人「（やっぱり、つるぺたか（鼻血）」

フィリ「うふ 脚を必死で閉じて、両手で胸を隠してて可愛いなあ

）」

フラ「（何この子変態なの!?!）」

ロバ「（お前に言われちゃお終いだが、変態で間違いない）」

フィリ「ちなみにここはアーサーと王さん以外の全員は変態になりますよ」

二人「（聞こえてる!!?!?!?!）」

フィリ「ちなみにアーサー!!私はアーサーはつるぺたの方が好きですよ!!」

アサ「っへ!!?.....ひあっ!？」

フィリ「上の方はキツイ?()によよ」

アサ「ん...ちよつと食い込んでる」

フィリ「アーサーつるぺただからキツくしないと、ずり落ちちゃっかもよ〜?()によよ」

アサ「んあっ...姉さん

下の方締めすぎ!！」

フィリ「そつちもずり落ちちゃっかもよ〜?()によよ」

二人「もう止めれ!!!!!(股間的な意味で」

んでもって

アサ「う...はずかしい」

フィリ「これが萌えですね(カメラ連写」

フラ「うわ.....理性飛びそうだな」

フィリ「兄さんはもうトイレに行きましたよ」

フラ「早」

菊「何やってるんですフランシスさん!!!そこはアーサーさんの上のビキニを奪うでしょ!!!!!!そしてあわよくば襲え!!!あんだそれでも変態ですか!!!!!!」

フラ「なんかきたー!!!」

つづく...?

もちろんそのあとに上ビキニ奪いました
でも襲えませんでした

だってアーサーにばこられたから

12：騎士（前書き）

今回ちょっと危ない表現があるので注意です

主人公が出ません

すみません

今回からフラ（？）アサのターン

12：騎士

「……………」

人気のない裏通りを抜けた先にある、廃れた公園のベンチにアーサーは膝を抱え込んだまま座っていた

「……………王女、か」

アーサーはそう呟くと、逃げるように顔を膝にうめる
そんな彼女の脳裏には今頃ブリティッシュランドの王女を探す人間達がい思い浮かぶ

「(……………迷惑…かけてばかりだな…)」

翡翠の瞳を細めると、さらに顔を膝にうめた

「お嬢さん！こんな人気のないところで何やってんの？」
「……………」

アーサーは突如声をかけられ、顔をあげた
すると目の前には先程フランスにシバかれていた男達がにやにやと笑っていた

「……………確か…さっきの」

「あれー？俺達のことわかるの？」

相変わらずにやにやと笑いながらアーサーへとじりじりと近づき距離を縮める

「いやー、さっきはあの金髪野郎に女の子をナンパしているところを邪魔されちゃって」

「そうそう、いきなり前に立ちはだかつてきやがって」

きつとそれは、この男達が嫌がる女性を無理矢理にも連れて行くこととしたのをフランススが見かねたからであろう

だが、この男達はあくまで自分達に非がないような物言いを続ける

「俺達としてはやっぱりこのままじゃ腹立つままだからあの野郎をぶちのめしたいわけ」

「でも、それだけじゃ物足りねーの」

男達はそう言いながら、さらにアーサーへと近づいていく

そんな行動の裏へ気が付いたのか、アーサーはベンチから離れようとするが、背後から突然羽交い締めにかかる

アーサーの行動を予期していたのか、いつのまにかベンチの裏側には男達の仲間の1人が待機していたのだ

「！……はっ離せ！！」

アーサーは逃げだそうとジタバタと暴れるが、少女と男では力の差がありすぎてびくともしない

そんなアーサーに男が顔を近付ける

「それより君、ブリティッシュランドの女王様らしいねー」

「！……なんで知って」

「悪いけどさっき盗み聞きさせてもらったよ」

「……………！！！」

アーサーは自分の身分が知らない人間に知られてしまったことにショックを受け、思わず目を伏せる

「それよりも、凄く可愛い顔してるなあー？さすが王女さま」

「なかなかの上玉だしな」

「こういうことしたことあるー？」

と、男はアーサーの胸へと手をあてて軽く掴んだ

アーサーはその行動に目を見開いて、拒絶するように暴れ出す

「っ……………！！！」

「やっぱり王女さまはこんなことしたことないんだー？」

「やめっ……………」

「じゃあ、俺達が教えてやるよ」

「いつ……………いやだ……………！！！」

男達が一斉にアーサーへと手を伸ばす

アーサーは王女ゆえに今までこういう恐怖を知らなかった

だからアーサーは男達が今から自分に何をしだすかは分からないだが、きっとそれは自分にとっては悪いことでしかないことは感じとっていた

「ついでにあの騎士野郎への仕返しになるしな！大事な大事な王女さまが汚されて！！！」

「……………フランシス」

今までフランシスは自分が危険な目にあつた時はいつも助けにきて

くれた

それは騎士ゆえの行動だが、アーサーは嬉しかった
だが、今回ばかりは彼は助けには来てくれない。
なぜなら、自分があんなことを言ってしまったから。
フランスはきつと自分に軽蔑しているだろう

アーサーはこれから自分がされることに恐怖を感じながら、涙に濡
れた目を強く瞑った

それと同時に男達の手がアーサーに触れようとした

だが、突然風が自分から男達を遮るように走った

n e x t s t o r y

13・騎士じゃない(前書き)

1話1話が短いので、これからは1話1話を少し長くします
多分これからは2日に1、2話かもしれません

どうでもいいけど、この話の裏主人公はラスボスになりそう

13：騎士じゃない

アーサーを拘束している男以外は皆、風に軽く吹き飛ばされた

「……!!!」

「なんだあ!!!?」

突風が止み、砂埃が止んだ後に人影が現れた

「……え!!!?」

アーサーはその人影の姿を見ると、驚いたように声をあげる

アーサーの視線の先、そこには

「汚い手で俺の大事な奴にさわんじゃねえよ!!!」

普段のふざけたような態度じゃなく、鋭い剣幕でレイピアを握るフランシスがいた

「……フランシス…なんで!」

「アーサー、大丈夫か?!」

「…なんで…なんで来たんだよ!!!」

「なんでって…」

「俺…あんなこと言ったのに…」

悲しそうな顔でそう言うアーサーにフランシスは呆れたようにため息をつくと彼女に言った

「……俺は騎士として来たんじゃないよ」

「……!!」

「……ただ、素直じゃないくせに寂しがりやで泣き虫な『アーサー』を助けに来ただけだ」

「……!!」

フランスの言葉にアーサーは泣きそうになるのを必死にこらえるように目を瞑る

「……!! テメエツよくもやりやがったな!!!!!!」

「はぁ……さっきのくたばっていればいいのに」

今まで倒れ込んでいた男達はフランスを睨みつけながら一斉に起き上がる

「はっ……こんなことのために、武器を用意してんだよ!!!!」

「いくらテメエでも終わりだぁ!!!!」

と、男達の手握られているのは黒光りするひどく大きく威つい

銃器

「うっわ……趣味悪いな」

フランスはハアと馬鹿にするようにため息をつく

「それに、人質がいるってことを忘れるな!!」

「……!!」

「アーサー!!!!」

と、男はアーサーの方へと近づき首元にナイフを突きつける

「これでデメエも終わりだ!!!!!!!!!!」

「っ…………!!」

「…フランスス!!!!」

銃器の銃口が一齐にフランススに向けられ、絶対絶命だと思われた
だが

「ねーねー、そのナイフでアーサーをどうする気なの？」

「あ？」

状況に合わないのほんとした声が聞こえてきた

全員が一齐に声の持ち主の方へ向いた

そこには

下向きに飛び出たくるん（アホ毛）を揺らす、琥珀色の髪と瞳の少年がアーサーにナイフを突きつける男の側にいた

「なんだお前は!!!!!!!!!!」

と、男はその少年に向かって叫んだその時

少年は素早い動きで地面に手をつきバク転するかのように男の顎を蹴り上げた

当然男はすぐに地面と仲良しになった

「なっ…………!!」

「ヴェヴェツ!!どう？爺ちゃん仕込みの剣術や体術の修行の成果は……」

「てっ…………めえっ!!」

アーサーを拘束している男は少年に向かって叫ぶが自分もすぐに顔面に鉄拳を叩きこまれ地面と仲良しになってしまった

拘束されていたアーサーも男が倒れると同時に地面と衝突しそうになるが、少年に支えられ衝突を防いだ

「怪我はない？アーサー」

「！…フェリシアーノ、…：…ルートヴィッヒ！」

にこりと笑うフェリシアーノがアーサーを支えていたルートヴィッヒもまんざらではない顔である

「くそっ…このクソガキッ！！！」

ダダダダンッ

「うわっヴェヴェッ！！？」

銃弾がフェリシアーノとアーサーを襲うが、フェリシアーノはアーサーを抱え上げると持ち前のすばしっこさですべてを避ける

「ウインドカッター！！！」

それに続くようにフランスは素早く呪文を詠唱し突風の魔術を起こす

全員が吹き飛ばされたと思ったが残った何人かがフランスに向かって銃弾を放つ

「危ない！！！！！」

「!!!?」

フランスはとっさに反応するが間に合わない
銃弾は間違いなくフランスに撃ち抜くと思われたが

「ファイアボール!!!」

「へ!!!?」

紅蓮の塊が燃え上がりながら、銃弾を燃やし尽くし残った男達へと
衝突した

男達の断末魔の叫びが広場に木霊する

その火の玉を出したのはフェリシアーノに抱え上げられている人物

「危なかったな…」

「…まさか…今のアーサーが？」

可愛い顔してやることは凶暴だったアーサーにフェリシアーノはぞ
っとした

フランスは驚いたようアーサーを見た

「……アーサーお前」

「!!!…騎士を大事にするのも王女の務めなんだからな!!!
かつ…勘違いするなよ!!!」

いつもどおりのツンデレを發揮するアーサーに苦笑すると、フラン
シスは彼女に近付く

「フランスス……
さっきは……その……ごめん」

アーサーはしゅんとうなだれて顔を落とす

「アーサー」

「……？」

「……お前は王女という立場が嫌かもしれない」

「……だけど、ブリティッシュランドの王女も素直じゃないくせに寂しがりや泣き虫でがさつな女の子も『アーサー』っていう人間に変わりはないんだよだから」

フランススはアーサーの右手を軽く握る

アーサーは驚いたように顔をあげフランススを見る

「そんな『アーサー』を大切にしている人間がすぐ近くにいることを忘れるな」

アーサーの瞳から一筋の涙がぽつりと落ちる

フェリシアアーノはにこりと笑いながらフランススの隣にやってくる
ルートヴィッヒもそれに続く

「俺も！！俺も！！アーサーが王女だっことにビックリしたけど、
アーサーはアーサーだしね！」

「俺も同じ意見だ」

「フェリシアアーノ……ルートヴィッヒ……」

アーサーの二つの翡翠からぽたぽたと雫が次々と地面へ零れ落ちていく

「あなたは一人じゃないんですよ？お姫様」

そう言って、かしづいてアーサーの右手の平の口づけを落とすフリスにアーサーはぽかぁとだけ言った

n e x t s t o r y

14：謎の旅人（前書き）

兄ちゃんがどんどん通常運転になっていきます

アサにも通常運転、つまりシンデレラになっていきます

14：謎の旅人

青空の下のメルヘンと上品をかけ合わせたかのような城のバルコニーに一人の金髪的青年が空を眺めていた

そこへ一匹の図体の大きな赤い竜が青年のもとへとやってくる

「！……どうした？モーガン」

どうやら赤い竜はモーガンという名前らしい

モーガンは青年の側まで寄ると口に加えていた紙きれを青年にとるように促した

「これ……なんだ」

青年は紙きれを受け取ると、四つ折りに折られているそれを開いて中身を見た

すると、青年はすぐに目つきを変えた

「……………これ……モーガンまさか……！」

青年が思っていることを察知したモーガンは首を縦に振った

「……………生きて……いたんだ」

「……………ガウ」

青年は内容に驚いたがすぐに嬉しそうな表情をするとモーガンに言った

「…アーサーとあいつが無事に戻って来れるといいな」
「…ガウ」

モーガンも嬉しそうに相槌をうつた

……アーサー…

「ん……………」

アーサーはただっ広い草原で後ろを向いた
呼ばれた気がしたが、後ろには何もなかった

「?どうしたのー?」

「……いや、なんか呼ばれた気がして……………」

「でも何もいないよ?」

「ん…そうだな

気のせいかもな」

アーサーはそう言つと、前に向き直つた

「おーいお前らー早く来いよ」

「あーうん!行こうアーサー」

「あ…うん」

慌ててフランシスとルートヴィツヒの元へ向かうフェリシアーノの後からアーサーもついて行く

あれから、アーサーはフランシスに論されブリティッシュランドへと戻ることを再び決めた

だが、その代わりにフェリシアーノ達も一緒に行くことを条件にした無理だと言おうとしたフランシスだが、結局彼はアーサーに甘い上に彼女の涙には弱いので渋々了承したのであった

そして、今彼らは街を抜けた先にある草原にいた

「ちょっとここで休憩するか」

「そうだな」

大分歩いたので、ちょうど木陰が出来ている場所を見つけ、フランシスは腰を下ろす

「アーサーはよく休んでおけよ」

お前はあんまり外の世界になれてないんだしな」

「なっ…こっこれぐらい大丈夫だ…!!」

「はいはい、本当に世話のかかる王女様だな」

フランシスはハアと溜め息をつく

「そんなんだから、胸が育たないんだよ」

「そっ…それは関係ないだろっ…!!!!?」

大体、これは…着痩せだ…!!」

「はいはい、見栄はらなくていいから」

とフランススは両手をアーサーの胸へ押し付けた

「フギヤアアアッ！！！！！！！！」

「フランスス兄ちゃん最低！！」

「お前は幼女趣味か！！！！」

フェリシアーノとルートヴィツヒはフランススを怒鳴るが、返ってルートヴィツヒの言葉がアーサーを傷つけてしまった

「…よつ幼女……俺……そこまで幼児体型か……？」

「「あ」「」

やべと三人はアーサーを見た

アーサーはポロポロと涙を流していた

「あ……ルートとフランスス兄ちゃんがアーサー泣かせたあ！！！！」

「いやいや、ごめん！！アーサー！！胸無くてもアーサー可愛いから！！！！」

「フォローになつてない！！！！」

アーサーを泣かせたことにフェリシアーノは珍しく怒った

それを見たフランススとルートヴィツヒは慌ててフォローをするが、逆にアーサーを傷つけてしまった

それを見てさらに彼らは慌てだした

「女の子を泣かすとは何事あるか」

そこへ、呆れたような声が聞こえてきた
三人はそちらを見ると、そこには焦げ茶の瞳に少し色素の薄い艶やかな黒髪を一つのおさげにし、片腕がノースリーブの中華服を着た少女のような人間がいた

「え……！？いやこれは……！」

「はあ……たくっ……大丈夫あるか？」

彼女（？）は溜め息をつく、アーサーのもとへ寄って頭を撫でる

「別に胸がねーこと気にしねーでいいあるよ

そんなもんなくても、お前は十分すぎるぐらい魅力的ある」

「あ……ありがとう」

「女の子は笑うのが一番ある」

彼女はにこりと笑った

それにつられアーサーも小さく笑う

「……ちよっと、悪いんだけど……えっとお嬢さん」

「ん？」

ギロつと凄い形相でこちらを見る黒髪の人物

フランシスは自然と顔が真っ青になる

フェリシアーノなんかガクブルしている

「だ・れ・が・

お嬢さんあるか？」

「……えっ……！」

「我は男ある！！！！！」

「「「ええっ！！？」」「」

「そして、お前らより年上ある！！！！！」

「「「ええー！！？」」「」

なんと、この少女のような人物は男であった

しかもこの中で最年長であるフランシスよりも年上らしい

「なんか…ごめん…なさい」

「謝ればいいある謝れば」

彼はにこりと笑うとアーサーに向かって言った

「我は王耀っていう旅人ある！よろしくある！」

「あ…よろしく…俺はアーサー・カーランド」

「……！」

アーサーの名前を聞き、耀は少しピクリと反応したが表には出していない

アーサーに続いてフェリシアーノが自分と他の二人も紹介する

「若いのに旅あるか」

「大変あるな」

「まあね！でも楽しいよ！

耀はなんで旅してるの？」

「我あるか…」

フェリシアーノに聞かれ、耀は真面目な顔で答えた

「…我は…ただ人捜しあるよ」

「…人捜し…:…?」

「…そうある」

「そうなんだー大変だね」

フェリシアーノがそう言うと、耀は真面目な顔から一変して落ち着いた顔でアーサーを見た

「まあ、それよりこれあげるある」

「え…これ」

「旅は女の子には危険がいっぱいある！だから御守りある！」

と耀はペリドットに輝く澄んだ球状の宝石のペンダントをアーサー首にかけてあげた

「…綺麗…だな」

「本当だ…アーサーの目みたい!!」

確かにそれはアーサーの瞳と同じ色と輝きだった

「本当に…いいのか？」

「いいあるよ！遠慮するなある！」

「ありがとう耀」

笑顔をつくるのが苦手なアーサーは精一杯作った偽物の笑顔で耀にお礼を言った

それを見たフランススとフェリシアーノはすぐに偽物だと気付き、いたたまれなくなってしまいそうだった

「じゃあ、我はさきを急ぐある！気をつけるある!」

「うんっ！..!」

「じゃあ、また逢えるといいあるな！！バイバイある！」

耀は大きすぎる荷物を背負うと、こちらに手を振りながら、大きすぎる荷物を背負っているわりには早いペースで走っていった
一同も手を振っていたが、それをみて啞然とした

「なんかハッスルだね..」

「..ああ」

「..俺達も先を急ぐか」「..ああ」

こうして、彼らも休憩を終わらせて先に進むことにした

それぞれが立ち上がる中、フェリシアーノはアーサーの首にかけられているペンダントが目に入る

「（..あれ？）」

その時、アーサーも立ち上がった時に揺れたペンダントが視界に入ってきた

「（.....ん？）」

二人は何かに気がついた

「（.....このペンダントの輝き.....どこかで見たとっな）」

二人は同じこと思っていたのであった

n
e
x
t

s
t
o
r
y

OB・・・日整理をしよう(前書き)

一日情報整理みたいな

感じ

OB：一旦整理をしよう

とりあえず、今までの話に出たキャラ達の補足説明です

・フェリシアーノ・ヴァルガス

主人公で平和主義

爺ちゃんに剣術と体術を教えてもらった

アーサーに一目惚れした

ルートとは友達

ヘタレだが、いざという時にはヘタレを捨てて戦う

・アーサー・カークランド

ヒロインでツンデレ

いろんな人間に可愛いと言われるほど美少女

胸がほとんど無くて、それがとてもコンプレックス

実はブリティッシュランドの第二王女

とても大きな魔力を体に宿している

たまに不思議な夢を見たり、不思議な声を聞く

浚われて、その後フェリシアーノと出会ったら詳しいが詳細不明

悲しい過去がある

そのせいで本当の笑顔を失っている

・フランシス・ボヌフォア

ブリティッシュランドの騎士団の第二王女親衛部隊の隊長

アーサーとは幼なじみらしい

変態

アーサーとは昔何かがあったようであるが詳細不明
アーサーに好意を抱いているようである

・ルートヴィツヒ

フェリシアーノの親友

フェリシアーノと同じ村に住んでいる

彼とは随分信じ合っているらしい

大剣を難なく使いこなして戦っているあたり、何か秘密があるらしいが詳細不明

・デイジー・ヴァルガス

フェリシアーノの妹で未っ子

歳は14歳

だが、アーサーより体が女らしくスタイルがいい

胸は歳のわりにはかなりある

ファッションセンスがいい

フェリシアーノよりしっかりしている

姉御気質

・ロビン・ヴァルガス

フェリシアーノの妹でデイジーの姉

歳は15

ツンデレ気味

結構しっかりもので面倒見もいい

だが、結構涙もろいらしい

兄のロヴィーノのことを心配しているらしい

・ロヴィーノ・ヴァルガス
ヴァルガス兄弟の一番上
行方不明らしいが詳細不明

・金髪の青年
城に住んでいるらしい青年
赤い竜モーガンの飼い主
アーサーの知り合いらしいが詳細不明

・モーガン
巨大な赤い竜
とても利口な性格

・王耀
フェリシアアーノ達の前に現れた謎の旅人
女の子みたいだが、れきつとした男である
フランシスよりも年上らしい
アーサーに御守りをあげた
自分の何倍もの大きさの荷物を軽々と背負うなど、随分ハッスルらしい

人物は以上

あとは用語解説

・ブリティッシュランド

絶対中立の魔法の王国

国民全員が魔力を持っている

その中でもアーサーは特に強力な魔力の持ち主なので狙われている

・エルフ、ハーフエルフ

ブリティッシュランドの国民以外で唯一魔術が使える種族

寿命は1000歳ぐらい

15：新たな不安（前書き）

フラグ建築士フルアンスイス兄ちゃん

今回はあまりストーリーが進んでないわ…

15：新たな不安

「はあ！！？なんだこりゃあ！！！」

全国的に発行されている新聞を読んでいたフランススは急に声をあげた

ちなみにここは街中である

「五月蠅いぞフランスス」

「どうしたのー？急に大声出して」

「いやいや、アーサーそんなに睨まないで？！本当に大変だから！！というかお前に関係あることだから！！」

「はあ！！？」

フランススはフェリシアーノとアーサーの目の前に新聞を出し、自分が読んでいた欄を指差した
そこにはこう書いてあった

- ・ブリティツシュランド王女行方不明！！？
- ・行方不明の王女を狙う人間達
- ・ブリティツシュランドの危機！！
- ・王女が捕まるのも時間の問題！！！！

「って、なんだこの見出しはアア！！！」

「『先日、突然本国から消え、行方不明となったアーサー・カークランド王女（17）』」

ブリティツシュランドは騎士団を駆使して王女を探索中。

だが、王女を狙う賊達も動き出しはじめた。』」

「…つまり、アーサーが狙われはじめたということか？」
「そうだ」

ハア… 大変な旅だ…とフランスはわざとらしく溜め息をついた
アーサーは一応は自覚しているのか、バツの悪そうな顔をしている
そんなアーサーにフェリシアアノはいつものように「大丈夫だよ。」
と励ますが、その励ましは次の瞬間無駄となった

「おいっ！？あれ、ブリティッシュランドの王女じゃねえか！？」
「！！？」

突然、柄の悪そうな、いかにも賊です。っていう男達がアーサーを
指差して叫んだ
その叫びを聞いて、にやにやと厭らしい笑みを浮かべている賊達が
わらわらと集まってきた

「…あれが噂の王女か……」
「捕まえれば、ブリティッシュランドを…」
「しかも、結構可愛い顔してるしな」

いつの間にか、とんでもない数になっていた
しかも全員、アーサーを見てにやにやと笑っていた
フランスはやばいと思い、その瞬間フェリシアアノとルートヴィ
ッヒに合図をして走り出した。
アーサーを抱えながら。

「って、賊多すぎだろおお……！！！！！！」

賊には追いかけれながら、フランシスは盛大にツツコんだ

ここは、帝国東北部の街キツロゴである

帝国内の街の中でも、あまり発展の早くない街であり、行き場を無くした賊やハンターが沢山いて、治安の悪さは帝国の中でも屈指である

ちなみに、なんで彼らがこんな危険な街にいるかというと

目的地のブリティッシュランドへは帝国から出国しないと行けないので、この街を抜け北にある氷上都市ルーヴルの近くにある港を指している

そこへ着けば、あとは船に乗ってブリティッシュランドへ向かうのみである

だから仕方無くここを通っていたのであった

「ちっ…あいつら何処へ行った!？」

「逃げ足の速い奴らだ」

なんとか一同は建物の陰に隠れ、賊を撒くことに成功したようだ

「なんとか逃げ切ったな」

とルートヴィヒはほっと胸を撫で下ろす

ちなみに、フランシスが入ってからというもの、彼の気が休まることはなく、むしろ余計に苦勞している苦勞人なのである

「本当良かったわー」

「って…人のケツ撫でながら言ってるじゃねーよ!!!」

抱えているアーサーの臀部を楽しそうに撫でるフランシスに彼女の重い右ストレートが入った。

「フランスス兄ちゃん〜!!!」

「って怒るなよフェリシアーノ!!!」

頬をぶく〜と膨らませて怒るフェリシアーノにフランススは両手をあげ降参した。

何故、彼が降参したかというフェリシアーノのオーラが凄まじかったのである。

何か真っ黒な…。

間違いなく嫉妬からだろう。

「なんか、フェリシアーノ見てるとアルフレッド思い出すな〜」

フランススが思わずごぼしたセリフ。

それにアーサーの肩はびくりと跳ねた。

「?…アルフレッド?」

「まあ、幼なじみだな

いつつアーサーの後ろをついて行ってた奴だったな

まあ、おとう…!!!」

言葉を言い終える前にフランススはさっと口を閉じた。

マズい…!!!と彼は思った。

「(…アーサーには禁句だったな)」

フランススはアーサーの方をちらりと見た。

アーサーは平気そうな態度だったが、彼女の手のひらは震えていた。

「…まあ、話はこれぐらいにして宿でもとって今日は休むか」

「……？フランスス兄ちゃん？」

「……？どうした」

「まあ、アーサーも疲れているみたいだしな」

ハハと乾いた笑いを零しながら、フランススはアーサーの肩を抱きながら宿で休むように言った。

フェリシアーノとルートヴィッヒも最初はフランススの態度を疑問に思っていたが、すぐにそれは消し飛び、宿へと向かうことにした。

「（……………アルフレッド）」

だが、アーサーは宿へと向かいながら、どこか浮かぬ顔をしていた

n e x t s t o r y

16：アルフレッド

「えっと、ツイン二部屋とシングル一部屋で」

まだ太陽が沈まない昼頃、彼らは早めに宿をとって休むことにした。宿は木の造りで観葉植物などの配置もよく、こまめに掃除をしているのか、埃一つない清潔感溢れていて過ごしやすそうだ。今日は走りまわったので疲労感が酷い。

「これが、鍵だ」

と、宿のフロントの係員は部屋番号が彫られた鍵を2つフランスに渡す。

「???:鍵一つたりないぞ」

「ああ、その2つはツインの部屋さ」

「じゃあ、シングルの鍵は…?」

「シングルに泊まるのは、その金髪の子だろ?」

にやと笑う係員はフランスの質問に答えずにアーサーを指差す

「??:…そうだが」

「そうか…なら、ついて来な案内する」

と、係員はアーサーについて来るように促すが

「……………ねえルート」

「?なんだ」

「係員の人…さっきからアーサーを見てにやにやしてるよ」

フェリシアーノは不機嫌そうに眉間に皺を寄せて係員を指差す

その途端に係員はぎくりと体を強ばらせる

「へっ…!!?!?」

「いっ…いやその…えっと」

係員の胡散臭い態度にフェリシアーノとルートヴィツヒは疑いの眼差しを向けた

「もしかして、こいつもアーサーを…」

「!?!?!…いやだなあ!!そんなことないですよ」

「どすよ?」

「ただ、この女の子が可愛いので鼻の下のばしただけですって!!」

「さあ!?!?!というわけで女の子を一名ご案内!?!?!」

「待て!?!?!」

アーサーの腕を掴み、連れて行くこととする係員にルートヴィツヒは止めようとするが、その前に一発の銃声が木霊し、係員の男の動きをとめた

「!?!?!?!?!」

「…はあ……………今日は珍しく仕事してると思ったら、その女の子捕まえるためやったんか」

「え…誰」

突然、フロント近くの扉から、金髪セミロングのヘアバンドをつけ

た、碧の瞳をした女性が現れた

「……やっぱりアーサーを……」

「なんて奴だ……!!」

「っ……チツ」

フェリシアーノとルートヴィッヒとフランスの3人に睨まれ、係員の男は舌打ちをすると宿から早足で出て行った

「ははっ……あいつはクビやね！」

お嬢ちゃん大丈夫？」

「あ……うん、……ありがとう」

「いやいや、お礼ならその二人に言っただけ！」

黒髪の人がうちを呼びにきて、金髪の人が銃を撃つてとめてくれたんやで！」

金髪の女性はフロント近くのソファアに座っている金髪と黒髪の二人組を指差す

金髪の女性は二人に声をかけると、二人はこちらを向いた

黒髪の方の年若そうな青年は印象の良い微笑みを浮かべ、金髪の青年のような少年の方はどこか気まずそうな表情をしていた

だが、こちらを向いて暫くすると、金髪の少年はあつと声をあげたそれと、同時にぱたつと何かが床につく音がした

「……!!!!」

アーサーだった

アーサーが床に座り込んだ音だった

「……アーサー？」

アーサーの顔は真っ青だった

だが、次の瞬間

急に苦しそうに頭を抑え呻き声をあげた

「……っっ……！」

「……！アーサー……！……どうしたの……？」

「まずい……！！！」

おい、アーサー……！ちょっと悪い……！」

フランシスはすばやく睡眠魔法をアーサーにかけ、彼女を眠らせた

「……！……アーサー」

「……眠らせたただけだ」

「……良かった」

「それよりも……」

フランシスは金髪の少年の方へ向き直った

金髪の少年の眼鏡のフレームに包まれた蒼い空のような瞳と目が合う

「久しぶりだな

アルフレッド」

そう、金髪の少年は彼らの見知った顔であった

n
e
x
t

s
t
o
r
y

17：過去の欠片（前書き）

ついにアルフレッドと菊登場しましたね

やっと、アルアサが書ける！！！！

17：過去の欠片

フランススによって眠らされたアーサーをベルは別の部屋のベッドで寝かせて、彼女の具合を診る。

異常はないとほっと安堵すると部屋を出て、フロント前のロビーへと戻った。

「アーサーちゃんしばらくすれば目を覚ますで」

「うん、色々ありがとう」

「いいよいいよ、気にせんでええよ」

お礼を言うフェリシアーノに、金髪の女性ベルはにこりと微笑んでこたえろと。

「まあ、それより……………」

「……………」

「まさか、お前がいるなんてな…アルフレッド」

「俺もびっくりだよ…まさか行方不明のアーサーがここにいるだなんて」

「まあ、その件に関しては今から説明する」

フランススは今までのことを一通りアルフレッドに話した。

「…なるほど、それでここにいるってわけか」

「お前は何しているんだ？4年前にアーサーの前から消えた後に…」

4年前。その言葉にフェリシアーノはぴくりと反応した。

何かの記憶にひかかったのだ。

「君には関係ないだろ」

「はあ…本当に子供だなお前は」

「悪かったね」

「…いつもアイツを大切にしていたのに…いつもアイツを傷つけしまった

そうだろ？」

「…!!!」

君も…俺のことが言えないんじゃないのかい？

……忘れたとは言わせないさ……あの時のことを…!!!」

アルフレッドとフランシスはお互いに睨み合う。
しだいにロビーの空気が重苦しいものになる。

「まあまあ、アルフレッドさん

落ち着いてください」

「菊!!!…でも」

「今は喧嘩している場合ではありません

少し、外で頭を冷やしてきなさい」

「……っ……分かったよ」

菊という黒髪の小柄な男性に促されて、アルフレッドは渋々外へ出て行った。

「…あのゴーイングマイウェイを手懐けてるなんて凄いなあんだ」

「いえいえ、私にもあんな弟がいるので」

「そうか、大変だな」

フランシスは少し菊に同情した。

「それより、まだ私の自己紹介がまだでしたね
私は本田菊と申します
以後お見知り置きを」

礼儀正しくお辞儀をする菊にフランシスはアルフレッドに彼を見習
つて欲しいと思った。

「アルフレッドさんとは三年前にこことは違う町で出会って、それ
からは一緒に旅をしています」

「若いのに大変だねー」

「いえ、私はあなた方よりうんと年上なので
「年上!!!?」

3人は驚いた、見た目若いのに凄い年上だという菊に。
確か前にも、そんなことあったなとフェリシアーノは苦笑した。
確か、女の子みたいなのに凄い年上な男の人と…。

「それよりも…フランシス。アルフレッドとアーサーは一体どんな
関係なんだ?」

ルートヴィツヒの疑問にフランシスが答える。

「まあ、幼なじみだな

アーサーの父親の前国王とアルフレッドの父親が親友同士で、よく
家族間で交流とかしていたんだ」

「へえ」

「アーサーとアルフレッドも凄く仲が良くて、まるで姉弟みたいで
アーサーもアルフレッドを弟のように可愛がっていた」

「じゃあ、アルフレッドはアーサーの弟分ってこと?」

「まあ、アーサーはそう思っているな
でもアルフレッドは違った」

「…アルフレッドさんはアーサーさんを姉としてではなく、一人の
女性として愛している
…でしょう?」

横やりをいれた菊の言葉にフランシスは静かに頷いた。

「だから四年前、アルフレッドはこのままじゃアーサーは一人の男
として自分を見てくれないと思って、アーサーの前から消えたんだ
……元の関係には戻れないのとアーサーが泣いてしまうのを重々承
知で」

「自分のせいでアイツはいなくなった」と泣きじゃくるアーサーが
フランシスの脳裏をよぎった。

「（結局：俺もアルフレッドもアイツを傷つけて、あいつの笑顔を
奪ってばかりだな）」

フランシスは自嘲気味にため息をついた。

「それで、アーサーはトラウマなんだな
アルフレッドのことが」

ルートヴィヒは冷静なままに静かにそう言った。
重い空気の中、今まで黙っていたフェリシアーノは空気を壊すよう
にのんびりした声で言った。

「…じゃっ…じゃあ！今日はもう話はこれぐらいにして寝ようよ！」
「…フェリシアーノ」

「みんな…疲れているでしょ?…こんな状態じゃアーサーを元気づけられないし…ね?」

ヴェーとフェリシアーノは笑った。

「……………そうですね」

また明日にしましょう」

「今日は寝るか」

フェリシアーノの案で今日は解散して、また明日話すということにした。

街の中のとあるバー。

ここには裏の世界に住む人間達が行き交う場所であり、妖しげな取引の場所でもある。

「くつ…王女捕獲失敗しちゃった」

「はあ…何やってんだよ」

せっかくのチャンスを」

さつき宿から追い出された係員の男は仲間らしき男達に報告をしていた。

「王女の護衛に邪魔されたんだよ!」

「護衛：？」

そこへリーダー格の豪華な身なりをした男が現れ、興味深そうに聞き返した。

「なんか、凄い強い奴らで……」

「……なるほど、それじゃあ王女を捕まえてもすぐに取り返されるな」

すると、リーダー格の男は良い案が思いついたと仲間達にこっそりと耳打ちをした。

「……なら、自滅してもらっしかないなあ」

男の目がキラリと凶悪な眼光を放った。

深夜、アルフレッドは一人、アーサーが眠る部屋へとやってきた。アルフレッドはアーサーが眠るベッドへ近付くとそっと彼女の髪を撫でた。

「……アーサー」

悲しそうな声で呟いたその声が、静かに眠るアーサーに届くことは

ない。

「…君は絶対に俺が守ってみせるから」

アルフレッドはそう言いつつ、出来るだけ音を立てないようにように部屋を出て行った。

早朝、アーサーは目が覚めた。

「……………」

昨日のことをうつすら思い出すと、体が震えてしまった。

「……………アル」

アーサーは泣き出しそうになるのをこらえて、いつもの服に着替える。

「……………こんなのだからアルに嫌われるんだ」

ベッドの上に座って考え事してもネガティブなことにはかならない。

このままではいけないと思ったアーサーは外へ散歩へ出て頭を冷やそうとして宿を出た。

しばらく、ぼーっとしたまま歩き回る

「（……………アルっ）」

だが、ついに耐えられなくなり、その場に崩れて泣き出してしまった。

アルフレッドに再会してからは過去を思い出すばかりであった。行かないでと泣いて懇願する自分の前から振り返らずに立ち去っていくアルフレッドを。

「……………つう……つ……あるっ……！」

「なぜこんなところで泣いているんですか？王女さま？」

「……………っ……！」

泣いている最中に背後から声をかけられる。

「……………！誰んうっ……んんっ」

「最近、あなたを狙う人間が多数いるんですよ？」

背後から突然羽交い締めになれ、口に薬の匂いがする布をあてられる。

アーサーはいやいやっと腕の中で暴れるが、布に塗られた薬が利い

てきたのか、アーサーの動きはしだいに鈍くなっていく。

「んっ……………」

そして、アーサーはついに意識を飛ばしてしまった。

「例えば俺達とか」

気を失ったアーサーを見て、男はにっと笑った。

「ふあゝ…よく寝たあー」

朝、目が覚めたフェリシアーノは目をこすりながら階段を降り、フロントへとやってきた。

「おはようフェリちゃん」

「あーベルさんおはようっー!!」

「よう眠った？」

「うんっ!」

フロント前で和やかに会話をしている中、ベルは何かを思い出したように何かをとりだした。

「どうやら手紙のようだ」

封筒にはフェリシアーノへと書かれている。

「?これは...?」

「なんか、朝ポストにはいつてたんやけど」

フェリシアーノは封筒を開き、中身の手紙を見る。

そこにはこう書かれていた。

フェリシアーノ達へ

今日の正午に町外れの洋館へ来てほしい

アーサーより

n e x t s t o r y

17・過去の欠片（後書き）

18：人質（前書き）

タイトルそのままです

なんて…アルフレッドが好きそうなシチュエーションWWW

町外れにある古びた洋館。

その洋館の壁には蔦が生えており、窓ガラスにはひびが入っており、誰も住んでいる様子はなかった。

「おい、フェリシアーノ

その手紙本当にアーサーからか？」

「うーん…『アーサーより』って書かれているんだからアーサーからだと思っただけ…」

「曖昧だな！！」

アーサーから送られたらしい手紙を見せながら言うフェリシアーノにルートヴィッツヒはツッコんだ。

「でもアーサーは朝からいなかった上にここにも来てないしな」

「たくっ…あのおてんば王女はどこにいるんだか……………ん？」

フランスは何かに気が付きわまさかという顔でフェリシアーノを見る。

「！どうしたの兄ちゃん？」

「…フェリシアーノ、まさかそれ偽物じゃないのか…？」

「ヴェ？」

「…アーサーの名を語る偽物じゃないか？」

フランスのその言葉で、フェリシアーノとルートヴィッツヒはサアと顔を真っ青にする。

《…ガガ……ガー……ガー》
「……！」

全員が手紙に疑問を持ったその時、突然彼らと彼らの目の前の洋館の間の空間がグニヤリと歪み、球体の薄紫の水晶が現れた。それから何か雑音が聞こえる。

「なにこれ…？」

「水晶…のようですね」

「！…何か映ってる」

水晶は中が白い霧が渦巻くと、何かを映し出した。そこには、仮面を被った男が映し出されていた。

「……！…誰だ……！」

《ごきげんよう、皆様

今日はある手紙で集まっていたいただいて光栄です》

「！…こいつの仕業か……！」

「一体何が目的ですか……！」

《まあまあ、そう睨まず…

今日集まっていたいたのは他でもない…あなた方にゲームに挑んで欲しいからです》

「ゲーム？」

「誰が貴様のような怪しい奴の頼みなんか…」

《ちなみにこのゲーム

あなた方に不参加の道なんてありませんから》

仮面の男はニヤリと笑う。

その姿を見たフランススは突然何かを感じ、
「まさか………！」
と声をあげて、水晶に映る男を睨んだ。

「お前っ……！！！！よくもっ……！！！！」

「？…フランスス兄ちゃん？」

《くくっ…感づきましたか》

そうですよ、あなたの思っている通りですよ

あなた方に不参加の道がないのは、あなた方はゲームに参加せずにはいられないからです》

「……まさか、フランスス……」

「ああ……」

アルフレッドも感づいた様子を見て、仮面の男はニヤリと笑った。

《そうですよ》

こちらにはあなた方の大事な大事な方が人質にされているのですから

そう……

アーサー王女がね》

水晶には針が突き出す床の上に胴体を縛られて宙吊りにされ、苦しそうな表情で気を失っているアーサーが映し出されていた。

next story

19：ゲームスタート（前書き）

米英のターン

最近兄ちゃんが空気

19：ゲームスタート

「アーサー!!?!?…なんで!?!」

「あんな場所になぜ…!!」

フェリシアーノ達が驚愕する傍らでガシャンッと何かが割れる音がした。

アーサーが映し出されている水晶の一部が木っ端微塵に破壊されたのだ。アルフレッドの拳によって。

「…アーサーに何をしたんだ…!!!!」

ギロリと凄い目つきでアルフレッドは水晶を睨みつける。

だが、水晶はそんなアルフレッドをあざ笑うかのようにすぐに元の姿に戻る。

《今朝、一人で街にいるところを見つけてましてねー

チャンスだと思って捕まえたんですよ

ちなみにまだ何もしていません》

「お前っ…!!!!」

《いや〜可愛い王女様ですなー

もしあなた方がゲームに参加しなかったらどんな姿になるんでしょう》

「…!!!!まさか」

《そのまさかです

あなた方から一人でも不参加を申し出る人がいれば

この王女様は針地獄へ真っ逆さまですよ

さあ、参加するなら洋館の中へ》

「っ……！！なんて下劣な……！！！」

「そんなことにアーサーを……！！！」

《王女様をそんな目に合わせたくないでしょう？》

我々も王女を生け捕りするように言われておるのでそんな目には合わせたくありません

なら……答えは決まっていますよね？》

「っ………上等だよ……！！！」

やってやる……！！！！

そう言うと、アルフレッドは洋館の中へ入って行った。

「アルフレッド……！！！」

「俺達も行こう……！！！」

「はいっ……！！！」

「ああっ……！！！」

アルフレッドに続いて4人も洋館の中へ入っていった。

洋館の中へ入った5人だが、洋館の中は綺麗なままだって普通で骨董品や家具などが置いてあった。

「一体…なんのゲームなんだろ」
「さあな」

フェリシアーノは周りをキョロキョロ見回して、ルートヴィッツは骨董品などを隅々まで調べる。

「……ヴえ…なんか不気味だよ…」
「そうだな…ん？」

ルートヴィッツはフェリシアーノに相槌を打ち、フェリシアーノの方を振り向く。

そして、彼は目を丸くした。

フェリシアーノの背後には剣を振り上げ今にでも襲ってきそうな飾り物である騎士のレプリカがいたからだ。

「フェリシアーノ!!よける!!!!」
「え?!…!!…!!うわあ!!!!?」

騎士のレプリカはガシャンツと音をたててフェリシアーノを襲ってきたが、フェリシアーノは持ち前のすばしっこさでギリギリにかわす。

「なっ…!!何?!!!」
「どうやら、ゲームの一部らしいな」
「次の部屋への扉を見つけましたが、これでは先へ進めません!」

今扉の方へ行ったら、かならず騎士のレプリカはすぐに後を追ってくるだろう。

「…しょうがない

お前たちは先に行け」

「！！！！…ルート！？まさか…」

「安心しろ

絶対に邪魔はさせない」

ルートヴィツヒは強い意志の積もった蒼い瞳をこちらに向け、その意志を感じ取ったのか、フェリシアーノたちはこくりと頷いた。

「…信じていいんだね」

「ああ、安心しろ」

ルートヴィツヒは再び扉の方へ行けと促すと背中に背負っている大剣を取り出して構えた。

フェリシアーノ達は扉の方へ走っていく。

「俺信じてるよ！！ルートが無事に帰ってくること！！」

「ふっ…お前らしいな」

顔を見合わせずに言葉を交わすと、この部屋にはルートヴィツヒと騎士のレプリカだけが残った。

しばらく沈黙が続き、騎士のレプリカが襲ってきたことで戦いが始まった。

「……………まずは一人か……」

水晶に映るルートヴィッヒの姿を見ながら仮面の男は怪しく笑った。男が笑った後、水晶はフェリシアーノ達の姿を映し出した。

「……………さて、生き残る人間がいるか……………なあ？お姫様？」

仮面の男は隣で気絶したまま縛られ、棘の床の上で宙吊りにされているアーサーの頬を卑しい手つきで撫でた

n e x t s t o r y

20・最恐の忍者(前書き)

タイトルがギャグテイスト!!!!!!

20・最恐の忍者

「…んんっ……」

今まで暫く気を失っていたアーサーは少しずつ覚醒した。起きたばかりなせいか視界が少しぼやける。だが、アンバランスな浮遊感により一気に目が覚めた。

「……！！……なんだよこれっ！！！！」

アーサーは自分が縛られ宙吊りにされていることに気付いた。アーサーは自分を縛りつけている縄から抜け出そうと体をもぞもぞと動かす。

「そんなことしても無駄ですよお姫様」

「……！！……っ」

「何者だと言いたそうな顔をしていますね」

「…………」

「でも、今はあなたをこんな目にあわせている人間としか言えませ
ん」

男は驚いたり睨んだりするアーサーを見て、にやりと口角をあげた。

その頃、フェリシアーノ達は次の部屋で大勢の敵と対峙していた。

「ヴェー！これじゃあ次の部屋に進めないよー！！」

「邪魔だぞ！」

フェリシアーノは長剣を、アルフレッドは二丁拳銃を駆使しながら敵を倒していく。

だが、倒しても倒しても敵はこちらに襲いかかってきた。

「チツ…しょうがないですね

あなた方はお先にお行きなさい！！」

「菊！！？」

「ここは私が引き受けます」

菊は腰にさしている日本刀やクナイなどで敵をなぎはらいながら他の面子に言った。

「なっ…菊まで？！こんなに敵がいるんだぞ！！！！」

「大丈夫ですよ！こんなザコ軍団ぐらい！」

「でもっ…」

菊はかなりの高齢だから！！

…とは死んでも裂けても言えないアルフレッド。

すると、一旦戦うのをやめてレイピアをしまったフランシスはアルフレッドを安心させようと、とある一言を言った。

「大丈夫だってアルフレッド！」

「フランスス！」

「フランスス兄ちゃん！」

「フランススさん！」

「俺も一緒に菊と残るからさ」

「はい？」

フランススが自分も残るといい、それに対して不満げな菊ははあっ溜め息をついた。

「まあ、お前らは先に行っておけよ」

「でも……」

「アーサーを助けなきゃいけないだろ？」

「……！」

フランススの言葉でフェリシアーノとアルフレッドは目が覚めた。

「……そうだ……アーサーを助けないと……！」

「フランスス兄ちゃん……菊……」

「任せろって！」

「お二人は先へ行って下さい」

フランススと菊はにっとなつと笑うと、早く行くように二人に言った。

彼らに促され、フェリシアーノとアルフレッドは扉へと全速力で走っていき、扉を開けて次の部屋へと行ってしまった。

それを見送ったフランススと菊は自分の得物に手をかけて、好戦的な笑みで敵へと視線を向けた。

「また、脱落か……くっ」

「フランスス……」

水晶に映るフランススと菊を見て、仮面の男は卑しげに笑い、アーサーは不安そうな声を上げた。

そして、すぐに水晶はフェリシアーノとアルフレッドを映し出した。

「奴らが死ぬのは見たくないだろ？」

「……………」

「どうした？ 悲しみのあまり声も出ないのか？」

「……………」

彼らは必ず生存するとアーサーは信じるが、どこかに不安があった。それと同時に罪悪感があった。

自分のせいでこうなってしまったという気持ちだ。

「ふう……めんどくさいねえ」

「しかも、ウザいですね」

アルフレッドさんみたいで
「アルフレッド!!!?」

チツと舌打ちをしながら眉間に皺を寄せる菊にフランススは恐怖を感じた。

「仕方ありませんね」

「……菊?」

「フランススさん

邪魔しないで下さいね?」

「え……」

菊が凶悪な笑みを浮かべた途端、この部屋は地獄絵図になったとか。

n e x t s t o r y

21:二人の想い(前書き)

今回、フェリちゃんがつおいっす

もうすぐ、合計アクセスが10000だと…!!!?

うおおおおおありがとうございます…!!

21:二人の想い

菊とフランシスにまかせて、次の部屋に来たフェリシアーノとアルフレッド。

その部屋にはお目当ての人物がいた。

「アーサー……」

「……フェリシアーノ……アルツ……」

2人の自分を呼ぶ声に顔をあげたアーサーは震える声で彼らの名前を呼んだ。

ぎしりとアーサーを拘束している縄が音をたてる。

「チツ……ここまで来たか……」

「いい加減アーサーを離したらどうだい!？」

「そうだ!アーサーを返せ!！」

「チツ……」

威勢よく自分に武器を向けるフェリシアーノとアルフレッドに仮面の男は舌打ちをする。

そして、自分の懐からナイフを取り出すと、アーサーを吊している一本のロープにあてた。

「……何を……」

「今すぐ殺し合え!……!どちらかが死んだら王女は助けてやる!……!」

「何言つてんだよ!……!」

「こっちに近付くな!……!近付いたら……!」

ナイフが刃をたててロープに触れて、ぎしりと音が鳴る。
アーサーはその音にぎゅっと瞳を閉じる。

「王女はこの針の海に真つ逆さまだ！！！！！！」

「！！！！……なんてことを！？」

「やっ……やめろ！！！！！！」

ちりりと少しロープに切れ込みを入れるナイフを見た瞬間、2人はやめると訴えかけた。

そんな慌てふためく二人を見て、仮面の男はにやりと笑った。

「じゃあ、早く殺し合え！！手を抜いていたりしても王女は真つ逆さまだからな！！！！」

「……………っ！！！！」

「……………仕方ないよね」

アルフレッドはそう呟くと二丁拳銃を取り出して、銃口をフェリシアーノへと向けた。

「……………まさか…アル！！！！」

「……………その通りだよ」

「やっ……やめろっ！！！！！！アルっ！！！！！！！！！！」

カチャッと銃の引き金に指をかけて、安全装置を外すアルフレッドにアーサーは悲痛な叫びをあげた。

「…アルフレッド、本気なの？」

「本気さ」

「……………ふふっ……………」

「何笑っているんだい!？」

「別に…でも残念!!」

勝つのは俺だから!!」

「!!!!!!」

余裕綽々に口角を上げて笑うフェリシアーノにアルフレッドはその蒼い瞳に怒りを露わにした。

「何言ってるんだい!!君は!!!!」

「当たり前なことだよ!!!!」

「!!!!!!」

普段あまり強気な態度をしないフェリシアーノにアルフレッドだけでなくアーサーも驚愕した。

「俺は…アーサーのことが大好きだよ」

「!!!!!!」

「でも俺はアーサーと出会ったばかりでアーサーのことをあまり知らない…」

「アーサーが本当の笑顔を見せない理由も辛い過去も悲しい想いも…」
「……………」

フェリシアーノのそんな言葉でアルフレッドの脳裏にはとある記憶が蘇った。

何度も何度も悲しみに泣くアーサーと彼女を傷つけるばかりで何も出来ない自分。

フェリシアーノは続けた。

「でも俺は、いつかは本当の笑顔を見せてくれるって信じてる……………」

俺、

君の笑顔が見たいから」

「……フェリ……」

優しいな笑顔を向けて言うフェリシアーノにアーサーは翠の瞳を潤ませた。

「だから、俺は絶対に……
負けない！！！！！！」

フェリシアーノは腰にさしてある長剣を抜いて、アルフレッドに向ける。

「……」
「さあ、かかってきなよ！！アルフレッド！！」

好戦的な笑みを浮かべるフェリシアーノにアルフレッドは下がってきた銃口を再びフェリシアーノにへと向ける。

「アルっ！？」

「……大丈夫さ……君は必ず助ける！！」

「だからって……そんなことするなんて！！！！」

「……アーサー、俺は」

アルフレッドは険しかった顔から一変して穏やかな顔でアーサーに優しく言った。

「四年前……俺は君の手を振り払った」

「……！！！！！！」

「必死に行くなと訴える君を俺は非常にも置いていくことしか出来

なかつたんだ……」

「……」

「でも、これだけは分かって欲しい」

アルフレッドは一回頭を下げるとまた上げて意志の籠もった瞳でアーサーと目を合わせた。

「俺はアーサーのことが何よりも大切なんだ！！！！」

ずっと君を守りたいんだ！！！！」

必死になって叫ぶように言うアルフレッドにアーサーは今まで溜まってきた何かが溢れ出すように、涙が溢れ出した。

「なんつ……で……っ！」

アーサーは下を向いて涙を流し出した。

ぼたりぼたりと雫が針のプールへと落ちていく。

「ええい！！！！小癩な！！！！早く殺し合わんか！！！！」

今までのくだりに痺れを切らした仮面の男は狂ったように叫ぶ。

だが、アルフレッドとフェリシアーノは再びナイフをあてる男に少し焦りを感じる。

「（……フェリシアーノ……アル……）」

そんな二人を見て、アーサーは一人悲痛な思いをした。

二人は自分を大切に思ってくれてる。

自分も二人が大切だ。

このままじゃ二人はお互い傷つけあってしまう。そんなのは絶対に嫌だ。

だから、

「……何を……！」

アーサーは体を揺らして、小さな声で呪文を詠唱する。

「……奔れ光念！」

スパークウエブ！」

かっつと薄金色の魔法陣が浮かび上がると、アーサーを覆うように光の蜘蛛の巣のような網ができ、アーサーを拘束していた縄が千切れる。

もうアーサーの体を縛るものはない。だがアーサーは位置的に仮面の男がいる普通の床までは届くことができるが、縄が千切れることで体のバランスがとれずに、そのまま針のプールへ真っ逆さまである。

「（……………二人が傷つかずにすむなら……）」

アーサーはそのまま、安全な場所へいくことは叶わずに針のプールへと落ちていく。

「……………ありがとう……二人とも」

背後から落ちていくアーサーは瞳から溢れる涙を宙に浮かせながらフェリシアードとアルフレッドの二人へと感謝をした。

「「アアアアアア!!!!!!」」

悲痛な二人の叫び声が部屋に響き渡った。

n e x t s t o r y

22：本気のカ(前書き)

最近はルートのカ

多分、パーティーメンバーが揃ったらルートは空気じゃなくなると
思うよ

22：本気のか

「アーサアアア！！！！！！」

悲痛な叫びが部屋に響いた。

叫びと共に駆け出す二つの足音。

だが、間に合わない。

アーサーは針のすぐ上。

どうか届いてくれ！！と二人が手を必死に伸ばすが届かない。

「アーサー！！！！！！」

ガッ

カガッ

鈍い音が響き渡った。

だが、それはアーサーが針に突き刺さった音ではない。

それは…。

「じゃじゃーん！お姫様のナイトの登場〜！」

「！！！！」

針のプールは見事に耕された感じになって跡形もなく、そこにはアーサーをお姫様抱っこした金髪の大人びた青年が立っていた。

「！！！！フランシス！！！」

「フランシス兄ちゃん！！！！」

そうフランシスだった。

「俺…生きてる」

「当たり前でしょうよ！なんのための俺よ」

得意気にはちつとウインクするフランシス。

そんな姿を見て大変面白くないが、フェリシアーノとアルフレッドはアーサーが無事なのを見るとほっとした。

「くそうっ…貴様どうやって…！！」

「そんなのは簡単！」

ただ、地属性の魔術で針のプールを木っ端微塵にしただけさ！」

得意気になやりとニヒルに笑うフランシスに仮面の男の苛々は最高潮に達した。

「こつなつたら…今すぐ手下達を呼んで…」

「無駄ですよ」

突然菊の声が聞こえ、全員菊の声が聞こえた入り口の方を向く。すると、そこには菊とルートヴィッヒが立っていた。

「菊！！ルート！！！」

「あなたの手下は私達がのしてきました」

「っ！！！！！！」

口元をにやりと弧をつくつて言う菊に仮面の男はつるたえた。

「アーサー…今すぐやってくれるかい？」

「…！…ああ」

「じゃあ、頼むよ！」

「ああ…！」

鳴り響け！喜びの炎念！バーンストライク！！」

アーサーの呪文詠唱と共に杖を天へとかざした後、炎の塊が複数仮面の男へ降り注ぐ。

そろを皮切りにアルフレッドは二丁拳銃を握りしめ、仮面の男を銃弾の嵐へと誘った。

「あれは…魔力を銃弾として放つ魔法銃か…」

「そう、アルフレッドはブリティッシュランドの人間だけど魔術は使わない

だけで拳銃を持たせれば最強なんだ」

アルフレッドの持つ二丁拳銃を興味深そうに見るルートヴィッヒにフランシスは自分のことのようにアルフレッドを自慢する。

「フェリシアアーノ…！」

「うん…！」

フェリシアアーノは剣を構えると、仮面の男へと突っ込んでいった

「いつけえええええ…！」

フェリシアアーノの流星のような強烈な一撃が仮面の男にクリーンヒ

ツトする。
もろに食らってしまった男はそのままふっとんで行き、たおれてしまった。

「っ！！やったー！倒したよ！」

フェリシアーノは大喜びでアーサー達の元へ戻っていく。

「俺のおかげだろ？」

「えーきめたのは俺だよー」

「まあ…二人とも…良かったんじゃない、か」

「！アーサー」

顔を真っ赤にして褒めてくれるアーサーにアルフレッドとフェリシアーノは振り向いた。

「……………ありがとな」

「え……………!？」

「今……………」

「……………助けて、くれて

ありがとな……………って言うてんだよ……………!」

「……………!」

フェリシアーノとアルフレッドだけじゃなくフランシスまでもが目を丸くした。

照れたように眉を吊り上げているアーサー。

だが、口元は綻んでいた。

人によつては違うという人もいるかもしれないが…間違えない。

「……………アーサーの、本当の笑顔だ……………」

まだ小さいものではあるが、間違いない。アーサーの本当の笑顔であつた。

アルフレッドへのトラウマも消え、どこかスッキリとしていた。フェリシアーノとアルフレッドは顔をあわせて笑つた。

「?…どうしたんだよ」

「ふふふふっ…別に」

「なんでもないよー」

「??」

二人の怪しげな行動にアーサーはこてんと首を傾げた。

「……………」

そんな雰囲気から離れ、フランシスは一人仮面の男の側へとやってきた。

仮面の男は気は失つてないようである。

「お前、見た感じこの街のマフィアだな？」

「…まあな」

「じゃあ、取引したということか」

「!?!」

仮面の目の穴から男の瞳が見開いたのがわかつた。

「言いな、誰がアーサー王女を捕まえると言つた？」

「……………っ!?!?!?!」

「大事な王女をあんな目にあわせたんだ」

「……………帝国だ」

「……」

「ジャーマン帝国のギルベルト様だ」

「……………」

仮面の男の言葉を聞き、フランスは眉を寄せ舌打ちをした。

n e x t s t o r y

23・恋バナ(前書き)

遅れすぎてすみません…!!!!

今回は閑話みたいなものです

23：恋バナ

「なーなー！アーサーはあの中で誰が好きなん？」
「え？」

男共が全員出張っている頃、アーサーはベルとお茶やお菓子とかを
用意して雑談をしていた。

その時、ベルが突然言い出したのがこれである。

「？……みんな……すっ……好きだが」

「ちゃうって！そんなんじゃない、男として好きってこと！」

「え！！？」

「はーん！さてはいる……」

「違う！！そんなことは……！！」

確かに……全員かっこいいと思うが……」

「……………」

「なっ……なんだよ！？」

「アーサーって男殺しやな」

「えっ！？殺人なんてしたことなんてねーよ！……！！」

「違っって」

ベルは顔を真っ赤にしたり天然炸裂をするアーサーを可愛いと思っ
ながら、男性陣達に少し同情した。

「アーサーは……フェリちゃんやアルフレッドあたりか……いやフラン
シスカ……」

「??？」

ぶつぶつ呟くベルにアーサーはこてんと首を傾げた。

「……………まさか、こんな場面とは……………」

「アーサー誰を選ぶんだろうねえ」

ベルとアーサーの様子を男性陣達はソファアの陰からこっそりと盗み聞きしていた。

菊はアーサーさんの赤面萌え!!とか心の中で叫んでいる。
何故彼らがここにいいのかは不明だが

「アーサーが男殺しってのは納得だわー」

「俺もそう思うんだぞ」

男5人がソファアの陰でベルの言葉に相槌を打つ。

「やっぱりアルフレッド?」

「なんでアルフレッドなんだ?」

「だって、一番近い存在なんやろ?」

「べつ…別に俺とアルフレッドはそんな関係じゃない!!アルフレッドは俺の弟みたいなものだし……………」

アーサーのその言葉の後、アルフレッドがしくしく泣いていたことは彼女は知らない。

フランスとフェリシアアノは大本命のライバル負けた!!と小さくガッツポーズした。

「んじゃあ、フランス?」

フランスはアーサーの騎士なんやろ? 姫と騎士は恋愛関係になりやすいやん!」

「フランスは……………」

フランスは大きな期待を胸に寄せてガッツポーズをした。
だが、そんな期待を打ち砕くのは超鈍感と言われるアーサーであり
…。

「フランスは…ただの腐れ縁だ
ちよっとムカつくし…セクハラしてくるし…

でも嫌いじゃない」

男殺しだ！！！！とフランスは軽くショックを受けた。
その隣でフェリシアーノはガッツポーズをしていた。

「じゃあ、俺かな？」

にこにこ笑いながら二人の会話に耳を傾ける。

「ということとはフェリちゃん？」

「フェリシアーノ？」

ドキドキとフェリシアーノの胸が高鳴っていく。
その隣に男殺しされた騎士と弟がいるが…。

「フェリシアーノは…優しいし明るいし…ちよっと…ていうかかな
りヘタレだし脳天気だけど…良い奴だと…思う」

アーサーの言葉を聞いてフェリシアーノはガッツポーズをしようと
するが…。

「俺の初めての友達だから…」

友達だから…

友達だから…

友達だから…

アーサーの言葉のエコーと共にフェリシアーノはうなだれていった。誰も脈なしかと菊とルートヴィツヒが思った時。

「でも菊は優しいし年上で包容力あるし大人だし…かっこいいよな」

「「「まさかのー！！！！？」」「」」

「やっぱり…年上なん？」

「ていうかアーサー…それは好きっていうよりただの憧れやん」

「だって好きとかよく分かんねーし…」

「アーサー……………」

アーサーはため息をつくど、ぼふっとソファアの背もたれに寄りかかると目を閉じた。

「……………一応王女だから勝手に結婚相手を決められて結婚させられるんだろっな」

「……………そっか」

「アーサーは王女やもんね」

「…例え好きな奴ができて、いつかは離れ離れになるそれはもう決まってるんだ…」

そう言って俯くアーサーにフェリシアーノ達も自然に静かになった。フランシスはそんなアーサーの言葉を聞き流すように窓の外を見ていた。

「ありがとうございます！ベルさん！色々お世話になりました！」

「良いお嫁さんになれるよ」

「フランシス：お前はそればかりだな」

フェリシアーノ達はあれから休息のために何日かこの街に滞在した。ベルの宿で色々お世話になり、今日から再び目的地を目指すことになった。

「ええよええよ！うちも楽しかったし！！……………それに儲けさせてもらうたし」

「ボソツと本音言つな」

「まあ、また遊びに来るんやで！」

「うんっ！！！」

「アーサーも！！！」

「あっ……………ああ」

じゃあまたねえ〜！！と言いながらフェリシアーノ達は歩き出した。ベルは彼らを姿が見えなくなるまで見送った。

見えなくなると、振っていた手をゆっくりと下ろした。

「……………アーサーを寂しがらせたなら駄目やからね」

姿が見えなくなったフェリシアーノに言つよつに呟いた。

n e x t s t o r y

24・不思議な青年（前書き）

今回から少しずつフラグたてていきます

24：不思議な青年

むかしむかし、まだ闇と光が交わっていた頃
光のような金糸と真つ白な真珠のような肌を持つ美しい巫女様がいました

色んな男性を夢中にさせる魅力を持った巫女様でしたが、彼女には大切な人がいました

それがあの伝説の魔導使いマーリン様です
どんな女性も虜にしてしまうマーリン様に巫女様も虜にされてしまいました

マーリン様も巫女様に一目惚れをしました
互いに愛し合った二人には幸せな日々がやってくると誰もが思いま
したが、そんな日が来ることはありませんでした

*****（ここは汚れていて読めない）
その後、愛する人を失ったマーリン様は美しい大天使様と一緒に幸
せな世界を作るために命を捧げました
そして、子孫が幸せな世界を守ってくれることを信じて
マーリン様の*****家と大天使様の

………カークランド家が

パターンと本が閉じられる。
閉じられた本の表紙は色褪せていて長い年月が刻まれていることを
確認させる。

「…これでいいの？」
「うん。いいよ姉さん」
「それにしても、いきなりこの本を読んでだなんて…」
「予言が出たんだ？」
「予言？精霊から？」
「うん。………来るんだって………天使が」

場所は変わり、氷上都市ルーヴル近郊。

「うわぁ…雪凄い…」

「さすが北国ですね」

「うー…寒いのは嫌いなんだぞ!!」

雪がこんこんと降っており、

周りは完全冬景色だった。

全員はそんな風景に思わず感動していた。

…アルフレッドを除いて。

「なんかアーサー嬉しそうだね」

「そうだな」

先程から真っ白な景色を興味津々にキョロキョロ見渡すアーサーの顔には笑顔がこぼれていた。

「これが雪なんだな！」

「え…アーサーは雪見るの初めてなの？」

「ブリティッシュユランドにも雪は降るはずだが」

「ああーそれはねー」

まあ、アーサーが体調崩さないようにアーサーが暮らしている城はいつも天気が魔法で調整されててね

それが晴れと雨と曇りしかないもんだから、ブリティッシュユランドに雪が降っても城は晴れなの」

「そっか…」

「だから初めてなのか」

「まあ、アーサーは初めての雪にはしゃいでいるけど」

お兄さんはそれよりも……

……アーサーの黒タイツに目がいくわ」

フランシスがそう言った途端、ルートヴィッヒがフランシスの頭に容赦ないチョップをいれた。
ちなみにアーサーの穿いている黒タイツは、菊がなぜか用意していたのを防寒として彼女に穿かせたのである。

「はしゃいでいるアーサー萌えですね」

「なんで俺の周りにはまともな大人がいないんだ……」

菊と一緒に来ることにより大人が増えたが、逆にルートヴィッヒは胃が痛むばかりである。

菊はそんなルートヴィッヒを見て軽く苦笑をした。

「雪って冷たいんだな！」

「ヴェヴェツ!!」

「?…ってどうした?フェリシアーノ」
「ヴェー、なんかはしゃいでいるアーサー可愛いなあ〜と思って!」
「!…!」

にこにここと笑うフェリシアーノに指摘され、アーサーはぼんつと顔を真っ赤に染め上げる。

「なっ…!!…べっ別にはしゃいでなんかねえよ!!」

「ヴェー!アーサーの顔真っ赤だ〜!!」

「ばっ…ばっ!…フェリシアーノのばっ!…!」

「っ…いたっ!!いたたっ!!アーサー叩かないでえー!!」

「アーサー!そんなことしても可愛くないんだぞ!」

「うるせえよ!アルのばっ!」

「お姫様なんだからお姫様らしく振る舞えよ」

「黙れ髭!!ていうかケツ触るな!!」

「ぐはっ!!…!」

「なんか賑やかでいいですねー」

「俺は胃が痛いかな」

フランスに右ストレートを喰らわせるアーサーに他の人間達は爆笑したる苦笑したり胃を痛ませたりとしていると、突然ザクツと雪を踏む音が聞こえ、全員はそちらを向く。

「!…!」

「誰だ?」

降ってくる雪の中から氷上都市ルーヴルを背景にマフラーをした凶体の大きな男が現れる。

男は顔こそは笑っていたが、どこか威圧感を出している。

その威圧感に菊とフランススが咄嗟に反応し、自分の得物を構える。

「何者だ！」

「アーサーを狙っているのか？」

「いきなり酷いなあ」

男は苦笑しながらアーサーを見る。

男と視線が合ったアーサーは肩を震わせた後、不用心に男へと近づいていく。

「アーサー！！何してんだい！？」

「またお前を狙っている奴かもしれないぞ！！！！」

アーサーを止めようとアルフレッドとフランシスが制止の声をかけるがアーサーは首を軽く左右に振ると、さらに男へと近づいた。

「こいつ………そんな悪い奴じゃないと思っ」

「はあっ！？」

アーサーは男から何かを感じるらしく、悪い奴じゃないと一言言つと男の目の前で止まり、自分より背の高い男を見上げる。

「ふふ…君がブリティッシュランドのお姫様だね」

アーサーはこくりと頷く。

「真珠のような白い肌に光のような金髪に若葉のような瞳………本当に天使みたいだね」

「…知っているのか？あの話」

「まあね。」

だから来たんだよ

お姫様？」

男はアーサーの頬に軽くキスをした。

リップ音が冷たい世界の中に木霊するように聞こえ、それがフェリシアーノ達に何が起きたのか理解させていくのであった。

「あつ…アーサーから離れるおおおおお！…！！！！！！！」

「今すぐ離れねえとブリティッシュランドの騎士団がお前をフルボッコにするからな！…！！！」

「アーサーがキスされたあああああ！…！！！」

「おやおや若いですね」

「……………本当だな」

アーサーがキスされた（頬だが）ことにショックを隠しきれない3人は動揺しまくっている。

アーサーも顔を真っ赤にしてパニックを起こしている。

「ふふ…おもしろいな」

男はにこりと笑うと踵を返し、ルーヴルへと向かいだした。

「僕はイヴァン・ブラギンスキ

おいでよ、歓迎するよブリティッシュランド王女一行様」

n e x t s t o r y

25・氷の都と姉（前書き）

何が言いたいかというところ

ツンデレ+つるぺたは最強の組み合わせです!!!!!!

25・氷の都と姉

白と黒をベースにした建物、街頭は水晶でできており、それらには雪が程よく積もっている。

アーサーはイヴァンにエスコートされながら、ルーヴルの街に綺麗と感想を述べた。

「綺麗な街だな」

「ふふ、ありがとう」

仲良さそうに歩くアーサーとイヴァンにその後ろを歩くアルフレッドは機嫌悪そうにブツブツと文句を言っていた。

「なんだよアイツ。アーサーと仲良くしてさ。アーサーにキスしやがって」

「なんか気に食わないんだぞ」

「凄いい嫉妬ですね」

「…アーサーをエスコートしていいのは騎士の俺だけだったのに」
「こっちもですね」

二人してブツブツネチネチと文句を言うアルフレッドとフランシスに、菊は苦笑しながらも面白そうに様子を見ていた。

「こっちはこっちで大変だがな」

「アーサーがキスされた…アーサーがキスされた…アーサーがキスされた…」

「シヨック大きいですね」

「単純な奴だからな」

「フェリシアーノ君、別にアーサーさんは唇にキスされたわけでは
ありませんよ？なので安心してください」

「いやいやいや、安心できるのか？！」

「……！あ……！そうだね……！なら安心だね……！」

「お前はそういう奴だったな！」

「アーサー！街綺麗だね……！」

「切り替え早いな……！」

だだつとアーサーのもとへダッシュで走っていくフェリシアーノに
ルートヴィツヒは盛大にツッコんだ。

「着いたよ。ここが僕の家ブラギンスキ大聖堂だよ」

大きな大聖堂は白の壁は水晶の壁で覆われており、屋根付近のステ
ンドグラスには天使と人間達が描かれていた。

「確か……この大聖堂って昔の書物が沢山ある……」

「そうだよ。僕はここの司教をしながら昔のことについて調べてい
るんだ」

「……………」

大聖堂について話すイヴァンの隣でアーサーは黙ったままステンドグラスにうつる天使をじっと見ていた。

「イヴァンちゃん！」

バイーンという音とともに大聖堂の入口からカチューシャをしたシヨートヘアーの巨乳……いや爆乳の女性が出てきた。

「ねっ…姉さん…!!」

「…胸すごいな」

「…凄い揺れてる」

「…巨乳ってレベルじゃないですね」

「…おつきいねえー」

「お前ら自重しろ」

イヴァンの姉らしき人物の胸を見て、男達は各自感想を述べる中、そんな彼らにルートヴィツヒは頭を抑えた。

ぺた…

「……………」

アーサーは隣で男達のそんな感想を聞きながら、両手の手のひらを自分の胸へと当てていた。そして、すぐに涙目になった。うるっと涙を浮かべた瞳をフェリシアーノ達の方へ向けて言った。

「つるぺたで悪かったな…!!どうせ胸なんてねーよ…!!ばかああああ…!!…!!」

「ああー!!アーサー泣かないでくれよ…!!いくら胸が無いからって…!!…!!」

「俺、アーサーのぺったんこ好きだよー！！！！」
「お前らは空気読めー！！！！！！！！！！」

うわああんと泣くアーサーにアルフレッドとフェリシアーノが空気の読めないフォローをするが意味が無かった。

「あー！！あなたがアーサーちゃんねー！！」

「…ふえ？」

「うふふ…かわいいー！！」

「…ひゃあつー！！！！！！」

アーサーに気が付いたイヴァンの姉は、アーサーのもとへ行き勢いよく抱きついた。

アーサーはひゃあつと小さく悲鳴をあげる。

「ふふ…アーサーちゃん可愛い〜」

「えっ…えっ…？」

「ライナ姉さん…」

ライナはアーサーに抱きついたまま楽しそうにアーサーの頬に頬づりを始め、アーサーはびっくりしたまま大人しくしていて、イヴァンはライナに困ったように苦笑していた。
かれこれこのやり取りがあと30分続いたとか。

n e x t s t o r y

おひ・話しましょ(前書き)

ちよい休憩

〇〇…話しましょう

ちょっとした番外編

純粹(?)にアーサー総受け

やっぱりみんな変態

アサ「うわあっ…!」

フェ「どうしたのアーサー!？」

アサ「ちよっと…紅茶こぼしてしまっ…服に染みができて」

フラ「うわあー今すぐ洗濯しないととれないぞソレ」

アサ「そうだな…でも代わりの服どうしよう」

菊様「アーサーさんご心配なく!私が代わりの服を準備しましたので!」

ムキ「なぜ持つてるんだ…」

アル「仕方ないさ菊だから」

アサ「あっ…ありがとう菊」

着てくるな」

んでもって…

濃いめの青の襟には白いラインが入っており、涼しげな白を基調とした布地には赤いスカートが垂れ下がっている。

襟と同じ色のプリーツスカートは大胆にも膝上20センチという短い丈でアーサーの白い脚をさらしており、白い脚は黒のハイソックスと黒のローファー。

仙人「つて…セーラーかよ!!!!!!」

フラ「うわ!!!耀!!!!」

菊様「なんで耀さんが…!?」

仙人「ツツコミが間に合いそうにないからある」

菊様「はあ…!!アーサーさん萌ゆる*^p^*」

仙人「シカトあるか」

フェ「ヴェヴェツ!!アーサー可愛いなあ」

アサ「く!!!!スカート短すぎるだろ!!!!下着がみえるだろ!!!!!!」

菊様「ちよっ!!!萌…!!!アーサーさん萌え…!!!!!!涙目で

スカート押さえるなんて萌え…!!!!!!」

フラ「菊ちゃん落ちて着いて…!!!!!!」

アル「と言いつつ、鼻血出てるぞ君!!!!」

フラ「お前もな」

アル「なんだと!!!!!!英受けカプナンバーワンに何という口の聞き方を!!!!!!」

フラ「腹立つ!!!!!!お兄さんだつて人気なんだからね!!!!」

アル「それはどうかかな?」

全員「え…?」

イギリス

マナーと気品を重んじる自称紳士

若かりし頃はヤンキーだったらしい

料理が好きだが腕前は破壊的

じつは 幼い頃のセーシエルを知る兄貴分

フランスとはケンカ仲間

アメリカに対しては複雑な感情を抱いている

フェ「何これー？」

アル「学ヘタ portable のイギリスの紹介文さ
最後の文に注目してみなよ」

全員「ぐはあっ！！！！（シヨック）」

アル「凄いだろ？米英だろ？フラグだろ？」

フェ「でも、この連載はフェリアアサです」

アル「くっそー！！！！」

親分「何やっとなの？みんなして」

仙人「未登場キャラが来やがったある！」

フラ「帰れ未登場めがコンチクショー」

フェ「ヴェヴェツ！口調が兄ちゃんだあ」

菊様「そしてアーサーさんの萌ゆる*^p^* コスプレ2回目！！」

仙人「暫く喋らねえと思ったらそんなことしてたあるか！！」

やっぱり最後はネコミミ+メイドで

メイドは膝丈サイズで

仙人「いちいちこんな説明いらんある！！！！！！！！」

アサ「ううう…もう嫁に行けない…」

フェ「大丈夫だよ！俺がもらうから！」

アル「いや俺が…」

親分「いや、親分が貰ったる！！」

フラ「いや、お兄さんが貰ったる！！」

ムキ「口調が移ってるぞ」

菊様「なんかもうグダグダですねハイハイ仕方ないですね」

ムキ「面倒くさいだけだろ！！」

菊様「やっぱり最後はアーサーの萌えでしめなければ！！」

アサ「え！？…こんなの…なんて言えばいいんだ！？」

菊様「口調がにゃん！ならなんでもいいですよ！！」

ほらカンペ出てますよ

口調がにゃん！でお願いしますって……」

アサ「えっ!?!」

スタッフ「オチお願いします

……3……2……1どうぞ!」

アサ「うっ……えっ……あのっ

おっ終わりだ……にゃん……?」

……ッ……!……!……!

その後、この場所は惨劇が起きたかのようになったそつな

おわり

最後はみんな鼻血出したんですねwwわかりますww

26・温かさ(前書き)

イヴアアサに見せかけてのフェリアサ……!

そしてフラグ建築しまくり

26・温かさ

「アーサーちゃん可愛い」
「いつまでくつついてんだか」

家の中へ案内され、客室のソファアに座ったアーサーは未だにライナに抱きしめられていた。
それを見たルートヴィツヒはハアとため息をついた。

「う…胸が…!!」
「…!!胸がどうしたの!？」
「いや、姉さんの胸に挟まって苦しんでるんだと思うよ」

イヴァンは苦笑しながら、ライナの胸に挟まれて苦しそうに白眼をむいているアーサーを指差した。

「あ…!!ごごめんなさい…!!」
「…けほっ…いや…別に…」
「よ…良かった」

ライナは涙目でほつと胸をなで下ろすと、お詫びに温かい紅茶煎れてくるねとキッチンへと向かった。…胸を揺らしながら。

「本当に凄いな…あの胸」
「大きいよね」
「男のロマンだね」

お兄さんはどっちもイケるけど、どっちと聞かれたら巨乳かな!」
「何を言うんです!!確かに巨乳もいいですが、やっぱり貧乳でし

よ！！！！希少価値です！！ステータスです！！」

息を荒げて語る菊に若干引きながらも、フェリシアーノとアルフレッドはその会話に混ざろうとしたが、ふとアーサーの胸へと2人揃って視線を向ける。

年頃の女の子にしては随分小さく平らな胸。

「アーサー！！！！俺は貧乳派だよ！！！！」

「俺も！！やっぱり貧乳はいいよね！！揉みやすそうだし！！！！」

くわっという効果音と共にアーサーの手を二人揃って握り彼女に向かって叫ぶように言った。アーサーは訳が分からず何回か瞬きをし首を傾げた。

ちなみにルートヴィッヒは「こいつらはさりげなくセクハラしたぞ」と心の中でツッコんでいた。

「ところでイヴァン…お前さん俺達がここに来ることを分かっていたみたいだが…なんでなんだ？」

「ふふ…それはね」

この地に住む精霊達がアーサー君の気配を感じたんだー」

「俺の？」

突然に自分の名前を出され、アーサーはイヴァンの方を向く。

「うん、古代からこの地に住んでいる精霊は強い魔力を感じやすいからね」

「なるほどな」

じゃあ精霊と話せるってことはイヴァンも魔術使いか？」

「まあ、そうだね」

自分も魔術師だと同意するイヴァンにアーサーは目を輝かせる。
アーサーはブリティッシュシユランド以外で魔術を使える人間を見るのが初めてだからだ。

「僕の場合は生まれた時から精霊と一心同体だから魔術が使えるんだ」

まあ、そのおかげで昔は苦勞したんだけどね。と付け足すイヴァンの顔はどこか寂しげだった。

あれから、彼らはイヴァンの家の地下にある古い資料が置かれていたという書庫へと案内された。
フェリシアーノはわくわくと好奇心いっぱいのお持ちで周りの本を漁りだした。

「おい！こら！フェリシアーノ！！勝手に触る…」

「別にいいよ」

「そっ…そっか」

フェリシアーノを注意していたルートヴィツヒはイヴァンに別に構わないと言われ、自分も古い資料を漁りだす。
フェリシアーノは一冊の古い本を取り出すと、色褪せた赤い表紙の埃をはらって読み始めた。

その本には物語が書かれていた。

美しい巫女様と魅力的な魔術師の悲しい恋の物語。

ひよんなことから彼らは出会い、仲を深めていき幸せな日々を送っていた。だが、巫女故に世界に光を取り戻す為に生贄として悪魔に捧げられることになった巫女様。そこで彼らの幸せな日々は無くなってしまった。

その後、魔術師は天使と出会い、二度とこんなことが起こらないように今日の世界をつくり、魔術師は英雄として讃えられ、天使はこの世界をいつまでも見守るためにどこかへ深い眠りについた。

「……なんか悲しい話だね」

ぽつりと感想を零したフェリシアーノに、その物語を知っている者は頷いた。

「俺も昔その話をアーサーに何回も読んでもらったけど……なんか皮肉だね」

世界のために大切な人が死ぬのを見ることしか出来なかったのに、最終的に自分が世界の英雄になるなんてさ」

「その物語の魔術師って…あの大昔の魔導師マーリンですよね」

実話でも彼は大切な人を亡くしてしまっただらしいですし」

「ならこれって実話なのかな」

「……………永遠の愛か……」

色々な感想が聞こえる中、アーサーの小さな呟きがやけに目立った。

「……………結局一番悪いのはあいつじゃなくて自分…」

「アー…サー？」

アーサーの瞳はいつもと違い、悲しみと後悔に染まり、表情が曇っていた。まるで何かに取り憑かれたように口を動かしているようだった。

「…っアーサーっ！…！！！」

「…！！！！！」

フェリシアーノが叫ぶようにアーサーの名前を呼び、アーサーは正気に戻った。

「？……………フェリシアーノ」

「…？アーサー…どうしちゃったの？いきなり永遠の愛とか言い出しちゃって…」

「へ？！俺そんなこと言ってたか！？」

「あれー！！？」

記憶に無いと言うアーサーにフェリシアーノは首を傾げた。

そんなフェリシアーノとアーサーの隣でとある人物はある書物を見ていた。

そこには、『この世界には唯一の天使の魂が残る一族がある

その一族には天使の魂が世代が代わるごとに受け継がれていき、やがて悲しい運命を持つ、穢れなき乙女に魂が宿る

その一族とは

ブリティッシュシユランダの王家

カークランド家である』

と書かれていた。

「（…やはりな）」

その人物は黙ってその書物を見ていた。

「でも本当に色んな書物があるな
勉強になる」

「でも、イヴァン…なんで俺達にこれを見せたんだ？」

「んー？温かいからかな」

「えっ…？」

イヴァンの意外な一言でアーサーは目を丸くした。

「アーサー君が温かいってことだよ

精霊が教えてくれたのは、悲しみと寂しさしか知らない姫君っていうことだったしね」

「……………」

「でも、実際は違ったね

まだ少し冷たさはあるけど、温かさを持っているんだアーサー君は

色んな人を幸せな気持ちにする…ね！」

にこにここと笑うイヴァンにアーサーも自然と口元が緩んだ。

「（……………温かさ…か

俺もそんなの本当は持ってなかったし、知らなかった…

でも……………」

アーサーはちらりとフェリシアーノを見た。
フェリシアーノは他のみんなと同じように、まだ書物を読んでいた。
アーサーは彼を見ると、自然と胸が温かくなるのを感じた。

「…………お前が教えてくれたんだよな…………」

アーサーはイヴァンの方を向くと、彼の冷たい革手袋に包まれた手を握って言った。

「イヴァンも…俺達と一緒に旅…しないか？」

アーサーの温かさにイヴァンが嬉しそうに頷いた。

n e x t s t o r y

27：恋しい面影（前書き）

ちはるさん！感想ありがとうございます！！返信は活動報告にて記載しています！

今回のテーマ：姉妹は最強ww

27：恋しい面影

「たっ…旅に出るのですか！？兄さん！！」

エプロンドレスを着た色素の薄いブロンドの少女は声を上げると、フェリシアーノ達を睨み付け彼らを震え上がらせた。

「（恐ええええ！！！！！！！！イヴァンの妹超恐ええええええ！！！！！！可愛いけど！！！！！！）」

「（なんか泣きそうだ…）」

「（ヴェー…デイジーと良い勝負だなあー）」

フランシスは凄いい絶叫を（心の中で）上げ、アーサーはがくぶると震え、フェリシアーノは故郷にいるやたらと気の強い妹を思い出した。

「やめなよ…ナターリア」

「でもっ…兄さん！！！！！！」

ナターリアは行かないでと言うようにイヴァンにしがみつく。だが顔がとても恐すぎたためにイヴァンまでもが震えていた。

「まあまあ…ナタちゃん

落ち着いて！」

「でもっ…兄さんが…！！！！！！」

「旅に出るってことはイヴァンちゃんが決めたことなのよ」
「でも…」

ナターリアは不服そうにライナを見るが、ライナはそれを微笑んで受け止めてナターリアの頭を撫でた。

「イヴァンちゃんが好きなら、イヴァンちゃんを応援しなきゃ、…ね？」

「…姉さん」

ライナの言葉にナターリアは寂しそうな表情を浮かべるが、暫くすると静かに頷いた。

「イヴァンちゃん…頑張つてね

お姉ちゃん応援しているわ」

「兄さん！…絶対に帰って来てくださいね！！私待ってますから！…！」

「姉さん…ナターリア…」

絶対に帰ってくるからね！」

寂しさをこらえて自分を応援してくれる姉と妹にイヴァンは微笑んで絶対に帰ってくると頷いた。

「いい…姉妹だな」

「…そうだね」

ルートヴィツヒの言葉にフェリシアーノは故郷で自分を応援してくれている妹達を思い出した。

「…姉か」

アーサーはそれらの光景を羨ましく思いながら呟いた。

空気を読んで、水入らずの三姉弟の時間を邪魔せずようにイヴァンの家からこっそり抜け出し、彼らはルーヴルの街を散歩していた。

「やっぱり、どこの姉もあいうもの…なのか」

雪がゆつくりと舞い降りるルーヴルの街の公園でアーサーはルーヴルの街を見ながら呟いた。

「…アーサーお前…まさか」

「……なんかイヴァン達見ると、俺も姉さんを思い出したんだ」

「えっ…！？アーサーってお姉ちゃんいたの…！？」

「ん？言っただけだったか？」

フェリシアーノの反応に苦笑しながらもアーサーは話を続けた。

「俺の姉さんは…優しくて綺麗で強かったんだ」

俺と違って…」

「確かに強かった子だったな

兄貴を喧嘩で負かしたり魔物を蹴り一発でのしたりな

そして終いには攻めてきた賊達を一人でボコボコにして無傷だった
しな」

「えっ…!!? 蹴り一発で!!?」

フェリシアーノは何故かフランスの語るアーサーの姉に対して恐怖を感じた。

「でも、力だけじゃなくて心も強くて優しい人だったよね

自分の決めたことは最後まで貫き通してさ

頑固っていうのかな」

アルフレッドがははって苦笑するとアーサーも自然とそれに乗った。
った。

「俺は姉さんとは全然似てないしな」

「なーに言ってるんのお姫様!

眉毛や胸はともかく、顔はそっくりだろ!

そして頑固なところも!」

フランスの言葉にアーサーは眉毛と胸は余計だばか!とツッコむ。
それを聞いてたフェリシアーノ達は自然とアーサーの姉に興味を持ち始めた。

「へえ〜なんか俺も会ってみたいなあ〜」

「俺もだ

魔物を一発で仕留めたというのが凄いな」

「私も興味があります」

「やっぱりブリティッシュランドにいるの?」

「いや、違う」

「え…どこに…」

フェリシアーノの問いにアーサーは困ったように笑うとゆっくりと天を指差した。

「……あ」

「…死んだんだ…四年前に」

「…そうなんだ…なんかごめんね」

「あつ…いついや、大丈夫だ!!!」

フェリシアーノはしゅんとしてしまいアーサーに謝れば、アーサーは首を横に振り、気にしていないと言っていたが表情はどこか寂しげだった。

それ寂しさは姉がこの世からいなくなってしまったという事実からきていることが痛いほど分かった。

雪はそんなアーサーを包み込むようにフェリシアーノの視界を白く塗りつぶしていた。

n e x t s t o r y

OD:まとめと補足(前書き)

セツキー様、感想ありがとうございます!!レスは今日の夜活動報告にて

物語は次回から新章に入ります
カオスww編です

OD:まとめと補足

補足的な何か

フェリシアーノ

主人公

明るい上にポジティブで脳天気で仲間思い

アルフレッドとそういうところが似たもの同士らしい

アーサーlove!!!!!!だがアーサーは気付いてくれない

アーサーの悲しみを拭ってあげ、本当の笑顔を見たいと思っている
ド天然でちょいばかな所がある

アーサー

ヒロイン

ブリティッシュランドのお姫様

悲しい人生を歩んできたが最近ではフェリシアーノのおかげで笑顔を取り戻しつつある

お姫様なので浮き世離れしている……ていうかしすぎである

色んな人を好意を寄せられているがそれらに全く気付かない男殺しである

兄が三人いる

姉がいたが既に故人である

ルートヴィツヒ

ムキムキなフェリシアーノの親友

パーティー内で一番の常識人

通称フェリシアーノの保護者

一番フェリシアーノのことをわかっているらしい

結構正義感があって仲間思い

下手すればアルフレッドよりヒーローぽいかもしれない

え？ルートヴィツヒがメインの話？いつかするよ！いつか！！！

フランシス

アーサーの騎士

アーサーのことはからかいながらも大切なお姫様だと可愛がっている

アーサーに好意を寄せているようだが、セクハラばかりするせいか

彼女に変態と認識されている

アーサーの過去を知る人物

アルフレッド

アーサーが弟のように可愛がっていた幼なじみ

アーサーには昔から好意を寄せており、弟扱いされるのが嫌い

正義感溢れる少年で、アーサーが捕まった時にいち早く敵地へと飛び込んでいくほど

夢はアーサーのヒーロー

夢はアーサーのヒーロー

アーサーの悲しい過去の原因の一人

菊

アルフレッドと一緒に旅をしていた年若そうに見える老人

アーサーに耀と似てると思われた

フランシスよりも大人であるが、行動が変態チックなのでルートヴ
イツヒをいつも困らせている

色々謎が多い

イヴァン

魔術師

精霊と一心同体であり精霊と会話もできる

昔の伝説に興味があり、アーサーのことを天使とよんだりした
姉妹がストレスの原因らしい

昔の伝説

この世界に伝わる話

悲しい恋の物語である

天使

アーサーの家に関係しているらしい

マーリン

昔の魔術師

凄い実力であつたらしく、今でもその伝説が残っている

精霊

この世界の色々な場所にいる人ならざるもの

魔力を持つ人間は精霊と契約を交わし、召還することができる

28・仮面の男(前書き)

セツキーさん、感想ありがとうございます！レスは今日の活動報告にて

新キャラ登場します

一体だーれだ！

テイルズのジューダスじゃないよー！！

28：仮面の男

フェリシアアーノ達は新たな仲間としてイヴァンを加え、ルーヴルのライナとナターリアの姉妹に別れを告げて、近くにある港街アイレスへとやって来た。

「うわーい！！！！船だあー！！！！！！」

港街に着いてすぐにフェリシアアーノははしゃぎまくっていた。

アーサーも好奇心旺盛に港に止まっている船をじいっと瞳を輝かせながら見ていた。

「こっ…これが船…なんだな…」

「アーサーも船や海とか見るの初めてだからな」

「べっ…別に子供じゃないんだから…喜んでなんかないんだからなっ！！！！！！」

「はいはい

好きなだけ見てなさい」

からかわれたのが不満なのか、頬をぶくつと膨らませてぽこぽここと怒るアーサーにフランシスは苦笑した。

「ブリティッシュランド行きの船の出航まで時間がかかり余っていますよ」

「せっかくだから買い物とかどうだ？」

「いつ…行きたい！！」

買い物という言葉にアーサーは誰よりもいち早く反応し、ルートヴ

イツヒの意見に賛成した。

アーサーが行きたいと言えば、誰も反対する者はいない。彼らはすぐに港街の店が集まるストリートへと向かった。

「ふっ… フランスス！これなんだ!？」

「えっ… どれどれ」

ストリートには色々な露店が集まっており、アーサーはその中の一つの店で何かを興味深そうに見ていた。

「あー… これはグミっていう食べ物だよ」

「これがグミってやつなのか…？」

「そうですね。それを食べると体力が回復したり魔力が回復したりするんです」

「そっ… そうなのか!」

「アーサーさんは結構浮き世離れしていますね」

「だろ？まあお姫様なんだから仕方ないんだけどさ」

「でも、こっ見ると… アーサーさんも普通の女の子なんです」

「うん…、そうだね」

色々な物を興味深そうに見るアーサーを目に焼き付けながら、フランススは菊の言葉に同意した。

出航の時間になり、彼らは船に乗った。

船は客室付きの船でカジノヤレストランなどもついており、甲板の上にはプールなどもあり、日光浴もできる豪華客船であった。

アーサーはそんな初めての船にワクワクドキドキ（死語）していたが、それよりも周り一面に広がる大海原を楽しそうに眺めていた。

「綺麗…だな」

「だよね!!! フランスス兄ちゃんの目もこっぴつ色だね！」

「えっ…」

「だって、アルフレッドは空って感じだし、ルートは湖って感じじゃない？」

にこりと笑いながらそう言うフェリシアーノにアーサーは微笑んで同意した。

「そうだ!!! 今からプールで遊ぼうよ!!!」

「えっ…プールに!？」

「うん!!! アーサーは水遊びしたことないの？」

「水遊びなんてやったことない…」

「じゃあ遊ぼうよ!!! 水着を…」

「フェリシアーノオオオオ!!! 遊びに来たんじゃないんだぞ!!!」

「!!!!!!」

「うぎゃああああ!!!」

フェリシアーノとルートの追いかっこが始まった。一般客もいるのによくやるものである。

すると、フランススは何かを思いだしたようにアーサーの名を呼んだ。

「あーアーサーそれよりさ」

「？」

「せっかく海に来たんだしね
姫様のためにこれ買ってきたんだ」

フランシスはどこからか茶色の紙袋を取り出し、中から布地の少ない露出多めな黒ビキニを取り出した。

「着てみ…げふっ！…！」

「誰が着るか！…！！！」

フランシスが言い終わる前にアーサーの脚が弧を描き、フランシスの顎に直撃した。

「え…！…！…！…！…！…！…！…！…！…！」

「え…！…！…！…！…！…！…！…！…！」

「胸の小さな姫様のために特注パットにしたのに…！」

「ちっ…！…！…！…！…！…！…！…！…！…！…！…！…！…！」

「アーサーさんアーサーさん！」

フランシスに罵声を飛ばすアーサーの肩に菊が優しくて手を置いた。

「私も、アーサーさんのために水着を用意したんですよ」

「えっ…！…！…！…！…！…！…！…！…！」

「ええ、アーサーにぴったりですよ

着てくれますか？」

「ああ！もちろん…！…！…！…！…！…！…！…！」

アーサーの声が落ちていった。なぜなら、菊の手には濃紺の生地に

胸のあたりに「あーさー」と黒マジックで書かれたワッペンが貼られている水着。いわゆるスクール水着というやつだ。ちなみに旧タイプである。

「貧乳と言えばスク水です!!!」

「……………」

アーサーは思った。見た目はフランスよりマシなようだが、着てはいけないような気がする。多分、フランスのものと変わらないような気がする。

「さあ！アーサーさん着てください！さあさあさあ！」

「うっ……………」

「アーサー！俺は青のビキニを用意したぞ!!」

「僕は白」

何故かアルフレッドとイヴァンもアーサーの水着を用意していた。というか、なんでこいつら水着用意しているんだ!!!自分で買ったのか!!!自分で女物の水着を買ったのか!!!アーサーはこの惨状に頭痛がした。

「大体、お前ら……」

アーサーがそう言いかけた時、大きな水音が聞こえた。

一般客の悲鳴が聞こえ、一般客達が自分の部屋へ避難しようとして甲板から出て行く。

アーサー達も状況が分からず、しばらくポカンとしていたが突然聞こえた声に全員正気に戻った。

「お久しぶりですプリンセス」

声は海の方から聞こえた。全員が海の方を向くと、また大きな水音が聞こえ、水しぶきと共にタコのようなザリガニのような大きな生き物が現れた。生き物の頭上には人がいた。

「!!!」

「!!!」

顔を覆い隠す仮面と黒の上質なマントが特徴的な人物がそこにいて、フランスはその人物を睨みつけ、アーサーは目を見開いていた。

「お久しぶりです
アーサー王女？」

仮面の男はアーサーを見ると、にっと笑った。

n e x t s t o r y

29：誘拐犯（前書き）

ちはるさん、セツキーさん、感想感謝感激です！

今回のフェリちゃんは黒くなりすぎました

29：誘拐犯

「お前っ……！！！！！！」

フランススはアーサーを庇うように彼女の前に立ち、仮面の男を睨みつけた。

「……フランスス、彼は一体何者なんだい？」

「さあ？何者かは俺も解らないさ
でも……」

あいつがアーサーを誘拐犯した奴なんだ！！」

誘拐という言葉に全員は目を見開く。仮面の男は相変わらずニヒルに笑っていた。

「誘拐ってどういうことなんだい！？」

「……先日、ブリティッシュランドの城でアーサーは俺や兄貴達や女王達の前で誘拐されたんだ。……あいつにな」

「……まあ、あの時せつかく誘拐したお姫様は無意識に自分で魔法を使って逃げちまったんだけどな！」

フランススが語る先日の出来事に仮面の男が補足を一言付け足す。

「……そして、逃げた先がフェリシアーノの所だったんだな」

ぼそりとアーサーがそう呟くと、仮面の男はフェリシアーノの方を黙ったまま見る。

「…フェリシアーノ・ヴァルガス」

「……!!」

「……お前か、俺の主のものに手を出す不届き者は」

「…主？」

仮面の男の言葉にフェリシアーノが質問を投げかけた途端、フェリシアーノに向かって魔物の脚が叩きつけられる。

フェリシアーノはそれに驚きながらも、ギリギリでかわす。

「なっ…何するんだよ!!」

「俺はお前を生かしておくわけにはいかないからな
我が主の伴侶となるアーサー様に手を出すお前をな」

「まだ俺は手を出してないよ!!」

「まだってなんだい!! ツッコミ所違っただろ!!!!!!!!
ていうかアーサーが伴侶ってどういうことだい!？」

途中、シリアスな雰囲気をぶち壊しながらも話は続いていった。

「……違っ」

「?…何が違うのです? 姫？」

「…俺はお前の主のものなんかじゃない!! 伴侶なんかでもない!
!」

「……!!!!!!」

アーサーの強い拒否の言葉に仮面の男は目の色を変える。
だが、すぐに冷静になり、フェリシアーノを睨むように見た。

「お前は主の敵だ

フェリシアーノ・ヴァルガス!!」

「アーサーに何かしようとしているなら、俺も受けて立つよー!!」
フェリシアーノも負けじと仮面の男を睨み返し、腰の剣の柄の部分へと手をかける。
彼にしては珍しく、怒りを露わにしていた。

「そうか…だがお前はいつか主によって殺されるだろう
また、会えるといいな？生きてな？」

そう言うと男は消えて、代わりに彼が乗っていた化け物が彼らへと襲いかかってきた。
化け物が襲いかかってきたら、間違いなく船は木っ端微塵になり、船中にいる人間達は助からないであろう。

「……………五月蠅い」

フェリシアーノがそう呟いた途端、蝟のような魔物は切り裂かれ逆に木っ端微塵にされていた。
フェリシアーノがやったのだ。

「フェリシアーノ……………」
「なんていう速さなんだ!」
「さすがの私もびっくりです」
「あんな魔物を一瞬で……………」

他の仲間達はフェリシアーノに驚いていたが、アーサーは一人頭を下げていた。

すると、船内から先ほどの様子を見ていた人間達が歓喜の声を上げ、

甲板へと出てきた。乗客達や船員達や船長がフェリシアーノの周りに集まり、感謝の言葉を口々にした。中には「君は英雄だ!!」や「神の子だ!!」など大袈裟なものまであったが、フェリシアーノはそれを笑顔で受け取った。

「凄いですねフェリシアーノ君」

「まあ、あいつのおかげで船が木っ端微塵にされずに済んだからな」「うゝー。俺がヒーローなのにー!!」

「アルフレッド君ってヒーローだったんだー」

仲間達もフェリシアーノへの感想を口々にするが、途中アルフレッドとイヴァンがバチバチと音を立てて喧嘩しそうな雰囲気になってしまったが…。

この二人は何故か仲が悪い。

アーサーは一人、フェリシアーノ達や仲間達から少し離れた所でフェリシアーノを見ていた。

「…あの誘拐から逃げ出した時、無意識に使った魔法は自分の行きたい場所へと瞬間移動する魔法だった。」

自分の実家のブリティッシュランドじゃなくて、フェリシアーノの住む村だった…」

アーサーは空を見上げた。

「（これは運命…なのか？）」

空の青は澄み切っていて、とても清々しかった。

n e x t s t o r y

30：帝都ブレイメン（前書き）

ちはるさん、セツキーさん、感想ありがとうございます…！

毎日更新頑張っています…！

今回はルートが…！！な話です

30：帝都ブレイメン

「はぁ！！？ブリティッシュランドまで行けない！！？」

フランススの叫びが港中に響いた。

「そんなんですよ。先程の騒ぎで船員が何人が失神しちゃいました！」

「船員根性なさすぎだろ！！」

「だから、船員の治療や船の調整も兼ねて、ここの港街ハーメルンでしばし止めようと思ひまして」

フランススははあと溜め息をつくと、港街の広場にいる仲間達の前へと戻った。

「船は1ヶ月後にしか出ねえとさ」

「…1ヶ月か、長いな」

「では、帝都で休むのはどうですか？」

「帝都？」

「はい、このジャーマン帝国の首都であるブレイメンです」

「ヴェー！行ってみたいーい！」

「おい…」

「アーサーも行きたいよね！？」

「え…！あ…：まあ、フェリシアーノが行きたいなら行きたいってことにしておいてやる…！！！！」

「僕も行きたーい」

「俺は行くんだぞ…！反対意見は認めないんだぞ…！！！！」

全員が行くと言ったため、フランスは反対出来ずに、帝都へいくことが決定した。

フランスは帝都へ向かって歩いていく一行を見ながら一人溜め息をついた

(誰が王女を捕まえろと言った?!)

(…帝国だ)

(……!)

(…ジャーマン帝国のギルベルト様だ!)

あの治安が悪い街の事件でアーサーを浚おうとした人間達は自分はジャーマン帝国のギルベルト様とやらに命令されてやったと言っていた。

だが、フランスはどこか腑に落ちなかった。

「(…俺はあいつがそんなことするような奴だとは思えないな)」

フランスは顎に手をあてながら考えていた。どうやらフランスはギルベルトという人間と知り合いらしい。

「(だけど、アーサーに何かしようっていうなら俺は奴を敵として迎える)」

そう決断したフランスの顔は騎士の顔であった。

「うわぁー!! 広いねー!!!!」

「ブリティッシュランドの王都と同じぐらいの広さなんだねー!!」
「帝国一の大都会ですから」

帝都ブレームンに着き、彼らは帝都の広さと都会っぷりにビックリして目を丸くしていた。

「俺の住んでいる所と大違いだね! ルート!!」

「...」

「?... ルート!」

「...ん? ああ...なんだ? フェリシアーノ」

「どうしたの? ぼーっとしちやって」

あ!もしかしてお昼ご飯のこと考えてた?」

「フェリシアーノじゃあるまいし...」

ぼーっとしていたルートヴィッツヒにフェリシアーノ達は珍しいな思っていた。

「...フェリシアーノ」

「ん? どうしたの? ルート」

「ちよっと、用事があるんだ」

すぐ戻ってくる」

「うん...?」

ルートヴィッツヒはそれだけいうと、悩ましげな顔で街の人間をすり

抜けてどこかへと言ってしまった。

「……………」

フランスはそんな彼の背中を意味ありげに眺めていた。

n e x t s t o r y

31：歯車が動き出す時（前書き）

すごい急展開になりました

あの方とあいつが出ます

近いうちに、にーに再登場予定

仮面の男の正体はトルコさんではありません
いつか正体は出します！！

31：歯車が動き出す時

「？ルートどうしたんだろっね？」

「君がいつも馬鹿やっっているからストレス発散に散歩にでも言ったんじゃないかい？」

「アルフレッドも人のこと言えないじゃん！」

「…二人共人のこと言えねーと思うぞ」

フェリシアーノとアルフレッドのマイペースな二人組にアーサーは溜め息をついた。

「あの、私も買うものとかがあるのでちよつと外れてきます」

「菊も…？」

「はい、色々武器が欲しいので」

「そっか、菊は忍者だからね！」

アルフレッドが明るい声で納得する中、フランスは先日菊の戦いっぷりを思い出した。懐からそれより遥かに質量の大きな武器をたくさん取り出して戦い真っ赤にしたあの時。何が真っ赤だった？ そんなの決まっているだろ。

フランスがそんな記憶を蘇らせている間に菊はどこかへと行ってしまった。

「じゃあ、お兄さんもブリティッシュランドに報告いれるためにちよつと外れるわ」

「兄ちゃんも？」

「そうなんだよ、お兄さんも騎士だから大変なのよ」

「…単に報告遅れた時に兄さんの怒られるのが嫌なだけだろ」

「うわぁー！さっすがアーサー！鋭いねー！！」

はははと乾いた笑い声でフランシスはアーサーの頭を撫でるが、アーサーは不機嫌そうにその手を振り払う。

「じゃあ、お兄さんは今から外れるんだけど、アーサー！いくら街中だからって誘拐されないように周りに警戒するんだぞ！知らない人には絶対について行くな！」

「子供じゃねーんだし分かってるに決まってる！！！」

「お前が世間知らずのお姫様だから言ってるの！！！」

「大丈夫だよ！兄ちゃん！アーサーには俺がついているんだからさ
！！！」

「あー！！それはヒーローの俺のセリフなんだぞ！！！」

「まあ、でもアーサー君に手を出そうとする奴がいたら僕がポッコボコにするけどね！」

「…お前が言つとマジで恐いな」

「とにかく、絶対に気をつけるよ！」とフランシスはそう言つとどこかへ去っていった。

「たくつ…心配し過ぎだあの糞髭」

「兄ちゃんは心配するほどアーサーが大好きなんだよ！」

「…そうなのか？」

『フランシスは自分のことが大好き』という言葉を聞くとアーサーは顔を真っ赤にした。

「じゃあ！帝都を探検するであります！！！」

「なんだよ…それ」

「人生は楽しまなきゃ!!」

「そうだけど…」

「とりあえず、レッツゴー……!!?」

レッツゴーと振り向いた途端、フェリシアーノは誰かとぶつかった。アーサー達は慌てて大丈夫かと彼に寄り、ついでにフェリシアーノとぶつかった人間にも大丈夫かと聞く。

「おっ…俺は大丈夫だよ」

痛いけど…」

「そっか…そっちの奴…じゃなくてそっちの方は大丈夫ですか?!」

アーサーがそう問いかけて二回目、フェリシアーノとぶつかって尻餅をついている人物は大丈夫と立ち上がった。

短め銀髪と鋭い眼光を放つルビーのような瞳が特徴的だった。

「お前は何してやがんだ?あ?」

「こっちも大変だったんだよ?!誘拐犯に会うし!!」

帝都の広場の噴水前にフランシスの前には小さな水晶があり、この水晶は通信することのできる魔力の塊であり、姿は映らないが会話ができる優れものである。

「誘拐犯に会ったのか!!?」

「うおっ！！食いついてきた！！やっぱりアーサーが心配なんだ！！」

「んなわけねーだろ！！あんな腐れ妹！！俺が心配してんのはブリティッシュユランドのことだ！！」

「あー…はいはい」

フランスははあと溜め息をついた。どうやら会話相手はアーサーの兄であり、タメ口で会話しているあたり、どうやら彼らは旧知の仲らしい。

「そんなんじゃ、ブリティッシュユランドに帰ったらアーサー泣くぞ？」

「知るかよ」

「あいつが泣こうが知った事じゃない」

「お前ねー」

本当にいい加減にしないと、もしかしたらアーサーと二度と会えなくなるかもしれないんだぞ？」

「……………どういうことだ」

「誘拐犯が言ったんだよ」

「アーサーは誘拐犯の主の伴侶になるって」

「…伴侶って花嫁ってことか？」

「そうだろうね」

「あんなにあっさり誘拐されたんだぞ？奴の主はそれよりも強い力を持っていてることだ」

「多分、アーサーより強い力だな」

「次にアーサーが誘拐されたら、二度と会えないかもな」

「……………」

黙ってしまったアーサーの兄にフランスは冷静な顔で彼の返事を待つ。

「…お前、冷静にしているけど、本当は腸煮えくり返ってんだろ？」
「…アーサーより鋭いねえお前は」
「…そりゃあ、腸煮えくり返るよな？」
自分の大切な婚約者が別の人間の伴侶として連れ送られそうだしな」
「そりゃあ、アーサーは俺に嫁ぐんだからね
俺はその主よりアーサー愛しているけど？」
「痒い言葉をよく他人に言えるなお前
だけど、お前の報告で分かった」

アーサーの兄の言葉でフランシスは再び冷静な顔になる。
察しのいい彼は分かったのだ。彼が何を言いたいのかが。

「女王陛下の占いに出たんだ

最初は疑心暗鬼だったが誘拐犯の言葉で分かった

陛下の占い結果は『運命は動き出した』とな」

n e x t s t o r y

32：血を分けた人間（前書き）

セッキーさん、感想ありがとうございます…！

今回は事実が…

32：血を分けた人間

「別に俺はどうってことないぜ！」

銀髪紅眼の青年はアーサーに向けてにかつと笑う。

「良かった…たくっフェリシアーノ！気をつけるよ！」

「アーサーなんで、俺だけ〜」

「全く気をつけるんだぞ！！フェリシアーノ！！」

「アルフレッド君が言える事じゃないよねー」

銀髪紅眼の青年をほっときながらいつも通りの雰囲気話している仲間達にアーサーは静かに溜め息をついた。

「お前アーサーって言うのか？」

「…？ああそつだが……」

「俺はギルベルトつてんだ」

「ギルベルト…？」

「おう！…それにしてもよお

お前可愛いな」

「？何言つて……」

ギルベルトはゆっくりとアーサーに近付くと腿部にスリットが入って彼女の白い太腿をさらす白いスカートの裾を掴んで、そのまま上へとあげた。上へあげたのだから当然…下着が丸見えである。

「ひゃあああああああ！！」

「王女様なのに縞模様か色気ね…」

「何すんだあああ…！！！！！！！！」

「アーサーに何やってんだあああ…！！！！！！」

アーサーの下着をじっくりと観察するように感想を述べるギルベルトにアーサーと顔を真っ赤にしたアルフレッドの協力な蹴りがたたき込まれる。

ちなみにフェリシアーノは顔を真っ赤にしている、イヴァンは相変わらずニコニコしていた。

「ふっ…安心しろ縞パン姫、俺様は色気ムンムンな女が好きだからよ」

「と、言いつつ鼻血出てるじゃないか！！！！君は意外にウブなんだね！！！！」

「ていうか…」

鼻血をダボダボ流している変態もといギルベルトにアルフレッドが珍しく的確なツッコミをいれていると、アーサーはあることに気が付いた

「…なんで、俺が王女だつて知ってたんだ？」

「……………そりゃあ、決まってるんだろ」

ギルベルトはまたもやアーサーに近づき、右腕をアーサーの腰に回し、左手でアーサーの顎を固定する。

「……………」

「お前は俺が…」

アーサーに向かってゆっくりと顔を近付けるギルベルト。アーサーは怖じ気づいたのか動かない。周りの人間もそうだ。

「兄さん!!!」

だが、第三者の乱入でギルベルトが止まった。
全員が声が聞こえた方向を見る。

「アーサーを離すんだ!!!兄さん!!!」

「ルート!!!?」

ルートヴィツヒだった。瞳はどこか怒りを含んでいて、その瞳でギルベルトを睨んでいた。

その言葉でギルベルトは驚いたのかアーサーを拘束する手を緩ませてしまい、その隙にフェリシアーノがアーサーの腕を掴んでこちらに引き寄せた。

「ていうか…兄さん!!!??」

「…ルツツ…お前も帝都にきてたのか…」

「え!?!兄弟なの!?!ルート…!!!」

「ああ、そうだ」

この人は俺の兄であり、そしてジャーマン帝国の皇帝だ」

ルートヴィツヒの言葉にその場にいた者は目を丸くした。

n e x t s t o r y

333・帝国騎士(前書き)

ちはピーさん、セッキーさん、感想ありがとうございます!!

今回はあの夫婦が登場です!!

作中では夫婦ではありません!!名前はまだ出ません!!

33・帝国騎士

「ルートヴィツヒとギルベルトが…兄弟？」

「それに…こいつがジャーマン帝国の皇帝？」

「じゃあルートは皇帝の弟ってこと…？」

いつもは賑やかな街がいつのまにか一通りの少ない場所になっており、やけに静かだった。

「俺は…かつてはこの帝国の皇子だった。だが俺は家出したんだそこから」

「それで…俺の故郷で一人暮らししていたんだね」

ルートヴィツヒはギルベルトを睨みつけるように見た。それに反応するとギルベルトはバツの悪そうな顔をしながらもどこか余裕があった。

「兄さん…アーサーに一体何をやる気だ!!」

「ルツツ、お前には関係ないぜ？」

だが、アーサーをこちらに渡して、ルツツが家に戻ってきてくれるなら教えてやるぜ」

「俺が戻っても意味がないだろう」

「いや、俺はお前のことをいまだに可愛い弟だと思ってるぜ？」

「可愛い弟だと思っているのは、俺ではなく、俺を通して見ている奴のことだろ？」

当たり前のことのように言うギルベルトにルートヴィツヒは彼をあざ笑うかのように冷たく返す。

「なーんか…やばくないかい？この状況…」

「そうだね…」

「しかも、ルートヴィツヒは冷たいし」

「なんか僕、嫌な予感がしてきたよ」

対立するルートヴィツヒとギルベルトから離れ、フェリシアーノ達はひそひそと小声で会話をしていた。だがイヴァンの嫌な予感は当たってしまった。

「お前たち！！皇帝陛下に何をしている！！！！」

「嫌な予感がああああ！！！！！！」

気が付けば、フェリシアーノ達は帝国の騎士達に囲まれていた。騎士達に囲まれたことにより、ルートヴィツヒも正気に戻り焦り始める。

「全く…あなたは何をやっているのですか！このお馬鹿さんが！」

「俺だって忙しかったんだよ！！」

「あんたはそれでも皇帝なの！？」

騎士達の中から格上の人間であろう男女の二人組が出てきた。騎士達と着ている服が似てるので、きっと二人も騎士なのである。眼鏡をかけた高貴そうな美青年は困ったように溜め息をつき、少しウエーブがかかった栗色のロングヘアの美女はギルベルトに向かって怒鳴った。

「騎士…やばいね」

「菊もいないしフランスス兄ちゃんもいないし」

「しかも囲まれてる」

フェリシアーノ達は切羽詰まった表情で逃げる術を考えており、ふと男女の騎士達と目があってしまった。その時、男女の騎士達は目を丸くした。アーサーはそんな目を見ると小さく震えた。

「……あの娘は……」

「ブリティッシュランドの……王女……!!」

「……なるほど、そういうわけですか」

「まさか、わざわざ王女様自身が来てくれるなんてよお」

「……そうですね」

騎士達、今すぐあの少女を捕らえなさい!!」

「はあ……!!?」

眼鏡をかけた騎士の一言でフェリシアーノ達を囲んでいる騎士達はアーサーに向かって一斉に走り出す。

「なっ……まさかこいつらがアーサーを……!!」

「早くアーサーを逃がさなきゃ……!!」

「でも、逃げ場なんて……!!」

「あるます……!!」

こちらに向かってくる騎士達に慌て困惑していると、何かがとても素早い動きでフェリシアーノ達の目の前に現れた。

「菊……!!」

「なんか騎士達が集まっていると思ったら、こういうことでしたか
!……!!」

今すぐ逃げましょう……!!」

「でも囲まれてるよ……!!」

「そんなの、逃げ道を作れば問題ありません……!!」

菊がそう言ったと同時に背中の刀を抜いて、騎士達へと突っ込んで行った。

「菊！！」

アーサーが声を上げた途端、騎士達は吹っ飛んでいき逃げ道ができ

n e x t s t o r y

34：帝国兵士

「さあ、逃げましょう!!」

逃げ道を作った菊はフェリシアーノ達の方を向くと逃げると促した。騎士達は菊の実力に呆気にとられていた。

「うん!! そうだね!! 怖いし!!」

「ヘタしてる場合かい!!?」

「フランシスとも合流しないといけないしな」

「ほら! ルートヴィツヒ君行くよ!」

「...ああ」

菊の元へ走っていくフェリシアーノ達に遅れてルートヴィツヒも走り出す。

「逃がさないわ!!」

女性騎士は高くジャンプすると、背中に担いでいた武器：フライパンを振り上げて落下すると同時に菊へとフライパンを叩きつける。

「菊!!!!!!」

鈍い金属音とともに砂埃が舞い、それが晴れると同時にクナイでフライパンの攻撃を防いでいる菊がいた。

「やりますね... 私の攻撃をクナイ一つで受け止めるなんて」

「あなたこそ、せっかく新しく手に入れたクナイがもう台無しにな

りましたよ」

ピキツと音を立てて、菊の握っているクナイにひびが入る。それを見ると、菊は小さく舌打ちをした。

「あなた、女性なのになかなかやりますね」

「女性だけでも騎士なのよ」

私はジャーマン帝国騎士団副団長、エリザベータ・ヘーデルヴァーリよ」

鋭い金属音と共に菊はエリザベータから距離をとる。菊は接近戦では自分に勝ち目が無いと感じ取ったのだ。

菊はある程度の距離をとると、懐から手裏剣を取り出し彼女に向かって投げる。

「手裏剣!!?」

「私、遠距離戦も得意なんです」

「そうですか…でも甘いです!!!」

凄い速さで飛んできた手裏剣をとっさにフライパンで防いだ。

「飯を作るための調理器具が武器ということに驚いたが、意外に活用できるんだな」

フランスは菊達の戦いを見ながら呑気に感想を漏らしていた。

そして、菊とエリザベータの戦いを見るのに夢中になっている騎士団をかいくぐり、フェリシアーノ達の所へと行った。

「フランス!!!お前いつの間に!!!?」

「いつの間じゃないよ!!!何!?!この状況!!!」

「だって…ルートのお兄ちゃんが皇帝で…」

「なんだ、そんなことかよ」

「そんなこと!?!」

「フランス君知ってたの?」

「んー、まあね」

でも、今は話している場合じゃないぜ?」

フランスがそう言った矢先、騎士ではない団体がこちらに向かって歩いてきた。

団体の全員は甲冑を着ており、腰には剣がついていた。

「帝国兵士の登場だな」

フランスはそう言うと、腰のレイピアを抜いた。

n e x t s t o r y

35・久しぶりの再会（前書き）

ちはピーさん、セッキーさん、感想ありがとうございます！！

今回はやっとあの方の登場です！

35：久しぶりの再会

「…帝国兵士までできたのかよ」

「いよいよ、やばくなつたじゃないか！…！」

「なんか、怖いよ…！」

帝国騎士だけではなく帝国兵士までにも包囲されてしまい、フェリシアーノ達は戸惑い、その顔に冷や汗が流れる。

「これはこれは、ローデリヒ・エーデルシュタイン団長ではありませんか」

「そういうあなたは、元老院代表のジャック・リップパーさんではありませんか」

「相変わらず、あなたは私のことを嫌っているようですね」

「否定はしませんね」

帝国兵士団を率いる若い男…ジャックは騎士団長ローデリヒと睨み合う。周りの騎士や兵士達もにらみ合い、エリザベータは菊と戦うことをやめ、ローデリヒとギルベルトのそばに行き、ジャックを向けてフライパンを縦に握りしめる。

すると、ふとジャックはアーサーの方をみる。

彼から怪しい笑みがこぼれる。

「目的は我らと同じのようですね」

「一緒にしないで下さいませんか？」

「姫君を捜す者同士ではありませんか」

「あなたには彼女は渡せません」

ローデリヒとジャックは互いに先程よりも強くにらみ合い、アルフレッドはそれを見て何かを思いつく。

「これはチャンス？」

「今のうちに逃げるぞ……！」

「アーサー早く……！」

チャンスだと言わんばかりに、ここから逃げようと走り出すが、ローデリヒとジャックはすぐにそれに気が付いた。

「逃がしませんよ」

「姫君、あなたはここで捕まえます」

その言葉と共に一斉に騎士団と兵士達がアーサーに襲いかかる。

「アーサー……！」

「っ……！！……！」

フェリシアーノがアーサーに手を伸ばした瞬間、聞き覚えのある声が聞こえた。

「はあ……、情けねえある」

その聞き覚えのある声の持ち主達はアーサーの前に現れると瞬時に騎士団と兵士達をぶっ飛ばした。

「……！！……！」

「この声は……！！……！」

「まさか……！！……！」

「……（生きてた……！？）……！」

フェリシアーノ達もすぐに反応し、各自色んな驚きを見せる。
人物は騎士団と兵士達が吹き飛ばされたのを見届けると言葉を吐き
捨てて、くるりとフェリシアーノ達を見た。

「女の子相手に武器振るうなんて、お前らそれでも国を守る者ある
か？」

「耀！！！！！」

「久しぶりあるなお前ら

…それに菊も…」

「…お久しぶりですね耀さん」

「なんで耀がここに！！？」

「そんな話は後ある！今は逃げるのが先決ある！」

耀はそう言うと、呪文を詠唱し、魔法陣がフェリシアーノ達の足元
に浮かび上がると、魔法陣から放出された光と共にフェリシアーノ
達ごと消えた。

「待て貴様等！！！！！」

「残念あるな？せつかくのチャンスが」

消えたはずの耀の声がどこからか聞こえ、ジャックは小さく舌打ち
をした。

n e x t s t o r y

OE：登場人物補足

イヴァン

氷上都市ルーヴルの聖堂の司祭
精霊と一体化して生まれたため、魔法が使えて精霊と会話できる
昔の伝説を色々知っている

王耀

旅人、菊とは知り合いらしい

ギルベルト

ジャーマン帝国の皇帝でルートの兄
アーサーを狙っているらしい

ローデリヒ

ジャーマン帝国騎士団団長
アーサーを狙っているらしい

エリザベータ

ジャーマン帝国騎士団副団長
アーサーを狙っているらしい

アーサーの兄

フランスと会話していたアーサーの兄

ジャック・リツパー

いわゆるモブキャラ

完全なる悪役である。

なぜオ리지ナルモブキャラをいれたかという点、作者はヘタキャラを完全な悪役にはできないからである

ちなみにモデルは『切り裂きジャック（ジャック ザ リツパー）』からである

36・逃走劇(前書き)

ちはピーさん、セッキーさん

感想ありがとうございます

36：逃走劇

フェリシアーノ達がこの場から消えた後、騎士団と兵士軍の双方はドタバタとしていた。

「今すぐ！今すぐ彼らを帝都内で指名手配しなさい！」

ローデリヒは周りの部下達に命令をした後、小さくため息をついた。そこへエリザベータが近くに寄ってくる。

「まさか…王女の周りにあんなのがいるなんて…」

「？…ブリティッシュランドの騎士のことですか？…」

「いや、違います」

「じゃあ…誰なんですか？ローデリヒさん」

「…あのフェリシアーノという少年です」

ローデリヒは苦々しそうな顔で頭を押さえて、そう答えた。

その頃、フェリシアーノ達は帝都の中をさまよっていた。

「早く帝都から出ねえとやべーぞ！…！」

「ていうか指名手配書貼られているよ……!!」

アルフレッドは家壁に貼られているよ紙切れを指差した。そこにはフェリシアーノ達8人の1人ずつの写真が載せられており、その上にはこの顔にピンときたら騎士団まで!と書かれていた。

フェリシアーノ達8人の写真にはそれぞれ彼らについての説明がついていた。

アルフレッドはそれを読み始めた。

「……フェリシアーノ・ヴァルガス

脳天気で惚けた顔の見た目通りの子供」

「惚けた顔って酷くない？」

「『イヴァン・ブラギンスキ

ほわほわしているように見えるが凄く恐ろしい』」

「恐ろしいって何かな? コルコル」

「『アルフレッド・F・ジョーンズ

フェリシアーノと同じく子供

空気が読めないメタボ』」

「め……メタボって何さ……!!メタボって……!!」

「空気読めないということにはツッコまないんだなお前」

「『ルートヴィッツヒ・バイルシュミット

ムキムキの厳つい青年

すごいサディストとにかくサディスト』」

「……皇帝が情報提供したのか? これ」

「……………兄貴」

「『本田菊

大人しそつに見えて凄く腹黒い

オタク』」

「凄いい合ってる……!!」

「何ですって?」

「『アーサー・カーランド
ブリティツシユランドの姫君
可憐なお姫様
鬼で素直じゃない
結構凶暴』」
……………に見えて天の邪

「……………悪かったな素直じゃなくて、凶暴で」

「『王耀
可愛い美少女
胡散臭い喋り方をする』」

「……………に見えて男

「……………」

「なんかムカつくある」

「『フランス・ボヌフォア
ブリティツシユランドの騎士
変態凄く変態とにかく変態
補足：やっぱり変態』」

「……………」

「変態しか書いてねーだろ！……！」
「当たり前だろ」

アルフレッドが一通り説明を読み終わると全員が溜め息をついた。

「やっぱり、指名手配されてたら迂闊に動けないね」

「兵士や騎士もあちらこちらにウジャウジャいるし」
「早く帝都から出ないといけないのに……」

そう言ってフランスはあたりを見回した。きっと正門には騎士や兵士が見張っているだろう。どうやって脱走するか考えた。

「お困りのようですね」

すると突然どこからか声が聞こえた。全員はその声の方を向くとそこには全身白いコートを纏い、白いフードで顔をすっぽりと隠した

人物がいた。

「誰…?」

「っ!!!!まさか…」

「違いますよ?兵士や騎士ではありません」

「……………」

自分を警戒するフェリシアーノ達に白いフードの人物は微笑んだ。

「帝都から出たいのでしょうか?」

「なんで…それを」

「さあ?」

白いフードの人物はまた笑うと、自分の左側の細い路地裏の道を指差した

「この細い路地裏を抜ければ、帝都を囲む城壁の前に出ます
しかし、あなた方が指名手配されていては正門からは出られないで
しょう

なので、路地裏を出てすぐのところの城壁に穴が空いています

そこから逃げなさい」

「なるほど」

「何で俺達にそんなこと教えるんだ?」

「困った人は見過ごせないでしょう?」

白いフードの人物がそう言うと、どこからか慌てた足音が聞こえた。

「騎士達がこちらに向かって来ているようです

早く行きなさい」

「あ…ありがとうございます…!!」

「…礼には及びません
頑張りなさい」

『天使姫』

「!!!」

白いフードの人物のその言葉にアーサーは大きな目を見開いた。

「おい!!!アーサー!!!早く!!!」

「今行く!!!」

フランスに呼ばれ、アーサーは白いフードの人物をちらりと見ると走って行ってしまった。

『天使姫』

アーサーはその言葉がどこかにひかかった。

n e x t s t o r y

37・赤いドラゴン(前書き)

セッキーさん、ちはピーさん、ありがとうございます！

察しの良い方はタイトルで分かると思いますが、今回は三兄の登場です

37：赤いドラゴン

白いフードの人物はアーサー達を見守ると、くるりと踵を返し歩いていった。歩いていった先にはローデリヒ。

「なんの真似ですか？」

「ただの人助けですよ」

「騎士団顧問魔術師であるあなたがですか？」

「顧問魔術師…そんなの昔の話ですよ」

不満そうなローデリヒに白いフードの人物は落ち着いた柔らかかな声で返す。

ローデリヒはそれを見ると小さく溜め息をついた。

「はあ…たくつ…あなたが王女を捕まえろと言い出したはずなのに」

「まあ、いずれ捕まえれますよ」

ローデリヒの愚痴に本人は軽く返すと、右手で皿を作りその上に水晶を現せた。

その水晶に移るのは、騎士団の天敵である元老院のジャック・リッパ。

「兵士団は一体なんで王女を捕まえようとするのでしょうか？」

「それはきつと、あのジャックが裏で誰かと繋がっているからです
よ」

「裏？」

「はい、だから早く天使姫を捕まえなさい」

兵士団に捕まえられる前に「

騎士団を包み込むように強い風が吹き、白いフードは軽く捲れ、その捲れた所には瞳が見えた。
翡翠の瞳が。

「はあ…帝都はいつからこんなむさ苦しい所になってしまったんだよ」

帝都の街中を高貴な身なりの金髪の青年が歩いていた。
そこへ、ジャック・リップパーが彼の背後から現れた。

「これはこれは、ブリティッシュランドの王子様ではありませんか」

「…ジャック・リップパー」

「珍しいですな」

「こんなところに」

「別に？ただ妹を迎えに来ただけだぜ」

「ほっ」

どこか好戦的に笑う青年にジャックは怪しく笑った。すると、青年は先程とは違う表情でジャックを見た。

「…言っておくが…妹に手を出すと怖いぜ？」

「何を言っておられるのです？」

「お前、妹…アーサーを狙っているんだらう？」

ギロリと翡翠を吊り上げてジャックを睨んだ。

「俺はお前のことが大嫌いだね

手加減なくミンチにできるぜ」

「くく…エドワード・カー克蘭ド

貴様が私のことを嫌っているのは片割れを私に殺されたからか」

「まあ、それもあるな

お前は四年前、俺の片割れを殺した

あいつは少々横暴だったが、他人想いの良い奴だった

なのに…お前は…

しかもそのせいで…アーサーの悲しみが増えた！！！！」

エドワードは怒りがこめられた表情でジャックに向かって叫んだ。

その表情は見覚えがあることにジャックは気付き、やっぱり双生児か。と呟いた。

「ジャック・リップー

お前はいつか殺される」

「面白いご冗談を」

「冗談？」

何言っただよ？事実だよ事実

アーサーの周りの人間、俺、兄さん達、女王陛下…この中の人間が

殺されるかもしれない？

はたまた、死んだ片割れの亡霊とか…？」

エドワードの好戦的かつ怒りを含んだ笑いにジャックは顔を歪ませた。そんな彼を見てあざ笑うかのように鼻を鳴らした。

「まあ、首を洗って待っておくんだな」

エドワードがそう言った後に、その場に突風が巻き起こり巨大な赤いドラゴンが現れた。エドワードはそのドラゴンをモーガンと呼ぶと背に乗ってどこかへと去って行ってしまった。ジャックはその姿を悔しそうに見ていた。

n e x t s t o r y

38：超スピード（前書き）

昨日はアップ出来ずにすみませんでした

ちょっと、小説アップを予約し忘れて…そのまま放置になってました

セッキーさん、ちはピーさん、感想いつもありがとうございます

今回はギャグ率が高い話です

38：超スピード

あの騒動の後、無事に帝都を抜け出すことに成功したフェリシアーノ達は港町には行かずに目的もなく歩いていった。

「はあ…港町もきつと帝国の手が回っているんだろうな」
「どうやってブリティッシュランドに行きますか」

菊とフランススがはあと溜め息をつくとき、珍しく空気を読んでかフェリシアーノが話を変えた。

「そういえばさ…！ルートって皇子様だったんだね…！」

「（空気読めてね…！！！！！！）」

やっぱり空気が読めなかったフェリシアーノに全員は心の中でツッコんだ。

「…ああ」

「でも、まさか指名手配されるなんてねー」

「そんなことを明るく言うなよ…！」

「それにしても…耀…あつありがとう」

耀がいなかったら捕まっていた」

「まあ、我もビックリしたあるよ」

たまたま帝都にいたら、お前らと帝国がドンパチしてて

「まあ、向こうが悪いんですよ耀さん」

「お前がフェリシアーノ達といてビックリしたある」

菊と知り合いらしい耀は彼を見て溜め息をついた。

「ていうか、この人誰なんだい？」

「この方は王耀さん」

私の家族みたいなものです」

「菊の兄ある」

「兄ではありません」

「かつ…かわいくねーある!!!」

菊に冷たくあしらわれ、耀は口を尖らせ拗ねたように彼に文句を言った。

「それにしても、どうやってブリティッシュランドに帰るんだよ！

！港からは帰れないし!!!」

「…やっぱ、忘れてたわ」

「海を泳いで行くのはどう？」

「できるもんなら、やってみるよ!!!」

「そんなことしたら、アーサー溺…」

「何か行っただか？髭」

「（アーサーは泳げないんだ…）」

アーサーは溺れると言おうとしたフランシスは、杖を取り出し今にも魔術を使おうとするアーサーに睨まれ、顔を真っ青にして黙った。

「しかも、こここの大陸全土はジャーマン帝国領だ
見つかるのも時間の問題だな」

「見つかるよ、おっそろしい拷問が待っているんだぞ」

「ヴェツ!!!!!!拷問やだよ!!!!!!」

アルフレッドの冗談混じりの言葉にフェリシアーノは顔を真っ青に

して絶叫しアーサーもサアツと顔を真っ青にした。

「陸は無い、海も駄目だ」

なら、どうやって帰れば良いと思う?」

「!?!?!」

アーサー達に大きな陰がかかる。アーサーは聞き覚えのある声にすぐに反応し、陰の持ち主を見上げ、他の者もそれに続く。

「陸も海も駄目なら、空で帰ればいいだろ」

彼らの真上には、巨大な赤いドラゴンに乗った、アーサーに似た金髪の青年がいた。

「誰!?!」

「えっ……エドワード兄さん!?!」

「兄さぁん!?!?」

エドワード兄さんと呼ばれた青年はアーサーに呼ばれると、微笑みながら久しぶりと言った。

「……………あ、アーサーの兄ちゃん……?」

「ん?……お前がフェリシアーノって奴か」

「なんで、俺のこと知ってるの!?!」

「帝都の指名手配書に載っていたからな」

そう言うとエドワードは懐から指名手配書を出し、フェリシアーノ達に見せた。

「エドワードお前、今まで帝都にいたの?」

「そうなんだよ」

アーサー迎えに行ったら、大変なことになっていてビックリしたよ」
「……なんか、すみませんでした」

わざとらしく溜め息をつくエドワードにフランスは反射的に謝った。

そんなフランスに苦笑すると、エドワードは赤いドラゴンのモーガンに地面に降り立つように指令を出して、モーガンは羽を舞わしながらゆっくりと地面に降り立った。

モーガンが降り立つとエドワードはモーガンの背中から飛び降りた。

「でもアーサー、無事で良かった」

「…兄さん」

エドワードはアーサーに近付くと、アーサーの頭を優しく撫でた。頭を優しく撫でてくるエドワードにアーサーは心地よさを感じ頬を緩めます。

「兄さん…」

「ん？」

「……久しぶり…あとモーガンも」

「相変わらず可愛い奴だなお前は」

いつもより素直でデレ全開のアーサーに、内心可愛いと思いつつもどこか悔しさを感じる者達がいたのは言うまでもない。

「アーサーは兄と姉と小さい頃のアルフレッドと妖精達にはデレデレだからね」

「フランス君は違うんだ」

「セクハラ魔だからね」

「…お前ら人を傷つけて楽しいか？」

「さあ、ブリティツシユランドに行くか」

「エドワード！…お前もかよ！！」

エドワードがモーガンの背に乗るように促し、全員モーガンの背に乗る。

「ヴェツ！…うっわー！！すっげー！俺はじめて乗ったよ！！」

「俺もなんだぞー！！！！」

「まあ…、ドラゴンなんて手懐けれるのはコイツら兄弟しかいないからね」

「凄い兄弟ですね」

「全くある！！」

「君達が言えることなのかな」

「お前も言えることではないと思う」

モーガンの背中の上でいつも通りの会話をするフェリシアーノ達に苦笑しながらエドワードは自分の目にゴーグルをかけた。

「よし、アーサー！いつも通りのスピードでいいよな！！」

「いつも通りの時速18000キロのスピードでいいよ兄さん」

「は…？」

「ちよつと待て！！時速18000キロってお前！！！！」

「大丈夫だ！風圧に耐えられる魔法をかけてるから！」

「そういう問題じゃねーある！！！！いや、それも大事あるが！！！！」

「？…俺、兄さんにいつもこのスピードで乗せてもらってるが…」

「お前ら兄弟クレイジーすぎるぞ！！！！」

「じゃあ出発！！」

「おいしい！！！！人の話を聞け！！！！！！」

エドワードの合図と共にモーガンは離陸し、羽根を2、3回羽ばたかせると、羽根を体と平行に伸ばし、そのまま超スピードで飛んでいった。

「って…ぎゃあああああああ…！！！！！！！！！！」

エドワードとアーサー以外の悲鳴が、遙か彼方へと響いていったのであった。

n e x t s t o r y

39・魔法の国(前書き)

セッキーさん、ちはピーさん

いつも感想をおくっていただきありがとうございます

今回はやっとブリティッシュランドに帰り着きました

39：魔法の国

「うつ…気持ちわりいある」

「頭いてえ…結局…時速18000キロどころのスピードじゃないよ
もう時速360万キロ出てたぞ
ありえねえよ」

「お前ら、だらしないぞ？」

やっとの思い…と言っても飛んでたのはほんの1分なのだが、地面に降り立つことができ、アーサーとエドワード以外の人間は地面の上で半屍状態になっていた。

エドワードはそれをみて困ったように溜め息をついた。

「しょうがねえなあ、アーサー！」

「わかった」

『万物に宿りし生命の息吹をここに！リザレクション！』

アーサーが治癒の呪文をかけると、魔法陣が彼らが倒れている地面に現れ、魔法陣から出る光が彼らを癒した。

「うつ…生き返った…」

「マジで死ぬかと思った」

「はあ…軟弱な奴らだな」

それより、ブリティッシュランドについたぜ」

「！」

ブリティッシュランドという言葉を聞き、地面に倒れていた者はすぐに立ち上がった。

フェリシアーノ達は今、ブリティッシュランドの都市の入り口前の崖に立っており、そこからはブリティッシュランドの景色が見えていた。

サファイアの海に囲まれた島国だが、島にはエメラルド色の美しい森があり、それはメルヘンかつ上品な建物が並ぶ都市の周りを囲っていた。

都市の上には光の塊が何個か浮いており、それが都市を見守っているようだった。

「なんか…魔法の国って感じだね」

「これが、魔法の国…ブリティッシュランド」

「…アーサーの故郷」

初めて来た者はあまりの美しさに目を丸くして驚くが、フランシスやアルフレッドやアーサーなどブリティッシュランドが故郷の者は懐かしむように目を細めて眺めた。

「さあ、行くか」

城がある王都ロンディウムに」

「なんかワクワクするねっ！！！」

「とりあえずフェリシアーノは落ち着くことだ」

「そうだぞ。落ち着いてないとモーガンから落ちるぞ」

「え？」

アーサーの言葉でフェリシアーノは顔を真っ青にして彼女を見た。逃げようと後退りするがガシリとモーガンの手に掴まれ背中へ乗せられてしまう。

「…諦めるフェリシアーノ」

「……待って…まさかまた」

「モーガン！今度は10秒でロンディウムに行くぞ！！！」
「10秒！！？……………つてぎゃあああああああ！！！！！！！！！！」

モーガンは赤い流星のごとく王都ロンディウムまで飛んでいった。
その日、ブリティッシュには謎の悲鳴が響き渡ったとか。

目標通り、10秒以内でモーガンは王都ロンディウムに着き、今はその真ん中に佇むブリティッシュランドを束ねるカーランド家の拠点ロンディウム城の城門前にいた。いや正しくはくたばっていた。

「さあ、王都ロンディウムに着いたぜ」

「…よく、あんなスピード出して城にぶつからなかったね」

「ブリティッシュランドの都市には飛んでいるモーガンの影響で街が壊されないように魔法がかけられてんだよ」

「…俺達には影響ありすぎだが」

2回目ですすがに慣れたのか、アーサーの治癒術無しで立ち上がる
ことができ、エドワードはそれをタフだなと言いながら感心そうに

見た。

全員が立ち上がったのを確認すると、エドワードとアーサーは城門の前に立ち呪文を唱えた。

「我、カークランドの血を受け継ぐ者は同じくカークランドの継承者であるアーサー・カークランドの仲間を城に入れることを許可する」

「我、アーサー・カークランドも右に同じく許可する
門の番人たる精霊よ門を開け」

エドワードとアーサーが詠唱し終わると淡い光と共に門は開き、城の姿を見せた。

だが、城は遙か遠くであり、そこまでには鮮やかな薔薇の花や彫刻が脇に並ぶ長い道のりが続いていた。

「ヴェツッ!! 遠い!!! 疲れるよー!!!」

「何言ってるんだい? 歩くわけないだろ?」

「ここは魔法の国だろ? だから」

フランスはパチンと指を鳴らした。すると城への道のりには赤い絨毯が敷かれ、その脇には使用人やメイドなどが並んでいた。

「おかえりなさいませエドワード様アーサー様」

「おかえりなさいませ」

フランス様アルフレッド様」

「ようこそいらっしやいました」

お仲間の皆様」

驚くぐらいに揃った使用人達の言葉にフェリシアーノ達は驚いたが、リアクションをする暇もなく絨毯が浮いてベルトコンベアのように

城へと向かった。

「うわ！凄いや！！！！すごい！！！！」

「本当に…魔法の国なんですね」

「この絨毯凄いやねー」

「夢なのか…これは」

「んなわけねーある」

初めてブリティッシュランドに来た者達は興味津々に周りを見回した。

につこりと微笑む使用人達を見て、久しぶりだなと言っていたアーサーは説明するようにフェリシアーノに言った。

「俺にはお前達が住んでいる所の方が驚いたがな」

「お前は外に出たことないからだろ」

「まあでも、やっと帰り着いたんだよ」

「……………ああ」

アルフレッドの言葉にアーサーは小さな声で頷く。その声はとても寂しげな声だった。

そんな話をしている内に絨毯は城に着き、城の扉が開かれて中からは侍女達が現れた。

「アーサー様、女王の間で女王陛下とロバート様がお待ちです」

「お二方に再会する前にお着替えをしましょう」

「他の皆様は客室まで案内します」

アーサー様がおめかしする間、ゆっくりとおくつろぎ下さいませ」

「あ、うん！」

フェリシアーノは少し緊張気味に返事をし、部屋まで引率してくれ

る侍女の後ろを他の皆と一緒に着いていく。
そこでアーサーに呼び止められた。

「ふえっ…フェリシアーノ！」

「！…アーサーどうしたの？」

「あっ…えっと…その」

「ヴェ？」

「…あう…う…その…ここまで送ってくれて…あっ…ありがとう！」
「あっ！アーサー！」

アーサーは顔を真っ赤にしてフェリシアーノにお礼を言うと、すぐに踵を返して他の侍女へと付いていった。

フェリシアーノはそんなアーサーの小さな背中を見た。

その背中はどこか寂しそうだった。

n e x t s t o r y

40：婚約者（前書き）

セツキーさん、感想ありがとうございます！

今回はスコ兄の登場です

ちなみに女王の名前は英国女王の名前からとっています

40：婚約者

フェリシアーノ達は客室でしばらくのんびりした後、再び侍女に案内されて女王の間という大きな部屋の扉の前へと案内された。

「なんか久し振りだなーここに来るの！」

「陛下は結構お前の心配していたぞー？」

「ここに女王陛下がいるのですね
なんか緊張します」

「まあ、この国を束ねる女王に会うんだから仕方ねえある」

「ふふふ、なんか楽しみななあ」

「ヴェッ！！綺麗な人かなー？」

「お前らは少し緊張感を持って…」

「よくこんなメンバーで旅ができたな…」

高貴かつ崇高な女王の間の扉の前でもいつも通りの雰囲気では話する彼らにエドワードは半分感心して半分呆れていた。彼ははあと溜め息をつく。扉に手をかける。その行動に全員は静かになり、魔法の力で開いていく扉を見た。

「お出ませ

俺達の叔母上でありこの国の元首

ヴィクトリア・カーランド様が」

扉が完全に開き、女王の間が目の前に現れた。

そこには豪華絢爛な玉座に座る高貴なドレスを着た美しい女性とその傍らには長身の金色でパンキッシュな髪型をした眉毛が太い青年がいた。

「はじめまして、皆様

わたくしはヴィクトリア・カーランドと申します」

「俺はフェリシアーノ・ヴァルガスです！

そして、その他大勢です！」

「（俺達はおまけかよ）」

「まあ、あなた方がアーサーを連れて帰ってくれたのですね
ご迷惑をかけましたが、ありがとうございます」

ヴィクトリアはにこりと優しく微笑み、それに美人さもプラスして
フェリシアーノはへにやりと笑った。

「フランスもアルフレッドもおかえりなさい」

「只今、帰り着きました」

「…ロバートも何か一言言っただけはどうです？」

ヴィクトリアに促されロバートは眉間に皺を寄せてフェリシアーノ
達を見た。

「あー、俺の愚妹（馬鹿）が世話になったな」

「オイコラ！ロバート！！」

「また愚妹とかいって！！」

「うるせーな！！こっちは問題起きて大変なんだよ！！」

「問題？」

初対面ながらアーサーを愚妹呼ばわりする、彼女の兄ロバートにフ
ランシスとエドワードは呆れて溜め息をついた。

だが、ロバートが余計に眉間に皺を寄せているのを見て、全員が彼
に注目した。

「ジャーマン帝国がアーサーに皇帝に嫁げと言っている」

「……………」

「…………お前…それいつだよ……………」

「さっきだ」

まあ、言いはしなかったが、もし断った場合ブリティッシュランドに攻めてくるだろうな」

「…………そんなこと…ただアーサーが欲しいだけ…」

「一応断っておいた」

まあアーサーには立派な立派な婚約者がいるもんな？

な？アーサー」

「……………」

ロバートは扉の方へ顔を向けた。いつの間にか、閉じた扉はまた開いており、そこには黄緑色のドレスを身に纏ったアーサーが立っていた。

「…………アーサー……………」

「…………なんで、黙るんだよ」

そんなにこの格好似合わないのかよ……………」

「いや違うよ……………」

ただ、お姫様みたいで可愛いなって思ったただだよ……………」

「かつ…………可愛い……………」

べつ…………別に嬉しくなんか…………ない…………からな

それにみたいじゃなくて王女だ…………！ばかあ…………！！……………」

顔真っ赤にして慌てるアーサーは頭上を装飾する黄緑色のリボンを揺らしながら素直じゃないことを言うが、そこが逆に可愛いと感じてしまいフェリシアノは笑った。

「…………ていうか…………婚約者…………ってどういうことだい…………？…………！！……………」

「！あ…：そつだー！！」

「なんだ、知らなかったのか？アーサーの婚約者はフランシスなんだぞ？」

「はあ！？なんだいそれ！！！！」

「フランシス兄ちゃんどういうこと！！！！」

「まあ、お兄さんは優秀な騎士だからね」

「別に俺が決めたことじゃねえよ！！！！」

「アーサーひどい！！！！」

アーサーに冷たく言われ、フランシスは噓泣きをするが、効果なしだった。

ちなみに、アーサーとフランシスが婚約者同士だと知らされ、アルフレッドとフェリシアーノの抗議が長々と続き、ロバートが切れるまで終わらなかったとか。

n e x t s t o r y

41：旅の終わりと始まり（前書き）

セッキーさん、ちはピーさん、感想ありがとうございます

今回は結構真面目です

41：旅の終わりと始まり

夜、豪華な客室からアーサーの怒声が漏れていた。

「たくつ、このばか…お前らは女王の前で何やってんだ」

「だってー」

「それに女王だって笑ってたじゃないかー」

「少しは反省しろばかっ！！！」

顔を真っ赤にして怒鳴るアーサーにフェリシアーノとアルフレッドは少々ビビリながらも、そんな彼女に苦笑していた。

だがフェリシアーノはすぐに苦笑するのをやめ、静かな声で呟くように口を動かした。

「……………これで旅も終わりなんだね」

「……………」

「元々はアーサーをブリティッシュランドに連れて行くのが目的だったんだもん……………」

「……………終わりなのかもね」

「……………結構楽しかったんだけどさ」

アルフレッドのその言葉でアーサーは寂しさから逃れるように視線を逸らし、服の袖を強く握りしめる。

「アーサー…？どうかしたの？」

「！……………別に何もねえよ」

「……………アーサー」

フェリシアーノにはアーサーが旅が終わるといふ事実から目を反らしているように見えた。

だからあの時、アーサーの背中が寂しげに見えたのだと納得した。

「なんだお前ら、もう旅しねえのか？」

「…ロバート兄さん」

「旅のついでにやって欲しいことあったんだが」

「やって欲しいこと？」

客室に入ってきたロバートは懐から一枚の紙を出して、そこに書かれていることを読み始めた。

「『ブリティッシュランドの女王であるヴィクトリア・カークランドはフェリシアーノ・ヴァルガス御一行に帝国視察の任務を与える』」

「…!!…これは女王陛下の勅命!？」

「最近帝国の動きが怪しいからな」

…女王陛下の頼みなら断らねえよな?」

ロバートは勅命をフェリシアーノに渡すとニヤリとニヒルに笑う。フェリシアーノは渡された勅命を見ながらプルプルと震えていた。

「…俺達…旅を続けること出来るんだね」

「フェリシアーノ!!」

「みんなっ!!…明日朝早くに旅に再出発しよっ!!…!!」

「うおっ!!…元気が出やがった!!」

突然、元気よく叫びだしたフェリシアーノに転換早いと驚きながらも、結局はみんなやる気満々ですぐに彼にのつた。

「じゃあ今から準備…」

「アーサー」

「?…兄さん」

「お前はここに残るんだ」

「!!!!」

「えっ!!!!?」

ロバートからの衝撃的な一言でアーサーとフェリシアーノは目を丸くした。

「なんで…俺は旅に出れないんだ…」

「今回の勅命はお前を守るためにコイツらに与えたものだ

お前が旅に出てみる、危険が多すぎてどんな目に遭うか分かんねえぞ」

「でも…俺は」

「…お前がもし傷ついてみる

悲しむのはコイツらだぞ」

「!!!!!!」

フェリシアーノ達が悲しむ。その言葉でアーサーの心は動かされ、旅に出ないという決意をせざるをえなかった。

「…わかった。俺はここに残るよ」

「アーサー!!!…本当にいいの!?!」

「…ああ、俺が行っても足手まといにしかならないし」

「違うよアーサーは…!!!」

「フェリシアーノ、…頑張れよな

俺はここで無事を祈っているから」

「…アーサー」

寂しさと悲しみを押さえ込んで無理に笑うアーサーにフェリシア
ノは言い返せなかった。
「俺がアーサーを守るから大丈夫」と言おうとした言葉が口から消
えていった。

みんなが寝静まった頃、アーサーは自室のベッドで寝転んで誰かと
話をしていた。

「…兄さんが旅に出るなって」

しかし、相手の姿はなく、アーサーが独り言を言っているようだった。

「でも、俺は旅をしたいんだフェリシアノ達と…」

「足手まといになるかもしれないけど…」

アーサーの言葉を返す者はおらず、アーサーの言葉は宙へと消えて
いく。

「なあ…どうすればいいんだ
…『アーサー』」

アーサーの首もとの翡翠のペンダントがキラリと光を放った。

早朝、城門前にフェリシアーノ達がいた。

「…フェリシアーノ、アーサーに別れの挨拶をしなくて良かったのかい？」

「…アルフレッドこそ

…アーサーに挨拶をしたって、アーサーを傷つけるだけだもん」

「…仕方ねえある

アーサーはブリティッシュランドの大切な姫君ある」

「耀もなんかごめんぬ

巻き込んだじゃって」

「まあ、別に構わんある」

我がいなかったらお前らが何しでかすか分からねえある」

「うっ…帝都でのことは悪かったよ」

「アーサーさんがいないと何か寂しいものですね」

菊の声がやたらと静かに聞こえ、全員は表情を曇らせた。

「野郎ばかりしかいないぜ？このパーティー」

「あんたも野郎ですよ」

「アーサーのつるぺたのエロスでも、このパーティーには必要なんだよ」

「つるぺたで悪かったな！！！！ばかあっ！！！！」

「！！！！！！！！」

突然アーサーの声が聞こえ、全員はアーサーの声を向いた。するとそこには案の定アーサーが仁王立ちしていた。

「ふざけんなよ髭！！いつか大きくなってやるんだからな！！！！」

「…ってアーサー！！！！！！！！？」

「！！！！なんだよ！！！！」

「なんでここに！！？」

「おっ…俺も旅に出るからだよ！！！！」

「！！！！」

「…文句あるのかよ」

「ないよ！！！！全然ないよ！！！！むしろ嬉しいよおおお！！！！」

「うわっ！！！！抱きつくな！！！！！！」

フェリシアーノに泣きながら抱きつかれ、アーサーは勢いに耐えきれずフェリシアーノごとに地面に倒れる。

それでも嬉しそうに抱きついてくるフェリシアーノにアーサーは顔

を真っ赤にして、手のひらに力を溜めてフェリシアーノの頬にベントをした

「じゃあー！全員揃ったし旅に出ようー！！！」

「コラ！はしやぎすぎだー！！フェリシアーノー！！！」

「まあまあルートヴィッヒさん」

「俺は楽しくて仕方ないんだぞー！！！」

「アルー！！お前も落ち着けー！！！」

「いやあー！アーサーの絶対領域が戻ってきてくれてお兄さん嬉しいわ」

「フランス君の変態は戻ってこなくていいのに」

「まったくある」

また、いつも通りの雰囲気でも城門を通過するパーティーにアーサーはみんなにバレないようにこっそりと笑った。

「アーサーー！！」

「？なんだ」

「アーサーは俺が守るから大丈夫だよ！」

にこりと笑ってかっこつけるフェリシアーノにアーサーはばかっとなんげと笑いながら返した。

そんなパーティーの様子をロバートとエドワードは城の窓から見ていた。

「…あいつ、勝手にいきやがって」

「でも、兄さんは行くと思ってたんだろ？」

「…まあな」

「まあ、アーサーがいなくなって寂しいだろうけどさ」

「さっ寂しくなんかねーよ！……！」

「はいはい、でもさ」

「？」

「久しぶりのアーサーの笑顔、可愛かったよな」

「……まあな」

顔を赤くしてそっぱを向くロバートにエドワードは苦笑した。

n e x t s t o r y

42・裏切り（前書き）

セツキーさん、感想ありがとうございます

今回はタイトルの通りです
裏切ります

さて問題、誰が裏切るでしょう

フェリシアーノとアーサー以外です

42：裏切り

フェリシアーノ達はブリティッシュランドから船でジャーマン帝国へと目指していた。

「お前ら!!!聞くある!!!」

船の甲板で耀は仁王立ちで同じく甲板にいるフェリシアーノ、アルフレッド、ルートヴィツヒの三人に言った。

フェリシアーノ達は何事かと嫌な予感を感じながら耀を見た。

「この前の帝都で兵士や騎士に手こずっていたあるなお前ら」

「うっ…そうだけど」

「これからはそういうことが沢山あるある」

「あるある?」

「黙るよろし」

このままじゃお前ら、守りたいものも守れないある」

「!?!?!」

耀の言葉で全員は帝都での出来事を思い出した。

あの時、騎士や兵士がアーサーに襲いかかり、自分たちは助けることができなかった。あの時耀がこなかったら今頃アーサーは彼らの手に墜ちていただろう。

「それで、我は今からお前達に修行をつけてやるある!」

「えー!!!」

「いやだよー!!!」

「ごちゃごちゃ言つなある!!!フランスス、イヴァン!!!こいつらを

船の荷室に連れて行くある！」

「はいはい」

「アルフレッド君をばこるなんて楽しみだな」

以前、耀の戦いを思い出したフェリシアーノとアルフレッドは顔を真っ青にして修行を拒否するが、フランシスとイヴァンに引きずられて行き、その後ろをルートヴィッヒが歩いていく。

「うわーいやだー」

「なんでイヴァンなんだい！！」

「ルートヴィッヒは真面目に参加するみたいだけど」

「裏切り者ー！！」

「別に裏切ってないが」

彼らが荷室へ続く階段を降りると、耀は今までの様子を見届けていた菊に懐かしむように言った。

「…お前は修行を嫌がったことなかったあるな」

「まあ、あの時の私は純粹でしたので」

「今も純粹あるよお前は」

「違います…私は純粹ではありません」

低い声を震えさせて言う菊に耀は何か違和感を覚えるが、気のせいであると自分を納得させて荷室へ続く階段に近づいた。

「……………まあ、いいある」

お前が何しようと思は構わないある」

「……………」

「でも覚えておくといいある」

お前にはお前を信じる人間がいるということを」

「……耀さん」

耀はそれだけ言うと、階段を降りていった。菊は耀が降りていった階段をしばらく見つめてると小さな声で言った。

「……私はあなたの思っているような人間ではないのですよ……耀さん」
そう言った菊の背後には人影があった。

「菊……」

「おや、アーサーさん」

背後の人影はアーサーで、菊はアーサーに気付くとすぐに笑顔を作った。

「……フェリシアーノ達修行しているのか」

「はい、そうですよ」

「そうか……」

アーサーはしゅんとした声で言った。日頃自分のことを足手纏いと思っているせいか、申し訳ないのであろう。

菊はそんなアーサーを見て、名案だと言わんばかりに行動に出た。

「……アーサーさん、お茶飲みませんか」

「……お茶？」

「ええ、帝都で手に入れたものですよ
有名店のものなんです」

菊に勧められては断ることが出来ないアーサーだが、自分も丁度喉

が渴いていたのでこくりと頷いた。
そんなアーサーに菊はどこか悲しそうな目をしていた。

荷室にて、耀達が見守る中、フェリシアーノ、アルフレッド、ルトヴィットは正座をして神経を研ぎ澄ましていた。

「ヴェー……」

「ぐぬぬ……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「………つて…これのどこが修行なんだい!!?」

「ヴェー!!!!足が痺れたよー!!!」

だが、普段大人しく出来ないフェリシアーノとアルフレッドはすぐに集中力が切れ、神経質に叫んだ。

「続けるよろし!!!」

「ぎゃああ!!いた!!」

「ちよっ!!蹴らないでくれよ!!!!」

「お前らは集中力が足りないある!!!だから続けるよろし!!!」

耀はこれも修行の一部と彼らに修行を続けさせた。渋々修行を再開した彼らにため息を付きながらルートヴィッヒに注意をした。

「ルートヴィッヒ、この馬鹿二人と違って落ち着いているみたいあるが、心が乱れているある」

「…すまない」

「確かに気持ちは分からないでもないあるが、今は修行中だからしっかりするある」

すまない。それだけ言うとルートヴィッヒは修行を再開した。そんな彼らを見て、耀は焦っているように顔を歪ませた。

「…耀君どうしたの？」

「…嫌な予感がするある」

「嫌な予感か？」

耀が焦るなんて珍しいな」

「それ程やばいってことあるよ」

「ヴェっ?!」

耀が顔を真っ青にして話す中、フェリシアーノが突然声をあげた。突然のことで、修行をしていた二人も修行をやめてフェリシアーノの方を向く。

「フェリシアーノ?…どうしたあるか」

「今…アーサーの悲鳴が聞こえなかった？」

「アーサーの？」

まさかお前、もう集中力が高まったのか」

「修行したかいがあったねー」

フェリシアーノの早い修行の成果をルートヴィッヒとイヴァンは賞賛するが、フェリシアーノはそれよりもアーサーの悲鳴が聞こえたと強く主張した。

「…って言ってる場合じゃないよ!!本当に聞こえたんだ!!!アーサーの悲鳴が!!!」

「…まさか!!!お前ら、今すぐ甲板に行くある!!!」

「え…!?あ!!!」

「うん!!!」

血相を変えて叫ぶように指令を出した耀にフェリシアーノ以外の人間もただ事ではないと気づき、すぐに階段を上り甲板へと出た。

「アーサー!!!」
「!!!!!!」

真つ先に甲板に出たフェリシアーノはアーサーの姿を探して見つけると目を丸くした。

続いて出てきた者達もフェリシアーノと同じく目を丸くした。

そこには数人の帝国兵士と帝国兵士に二人係で両腕を拘束されたアーサーがいたからである。

「アーサー!!!」

「…フェ…リ」

アーサーはぐったりとしていて、フェリシアーノの呼びかけに小さなか細い声しか出せないようである。

「帝国兵士!!!!!!お前ら!!!アーサーに何をした!!!」

「なんで、俺達がここにいることを知っていたんだい!!!?」

「私がやったことだからですよ」

血相を変えて帝国兵士に問いただすフランシスとアルフレッドを宥めるように数人の帝国兵士の後ろからよく見知った人間が現れた。

全員はその姿を見ると信じられないと目を見開きシヨックを隠せず、アーサーは表情を曇らせた。

「えっ…嘘…」

「…こんなことって」

「…なんでなんだよ」

「…なんで、お前がそこにいるあるか!

菊！！！」

耀は帝国兵士の方にいる人物、菊を睨みつけた。
だが菊はそんな耀を冷たい表情で見ると、普段とは違う冷たい声で
言い放った。

n e x t s t o r y

43・帝都へ（前書き）

今回はかなりグダグダです

早く助けに行けよフェリシアーノ

あと少しでロヴィーノが出せる！！ロヴィー！！まさかの立ち位置！！

ていうか、親分いつ出そうか…

43：帝都へ

耀は帝国兵士の方にいる人物、菊を睨みつけた。

だが菊はそんな耀を冷たい表情で見ると、普段とは違う冷たい声で言い放った。

「私は帝国軍大佐本田菊

元々あなた方の敵だった

それだけです」

「そんな…菊が敵だなんて」

「残念でしょう？アルフレッドさん

私があるたと旅をしていたのはアーサーさんと繋がりのあるあなたを利用するためです」

「でもっ…菊は…菊はっ！！俺達を助けてくれて！！！！優しくて！！！！」

「それはあなた方を欺いてアーサーさんを手に入れるためです」

今までの菊は全てが偽物で本当は自分達の敵だった。

そんな事実はあまりにも大きな衝撃をフェリシアーノ達に与えた。だが、耀だけは菊を敵意むき出しの瞳で睨んでいた。

「…そういうことなら、さっさとアーサーを返すある！！！！！！」

「無理な話ですね

力付くで来ようと無駄ですよ？」

「…何言ってるの菊ちゃん

そいつらはただの兵士でしょ」

「ただの兵士？」

残念ですが、彼らは皆ハーフェルフで特別訓練を受けているんです

ブリティッシュランドの一般騎士に匹敵する強さですよ」

「！！ハーフエルフ！？あの魔法を使うエルフの血をひく種族か！？」

「…でも関係ないよ！菊！…アーサーを返して！！！！」

武器を取り出してそれを菊に向けてアーサーを返すように催促するが、向こうは十数人いる上に人質がいる。フェリシアーノ達が不利なのは明らかだった。

「…王女以外の人間は……殺しなさい」

「……………やめっ……」

「……………アーサー！？」

アーサー以外の人間を殺すように命令する菊にアーサーはとっさに反応し、小さな声で呪文を詠唱しはじめた。

「なっ……！？こんなところで魔術を！？」

「アーサー！？一体何を……」

「今すぐ王女の口を塞ぎなさい！！！！」

「…もう遅い」

菊がアーサーの口を塞ぐように命令する頃はもう呪文詠唱は完了しており、魔法は発動した。

だが、魔法陣は帝国兵士の足元ではなく、フェリシアーノ達の足元に出現した。

「！？…なんで?!」

「…この魔法陣は移動系魔術の……?!」

「まさか…アーサー……!!」

フランスはすぐにアーサーが自分達を逃がそうとしてくれていることに気付き、アーサーの方を見る。するとアーサーは彼らを安心させるように笑って言った。

「…みんな……逃げ……ろ」

「あつ……アあああせあああ……！！！！」

フェリシアーノが手を伸ばしアーサーの名を叫んだ頃には彼らは消えていた。

甲板には意識を失ったアーサーと帝国兵士と菊だけがいた。

「まさか……麻痺薬を飲ましても魔法が使えるとは……さすが『天使姫』ですね」

「大佐！王女はどういたしましたでしょうか？」

「このまま帝都の帝国城へ連れて行きます」

目を覚ました時にまた魔法を使われては厄介です。拘束具をつけて口を布で塞ぎなさい」

「ハッ！わかりました！」

帝国兵士たちはアーサーを抱えて、船の荷室へと行った。菊はそれを見届けると小さな声で呟いた。

「もうすぐで………『天使』は復活する」

その頃、ブリティッシュランドでは城の応接室にてロバートは金髪
のボブヘアの青年と何やら話をしていた。

「これが新作の魔法薬なのである」

「ほう、これが」

「これを使えば傷などすぐに塞がる」

「へえ、やっぱり優秀だな」

お前ら兄妹は

「国の平和のためなのである」

ロバートは、金髪の青年から受け取った瓶薬を興味深そうに見ると
感心したように感想を述べた。

ちなみに今日は快晴で心地良い青空が広がる清々しい日である。だ
がこんな平和な日は一つの叫び声で台無しとなった。

「うわああああ！……！！」

「ヴェー！……！！」

「なっ……何事である……！！」

「あー…あの馬鹿共が…」

庭の方から聞こえた騒がしい声に金髪の青年は驚き、ロバートは頭を抑えて溜め息をついた。

二人は応接室を出て、庭まで走って行くとそこにはフェリシアーノ達が倒れていた。

「お前ら帰ってくるの早いぞ」

「…うっつ…いたた…」

「…ここブリティッシュランドか」

「ていうかアーサーはどこ行った」

「アーサーは……ああー…!…!…!」

倒れていたフェリシアーノ達はアーサーの名を出されすぐに起き上がり声を張り上げた。

「そうだよ!!…アーサーが捕まっちゃったんだ!!…!」

「そして菊が帝国軍大佐で!!!」

「こんなことしてる場合じゃない!!…今すぐアーサーを助けにいないと…!…!」

「落ち着くある…!…!」

飛び起きてどこかに走っていきこうとするフェリシアーノの後頭部を耀は片手でがしりと掴んで制止させた。

「…おい、テメエら」

どういふことが説明しやがれ!!!」

「って怖っ!!!ロバートお前怖いよ!!!」

「いいから、とつとと説明しやがれ!!!」

ロバートが悪魔のような形相で睨まれ、フランシスは顔を真っ青にしてさっきのことを一通り話した。

「なるほど、全部本田の罠だったのか」

「でもアーサーが捕まった

事態は凄くやばい」

「……やばい事態なのは帝国も同じみたいだぜ」

「帝国が？」

「………皇帝が行方不明だよ」

「……！」

ロバートの言葉にルートヴィツヒは目を見開いた。ロバートはルートヴィツヒが聞きたいことを察したように続きを話した。

「………元老院が帝国を牛耳っているらしい」

「元老院………！帝国軍を手に行っている奴らか……」

「アーサーもそいつらに囚われてんだろっな」

「……アーサー」

今の事態がとても大変なことになっている上にアーサーが帝国側に囚われているという事実、フェリシアーノは自分の力不足と弱さに悔しくなり拳を握りしめた。

「……俺が強ければこんなことには………」

「……フェリシアーノ」

「……俺が守るっていったのに」

フェリシアーノの悔しそうな表情に全員何も言えずに沈黙のまま時間だけが過ぎていった。

だが耀はそんなフェリシアーノを見ると拳を握りしめて思いつき殴った。

「ヴェっ…!？」

あまりにも強く殴られたせいか、フェリシアーノは5メートル程吹っ飛び、全員は驚愕した。

「いたっ…!!何するんだよ…!!!!」

「お前!!いつまでもウジウジすんなある!!」

そんな姿をアーサーに見せたら殴られてるあるよ…!!!!」

「っ…でも俺のせいだ…!!」

フェリシアーノは泣きそうな顔で耀に殴られた頬を抑え、震える声で返した。

だが、耀はそれを厳しい瞳で見ると鼻を鳴らして言った。

「そう思うなら、今すぐアーサーを助けに行くある！」

アーサーはお前の助けられるのを待っているある…!!!!」

「アーサーが…俺の…」

「フェリシアーノ、お前はアーサーを守ると言っただろうなら、彼女を助けるべきではないのか」

「…ルート」

「フェリシアーノ君、菊君を敵に回すことが嫌かもしれないけどこのままじゃアーサー君は…」

「俺は…」

仲間達に論されフェリシアーノは目をつぶり手を震わせた。

自分が助けに行かないとアーサーは大変なことになる。その言葉がやけに心に響いた。

すると、フェリシアーノは強い意志が宿る目を開いた。

「俺っ…アーサーを助けに行くよ…!!!」

フェリシアーノは仲間達に向けてそう言った。仲間達はその言葉を待っていたかのようにすぐに頷いた。

「でも、どうやって行くんだ？港は多分菊が封鎖させてるぞ」

「エドワードのドラゴンじゃ目立つし」

「移動なら我が輩に任せろ」

「…バツシュ…!!」

帝都へ行く方法を考えていると、今まで黙って様子を見ていた金髪の青年バツシュが話に入ってきた。

「誰？」

「こいつはバツシュ・ツヴィンクリ

移動系魔術のスペシャリストだ」

「じゃあ移動系魔術で送ってくれるの!？」

「ああ、アーサーが浚われたなら一大事だ

特別に我が輩がやってやるぞ」

「あっ…ありがとう…!!!」

「今すぐ送ってやる!!!全員準備をして魔法陣の上に立て…!!!」

「うん…!!!」

バツシュに指示され、フェリシアーノ達はバツシュが床に出現させた大きな魔法陣の上に乗った。

「…お前ら、絶対に馬鹿妹を助けるよ

じゃないと、ぶっ殺すからな」

「わかってるよ…!!」

ロバートの脅しに近い応援を受け、フェリシアーノ達はバツシユの移動系魔術の光に包まれた。

(…アーサー…待っててね)

フェリシアーノが心の中で、今頃捕まっているアーサーにそう言つと、フェリシアーノ達は光と共に消えた。

n e x t s t o r y

44・囚われ（前書き）

ちはピーさん感想ありがとうございます

今回ちょっと危ないです

痛いシーン無理！！って人は見ない方がいいです！！

グロさはあまりありませんが

これから、痛いシーン増えます

44：囚われ

帝都ブレームンの帝国城の地下室

いつもは人がおらず静かなのだが、今回は違った。

原因はその地下室のとある一室。その部屋の扉には拷問部屋という文字が彫られており、中には拷問器具が置かれていた。

「…良いお姿ですな姫君」

「……」

アーサーは天井から吊されている鎖付きの手枷で両手を吊り上げられており、足は動けないように地面から飛び出た鎖付きの足枷で縛られており、逃げ出すことなど無理だった。

アーサーは目の前の男ジャック・リツパーを睨んだ。

「…一体、何が目的なんだ…」

「目的？そんなの決まっているでしょう」

「触るな！！！！」

ジャックに顎を手で固定され、アーサーは嫌悪感から体を振って拒絶をし、鎖がジャラジャラと音をたてる。

「あなたの中にある『天使の魂』ですよ天使姫」

「っ…！！！！なんでそれを…！！！！」

「はて、なんででしょう？」

しかし我々は天使の魂をあなたから取り出したいのですが、分かりません

あなたなら分かるでしょう？」

顔を近づけて獲物を見る捕食者のような瞳でアーサーを見るが、アーサーは強い意志の籠もった瞳で負けじと睨み返した。

「いやだ！！俺は教えない！！！」

「そうですか…それは残念です」

「うっ…！！！」

ジャックが右手を上げると、その場にいた兵士が鞭を持ち、アーサーの背中を強く叩いた。

アーサーは痛み顔に顔をしかめた。

「なら、あなたを拷問して吐き出させるしかありませんね

…やれ」

ビシィッ…！！

「うあっ…」

バシィッ…！！！！

「いあっ…！！」

「どうですか？痛いでしょうか？我々もあなたにこんなことしたくはありません

素直に喋ってはどうぞですか」

「…やだっ…絶対に言うかつ…！！！！」

ビシィィッ…！！

「あぁっ!!」
「…強情な小娘だ」

ジャックはアーサーの悲鳴が響く拷問部屋から出ると、拷問部屋の扉のすぐ隣にいる菊に話しかけた。

「相変わらず寡黙な奴だなお前は」

「それはどうも」

「感謝しているのだぞ？天使姫を連れてきてくれたことに」

「大事な天使姫に危害を加えるのですねあなたは」

冷たい声でジャックに言葉を返す菊に彼は妖しい笑みを浮かべた。

「くくっ…綺麗なものをボロボロにするのは楽しいぞ？」

「私にはそんな素晴らしい趣味はございませんので」

「そうか、それはすまん」

菊の皮肉にジャックはくくつと嫌味に笑うと地下を出て行ってしまった。一人残された菊は扉の格子窓から中を覗いた。

「うぁっ…!!」

痛めつけられても一切喋ろうとしない、強い意志を持っているアーサーに菊は眉間に皺を寄せた。

『…俺は菊を信じる』

先ほど、船で彼女は自分の裏切りを目の中りにし拘束されたが、それでも彼女は自分信じると言ってくれた。菊にはそれがとても齒がゆかった。

「いい加減、喋っちまえよ!!!」

「や…だっ!…ひいっ!…!」

「強情な小娘だなあっ!…!…!」

「いああっ!…!…!」

…… った…すけて…… フェ…りっ…!」

アーサーの翡翠の目は涙で潤んでいた。アーサーの身体も傷だらけで所々血が滲んでおり、床には血が数滴垂れていた。菊にはその姿がとても儂く哀れに見えた。

帝都に着いたフェリシアーノ達は路地裏で帝国城への侵入作戦を立てていた。

「二手に別れて侵入するか
大勢だと目立つからな」

「まず、二手に別れるある」

「じゃあ、くじで決めようよ!」

「なんでくじ持っているんだい君は」

「まあまあ、ひこうよ」

二手に別れることになり、フェリシアーノがどこからか取り出した紐六本で決めることとなった。

「紐の根元に色がつけてあるんだ

赤と白の二種類で三本ずつだよ」

「準備いいあるなお前」

やたらと準備の良いフェリシアーノに耀がつっこんだ後、全員が各自別々の紐を掴んで引いた。

くじの結果はフェリシアーノとアルフレッドとルートヴィッヒが赤を引き当て、耀とフランスとイヴァンが白を引き当てた。

「……………なんかアンバランスな分け方になったな」

「……………すっげー心配ある」

フランスと耀が心配そうな顔で赤をひいた三人を見た。

「まあ、ルートヴィッヒいるから大丈夫だろ」

「えー俺はー!？」

「大丈夫なんだぞ!ヒーローだからさ!」

「お前ら二人が心配ある!?!?!」

不安要素が2人もいる赤組に耀は盛大にツッコんだ。

「まあまあ、じゃあ僕達が正面から堂々と侵入して混乱を招いて、その際にフェリシアーノ君達がどこから侵入すれのはどう?」

「それだ!!!」

「じゃあ、我達は正面から侵入するある!お前らはどこかからか侵入するよろし!

そして、アーサーを見つけたら魔法水晶で連絡するある!」

「わかった!」

イヴァンの出した作戦に全員は了承し、二手に別れて別々の入口から侵入することになった。

耀は全員に魔法水晶を渡すと、真剣な顔で言った。

「…お前ら、死ぬんじゃないやねえあるよ」

「わかってるよ」

アーサーを助け出して、必ず脱出しよう!」

フェリシアーノの言葉に全員は頷き、すぐに二手に別れた。

フェリシアーノ達はしばらく走るが、止まってしまい、ルートヴィツヒは真面目な顔でフェリシアーノとアルフレッドに言った。

「俺達はどこから侵入すればいいんだ?」

「え…ルート分かんないの!?皇子なのに!!!」

「悪かったな!」

「じゃあ、どうしよう…」

「まあ!取りあえず探そう!」

「なんてポジティブな奴なんだ」

何とかなると言いながら走り出したポジティブ組にルートヴィツヒ

は溜め息を付きながらついて行った。

「ヴェーっ!!」

「転ぶな!!」

だが、曲がり角でフェリシアーノは何かにぶつかり転んでしまった。アルフレッドはその様子にどこかデジャヴを感じた。そうデジャヴだった。だが今回は相手が違った。

「…あ…あなた達は…」

「ヴェ？」

「…あー!!!!!!!!!!」

「お前は!!!!」

フェリシアーノがぶつかった相手はウェーブがかった長い栗色の髪に新緑の瞳の美女。

「騎士団の副団長さん!!!!?」

「たしか…フェリシアーノ…さんとアルフレッドさんと…ルートさん!?!」

「えっ…エリザベータ!!!!!!」

そう騎士団副団長であるエリザベータ・ヘーデルヴァーリだった。

next story

45：彼女の協力（前書き）

セッキーさん、ちはピーさん、感想ありがとうございます！！

今回のサブサブタイトル

フェリシアーノてめえパスタ食ってねえで助けにいかんかい！！
です

45：彼女の協力

帝国城から少し離れた建物の並ぶ路地裏で耀達は周りを警戒しながら帝国城を目指していた。

「それにしても、フェリシアーノ君達大丈夫かなあ」

「…ルートヴィツヒがいるから大丈夫じゃ…ないか？」

「でもルートヴィツヒ君は最近上の空じゃない」

「…まあ若者は悩むんだよ」

フランスははあと溜め息をつくときから浮かない顔をしている耀に顔を向けた。

「耀も悩んでるだろ？」

「…否定はしねえある」

「菊ちゃんのことでしょ？」

「……………」

「まあ、弟があんな風になったら悩みはするよな」

「…菊は」

同情の眼差しを向けながら気持ちは分からなくはないというフランスに耀はぼそりと小さな声で話し始めた。

「…菊は…昔親を殺された孤児だったある

我は幼いあいつが一人で見ているのを見て、自分が育てることにしたある」

「……………」

「…我も一人きりだったあるから、あいつの気持ちは痛いほど分か

ったある

多分、菊は人間が嫌いあるよ

昔、自分の親を殺されたあるから

あいつがアーサーを浚ったのもこの世界に復讐するためある

…菊の苦しみはそれほどのものある」

「…復讐か

…なあ耀、もしかして菊って…ハーフエルフなのか…？」

「…そうある」

「じゃあ、お前さんも…」

「…まあ同じあるよ」

耀はフランススの質問に小さな声で答えた。フランススは初めて菊に会ったときに違和感を感じていた。それが耀の話で確信に変わったのだ。

「…なんで分かったあるか」

「あんな若いのに俺より年上なんだ…それに過去のこと詳しい確信できたのは今のお前さんの話からだ

だから気づいた」

「…ハーフエルフは1000年の時を生きるからね」

ハーフエルフは人間とエルフの混血であり、人間からもエルフからも異端の生き物と今も昔も差別されて迫害され続けてきた。今は少ないが、200年ほど前はハーフエルフ狩りが横行されていた。きつと菊の両親は菊をかばって殺されたのだろうとフランススは思った。

「お前らは菊がハーフエルフだからって、あいつを迫害するあるか」

「するわけないでしょ！菊ちゃんは俺達の仲間！」

「そうだよ…裏切ってもみんな菊君を信じているよ」

もちろん耀君も」

フェリシアーノを初めとした馬鹿正直な奴らばかりのパーティーだったなと耀は思い出して苦笑した。

(だが、そんな馬鹿正直な奴らだからこそ…我もここにいるある)

そんな馬鹿正直さがアーサーの笑顔を取り戻した。

結局自分も馬鹿正直な奴の一人だと苦笑し、いつも通りの強気な表情で彼らに言った。

「さて、我も可愛い弟を更正させるあるか！」

「耀！」

「弟を正しい道に戻させるのは兄の役目あるからな！」

兄貴面をして言う彼に苦笑しながらも彼らは帝国城へと再び目指し始めた。

「エリザベータさんって良い人だね！」
「全くなんだぞ！」

その頃フェリシアアーノ達は喫茶店でエリザベータと話していた。
ちなみにテーブルの上には大盛パスタと大量のハンバーガーの皿が置かれていた。

「最初はアーサーを狙う悪い人と思ったよー」
「やっぱり美人な女の人に悪い人はいないんだねー」
「…お前ら単純すぎるだろ」

単純なアルフレッドとフェリシアアーノにルートヴィツヒは額を押さえつつ、隣に座るエリザベータを見た。
エリザベータはルートヴィツヒの視線に気付くと、彼を安心させるような優しい声で言った。

「…ルートさん、大きくなりましたね」

「……………ああ」

「…ギルなんかより頼りがいがあるわ」

「……………」

「大丈夫よ！あのギルだもの！死んでなんかないわ！！！」
「…そうか」

「そつよー!」

ずっとギルベルトが気がかりだったルートヴィツヒは彼の騎士であるエリザベータの言葉を聞いてひとまず安心した。

「でもフェリちゃん達……アーサーさんを助け出すのは至難の業よ」

「…俺はそれでもアーサーを助けるよ」

「ならパスタを食わずに助けにいくぞ……!」

「あ……早くアーサーを助けないと……!」

「待って……!」

フェリシアーノは突然血相を変えて喫茶店を飛びだそうとするが、エリザベータに引き止められる。

「待って……!帝国城に侵入するのは至難の業よ……!」

「わかってるよ……でもアーサーが……!」

「アーサーさんは殺されはしないわ……!」

「ただアーサーさんはきつと拷問されてるわ……!」

「……拷問……!」

「なら尚更アーサーを……」

「だから、侵入なら私に任せてください……!」

「え……?」

自信満々に言うエリザベータにフェリシアーノ達はパチパチとまばたきをした。

帝国城正門前にエリザベータとフェリシアーノ達はいた。

正門前を警備していた兵士は驚いて目を見開く。

そんな兵士にエリザベータは敬礼をしてみた。

「騎士団副団長エリザベータ・ヘーデルヴァーリ、指名手配中の少年三名を捕獲して参りました」

フェリシアーノ達は全員エリザベータに背負われており、兵士はそれに驚きながらも、反応のないフェリシアーノ達を見て、彼女に敬礼をし、正門を通らせて城の中へといれた。

城の中に入って、誰もいないことを確認すると、エリザベータは背負っている三人を降ろした。

「さあ！これで大丈夫！！」

「…エリザベータさんってすごいねー」

「俺、結構体重酷いんだぞ」
「まあ！副団長だしね！」

三人は閉じていた瞳を開くと、自分たちを背負っていたエリザベータを賞賛した。

「アーサーさんはきつと地下室の拷問部屋にいるわ！」

「…アーサーっ！！！！」

「…きつと今頃…」

「早くいかないと！！！！」

「地下室はその階段よ！！！」

エリザベータは城のエントランスの右脇にある下りの階段を指差した。フェリシアーノ達はそれを見ると一気に走り出した。

「気をつけてね！！！！」

「うん！！エリザベータさん！！ありがとう！！！！」

「エリザベータ！！！！お前も気を付けるんだぞ！！！！！！」

協力してくれたエリザベータにお礼の言葉を述べた後、彼らは地下室へ続く階段の闇へと消えていった。

エリザベータは彼らが見えなくなった後の階段を見つめ、彼らの無事を祈っていた。

n e x t s t o r y

46・信じる心(前書き)

ちはピーさん、セッキーさん、感想ありがとうございます…！

今回は前半真面目なシリアス

しかし後半はギャグです

なんだこれ……

結構長くなったせいで、どんどんロヴィの出番が遠く…うあああああ
ああ…！…あと4話ぐらいでロヴィ出します…！…！

次回予告、

孫と爺と仙人

46：信じる心

数時間前

帝国近くの海の上の船で私はフェリシアーノ君達を裏切り、そしてアーサーさんを捕らえた。

『…アーサーさん……目は覚めましたか』

私は荷室で手錠を後ろ手につけられて足首をロープで縛られ、口には布をあてられているアーサーさんの様子を見て少し胸の痛みを感じながら目をゆっくりと開いた彼女に語りかけた。

『んっ……』

『おや、それでは話せませんね』

『っ……菊！……』

口に噛まされている布を解いて外してやると、アーサーさんは苦しそうに呼吸をし、落ち着くと泣きそうな顔で私の名を呼んだ。

『…なんでこんなこと……!!』

『私はもともとこんなことをする人間だったのです』

『…そんなこと……!!』

『アーサーさん』

私を否定しようとする彼女の名を呼び、私は彼女の両肩を掴んだ。

『…私、実はハーフエルフなのですよ』

『…ハーフエルフ……』

『そうです、虐げられた混血の種族です』

『……………』

『人間への憎しみなど凄いものですよ？』

『私は今すぐにもあなたを酷い目に合わせてやりたいものです』

くくつと喉奥から妖しい笑い声を出すと、アーサーさんは私に恐怖を感じると思った。

だが彼女は一瞬怯えはしたが、すぐに人を慈しむ表情をして落ち着いた声で言った。

『…菊はそんなことしない』

『…!!!?』

『菊は優しく、大人で、落ち着きがあつて、そんなことをする奴なんかじゃない』

『…つ…!!!』

『俺は菊を信じているから』

私は彼女の一言で思わず、表情を崩してしまった。

私は彼女や兄を裏切った、これから彼女が拷問をつけることも知っている、それを知って彼女を連行している。

なのに彼女は自分を信じると言ってくれた。

『……………だからっ！…私はあなたの思っているような…!!』

『……………菊!?』

『第一私は、フェリシアーノ君達を殺そうとまでしましたよ?』

『…でも菊は…!!』

『最初から全てこれが目的だったので…!!』

アルフレッドさんに近づいたのも…あなたを捕らえるためで…!!』

『それでも俺は…菊を信じたい…!!』

目を見開いて大きな声で叫ぶように言う私にアーサーも叫ぶように私に言った。

ダメだ…ダメだ……………これ以上彼女といたら…私は…。

『…フェリシアーノ君は助けになんか来ません』

私は彼女にそう吐き捨てると静かに荷室から出た。

『……………フェリシアーノはきつと助けに来てくれる』

彼女の言葉には気付かないふりをして…。

菊はアーサーとの会話を思い出すとそつと溜め息をついた。

「（…今頃、アーサーさんはどうなっているのでしょうか）」

心の強いアーサーならきつと辛い拷問にも耐えているだろうと菊は安堵した。

安堵した自分に少し苛立ちを感じながら目の前にある拷問部屋を見た。

格子窓から中を覗くと、アーサーは先ほどよも酷く傷ついており、

それを面白がって痛めつけている兵士たちがいた。

「あっ……はあっ……」

「おいおい、しづといぞこのお姫様」

バシィッ

「あうっ……!!」

「……」

「っ……」

「なあ?」

「なんだ?」

「このお姫様、可愛い顔していると思わねえか?」

「ああ、思う思う!可愛いよなこのお姫様」

「だからさ……」

そう言った兵士の声はどこか捕食者のようであった。

「……今からさ、別の方法で拷問しねえか?」

「……どんな?」

「お姫様の純潔を汚すんだよ!!」

菊はその言葉を聞くととつさに反応し、格子の中の兵士たちを見た。

「ここにはさ、そういう系の道具もあるじゃん?」

「なんか楽しそうだな!な?お姫様」

「っあ……!!」

アーサーの恐怖ですくんだ声が聞こえた途端、菊は拷問部屋の扉を開けて、中へ飛び込んだ。

「……!! 本田大佐!!?」

「……あなた方、いくら捕虜相手でもやっていいことと悪いことがありますよ」

「……!! ……すみませんでした」

「き……く……」

「……」

「……あり……が、と……」

「……」

ふにやりと微笑んで礼を言うアーサーの顔は傷だらけだが、それはどこか優しさに帯びていて菊は心の奥が痛んだ。

だが、菊はアーサーに一言も言わず拷問部屋から出て行った。

自分が彼女を助けたのは気まぐれだ

単なる気まぐれ

そう自分に言い聞かせて、再び悲鳴が聞こえる拷問部屋から離れていった。

なんとフェリシアーノ達は捕まっていた。だが、正しくはエリザベータの協力での侵入作戦なのだが、彼らはそのことを知らなかった。

「…あいつら捕まってるじゃねえあるか!!」

「ていうか捕まるの早いよ」

「凄い二度手間!!」

お兄さんもう嫌だ!!」

耀達は呆れるが、実際は捕まってなどいない。ただ、作戦無視で勝手に侵入しただけだ。

「でも、結局は入らねえといけねえある」

「!なら良い方法があるよ」

「?言ってみろイヴァン」

「色仕掛けで正門前にいる兵士を再起不能にしようよ」

「!!!ナイス!!!ああいう女の子と縁のなさそうなのっついむさ苦しい男は可愛い女の子大好きなんだよね!!!」

「なんかルートヴィツヒ君の悪口みたいだね」

ルートヴィツヒがいたらどんな反応をするのだろうか。イヴァンはそれを考えながらニコニコ笑った。

「問題は女の子か…」

「なら任せるよろし!!」

耀は自分任せると言うと、目を閉じてゆっくりと高らかに呪文詠唱を始めた。

「『天地を貫く光華の素よ

契約者の名において命ず
出でよ！湾！！！！！！」

詠唱し終わると当たりが光に包まれ、光と共に美しい長い黒髪の桃色の中華服を纏った少女が現れた。

「精霊！？」

「私の契約精霊の中の1人の光の精霊の湾あるよ！！」

「老師！！久しぶりです！！」

あと、皆さんはじめまして」

礼儀正しくぺこりとお辞儀する湾に可愛いなあとフランススは言葉を零すが耀に睨まれてしまった。

「で、老師

何の用ですか？」

「ちよつとあそこの兵士をお前の色仕掛けで落とすある」

「嫌です」

「断るの早いある！！！！！！」

兵士達を指差して湾に指令を出した。
だが、0.5秒で断られてしまった。

「なんであるか！！！！」

「私は菊さん一筋だから無理だもん！！！！」

「…この子……菊が好きなんだ」

につこりと笑いながら断る湾のさりげない爆弾発言にフランススは苦笑した。

耀は呆れていた顔を真面目な顔にすると湾に言った。

「湾!!! そんなこと言ってる場合じゃねえある!!!」

菊の奴… あいつついに… 復讐心が出てきてしまったある」

「菊さんが!?!? そんな…」

「だから我はあいつを叱りに行かんといけねえある

… だから協力してほしいある」

普段は適当な耀に湾は違和感を感じると共に心が動かされた。

そして思い出したのだ。昔から彼は菊や自分達を大切な人として家族として守ってくれたことを。

誰よりも愛情を注いでくれたことを。

きつと彼は今頃復讐心で心をいっばいに行っている菊を信じているのだろう。

湾は耀の真剣すぎる瞳に何かを感じ取った。

「… 老師」

「… 頼むある」

「…………… わかりました

私、協力します!!!」

耀に心を動かされた湾は耀に協力をすると言うと、耀達の顔は明るくなった。

だが、次の湾の一言ど耀は再び顔を真っ青にした。

「ただし、老師の女装を手伝う意味で!!!」

「なんであるか!!!」

「それいいかも…」

「はあ!!!?」

「女顔だしな!!!」

「お前ら!!!」

「……決まりだな」

なぜか耀が女装する話になっており、フランススやイヴァンも湾の話に乗って三人でじわりじわりと顔を真っ青にした耀に近づいた。その後、帝都に耀の悲鳴が響いたのは言うまでもない。

いつもは一つに纏めている黒髪はツインテールにして牡丹の髪飾りをつけ、男にしては細い体は赤のチャイナドレスをまとい、足部分にはスリットが入っていた。
今の耀はどこからどうみても、綺麗なチャイナ娘だった。
だが、耀は泣きそうだった。

「……っ……屈辱ある」

「似合う似合う！」

「もうアーサーとセットで紅二点だな」

紅二点。その言葉で少しショックを受けたが、脚がスースーするの

を感じて、とつとつと兵士達を誘惑して侵入しようとして正門へと向かった。

「あー！！もう早くあいつら誘惑して早く侵入するある！！」

ムキになった耀にイヴァンとフランスと湾はエールをおくった。耀が正門に近づいてきたことに気付くと、兵士達は耀の方をみた。

「…ん？」

「……………」

やや頬を染めて自分を見る兵士を気持ち悪いと思いつつ、耀は嫌がりながら彼らに言った。

「…わわわわっ…ワタシとっ…いいっ…いいこと…しないある…いや…しませんか？」

誘惑の言葉だが、どこかグダグダだった。思いつきり嫌々やっていった。だが兵士達は目をハートにし、耀に近づいてきた。

「（…死にたいある）」

耀はついてきた兵士達を連れ出して、フランスが隠れている建物の影へと連れてきた。

幸い兵士達は耀に夢中でフランス達に気づいていない。そんな兵士達にフランスとイヴァンは気絶させる程度の攻撃を食らわせた。

「ぐわっ」

「ぐはっ」

「はい、耀」

「ご苦労さん!!」

「面白かったよー!!」

「……………」

によによ笑う彼等にいつか復讐してやると誓いながらも、耀は溜め息をついて警備のいない正門へと向かった。湾はいつの間にか帰っていた。

結局、湾は自分の心に大きな傷を作って帰っていった。

これも菊とアーサーのためと思いながら侵入するのであった。

n e x t s t o r y

47・優しさと憎しみ(前書き)

ちはピーさん、セツキーさん、感想ありがとうございます
大感謝です

今回はシリアスです
ギャグはありません

次の次でロヴィが登場します

47：優しさで憎しみ

「アーサー!!どこおー!!!!!!!!」

「アーサーああー!!!!!!」

フェリシアーノ達は地下でアーサーを探し回っていた。

地下は広く部屋も多いため、なかなかアーサーのいる拷問部屋が見つからなかった。

「……くそっ……この部屋も違うか……!!!!!!」

「一体……どこに……」

「……アーサー」

今頃アーサーは拷問を受け、傷だらけになっている。こう捜している間にも彼女は傷ついているのだ。そう思うと彼等は焦り冷静さを見失った。

だが、そんな彼等に追い討ちをかけるように数本のクナイが飛んできた。ギリギリかわすがクナイはまだ飛んできた。だがアルフレッドがとっさに出した魔法銃で全てのクナイを撃ち落とし、ひとまずは助かった。

「やはり、助けにきたんですね」

「……菊っ!!!!!!」

かつんかつんと音を立てながら闇の中から冷たい表情をした菊が現れた。

アルフレッドは菊の姿を確認すると彼を睨んだ。

「…天使姫の言うとおりでしたね」

「…菊、天使姫ってアーサーのことかい？」

「そうですね、彼女は天使の血を継ぐ一族カーランド家の女兒
そして、カーランド家の始祖である天使の魂を体に宿す特別な方」

菊はアーサーの素性らしきものを淡々と口にするが、アルフレッド
とフェリシアーノは意味が分からず首を傾げた。

「!?!?…何を言っているんだい!?!?」

「何も知らないのですね…」

なぜ、我々が彼女を狙ったのかというと、その天使が目的です
そして、その天使の魂が宿る彼女の特別な体も」

「天使の魂…アーサーが…」

「そんな特別な力が…」

「…つまさか…お前達!?!」

「あなたの思っている通りですよルートヴィッヒさん」

我々は天使とアーサーさんを使いこの世界を変えるのが目的です」

「!?!?!?!」

菊が言い終わると、フェリシアーノは菊へと近づいた。

「…そういう話はいいいよ」

「…今アーサーを助けるのが先だよ」

どいてよ菊!?!」

「いいえ、どきません」

私はこの世界や人間に復讐をしなければなりません」

「なんでだよ…なんで復讐しなくちゃいけないんだよ!?!?!」

冷たい瞳で自分らを見る菊にフェリシアーノは彼から悲しみを感じ、言葉が出て来なかった。代わりにアルフレッドが彼に質問した。

「私は人間からもエルフからも忌み嫌われる種族ハーフェルフ」
「！！！！！！」

「…菊の奴、ハーフェルフだったのか!？」

「驚くのも無理はありませんよね」

ハーフェルフは昔から迫害され続けてきた

私の人間の父とエルフの母も私をかばって殺されました」

「！！！！」

「…殺された…?」

「…ハーフェルフは魔法が使える人間だから異端とされたんだ」

顔を真っ青にしたフェリシアーノにルートヴィツヒは冷や汗をかきながら彼に説明した。

「…なんで、ハーフェルフがそんな目に逢わなくちゃいけないんですか！！なんで私の両親は殺されたんですか！！！！」

「…菊」

菊は悲痛な叫びが地下に響いた。それはまるで菊の今までの苦しみをぶつけているようで、聞いているフェリシアーノ達にはとても悲しく感じた。

「こんな世界なんて壊れてしまえばいい、人間なんて消えてしまえばいい」

「！！…そんなこと」

「…人間なんて汚いですよ」

「…！！！！！！そんなことないよ！！！！」

自分の意見に異論を唱えるフェリシアーノに菊は思いっきり蹴りを叩き込んだ。

「ぐあっ……!!!!」

「フェリシアーノ……!!!!」

「菊……やめる……!!」

「うるさいっ……うるさいっ……!!!!!!」

「っ……が……!!」

自分を止めようと近づいてきたアルフレッドを菊はさっきよりも強い力で蹴り、アルフレッドは思いっきり床に叩きつけられた。

「お前達に……何が分かるか……!!!!この子供が……!!!!!!」

「っ……分からないさ、でも……菊は本当は復讐なんて望んでないって……いうことは分かるよ……!!」

「……!!!!」

床に叩きつけられたアルフレッドに容赦ない蹴りをもう一発叩き込んだが、それでもアルフレッドは菊に必死に訴えた。

「……だって知っているんだぞ」

菊は弱かった俺に戦う術を教えてくれた……そして本当の優しさも……」

「……そんなのっ……あなたを騙すための……」

「……菊がそう言っても、無理だよ」

……俺は菊を信じているから」

「……!!!!」

『俺は菊を信じているから』

アルフレッドの言葉が先程のアーサーの言葉と被り、菊は目を見開

いて動揺を隠せなかった。
アーサーは翡翠、アルフレッドは蒼。瞳の色こそは違ったが同じだった。

「っ…だまれっ…黙れええええ…!!!」

「アルフレッド…!!」

「アルフレッド危ない…!!!」

菊は刀を抜いて、未だに床から立ち上がることでできないアルフレッドに怒涛の一発を繰りだそうとした。負傷したフェリシアーノと彼を支えるルートヴィツヒからは悲痛な叫びがあがる。

ザシュツッ…!!!

痛くない。そう感じたアルフレッドはとっさに瞑った瞳をゆっくりと開いた。するとそこには驚くべき光景があった。

「！！！！…たくっ…何やっているあるか…」

「…！！！！！！」

「耀！！！！！！」

アルフレッドと菊の間に耀が割り込んでいた。耀はちらりとアルフレッドの方を見ると、世話がかかる奴と笑った。だが。

「…！！！！！！耀…血が！！！！！！」

「…どうってことねえあるよ………」

「でもっ…！！！！！！」

真剣白刃取りで菊の刃を手で受け止めた耀だったが、菊の攻撃が凄まじかったせいかな耀の手のひらからは血が滴っていた。

「…耀さん！！！！」

「…菊……にーにが叱りにきたあるよ
覚悟するある！！！！」

「ここでも…兄面ですかっ！！！！！！！！」

「がはっ…！！！！」

二人とも両手が塞がっていたが、菊は脚を駆使し耀の脇腹に蹴りを叩き込んだ。

ふっとんでいった耀に後から駆けつけたフランシスとイヴァンは駆け寄るが、耀が彼等の力を借りずにヨロヨロと起き上がった。

菊はそんな耀を見て驚愕した。

「……………なんで……………なんで、避けなかつたんですか…

あなたなら簡単に避けれたはずです……………！！！！」

「確かにそうあるな……………」

「なら……………何故っ！！！！？」

「…苦しいあるか菊」

「……………！！！！！！」

「…でも、お前が苦しいのは殺された両親のことじゃねえある

仲間を傷付けたことある」

「……………！！！！！！」

耀の言葉で菊は平常心を保つことなど無理だった。

動揺の隠せない菊を見て、耀は強い意志の籠められた瞳を向けて言った。

「アルフレッドへの攻撃も…我への攻撃も…全部手加減してたある

ね

「…そんなことっ…!!!」

「…そんなことないなんて言わせないあるよ…」

お前は心は憎しみより優しさの方でいっぱいある」

「知ったような口を聞かないで下さい…!!!」

「…知ってるある

お前は優しい奴ある」

耀の言葉で菊は正気を失いかげ、どうにか正気を保とうと耀に近づき刃を振り上げた。

だが耀はそんな菊から逃げもせずはずっとそこにいた。

「…斬りたいなら斬ればいいある」

「…っ…!!!」

「…我を斬って…お前から憎しみがなくなるなら遠慮なく斬るある」

「…っ…!!!…!!このっ…!!!」

耀に優しさと慈愛に満ちた瞳を向けられて菊はそれがとても眩しくて勢いよく刃を振り下げた。

黙って見ていたフェリシアーノ達の瞳が見開かれるのが耀には見え

た。
カシャンッ…

「……………」

「菊…」

だが、刃は耀を傷つけることなく、床に転がった。

「無理ですよ…あなたを斬るだなんて……………私には無理です……………!!」

「菊……………」

「私は…どうすればいいんですか?…!!!!」

「…我達の所へ戻ってくるある」

「…こんなことしてまで…戻れますか?!…!!!!」

「戻るよ」

床に跪き涙を流す菊にフェリシアーノは近付くと手を差し伸べた。
フェリシアーノの顔はとても優しく笑っていた。

「フェリシアーノ…君」

「…確かに菊のしたことはいいことじゃないよ

…でも、菊だって苦しかったんだよね」

「……………」

「全く…菊は高齢なのに無茶しすぎなんだぞ!!」

「アルフレッド…さん…」

フェリシアーノを皮切りにアルフレッド、ルートヴィッヒ、フランシス、イヴァンが菊に手を差し伸べた。

「…苦しみを分かち合う、それが仲間だろう」

「たくつ…菊は年上なのに、こういうことには鈍いねえ」

「たくつ菊君つてば迷惑かけすぎだよー

まあいいんだけどね」

「…ルートヴィッヒさん、…フランシスさん、…イヴァンさん」

手を差し伸べてくれる仲間達に菊の頬を涙が伝う。

そんな菊に耀が手を伸べる。

「…みんなお前を信じているある

時に嬉しさを分かち合い、時には苦しみを分かち合う

それが仲間あるよ菊」

「耀、さんっ…！…！…！」

「今日でもう悲しみとはさよならある…！」

耀はそう微笑むと、菊の手を握り立ち上がらせた。菊は涙を拭くと彼等に言った。

「私…みなさんと…仲間になれて良かったです」

冷たい地下で温かさが溢れているのを菊は感じた。

n e x t s t o r y

48・救出（前書き）

ちはピーさん感想ありがとうございます

なんと！！アクセス20000突破！！！

皆さんのおかげです！！ありがとうございます！！

感想など、是非お願いします！！！！

テイルズオブブレイセスFの浪川さんボイスがマジ王子だわ！！！！
あとアニナルのサスケが可愛かった！！のんたんボイスでにゃあつ
て殺す気か！！！！！！

では自重して来週の次回予告

次回、ロヴィーノ登場と急展開

です！！！！

48：救出

地下では複数の足音が冷たい石造りの空間で響いていた。

「菊っ！！アーサーはこの先にいるんだね！！！」

「はいっ！！そうです！！！」

走りながら、フェリシアアーノは菊に聞いた。

仲間に復帰した菊の顔はどこかすっきりしていた。

「：アーサーさんは私を信じていると言ってくれました」

「：アーサー」

「彼女はとても強い心をお持ちです

拷問でどんなに痛めつけられても秘密は語らない」

菊の話聞き、フェリシアアーノは今頃ボロボロになっているであろうアーサーを思い浮かべ、拳を強く握った。

そこでアルフレッドは菊にある質問を投げかけた。

「なあ菊、アーサーのこと天使姫って言ってただけかどうかと
とだい？」

「私も詳しくは知らないのですが、元老院のリッパから聞いたの
です」

「：あいつか」

全ての黒幕であるであろう元老院代表のジャック・リッパという男にアルフレッドは怒りを感じ、奥歯を噛み締めた。

「きつと、皇帝陛下が行方不明なのもその方の仕業です」

「恐ろしい奴だな」

「ええ、私もあの方の下にいましたが嫌な奴だと思っていましたよ」

皇帝という単語が出て来て、ルートヴィッヒが暗い顔をしたことに気付くとフランススは慌てて話を変えた。

「…それにしても、あの仮面の男は何なんだ」

フランススのその呟きに答える者はおらず、地下には足音だけが響いていた。

「おいおい、お姫様気絶したんじゃないの？」

「はっ…まじかよ！」

兵士達にはにやにやと厭らしい笑みを浮かべてアーサーを見た。

力無く顔を下げているアーサーの顔は傷だらけで青く、体の衣服は所々擦り切れ、その下から痛々しい生傷が見えた。

「このまま気絶されたら暇だな」

「じゃあ、今からお楽しみやるか？」

「いいねえ、さっきは邪魔されたけどやっっちゃうか！」

そう言うと、兵士は壁に取り付けられた複数のレバーの中の一つを下ろした。

「っ…いあああああ！！！？」

「おはようお姫様」

アーサーの体に電流が流れ、アーサーはそれに無理やり起こされてしまった。

兵士はアーサーが起きたことを確認すると、別のレバーを下げた。するとアーサーの足を拘束していた枷が外れ、その後また別のレバ

ーを下げた。そのレバーを下げたことにより、手枷の鎖が天井からジャラジャラと垂れてきてアーサーは地面に尻餅をついた。

「ふあっ…なっ…何…!？」

「…なあ、お姫様？」

兵士達は尻餅をついているアーサーの上のしかかる。アーサーはそれに恐怖を感じ肩を揺らした。

「…こういうことしたことあるか？」

「っ!?!?…やめっ…触るな!?!?!」

「いい反応するなあ」

兵士がアーサーの内腿を撫でるとアーサーはその嫌悪感から暴れ出し瞳から涙を溢れさせた。

アーサーの反応を見て、兵士達は面白がり腿を撫で続けた。

「やだっ……助けてっ……フェリッ…」

ついに兵士はアーサーの服に手をかけ脱がそうとすると、アーサーは瞳をつぶった。

ガコンッ

だが、拷問部屋の扉が吹っ飛ばされたことにより、兵士達は手を止めて入口の方を見た。

アーサーもゆっくりと瞳を開いてそちらを見る。

「アーサー!?!?!?!」

そこにはフェリシアーノ達仲間がいた。

「フェリッツ!!!」

「アーサー!!!」

「…酷い…あんな傷だらけになるまで…」

「アーサー…っっ!!!」

ボロボロなアーサーを目の当たりにしたアルフレッドは怒りこみ上げてきたのを感じ、アーサーにのしかかっている兵士に突っ込んで強烈な蹴りを食らわせ他の兵士は魔法銃で撃ち抜いた。

「…!!!アルフレッド強っ!!!」

ていうか死んでないよね？」

「…殺してはないさ」

兵士全員が倒れたのを確認すると、アルフレッドは魔法銃をしまい、フェリシアーノと一緒にアーサーの側まで駆け寄った。

「アーサー!!!」

「アーサー無事かい!?!」

「…っ…フェリ…アル…」

フェリシアーノはアーサーの体を膝の上に抱き抱えると、アーサーの様子を見た。

傷だらけのアーサーは目は虚ろだったが、フェリシアーノ達が来たことで安心したのか落ち着いた表情だった。

「くそっ…酷い…傷だらけだよ」

「なんてこと…早く治療しないと」

「我にまかせるある」

耀はアーサーの側にくるとしやがんで、傷だらけで瀕死状態のアーサーを治療術で治療して回復させる。

その様子をフェリシアーノは泣きそうな顔で見っていた。

「…アーサー、ごめんね

来るのが遅くて」

「フェリ…」

「君をこんな目にあわせて…」

自分と同じで泣き虫なフェリシアーノが謝罪するのを見て、アーサーは彼の手を握った。

「…俺、ずっと信じていたんだ

フェリが助けに来るって」

「…アーサー」

「俺は大丈夫だ…」

「でも…アーサーああああ！！！！」

「あーっ！！もうっ！！泣き虫な奴だな！！！！！！」

「アーサーだって泣き虫じゃん！！！！！！」

泣き虫なフェリシアーノの頬を泣き虫なアーサーが抓った。アーサーを回復し終えた耀はゆっくりと立ち上がると二人の様子を見て苦笑した。

「どつちも泣き虫ある」

「本当だね」

「ていうか、アーサーの服破れてるけどどつするんだい？」

「空気読めよお前」

せつかくのいい雰囲気にもアルフレッドは面白くないと拗ねて、あえて空気を読まずにアーサーを指差して言った。それに気付いたアーサーは自分の服を見て、顔を赤くして自分を抱き締めるように腕を体に巻いて隠した。

「みつ…見るな…!!」

「今更でしょ、どうせ幼児体型じゃん」

「うっ…うるせえ…!!…この髭野郎…!!」

「そう言えば、旅に出るときにデイジーから服のスペアを預かっていたな」

「さすがルート!!…ていうかデイジー!!」

「本当にフェリと違って出来た娘だよな」

「えー!!…? 酷いよアーサー!!」

アーサーから皮肉を言われて頬を膨らますフェリシアーノに全員が笑う中、ルートは荷物の中からスペアの服をアーサーに渡した。

「アーサーさん、こちらで着替えて下さい」

「菊!」

「…私はあなたに酷いことをしてしまいました」

許されないことですが、私は心からあなたに謝りたい」

「…なっ…べっ別にそんなことっ…俺は……菊のこと信じてたし…」

「しかし…」

「なら……これからもずっと……友達でいてくれ…」

「アーサーさん…」

顔を真っ赤にして言うアーサーに菊は破顔しそうになるのをこらえて、彼女にありがとうございますと微笑んだ。

アーサーのデレを独り占めしやがってと、すっところこの妬み

が聞こえるがそんなのは無視だ。

菊に案内された部屋に着替えを持って入るアーサーだが、入った直後に顔だけを出して言った。

「…絶対に覗くなよ!!!特にフランスス!!!」

「なんで俺!!!?」

「ていうか俺達も入っているの!!!?」

ギロリと睨んだ後、再び部屋に戻ったアーサーに「そりゃないよアーサー」とフェリシアーノは呟いた。

アーサーの中でパーティーメンバーの殆どがケダモノとして認識されているのは普段の行いの悪さだろうと耀は笑った。

n e x t s t o r y

49・正体（前書き）

ちはピーさん、セッキーさん、感想ありがとうございます

今回ロヴィーノとーじょー

そして…にーにが…にーにいいいい…！！！！！！な話です

次回、衝撃的な展開が！！！！！！

黒幕の登場か！？です

そろそろ、リヒちゃん出してえなあ

ちなみに、このアーサーはリヒちゃんとい勝負です
え？何がつて？胸が！

さっき、第52話書き終えたんですが
にーにが…！！にーにが…！！！！
な、ことになりました

ていうか、最近にーには出張ってんなあ

そろそろ物語も折り返しです

もう、最終回までプロットできてますが
最終回までが長いです

もし、これが終わったら…今度はアルフレッド主人公のRPG書きたいなあ

今のが、テイルズ風味に書いているから、オリジナルでいきたい

まだまだ先の話ですが

連合パーティーで書きたいです
ヒロインがアーサーなのは変わらず

それか、この連載の2年後の話を連載したい

「でも、アーサー君が助かって良かったね」

「一時はどうなるかと思ったよ……」

アーサーを救出できたここに安堵し、ほっと胸をなで下ろすと、アルフレッドはさっきから抱いていた疑問をぶつけた。

「そう言えば、『天使の魂』って何なんだろう」

「……!!」

「……私は世界を変えることが出来るほど強大な力だと聞きました」

「そんな力がアーサーに宿っている……」

「俺もロバートの奴から聞いたことがあるよ」

まあ、本当かどうかは知らないけど」

『天使姫』であるアーサーに宿る『天使の魂』。その話の最中に耀はバツが悪そうに眉間に皺を寄せるが誰も耀の様子に気付かない。アーサーについての謎が深まる中、イヴァンがぼそりと言った。

「もしかしたら、あの話に関係あるんじゃないのかな」

「あの話？」

「ほら、マリーンと巫女姫の話」

「でもあれは……おとぎ話じゃ」

「いや、そうでもないよ」

現にカークランド家は天使の子孫じゃないか」

「だから、それも……!!!!お前ら伏せる……!!!!」

イヴァンの意見に現実性が感じられなくなり、否定しようとしたフランスだが、いきなり何かの気配を感じて、全員に伏せると言い渡し、全員はフランスの言うとおり伏せた。すると、彼等の真上を大きなエネルギー弾が通り抜ける。それは壁にぶつかり、壁を木っ端微塵に破壊した。

「！！なっ…何！？」

「…そう、カークランド家は天使の子孫一族

その中でもアーサー・カークランドは神に愛された故に天使の魂を宿ることができた」

「！！！！！！」

「彼女が天使姫になったのは単なる奇跡にすぎないだが、彼女は主に伴侶として選ばれた」

「っ…お前は！！！！」

エネルギー弾が飛んできた方から煙がたち、そこから人影が現れた。フェリシアーノ達はその人影の姿を確認すると驚愕し目を見開いた。

「…それはアーサー・カークランドが主に愛された運命の姫君だからだ」

「…っ…仮面の…男！！！！」

そう、その人影はアーサーを誘拐したり、フェリシアーノ達の邪魔をしてきた謎の仮面の男であった。

男はフェリシアーノの姿を見ると、にやりと笑った。

「役立たない奴だジャックは」

「お前…まさか帝国を裏で…！！！！」

「その通りだ

たくっ…ジャック・リップー

あの男は役に立たないな
主のものである姫君を勝手を拷問するなど…その上逃げられそうになつたりするなど…

まあ、皇帝を始末してくれたのはいい働きだがな」

仮面の男の言葉でルートヴィッヒは目を見開いた。

頭に浮かぶのは銀髪と紅眼の持ち主である自分の兄。
まさか、とルートヴィッヒは息を呑んだ。

「……!!…!! お前…一体何を…!!?」

「そのままの意味だ…!!」

「貴様ああああ…!!」

「ルート…!!…!! やめる…!!」

今すぐにも兄を手に掛けた黒幕であるこの男を殺したい。そう思うのがルートヴィッヒにはあった。だが、大剣を構えて仮面の男に挑もうとするルートヴィッヒをアルフレッドと菊が必死になつて止めた。

「…お前…何者あるか」

「…何者?…!!」

耀に睨まれて答えようとする仮面の男は耀を見ると、何かに気付いた。

「…こいつ…」

まあ、いい

まずはお前を倒してから答えてやる…!!」

「…!!」

そう言うと、仮面の男は剣を抜き、耀に襲いかかってきた。

仮面の男の攻撃を宙にジャンプしてよけた耀はそのまま仮面の男に向かってドロップキックを食らわせようとするが、剣を使ってガードされてしまった。

「っ！！！！……なかなかやるあるな！！！」

「……貴様、何者だ」

仮面の男は耀を睨むと、再び攻撃をしかけてきた。耀は再び防ごうとジャンプをして今度は天井を蹴って宙回りをして、壁を蹴って、その勢いで仮面の男に鉄拳を食らわせようとした。

耀のしなやかな動きに錯乱された仮面の男は一瞬怯んだ。

その隙に耀は攻撃を決めようとした。だが。

「なんだよ……これっ……！！！」

着替え終わったアーサーが部屋から出てきた。耀はアーサーがこの男からねらわれていることを思い出し、アーサーに注意をとられてしまった。

「隙あり……！」

「しまっ……！」

だが隙が生まれ、形勢逆転されてしまい、耀は仮面の男が出現させたエネルギー弾に吹っ飛ばされてしまった。

「耀っ！！！！！！！！！！」

「耀さんっ！！！！！！！！！！」

「……っアーサー……！！！！！！！！」

全員が耀に駆け寄ろうとするが、仮面の男がアーサーに近づいてい
っていることに気付き、フェリシアーノは急いでアーサーを庇うよ
うに仮面の男の前に立ちはだかった。

「お前っ…!!なんだよ!!」

「フェリ…!!」

「…弱虫が出しゃばるな」

「っ!!!!!!」

仮面の男がフェリシアーノに攻撃しようとするが、フェリシアーノ
はとっさに剣を抜き、男の攻撃を防いだ。

だが、力の差がはつきりと分かり、このままではフェリシアーノは
押されてしまう。

そう感じ取ったアーサーは杖を構えて呪文を詠唱した。

「『舞い怒れ、嵐の思念！

クロスウインドウ!!!!』」

アーサーが詠唱をすると、風の刃が十字に切り裂くように仮面の男
を襲った。

だが、仮面の男に大したダメージはなく、彼の仮面が粉々になった
だけだった。

初めて明かされた彼の仮面の下。それを見たフェリシアーノは目を
丸くした。

「…っ…嘘…そんな…」

「…フェリ?...どうした...!!」

様子がおかしいフェリシアーノに異変を感じたアーサーは仮面の男

の顔を見た。
すると、アーサーは驚愕した。

仮面の男の顔がフェリシアーノに酷似していることに。

「…ロヴィーノ兄ちゃん…!!!!」

フェリシアーノが震える声で呟いたそれにその場にいた全員が目を丸くした。

だが、仮面の男…いやフェリシアーノの兄ロヴィーノは怪しい笑みを浮かべていた。

n e x t s t o r y

50・目覚める魂(前書き)

今回で50話目です!!!

まさか、こんな数までいくとは…

ちはピーさん、セッキーさん、感想ありがとうございます！

今回、にーにの出番があつりませーん!!

フェリちゃんも途中から出番なくなります

黒幕出ます

黒幕はオリキャラです

詳しくは明日の更新に設定載せます

黒幕がオリキャラなのはヘタキャラを(r y

今回はアーサーの拷問シーンより殺伐としています

注意してください

50・目覚める魂

仮面が外れた男は、フェリシアーノと同じ顔に彼より色素の濃い髪と瞳。だが瞳は冷たく、フェリシアーノを見下していた。

「ロヴィーノ…兄ちゃん」

「…兄ちゃん…って…まさか…！」

「フェリシアーノの…兄貴…!？」

「…そうだ、あいつはロヴィーノ・ヴァルガス
フェリシアーノの兄貴だ」

驚愕した表情のまま混乱する全員の疑問にルートヴィツヒが答えた。彼はあえて冷静に言っているが、内心彼も驚愕しているだろう。今まで、旅に出て音信不通だったロヴィーノがああ仮面の男の正体で自分達の敵だったなんて。

「なんで…なんで兄ちゃんが…」

「…フェリシアーノ」

「なんでっ…なんで兄ちゃんがアーサーを狙っているんだよっ!!
!…!!」

冷たい地下にフェリシアーノの大きすぎる声が響いた。

「俺はさるお方に仕えている

そして、俺はそのさるお方の命でアーサー・カーランドを狙っている
ただそれだけだ」

「…なんでだよ、兄ちゃんはこんなこと…女の子を泣かすことなん

てしなかったのに……!!!」

下手したら弟の自分よりすぐ泣き、ナンパ失敗したら自分に慰められる。

フェリシアーノの頭の中ではそんな兄ばかりだったが、フェリシアーノはそんな兄が大好きで尊敬していた。

絶対女の子を泣かすようなことはしない、そんな兄がアーサーを悲しませようとするなんて信じられなかった。

ロヴィーノは啞然としているフェリシアーノの後ろにいるアーサーを見ると、フェリシアーノに向かって言った。

「全ては主のためだ!!! フェリシアーノ!!! そいつを渡せ!

!!!!!!」

「嫌だ!!!!!! 兄ちゃんなんかアーサーは渡さない!!!!!!」

アーサーを渡せと言うロヴィーノにフェリシアーノは彼を睨み付けてアーサーを守るように彼女を抱きしめた。

「っ……お前!!! 俺に逆らう気が!!!!!!」

「っ……俺の知っている兄ちゃんはこんなことしないもん!!!!!!」

「!!!!!!……お前に俺の何が分かる!!!!!!」

自分に楯突く弟にロヴィーノはエネルギー弾を手のひらの中で作り、それをアーサーを抱きしめているフェリシアーノに当てようとした。

「っ!!!!!!」

「……!!!!!! フェリーっ!!!!!!」

フェリシアーノはアーサーが巻き添えにならないよう、彼女を一旦

放したため自分だけがエネルギー弾の餌食になってしまった。
フェリシアーノから放された勢いで床に尻餅をついたアーサーはフ
ェリシアーノの名を叫びながらエネルギー弾の爆発から出た煙の方
を見た。

まともに食らってしまったフェリシアーノは床に倒れていた。

「…フェリッツ！！！！」

「フェリシアーノ！！」

「フェリシアーノ君！！」

「…丁度良い」

「！！！！…フェリに何をやる気…」

仲間達が心配してフェリシアーノに駆け寄ろうとすると、それより
早くロヴィーノがフェリシアーノの側に来て彼の額に手をあてた。

「…これで主は体を取り戻すことができる！！」

「！！！！！！」

「フェリッツ！！！！」

ロヴィーノがそう言った瞬間、フェリシアーノごと黒いオーラに包
まれた。そのオーラはとても禍々しく邪悪なものだった。それは良
くないものだと気付いたアーサーだが、オーラに駆け寄る前にオー
ラが消えてしまう。

オーラが消えた場所には跪いているロヴィーノとフェリシアーノが
立っていた。

「…フェ…リ…?」

「…！！…アーサー」

「…大丈夫なのかっ!？」

アーサーがフェリシアーノの名を呼ぶと、フェリシアーノは微笑んでアーサーの方を向いた。
アーサーはそれを見て、安堵するとフェリシアーノに近づこうとする。

(……ちゃ……だめ……)

「…！」

「……どうしたの？アーサー」

「…いや……何でもない」

アーサーは立ち止まった。

何か声か何かか聞こえたようだ。

だがアーサーは気のせいだと感じ、再びフェリシアーノに近づく。

(……だめ……だ)

「え！？」

また声が聞こえ、アーサーは目を丸くして立ち止まった。

何がだめなんだ。アーサーは訳がわからず微笑むフェリシアーノを見た。

だが、声はまだ聞こえた。

(……い……ちゃ……駄目だ)

(……ち……か……づ……)

「え!!!??」

(…………近付いちゃ…ダメだ…っ!!!……)

「!!!……」

アーサーはそこで気が付いた。聞こえてくる声は警告していることに。

そして、その警告の内容は

『フェリシアーノに近付いてはならない』ということだったが、時既に遅し。

アーサーはフェリシアーノの腕の中にいた。

アーサーは恐る恐るフェリシアーノの顔を見上げた。

「フェリ……?」

「?……」

フェリシアーノの瞳は光はなく、禍々しい闇で曇っていた。アーサーは違和感に気付いた。

「…………フェリじゃない!!!」

「…………」

「お前は…誰だ!!!……」

「!!!……え……!??」

「フェリシアーノじゃないって!!!??」

アーサーの言葉に彼女を抱きしめているフェリシアーノは目を細めた。

他の仲間達も驚いたが、フェリシアーノを疑惑の瞳で見始める。

アーサーはフェリシアーノの腕の中から逃げだそうと暴れ出すが、フェリシアーノからより一層強く抱きしめられた。

「あっ……」

「……アーサー、やっぱり天使姫だったな」

「だ……れ……」

「……そこまでは気付かないようだね」

まあ教えてやるよ

俺は、マーリン

マーリン・ヴァルガスだ！！！！」

彼がそう言った途端、その場にいた全員から驚きの声があがった。

マーリン。

大昔、世界を救った英雄。世界に愛する人を奪われてしまった悲劇の魔術師。

だが、それはお伽話での内容だった。

だが、実際に彼はいた。

「！！！！まさか……なんでフェリシアーノに……！！！！」

「アーサーに天使の魂が宿っているようにこいつにも俺の魂が……体に宿っていたそれだけだ

だから、ロヴィーノにこいつの中に眠っていた魂を呼び覚ましてもらい、俺が自分の体を取り戻すまで使わせてもらう」

決して穏やかとは言えない笑みを浮かべ、事実を述べるマーリンに、腕の中にいるアーサーは小さく震えた。

「そんなっ…まさかフェリに…!!」
「…あなたの狙いは何なんですか」
「狙い?…そんなの決まっている」

菊の問いを嘲笑うかのようにマーリンが答えた。

「アーサーを俺の花嫁として迎え、この醜き世界を破滅させる!!」
「!!!!!!」

黒く禍々しいオーラを纏う、フェリシアーノの体に宿った魂マーリンはアーサーを愛おしげに抱きしめて宣言した。

「そんなこと…させるか!!!!」
「早くアーサーを返しなよ!!!!」
「フェリシアーノの体から出て行け!!!!」

マーリンに反発し、仲間達は武器を構えてマーリンを睨んだ。
だが、マーリンは冷静で、瞳を細めるとニヤリと笑った。

「何…笑っ…ぐああっ…!!!!」
「つつがはっ…!!」
「なん、だ…!!」
「みんなああっ!!!!」

突然仲間達は大きなエネルギー弾の押し潰され、全員地面に倒れた。
アーサーが悲痛な叫びをあげると、倒れた仲間達のそばに復活した
ロヴィーノが現れた。

「……!!」
「不意打ちにも気づかないとは…弱い奴らだな」

ロヴィーノはそう言うと菊の右足の脹ら脛を強く踏みつけた。
悲痛な音と共に菊から悲鳴が聞こえた。

「ぐああっ!!」

「菊っ!!!!」

「ハーフェルフのくせに弱いな」

ロヴィーノはそう言うと、ルートヴィツヒの右腕を強く踏みつけた。
菊同様骨の折れる音が聞こえる。

「がっ……!!」

「ルートヴィツヒ!!」

っ……やめろっ……!!!!」

アーサーの制止の声も虚しく、今度はイヴァンの左腕を踏みつけた。
聞こえてくる音にアーサーは涙を浮かべて止めると訴えた。

だが、それでもロヴィーノは続け、フランシスの左腿を踏みつけた。
耳を塞ぎたくなるような悲痛な音が耳に届き、アーサーは先ほどよりも強く止めるよう懇願した。だがロヴィーノはそのままアルフレッドの方へ向かい背中を軽く踏んだ。

「っ……アーサーを放せ……!!」

「ほお、まだ抵抗するガキがいたか」

「アルっ……!!!!」

「……だが生意気だな」

よし、ロヴィーノ

そいつを八つ裂きにしろ!!」

「っ……あああつ……!!」
「アルっ……!!」

マリーンの命令でロヴィーノはアルフレッドの背中を強く踏みつけ、腰から剣を抜く。

今にも振り下ろされそうな剣を見て、涙を浮かべたアーサーはマリーンに向かって言った。

「やめっ……」

お願い……やめて下さい……!!……!!

……花嫁に……なるからっ……!!」

「……ロヴィーノ、剣をしまえ」

「はい」

「ぐああっ……!!」

「アルっ……!!」

アーサーの必死の懇願でマリーンはロヴィーノに止めるように言い渡し、ロヴィーノはアルフレッドの背中を強く踏みつけると剣を腰の鞘に収めた。

「……了承してくれて嬉しいよアーサー」

「……っふ……うっつ……ふえっ……」

多くの仲間が自分のせいで傷つけられたことに泣くアーサーをマリーンを愛おしげに抱きしめると、彼女を抱きかかえた。

「あなたの体と例のものはこの城の最上階の部屋にて安置しております」

「そうか……アーサー、君の中の悪いものは今からそこで取り出すよ」

「っ…っう…」

マリーンは泣くアーサーの額に優しくキスをすると、彼女を抱きかかえたままロヴィーノの移動系魔術で城の最上階へと消えて行った。

「っ…アー…サー…っ」

アルフレッドは痛む体に鞭をうちながら、アーサー達が消えていった方に必死に手を伸ばすと、そのまま気を失った。

n e x t s t o r y

モデルはアーサー王物語の魔術師マーリンから
理由はイギリスのアーサー王物語のドラマのマーリン役の日本語吹
き替え声優が浪川さんだからである

51：天使と天使姫

静かな冷たい地下にて耀がフラフラとおぼつかない足で歩いていた。

「っ…つまさか…城外まで吹っ飛ばされるとは…」

ロヴィーノに城外まで吹っ飛ばされた耀は自らに治癒術を使い回復し、仲間達の場所へと戻ってきた。

「！……！」

だが、戻ってきた場所で見たのは、フェリシアーノとアーサー以外の仲間達が倒れている姿だった。

耀はその姿を見た途端、血相を変えて彼らの側へとかけつけた。

「！……お前らどうしたあるか！……！」

「…耀…さんっ…」

「！…菊お前…骨が…折られて…」

ちよっと待つよろし！……！」

耀はそう言つとしゃがんで治癒呪文を詠唱し、菊の体を回復させた。骨が元に戻り、菊はゆっくりと上半身を起こした。

「っ！……これで大丈夫ある」

「…ありがとうございます」

他の方にも……」

「わかつているある！……！」

耀は他の仲間にも治療術をかけて治療した。

全員を治療し終わると、耀は彼らから話を聞いた。

仮面の男の正体がフェリシアーノの兄であるロヴィーノであること。自分達の敵が昔の英雄マーリンであること。そのマーリンが魂としてフェリシアーノの体に宿り、彼の体に取り憑いてしまったこと。そして自分達を倒してアーサーを連れ去ってしまったこと。それを聞いた耀は驚愕したが、すぐにいつも通りの表情に戻った。

「…フェリシアーノとアーサーが…」

「ええ、フェリシアーノ君がマーリンに取り憑かれてしまい、そのままアーサーさんを連れ去ってしまいました」

「マーリン…あいつあるか…!!」

「まさか、あの英雄であるマーリンがフェリシアーノに宿っていたなんて…」

「…それじゃあ、今まで敵は僕達のすぐ近くにいたってことなんだ」
自分達の敵が今まで今まで自分達のすぐ近くにいたことと簡単にアーサーを奪われてしまった無力な自分達に絶望した。

だが、アルフレッドだけは違った。アルフレッドは腰の両サイドに一つずつつけられたガンホルダーに入っている魔法銃のグリップを握ると立ち上がり歩き出した。

「アルフレッド…!?!どこいくんだ…」

「アーサーを助けに行く」

ついでにフェリシアーノも連れ帰りに」

「馬鹿…!!見ただろ…!!あの力…!!」

今の俺達じゃかなうわけ…」

「分かってるよ…!!…!!」

アルフレッドは仲間の方を向いた。その顔は真剣そのもので、アー

サーへの想いが込められていた。

「でも…俺が行かなきゃ誰がアーサーを助けるんだよ…！」

「……！」

「フェリシアーノもあいつに取り憑かれているし…このままじゃアーサーが…あいつの伴侶になってしまっじゃないか…！」

アルフレッドはアーサーを心から想い好意を寄せていた。同じ気持ちを持つフェリシアーノとは友であり恋敵でもあった。

フェリシアーノに奪われるのなら、認めることができた。彼ならアーサーを幸せにしてくれるから。

だが、アルフレッドはマーリンは許せなかった。

今までアーサーを苦しめてきた張本人であり、アーサーの幸せを奪う人間。アーサーから幸せを奪ったことのある自分が言つのも難だが。

だからこそ、彼女を傷つける人間が許せなかった。

アルフレッドは進行方向に向き直ると小さな声で言った。

「…アーサーには幸せになって…笑って欲しいんだ」

それだけ言うと、アルフレッドは歩いていった。

仲間達はその背中を暫く見つめていた。すると菊と耀は立ち上がってアルフレッドが行った方へと歩き出した。

「たくっ…無謀なことを言っんですから」

「…まったくある」

言ってることは裏腹に二人は笑っていた。

すると、ルートヴィツヒとイヴァンが立ち上がり、彼らが歩いていた方向へと歩き出した。

「…フェリシアーノの世話をしないといけないしな」

「ふふ、アルフレッド君のくせにかっこつけすぎだよー」

「お前ら…」

歩いていった仲間達の姿が見えなくなると、フランシスは溜め息をついて立ち上がり、彼らが歩いて行った方向へと走り出した。

しばらく、走るとアルフレッドを含む仲間達が歩いているのが見えた。

「…！！フランシス！！」

「なーに、歩いてんだよ！！そんなんじや結婚式に間に合わないぞ！！」

「…結婚式って…！！」

「お兄さんもアーサーは幸せそうに笑った方が可愛いと思うよ」

フランシスのその言葉にアルフレッドはポカンと呆気にとられた。

ああ、こいつも恋敵だった。

そのことを思い出すと、アルフレッドは苦笑してフランシスを追い抜く速さで走り出した。

「フランシスこそ！！走っているわりには遅いんだぞ！！」

そう言うつと、猛スピードで走り出すアルフレッドの姿はすぐになくなった。

フランシスはそれを見て苦笑すると好戦的な顔で走りにスピードをあげた。

それに仲間達も続いたのであった。

移動系魔術で最上階の部屋に着いた3人。

この部屋は元々皇帝の間だったので玉座がそのままあった。だが、問題はそこではなかった。皇帝の間の中央に巨大な水晶が2つ置かれていた。

「…っ…!!」

アーサーはゆつくりとマーリンの腕から解放されると、そのまま高貴な絨毯の上にぺたりと座り込み、巨大な水晶を見上げた。そして驚愕したのだ。

「…なん、で…人が…!!?」

そう、水晶の中にはそれぞれ人が凍らされたように閉じこめられていた。顔は水晶の濁りであまりよくは見えないが、2つとも若い姿だということがわかった。

「…皇帝を始末した後すぐに封印されていた場所からこちらへと持ってきて安置しました」

「…1000年前から変わらないんだな」

1000年前。おとぎ話ではちょうどマーリンが死んだ時だ。

アーサーは、きつと一つはマーリンの本物の体なのだろうということがわかった。

「…今すぐ復活の準備をしろ」

「わかりました」

ロヴィーノはマーリンに命令されるとすぐに復活の準備をさせた。復活とはきつとマーリンの体のことなのだろう。

そのマーリンは座り込んでいるアーサーに近付いて膝を付くと優し

く肩を抱いた。

アーサーはびくりと肩を揺らしてマーリンを見た。マーリンは今ではフェリシアーノの姿でいる。アーサーはフェリシアーノの姿をしていながら残酷なことを言う彼がとても怖かった。

だが、アーサーはその恐怖を心の奥に仕舞い込んで、前から気になつていたことを彼に聞いた。

「……………なんで、俺が花嫁なんだ？」

アーサーが一番聞きたかつたことだった。アーサーはマーリンとは初対面で何も知らない。だがマーリンは自分のことを知っているようだった。

アーサーはそのことが不思議でたまらなかつた。

だが、マーリンはアーサーの質問に変な顔一つせず、微笑んで答えた。

「それは、アーサーが俺が唯一愛した女に似ているからだよ」

「え……!？」

「いや、アーサーはそいつの生まれ変わりと云った方がいいかな」

「…生まれ…変わり」

「光のような金髪、自然を移したような翡翠の瞳、そしてこの顔に
しぐさや名前

全てが同じだ

まあ、胸はそいつの方があつるかな」

「…っ!!…むっ…胸は余計だ!!!ばかあっ!!!」

マーリンの言葉にアーサーは顔を真っ赤にして怒つた。

そんなアーサーを愛おしげに微笑むマーリンを見て、アーサーは何か心地よさを感じた。

そんなアーサーをよそにマーリンは話を続けた。

「…このガキの体の中に入っているとき、初めてお前の姿を見たとき気づいたんだ

これは運命で、俺達は結ばれるのだと」

「…運命」

「…俺は生まれ変わる前のお前を守ることができなかったなのに、世界はお前を奪い去った

誰よりも優しく、誰よりも強く、そして誰よりも美しいお前を

人間はお前を道具のように利用して死に至らしめた
だから俺は決めたんだけだ

醜いこの世界を壊そうと」

マーリンのその言葉はアーサーの顔を真っ青にするには十分だった。言葉だけではない。フェリシアーノの姿で、フェリシアーノの顔で、そんな言葉を言って欲しくなかったのだ。

アーサーが顔を真っ青にして言葉を失っていると、準備を終えた口ヴィーノがマーリンの元へやってきた。

「マーリン様…準備が出来ました」

「そうか…アーサー、少し我慢してほしい」

「…え！？…な、に…」

マーリンの言葉のすぐ後にアーサーを中心に巨大な魔法陣が現れた。マーリンはアーサーから手を放すと、魔法陣の外へと出て行く。

その途端、魔法陣から発せられた光がアーサーを閉じこめるように球体を作った。

「!!!!!!…何するんだ」

「…天使の魂を取り出すだけだよ」

「!!!!!!」

マーリンがそう言うと、アーサーを閉じ込めている光がより強く光り、やがて弾けるように2つの巨大な水晶の一つに貫くように当たった。

光が当たった水晶は粉々に割れ、破片は光となり飛び散り、中に閉じこめられていた人間が解き放たれた。

飛び散る光の破片と共にゆっくりと落下する人間。純白の露出の高い衣を纏った美白の身体。背中からは衣と同じくらい白く純粋な羽根が生えており、光の金髪に白い肌。瞳は閉じられている。

天使のようだった。

「!!!!!!」

だがアーサーはその天使を見て、目を見開いた。

「…俺と…顔が同じ…?」

そう、天使とアーサーの顔は瓜二つだった。

n e x t s t o r y

OF：小話集（前書き）

セッキーさん、感想ありがとうございます

今回は焦らしターン

OF：小話集

いつものような変態ネタ

色仕掛けしましょう

フラ「それにしても、耀の女装…可愛かったねえ」

耀「その口にアーサーの手料理をいれられなくなったら黙るよろし…！」

アサ「耀…女装したのか？」

耀「…アーサーまで言うあるか」

フラ「（そう言えば…アーサーがいたら、色仕掛けすぐにできたな）」

ぼわわわーん（妄想入ります）

アーサーは当然メイド服で、正統派…いやミニスカだな…色仕掛けだし。パンチラすれすれの短さで…！！あと胸と肩が少し露出したタイプで、足は生足がいいな。色仕掛けだし。頭にはヘッドトレスと猫耳。猫耳は断然黒で…！もちろん尻尾付きで…！！よし…！！これで完璧…！！！！！！

これで色仕掛けすれば…。

兵士「……………」

アサ「…っ！！！！（びくっ）」

兵士「…萌え……………」

アサ「……………？……………えっ……………えっと……………わっ……………わたっ……………わたひっ！

！！（ 噛んだ ）

兵士「萌ええええええ……………」

アサ「！？…うっ……にゃあああああ……………？」

＼（＾p＾）／

妄想終了

フラ「……………なんてことだ……………そんなことしたらアーサーの貞操が……………」

アサ「…何の話だ」

覗きましよう

白く濁った秘湯。そこに浸かるのは、真っ白な真珠のような美しい色白な肌。胸はちよつと…いや全然足りないが、美白な肌が少し桃色のように色付いて艶やかなのでよしとしよう。細い脚からそつとお湯に入り、続いて小さな桃尻が…。

フラ「というわけでアーサー、今夜は一緒に風呂に入るう」
アサ「一回死んでこい」

覗きましよう2

フラ「っ…いたたた…」
フェリ「あー…フランスス兄ちゃんアーサーに殴られたんだね痛そう…」
フラ「くそっ…昔は一緒に入っていたのに…!!」
フェリ「……………」
フラ「どうせ、昔みたいにツルペタなのに!!」
フェリ「フランスス兄ちゃん」
フラ「?なんだ」

こと思わないよー?」

アサ「えっ?!」

フェリ「むしろ、アーサーの裸見れてラッキーだよ!!!」

アサ「っ…フェリのばかあっ!!!ばかばかばかっ!!!」

フェリ「アーサー可愛い!!!」

フェリがアーサーに抱きつく そのまま倒れる

ルート「フェリシアーノ、風呂場で何をやっている」

フェリ「ヴェー」

アサ「あ…」

今の状況

倒れたアーサーをフェリシアーノが抱きしめている

しかもアーサーは半裸体(ていうかバスタオル巻いてるだけ)

ルート「何やっているんだお前達はあああああ!!!!!!」

どたばた

菊「どうしました!?…ああ!!!!!!萌えー!!!フェリアサ

ktkr!!!!風呂上がりアーサーさんテラエロス!!!!」

フラ「アーサーお前、フェリシアーノには許すのかよ!!!しかも

お楽しみ前!？」

アル「何やっているんだい!!!?フェリシアーノ!!!」

イヴァ「アルフレッド君、鼻血出てるよ?」

耀「まだまだお前等には早いある!!!!(真っ赤)」

アサ「あっ……じゅっ……う……ばかあああああああ
あああっ……!」

おしまい!! (オチなんてありません)

OG・・・お知らせ（前書き）

すみません、更新じゃなくて…

OG：お知らせ

お知らせ

この小説も忒万打を迎えました

そこで皆さんにお願いをしたいのですが

北欧、地中海組、バルト

これらには立ち位置がまだにありません

なので、今からこいつらの立ち位置を募集したいと思います

感想からお願いします!!

あと、番外編のネタとリクエストも募集しています

今回、更新じゃなくて、本当にごめんなさい

明日から、続き入ります

天使の正体は一体何か!!!!!!!!!!!!!!

アーサーが選んだ答えは!!!!!!!!!!!!!!

フェリシアーノはとうなる！……！！

彼等の運命は一体……！！！！！！

アーサーは胸がでかくなるのか……！！！！！！……！！

全ては次回から……！！！！！！

52：復活（前書き）

すいません！！！昨日は予約し忘れて投稿できませんでした！！！！
もし楽しみにしていた方がいたなら本当にごめんなさい！！！！

ちはピーさん、セッキーさん、midukiさん、感想ありがとうございます！！！！

52：復活

どさりと音を立てて、天使がアーサーの目の前に落ちてきた。
アーサーはが落ちてきた天使に触れようとすれば、天使はいきなり
翡翠の瞳を見開いて、身体を震わせた。

「…っっ…」

「！…！！」

「……………アー…サー…

っ…！！…！！…！！」

「アーサーに近付くな

この悪魔が！！」

天使の背中を踏みつけた。踏みつけた瞬間に天使からは苦しそうな
悲鳴が上がる。

「…っ…マー…リン…」

「馴れ馴れしく俺の名を口にするな」

「やめろっ！！マーリン！！」

「とめるなアーサー

こいつはお前と同じ姿をした悪魔だ！！…！！」

「やめっ…」

アーサーが天使を庇うように天使に覆い被されれば、マーリンは踏む
のを止めて、天使を睨みつけると残された水晶の前に歩みよった。

「…まあいい…まずは自分の身体を取り戻してからその悪魔を八つ
裂きにするか」

「……！」

マーリンは片手を水晶に向けると、水晶とリンクしたように水晶と同時に輝きだした。いや、正確には水晶の中の魔術師マーリンの身体とフェリシアーノの身体が。である。

「っなんて…ことだ…」

「……！」

「マーリンが…身体を…取り戻してしまっなんて」

天使の声は震えていた。天使はマーリンに復活してほしくないようだが、天使のそんな願いも虚しく、水晶は割れ、マーリンの身体がこちらに向かつて落ちてきた。

それと同時にフェリシアーノの身体が崩れ落ちるように倒れた。

「フェリシアーノ……！」

アーサーが彼の名を呼んだ瞬間、バンツと皇帝の間の重厚な扉が開かれた。

開いたのはアルフレッド達であった。アルフレッド達は部屋に入るなり、部屋の様子に目を丸くした。

「……！アーサー…とフェリシアーノが…二人！？」

アーサーの側には彼女によく似た天使がいた。

そしてフェリシアーノ似の人間とは………マーリンだった。

アーサーは仲間に言われ、ハツとすると、身体を取り戻したであろうマーリンを見た。

確かにマーリンはフェリシアーノに似ていた。髪の色も目の色も顔も。だが耳は尖っており、それは彼がエルフだということを知らし

めていた。

復活したマーリンはアーサーに近寄ると彼女に手を差し出した。

「……！」

「……アーサー、俺は復活した
だから行こう……新しい世界へ」

フェリシアーノによく似た彼の瞳は憎悪で染まっていた。

それを見て震えるアーサーに微笑むとマーリンは倒れている天使を
見下すように睨みつけた。

「だが……お前は邪魔だっ……！！！！！！！！」

「やめろっ……！！！！！！！！」

「アーサー……！！！！」

炎の魔術を発動させて天使に攻撃をしようとしたマーリンをアーサーは声を張り上げて止めた。

仲間達はその声を合図にアーサーの側に駆け寄り、彼女を守るようにそれぞれ武器を構えた。

「……邪魔だ……どけっ……！！！！！！！！虫けらがあっ……！！！！！！」

「マーリンやめろっ……！！！！！！！！俺がお前の花嫁になれば、誰も傷付けない約束だろ……！！！！！！」

だが、アーサーは仲間達の守りから抜け出し、マーリンの前に立ち
はだかった。

「だが……アーサー……邪魔は八つ裂きにしないといけないんだああ
あ……！！！！！！！！」

「マーリン……やめっ……！！！！あ……あっ……！！！！」

マーリンが魔術で火の塊を出現させ、それを天使に当てようとするが、アーサーが天使を庇い彼女が魔術を食らってしまった。アーサーはモロに食らってしまったため、そのまま床に崩れ落ちた。

「あつ…アーサー…!!」

「っ…!!!!」

彼女を心配しかけよる仲間の声をバツクに、マーリンの中であるとある記憶が蘇っていた。

燃え上がる建物の中、大切なものを抱え走った。だが、大切なものはしだいに弱っていった。

マーリンはそれを思い出すと、大きな声で叫び出し、魔術を乱射した。

「っ…うあああああ…!!!!」

「…!!…マーリン」

「魔術が…!!!!」

複数火の塊が部屋中を飛び交う。マーリンは狂ったように叫びだし、魔術を乱発させ、天使は瞳に涙をためながら彼の名を叫んだ。だが、マーリンには届かず、彼の魔術だけが天使に返ってきた。天使は力を振り絞って結界を張り火の塊を避けたが、今度は火の塊はアーサーを襲おうとした。

「アーサーあああつ…!!!!!!!!」

全員が倒れている彼女の名を叫ぶ中、どんどん火の塊は彼女に近づ

いっていく。
間に合わない。

もう手遅れだと、全員が悲痛な顔でアーサーを見た瞬間、火の魂は
剣によって真っ二つに斬られた。

「……………フェリシアーノ」

アーサーの翡翠の瞳には剣を構えて立つフェリシアーノの姿が映っ
ていた。

n e x t s t o r y

53：仲間の危機（前書き）

セツキーさん、ちはピーさん、感想ありがとうございます
セツキーさん、リクエストありがとうございます
みんなの過去はいずれ本編で出てきますよ！！
トルコさんの方をいずれ書きます

今回はいつもよりぐだぐだしてます

アルフレッドをかつこよく書いてみました

53：仲間の危機

気が付けば、俺の身体は俺ではない誰かが使っていた。俺の身体に宿っていたそいつは俺の仲間を傷つけて、アーサーを兄ちゃんと一緒に連れ去って行った。

アーサーは泣いていた。俺はその涙をとめてやりたい。でも、俺の身体は乗っ取られていて、アーサーの涙を拭ってやることも、アーサーに優しい言葉をかけることもできなかった。そいつはアーサーを使って、アーサーの身体の中に宿っていた天使を蘇らせた。

驚いたことに天使はアーサーにそっくり。本当にアーサーにそっくりだったんだ。だけど、アーサーにそっくりなのにマーリンはその天使を殺そうとして、アーサーを助けに来た俺の仲間さえも殺そうとした。

復活したマーリンは魔法を暴走させた。

マーリンの魔法の火の玉がアーサーめがけて飛んでるのを見て、俺はいつの間にかアーサーの目の前に行つて火の玉を斬っていたんだ。

アーサーをこれ以上傷つくのが嫌だったから。

アーサーを守りたかったから。

「…フェリ…」

倒れていたアーサーが顔だけを上げて、フェリシアーノを見上げた。

「…アーサーや仲間には…手を出すな!!!」

復活したフェリシアーノは魔法を暴走させることをやめたマーリンを睨みつけた。

マーリンはフェリシアーノに睨まれるとゆらりとフェリシアーノの方を向いた。

「また…俺の邪魔をする気か!!!」

「アーサーはお前なんかには渡さない!!!」

ギロリと凄い剣幕で睨んでくるマーリンにフェリシアーノも負けじと言い返す。

そんなフェリシアーノを見て、マーリンの後ろから現れたロヴィーノはフンツと鼻を鳴らした。

「…フェリシアーノ、王女がそうだったのも全部お前のせいなんだぜ?」

「え……」

フェリシアーノはロヴィーノの言葉を聞いて、思わず剣を握る拳を緩めてしまった。

「お前は、マーリン様に身体を乗っ取られるように術をかけた俺に反撃ができなかった

それはお前が弱いせいだ

お前の弱さがお前の仲間を傷つけてしまった
そうだろ？」

「……俺が弱いせい……」

ロヴィーノに仲間が守れないのはお前のせいだと、フェリシアーノの兄とは思えない冷たい口調で彼に言った。

ロヴィーノにきついことを言われたフェリシアーノはショックでその場に崩れ落ちた。

「フェリ……!!!!」

「ここから離れましょうか」

フェリシアーノに近付こうとしたアーサーをいつの間にか彼女の背後に回っていたロヴィーノに羽交い締めをされ、無理やりその場から離れさせられ、マーリンの隣まで連れてこられた。

「放せ!!!!!!」

「アーサー!!!!!!!!」

放せと叫びながら、ロヴィーノの腕の中で暴れ出すアーサーを見て仲間達は助けだそうとその場を動かこうとするが、マーリンが魔術を詠唱していることに気付き、その場に立ち止まってしまった。

マーリンの詠唱中、部屋の壁や床がひび割れて揺れていた。それを見た仲間達は冷や汗をかき、恐る恐る口を開いた。

「まさか、すごくヤバい魔術使おうとしてないか？」

「…その、まさかある…」

多分、我達やフェリシアーノ、天使をまとめて殺そうとしてるある」

耀の言葉で全員言葉を失った。

今から魔術の攻撃範囲外に移動することは可能だが、そうするとフェリシアーノと天使を残してしまうことになり、もし二人を背負って移動しても時間が足りない。どうすることもできなかった。

マーリンの魔法に不安を感じていたアーサーは名案が思い浮かび、再びロヴィーノの腕の中で暴れ出した。

「!!!!!!」

「っ…放せ!!!!」

「っ!!!!!!…しまった!!!!」

小さな身体を利用してロヴィーノが油断した際に彼の腕から抜け出したアーサーは、ダッシュで仲間達の側に移動した。移動すると彼女も魔術を詠唱しだした。

「アーサー!!!!」

アルフレッドがアーサーの名を呼ぶと同時に床に巨大な魔法陣が現れ、その範囲内に仲間やフェリシアーノ、天使がいた。アルフレッドやフランシスはこの魔術に見覚えがあった。

「これ…移動系魔術じゃないのか!？」

「じゃあ、これならマーリンの魔法から逃げられるね」

「……!……!……!」

危機から逃れられると仲間達はほっと胸をなで下ろすと、アルフレッドはあることに気が付いた。

そう、魔法陣の範囲にアーサーが入っていなかった。

きつと、アーサーは自分が残り仲間達は逃がそうとしているに違いない。

アルフレッドはそれに気付き、急いで魔法陣の外にいる詠唱を終了したアーサーのもとまで走って行った。

「あつ…アル!?!?何して…!……!」

「君こそ何しているんだい!……!また自分を犠牲にしようとしているんだろ!……!」

「でもっ…そうしないと」

「あー、もう!……!君は本当に馬鹿だなあつ!……!」

そう言うと、アルフレッドはアーサーを抱えて魔法陣の中に入った。いった。

「君も一緒に行くんだよ!……!……!」

「…アル」

アルフレッドがそう言ったと同時にマーリンの魔法が発動した。だが、移動系魔術はすでに発動し彼等の姿はなかった。

「…申し訳ございませんマーリン様」

「……」

アーサー達がいなくなった部屋はマーリンの魔法のせいで煙が舞い、ポロポロになっていた。

「…まあいい…アーサーはきっと自分からこちらに来るだろう」

「……！」

「優しいアーサーなら分かるだろう」

仲間が傷つかないためにはどうしたらいいか

「…なるほど」

先ほど狂って魔法を暴走させていたマーリンとは思えないほど冷静に話す彼に、ロヴィーノは畏怖を感じたが、それと同時に魅力も感じた。

「…フェリシアーノ」

歩いていく冷静なマーリンの背後で、ロヴィーノは弟であり敵でもあるフェリシアーノの名を呟いた。

その呟きはとても忌々しいものだった。

自分の敬愛する主、マーリンの邪魔をする忌々しい弟。

ロヴィーノは顔を歪ますと、マーリンの後をついていった。

n e x t s t o r y

54・天使の謎（前書き）

セツキーさん、ちはピーさん、感想ありがとうございます

最近マーリンをマリーンと打ちそっくになります

今回久しぶりに兄貴登場&妹キャラ登場です

次回に天使たんの設定のせますね

あ、ちなみに天使たんはロリ巨乳です

54：天使の謎

「いつも通り、ブリティッシュランドにたどり着くわけだな」

アーサーの移動系魔術で瞬間移動した彼等はまたブリティッシュランドの城の庭に不時着していた。

だが、幸いにも全員脱出に成功しており庭に倒れていた、フランスはその様子を見ると安堵して胸を撫で下ろした。

だが、胸を撫で下ろした瞬間、再び安堵できそうにない奴がやってきた。

「お前らああああ……！！！！！！またかああああ……！！！！」

「げーロバート……」

アーサーの兄であるロバートが鬼のような形相で猛スピードでこちらに向かって走ってきた。

はつきり言っていて怖い。かなり怖い。

「って恐すぎるぞ……お前……」

「お前らがせつかくアーサーが育てた薔薇が植えられた庭に瞬間移動するからだろうがああああ……！！！！」

「薔薇被害ないけど……！！……？？それよりも怪我人……！！」

ロバートのシスコンに困りながらも、フランスはジャーマン帝国での出来事をロバートに教えた。

「……そんなことがあったのか」

「……まさか、アーサーに本物の天使が宿っていたなんて思わなかったよ」

「……俺も…半信半疑だったかな
たくっ…おい起きろ！！！！」

ロバートは倒れている全員を起こしたが、アーサーと天使とフェリシアーノは起きなかった。

それを見たフランススは重傷だな。と呟いた。

「アーサーは傷ついた身体で俺達をここまで瞬間移動させたんだ…
仕方ないな

フェリシアーノは心が重傷だしな」

「……とりあえず、医務室まで行くぞ

ツヴィンクリ妹を呼ぶ」

「そうかい…まあ彼女なら治せるだろうしね」

ロバートがアーサーを抱えて医務室に向かうと、フランススはふと天使の方を見た。

「ていうか、この天使ちゃん

本当にアーサーにそっくりだなー」

アーサーと同じ金髪に顔の造り。アーサーと同じ白い体躯は露出の多い純白のワンピースに包まれており、その服装はフェリシアーノと出会った頃のアーサーと同じだった。

だが、天使である彼女はアーサーとは違うところが2つあった。

それは、背中に生えた真っ白な羽根…そして。

「…胸デカいなこの子」

「…アーサーさんとは真逆ですね」

そう、胸だった。

アーサーのまな板のような胸とは違い、天使の胸は豊満に膨らんでおり、巨乳の部類に入る。

「とりあえず、お兄さんがこの子おんぶして連れて行くわ」

「なんか、お前が言つと下心を感じるな」

耀が運んだ方がいいだろ」

「わかったある」

「まあ、ルートさんやアルフレッドさんは思春期ですしね」

「どつという意味だいそれ」

「そつという意味だよ」

耀が天使をルートがフェリシアーノをそれぞれ背負い、彼等は他愛のない会話をしながら医務室へと向かったのであった。

「これで、一通り治療は終わりです」

医務室でフェリシアーノの治療を終えた治癒士の少女はフランシス達の方を向くとぺこりと頭を下げた。

青がかつた翠の大きな瞳が特徴の美少女はバツシュ似の金髪は紺色のリボンで飾られていた。

ロバートが医務室に入ってくると、少女は白と桃色のドレスの裾を軽くつまんで彼に挨拶をするとロバートは彼女にお礼を言った。

「ありがとう、リヒ」

「いえ、お礼なら耀さんに言ってくださいまし

彼の治療術の応急処置のおかげで皆さん無事でしたので」

では。とリヒは挨拶をすると、医務室から出て行った。

「…良い子ですね」

「まあ、あのバツシュの妹だしな」

「バツシュがかなり首ったけだしな」

「シスコンが言える事じゃないと思うけど」

「ああ?!」

シスコンと言われたロバートはギロリとフランシスを睨んだ。まあ、フランシスも妹がいるから気持ちは分からなくも無いが、そこまではない。そこまではない。

「…それにしても、昔の英雄である魔術師マーリンが黒幕とはな」
「……………」

全員はベッドの上で死んだように眠っているフェリシアーノを見た。彼にマーリンの魂が宿っていたのだ。それを思うとどこか複雑な気持ちになった。

フランシスは複雑な気持ちを打ち消そうと話を例の天使のことに変えようとした。

「天使ちゃんにも目が覚めたら話し聞かなきゃいけない…」

「…もう、目覚めている」

だが、フェリシアーノの向かいのカーテンに包まれたベッドから声が聞こえ、全員そちらの方を向く。

そこにはアーサーと同じ顔をした天使が上半身を起こしてカーテンを引いている姿があった。

「…で……………天使ちゃんは、何を俺達に話したいの？」

「……………色々ある…けれど、一番話さなきゃいけないのはマーリンのことだ」

「……………」

マーリンという単語を聞き、全員が天使に注目した。すると、天使はゆっくりと話し出した。

「…昔マーリンは愛していた恋人を失った。マーリンはその時酷いショックを受けて自暴自棄になった

そんな奴の前に俺は現れた

悲しみや憎しみで溢れたこの世界を変えようと

マーリンは俺の意見に賛成してくれた

だけど、マーリンが望んだのは世界の変化じゃなく世界の破壊だった……」

『マーリンやめろっ！……！』

魔術で街を焼いてこの世界を苦しめようとしているマーリンを俺は止めに入った。

『……お前か……』

『……こんなことしたって……世界は変わらない……！……！』

『うるさい……！俺は許さないんだ……！……あいつを……あいつを奪って……呑気に暮らす人間共が……この世界が……！……！』

『でも、……こんなの

あいつは望んでなんかない……！……！……！』

『お前に……何がわかる……！……！……！』

……あいつと似ているから……信頼したが……やっぱりお前とあいつは違う……！……！……！』

『聞いて……！……！マーリン……！……！俺は……！……！』

マーリンは俺の言葉に一切耳を貸そうとしなかった。

だから、しょうがなかった。
この世界のためにもマーリンのためにも…

『…マーリン……ごめん』

俺は自分を犠牲にして、マーリンを殺した。

だけど、マーリンと俺は魂だけが残ってしまい、その魂の力が新たな肉体と魂を作った。

そして、俺とマーリンの魂はその肉体の中にそれぞれ眠りについた。

そう、それが

ヴァルガス家とカークランド家の始まり。

俺達の魂は各家の人間の身体に宿って、そして次の世代へと受け継がれた。

一通り話し終えた天使は悲しげに溜め息をついた。

「は…ヴァルガス家…！？それ、フェリシアーノの…」

「…マーリンの魂がフェリシアーノ君に宿っていたから、この話なら辻褄があうね」

「……………」

天使が話した事実を聞いた彼等は今まで謎だったことが分かり納得した。

「……でも、俺のせいでアーサーがこんな目にあっただよね」

「……！！フェリシアーノ」

いつの間にか、目覚めていたフェリシアーノはベッドから身体を起こさずに苦痛の表情で呟いた。

「……それを言うなら、俺がマーリンを殺しきれずにアーサーの身体に宿ってしまったからだ……！！」

「……でも俺が……マーリンを復活させたせいなんだ……！！」

「マーリンが復活したのもお前のせいじゃない……！！」

「……違う……！！……！！」

フェリシアーノが自責の念にとらわれて自分を責めるが、天使は必死に彼に悪くはないと言った。

だが、フェリシアーノは聞く耳をもたずに自分を責め続けていた。

だが、突然医務室の扉が開き、フェリシアーノは自分を責めるのを一旦止めて、扉の方を向いた。

「……アーサー」

そこには、自室で療養中だったアーサーが悲しげな表情で立っていた。

「……君、大丈夫なのかい」

「……ん……大丈夫だ……」

「……」

「……それよりも、みんなに言いたいことがある

聞いて欲しい」

アーサーがあまりにも静かに呟くものだから、医務室は自然に沈黙に包まれた。

そんな中、アーサーは口を開いた。

「俺…マーリンのところに行くことにした」

その言葉はその場にいた全員に衝撃を走らせた。

n e x t s t o r y

55：仲間内の亀裂（前書き）

セッキーさん、ちはピーさん、感想ありがとうございます

55：仲間内の亀裂

「…お前、何言ってるんだよ」

アーサーの衝撃的な発言の後、最初に口を開いたのは兄であるロバートだった。

「…お前、自分が何言ってるのか分かっているのか!？」

「……わかってる」

でも…俺がマーリンの花嫁にならなきゃ世界が破滅してしまう…」

「お前が花嫁になっても、あいつは世界を破滅させる気だ!……!」

「……世界を破滅させないように俺がマーリンに頼む」

アーサーの小さな声は震えていた。ロバートはそんなアーサーにさうらに言い返した。

418

「…お前はそれでいいのか」

「……兄さんには俺の気持ちなんて分からない」

「…なんだと」

「…兄さんは…天使の魂を受け継いだ人間なんかじゃないから、俺の気持ちなんか分からない!……!」

「っ…お前ツツ!……!」

反抗的なアーサーの態度に堪忍袋が切れたロバートは手のひらに熱を込めるが、突然乾いた音が聞こえ全員目を見開いた。

「っ…!……!」

「…いい加減にしろ!……!」

アーサーが真つ赤な頬を抑える前でフランシスが痛む手のひらのアーサーに向けていた。全員はすぐに分かった。フランシスがアーサーを平手打ちしたのだと。

「……………！！！」

アーサーはじわりと瞳から涙をこぼすと、そのまま医務室から出て走り去って行った。

「…フランシス」

「……………はあ……………」

ロバートがフランシスに声をかけると、フランシスは溜め息をついた。

「…アーサーを叩いてしまったな……………俺

二回目は無いと思ったのに」

「……………お前……………」

フランシスはアーサーを叩いた手のひらをもつ片方の手のひらで包んで苦笑いをした。

ロバートはその姿を苦々しい表情で見ている。

「…俺が…アーサーを苦しめているんだよね」

「！……………フェリシアーノ」

アーサーが出て行った後の沈黙の中でフェリシアーノがぼそりと咳くように口を開いた。

その声はアーサーのように弱々しくか細い声だった。

「…アーサー、マーリンのところに行くって言ったよね」

「……」

「…アーサー、そんなこととして幸せになるのかな」

「……」

「…アーサー、笑っていられるのかな」

答えは返って来ない。だが、その質問はアーサーからの答えが無くとも、全員正解が分かった。

だが、マーリンの力を直に見た者は分かっていた。

アーサー以外にマーリンは止められないと。

マーリンとアーサーが結ばれる意外に世界を救う方法は無いと。

アーサーと世界。どちらかを救わなければならないと。

それは全員が重々承知しているもので、そんな重い雰囲気誰かが耐えきれなくなる前にロバートはお開きにした。

城の庭の薔薇園の奥の小さな広場にアーサーはいた。その場所は生い茂る美しい緑の木々に囲まれていたが、真ん中に墓石がある以外に特に何も無かった。

そこに、エドワードは金髪を揺らしながらやってきた。

墓石の前に三角座りをして膝に顔を埋めている妹に溜め息をつくと話しかけた。

「…こんなところで何やってんだ」

「………エド兄……さん」

「…お前、いつつも落ち込むことがあるとここに来るよな」

「………ん」

エドワードは墓石に近づくと、しゃがんでそつと水仙の花束を供えて、墓石の文字をなぞった。

フィリア・カークランド。

その名が刻まれた墓石を懐かしげに見つめるとアーサーに言った。

「…フィリに頼ったって、死んでいるから答えることなんてできないぞ」

「………分かってる」

姉さんは答えてくれないのは

…でも、」

アーサーはそつと顔を上げて目を細めた。
脳裏には昔の懐かしき記憶が蘇った。

フランススや兄に意地悪をされて、この場所で泣いていたらいつも
姉が慰めてくれた

『アーサー…顔をあげて』

『っ…ねえっ…さんっ…』

フィリアは優しい手つきで頭を撫でて慰めてくれた。

『兄さんやフランススさんはあれでもアーサーのことが大好きなん
だよ』

『…分からない…そんなの』

昔から泣き虫だったアーサーだが、かなり繊細だったもので兄やフ
ランススのちよつとした暴言ですぐ泣いていた。

そのせいか、アーサーは彼等の愛情が分からなかった。

『…俺、この前も誘拐されてみんなに迷惑かけた…』

なのに、俺は何もできないっ…!!!!』

『アーサー』

泣いているアーサーを後ろからそつと抱き締めて、フィリアは優し
い声で言った。

『…みんな、アーサーの幸せを願っているから…自分を責めるよう
なことはしないで』

『…っ…』

『だから、何もできないなんて言わないで笑っていて』

アーサーの笑顔は色んな人を幸せにするんだから……」

もう、今はいない姉がいつも泣いていた自分に言ってくれた言葉。アーサーは今でもその意味が分からなかった。

「……姉さん」

「……笑っていればいいんじゃないのか」

姉さんとぼつりと呟いたアーサーに助言するようにエドワードは言った。

エドワードの言葉にかつての姉の言葉が被ったように聞こえたアー

サーは勢いよくエドワードの方を向いた。

「…お前が何を思ってるかは知らねえが、奴らはお前が幸せに笑っていられるのが幸せなんだよ

…馬鹿正直な奴らばかりだからな」

「…兄さん」

「…本当に誰も傷つけないと思ってても、傷ついてしまうことなんてあるんだ」

「……………」

「…だから、笑ってるよ

あいつらが傷ついても、お前の笑顔で癒やせばいいだろ」

「…兄さん」

顔を真っ赤にして涙を零すアーサーに「フィリならこう言うんじゃないかねえか」と言うと、そっとアーサーを抱き締めた。

アーサーの泣き声が木霊するこの場所で水仙の花びらが舞っていた。

n e x t s t o r y

OH：天使設定（前書き）

すみません、更新じゃないです

0 H：天使設定

アーティ

大昔の天使

ブリティッシュユランドでは女神として拝められ、アーサーの身体の中で魂の状態で宿っていた。

容姿はアーサーそのもので、違うのは胸だけ

巨乳童顔

だから色んな意味で狙われている

ちなみにアーティという名前はフェリシアーノにつけられた（いつか話に出るよ）

容姿と同じく、性格も同じ

色々謎

ブリティッシュユランドの国民には女神として慕われていて、アーサーやフェリシアーノ達仲間からは友達や仲間として見られている
だがマーリンからは憎まれている

56：二人の決意（前書き）

すいません！・・・アップ予約し忘れてました！

セッキーさん、ちはピーさん、感想ありがとうございます！・・・

56：二人の決意

暗幕の上で星が瞬く中、フェリシアーノは月明かりに照らされた客用の寝室で一人ぼんやりとしていた。

「……………」

未だに、マーリンやアーサーのことで落ち込んでいるフェリシアーノは窓の外にある満月に語りかけるように言った。

「……………俺…どうすればいいんだろ」

だが、月は答えてくれない。

仲間がいたのならば、誰か反応してくれるが、月は答えてはくれない。

そんな月を見る中でも、ぼんやりと脳裏に浮かぶのはアーサーの笑顔。

最初はちゃんとした笑顔を見せてくれなくて、すべてが偽物の笑顔だったが、アーサーは徐々に笑顔を取り戻し、昔のような愛らしく幸せに笑うアーサーに戻っていった。

すべてはフェリシアーノ達仲間のおかげ、全員でアーサーの笑顔を取り戻したのだ。

アーサーだからこそ、みんなは笑顔を取り戻すために頑張ったのである。

アーサーの幸せな笑顔のために…。

「アーサー…」

フェリシアーノの脳裏には色々な表情をしたアーサーがうつった。苦笑いやフランスを馬鹿にしたような笑いもあるが、顔を真っ赤にして恥じらう笑顔。困ったように笑う姿。色々あるが…一番は。

「やっぱり…幸せそうな笑顔がいいよね」

幸せそうな笑顔だった。

その笑顔は傷ついた心を癒してくれて幸せにしてくれる。そういう笑顔だ。

「……………やっぱり、俺がアーサーを守らないとね」

アーサーを守るため、フェリシアーノは月に誓いをたてた。

早朝、ブリティッシュランドの港街は人氣が無く、朝靄でぼやけていた。

海猫の鳴き声さえもしない、静かな港にて朝靄の中に人影があった。

「…本当にこの船もらつていいの？」

朝靄のせいで白い背景に浮かんでいるように見える小型ヨットは魔法水晶の魔力で動く優れものである。

その前に、人影…いやフェリシアーノがいた。

フェリシアーノは同じく小型ヨットの前にいる初老の漁師の男と話していた。

「こいつあ、持ち主が死んじまつて以来全く使われていねえんだ

持ち主は身よりもなかつたしよお

かまわねえぞ兄ちゃん

持つて行つてくれや」

にかつと人の良さそうな笑みで言う漁師の男にフェリシアーノはありがとうとお礼を言った。

「じゃあ、もらつていくね！ありがとうおじさん！」

「おう！兄ちゃんも頑張れよ！」

漁師の男はフェリシアーノにエールを送ると、靄の中へと消えて行った。

フェリシアーノは漁師の男を見送ると船へと乗り込んで操縦席を覗いた。
自動操縦らしく、フェリシアーノはエンジンのスイッチをいれ、小型ヨットは動き始めた。

「…俺が決着をつけないと」

アーサーのため、仲間のため、世界のために子孫である自分が決着をつけないという責任がフェリシアーノにはあった。

どうしても、兄やマーリンから世界を守る。例え自分の命を脅かそうとも。

フェリシアーノが再びそう決断した時、突然大きな声が聞こえた。

「フェリッツ！！！！！！！！！！」

フェリシアーノはものすごい速さで港の方を振り向いた。

靄で消えゆく港の船の停留場所の先に、靄の白さで目立つ金糸と大きく見開かれた翡翠の瞳。

間違いない。アーサーだった。

「アーサーッ！！！！！！！！！！」

一度は戻ろうと考えたが、フェリシアーノは自分の決断を思い出し、その考えを振り払って船をすすめた。

「……………！！！！！！！！！！フェリ」

アーサーは泣きそうな声でフェリシアーノの名を呼んだが、フェリシアーノは船を引き返そうとしない。

「……！！！！！」

しばらく水面を見つめていたアーサーは拳を握りしめると、勢いよく水面へ飛び込んだ。

バツシヤンという勢いの良い音が聞こえ、さすがのフェリシアーノも船を沖にとめてアーサーをみた。

「っ……フェリっ……！！！」

バシヤバシヤと手足をばたつかせている彼女はフェリシアーノが乗る船まで泳ごうとしているのである。だがなかなか進まない。

「……！！！！アーサー！！泳げないでしょ！！！！！」

泳げないのに、泳いで自分のところまで来ようとするアーサーにフェリシアーノは心配し、声をあげた。

「フェリっ……ゴホッ……」

「アーサー！！！！！！！」

暴れるように泳ぐアーサーは徐々に沈んでいった。それでも健気に自分のもとへと来ようとしているアーサーにフェリシアーノは船をアーサーに向けて動かした。

「アーサアアアアア！！！！！！！！！！！」

アーサーの姿は水面より下に消えてしまい、気泡だけがブクブクと浮いていた。

フェリシアーノはそれを見ると、アーサーが沈んだ場所近くに船を留めて、自分は水面へと飛び込み海へと潜り込んだ。

「（アーサー！…）」

潜り込んだ青の世界の中へ海底へと沈んでいくアーサーを見つけた。フェリシアーノはアーサーを見つけるとすぐにアーサーのもとまで泳いでいき、彼女の身体を捕まえて水面へと泳いでいった。

「つぶはっ！…アーサー！！」

「っ…」

フェリシアーノはアーサーの身体を抱きかかえて船へと乗せた。すると、アーサーはゆっくりと瞳を開いてやんわりと笑った。

「！…！！…アーサーのばか！！…何してんだよ！！…！！」

「っ…フェリ…」

「…本当に…何…してんだよ」

「…一人で…行くな…」

「！…！！」

説教中にアーサーが悲痛な表情でぽつりと零した一言にフェリシアーノは説教を中断した。

「…俺…最初は…みんなが傷つけられるのが見たくなくて…マリンのところへ行くこうと思った」

「…」

「…俺一人が幸せになるより、みんなが幸せになった方が良く…思った」

「でも……分かったんだ
……」
「みんなが支えてくれたり大事にしてくれた自分を犠牲にして作った幸せなんて、せつかく支えてくれたみんなは幸せにならないって……」
「……アーサー」

目を潤ませて言うアーサーにフェリシアーノも決意が揺らいだ。

「……フェリ
俺は……戦闘とか役に立たないかもしれない……だけど、フェリが傷ついたら治療術で癒すことができるし、魔術で援護することもできる」
「……」
「だから、一人で行かないで……!!」
「……アーサー」

濡れた身体でフェリシアーノに抱きつくアーサーは切実に彼に一人で行かないでと訴えた。

フェリシアーノは抱きついてきたアーサーを優しく抱き返すと、優しい声色で言った。

「……アーサーがいて良かったよ」

その声は波の音で消えてしまったが、アーサーの耳にはしっかりと入っていた。

next story

57・見守る仲間達（前書き）

セッキーさん、ちはピーさん、感想ありがとうございます

昨日は更新することを怠ってすみませんでした

風邪ひいて寝込んでいたので続きが書けませんでした…すみません

それが彼等を大人に変え始めていったのだ。

「……あいつらはあいつらの道を歩み始めた
だからこれでいいある」

「……………そうだな」

妹の急な成長に寂しさを感じながらもロバートは仏頂面なまま彼女の成長を喜んだ。

「まあ、お兄さん達も旅に出ないといけないけどね
ね、天使ちゃん」

フランススは閉じられた扉に向かってそう言った。すると、ゆっくりと扉が開き、天使がぴよこりと顔を覗かせた。

「ほら、恥ずかしがってないでお兄さんの胸に飛び込んで……」
「ちよつと黙るある変態」

耀はフランススを黙らせて、天使のもとへと行って肩に手を置いた。天使は手を置かれてびくりと肩を震わせたが、小さな声で「ご主人様」と呟くと、耀は彼女を不安にさせないように頼りがいのある表情で言った。

「マーリンを止めに行くあるよ」

「……」

「……お前は一人で行って、自分の命を削ってまでマーリンを殺すつもりあるね」

「……はい、復活したといっても、もう長くなんかない」

「……止めはしねえある」

そっけなく傍観者のごとく返した耀だが、まだ言葉には続きがあった。

「……けど、看取ることならしてやってもいいある」

「……!!……ご主人様……」

耀は優しく天使の頭をポンと叩いた。すると、今まで黙っていたため息をついて言った。

「……あなたはこの国の女神みたいなもんだからな、この馬鹿共がいるんだ

安心すれば良いと思うぜ？」

古くからブリティッシュランドは天使を女神として信仰していることがある。ロバートは別に信仰しているというわけではないが、彼女の決意は尊敬できるものだと感じたのだ。

「そうそう、お兄さん達も駆け落ちした二人を追いかけるつもりだったしね

それに巨乳天使ちゃんなら全然OKだよ

あと、ついでにお兄さんのこともご主人様って呼んでくれるといいよ！」

「フランス君は本当に一言余計だね

まあでも……僕も一緒にいくよ

だってせっかく天使に会ったんだもの」

「俺も……マーリンを倒すのを協力する

そして……兄さんの仇をとる」

「私も勿論協力します

この世界やアーサーさんが犠牲になっていくのを黙って見ていられませんしね」

耀やロバート、そしてアーサーの仲間達に頼りになる言葉を投げかけられ、天使は不思議と心が温かくなった。
少しだけ、こんな仲間と出会えたアーサーが羨ましくなった。
そして、昔の自分の仲間の面影が彼等と重なった。

「…ありがとう…」

泣きそうになるのを堪えながら、天使は彼等に感謝した。

「ていうか、アルフレッドは？」

「「「……………」

58・騎士達の昔話(前書き)

セッキーさん、ちはピーさん、感想ありがとうございます

58：騎士達の昔話

早朝、港町ハーメルンの宿。

窓のカーテンの隙間から零れる朝日でアーサーは目を覚ました。

「……………」

外からフェリシアーノの声が聞こえ、アーサーはベッドから起き上がる。とそつとカーテンを開けて外を見た。

外を見ると、宿の庭でフェリシアーノが剣を素振りしており、アーサーは窓枠に肘をつく。と、物珍しそうにそれを見つめた。

「……………アーサー！おはよー！」

アーサーの視線に気が付いたフェリシアーノは二階にいるアーサーに向けてブンブンと手を振った。

手を振られたアーサーは顔を真っ赤にさせて少しパニックを起こしたが、暫くするとはにかみながら小さく手を振った。

「……………おはよー」

目の前には大きく立派な城壁。そして、豪華絢爛だが頑丈そうな門。それは言わずもがな、ジャーマン帝国の帝都ブレーメンの入り口である。

その前でフェリシアーノはこっそりとアーサーに言った。

「ねえ…アーサー

俺達、指名手配されてなかったっけ？」

「……大丈夫だ

こっそり入っていけば問題ない」

そう言つて、帝都へと入る二人だが、足を踏み入れた直後にポンと肩を叩かれた。

「全然大丈夫じゃないですよ」

二人は勢いよく振り返れば、そこにいたのは…。

「……………エリザベータさん」

帝国騎士団の副団長であるエリザベータであつた。

エリザベータはにっこりと笑つと、アーサーは顔を真っ青にしてフェリシアーノの後ろに隠れた。

「アーサー大丈夫だよ……！エリザベータさんは良い人だから」

「……でも……………」

「アーサーの敵じゃないよー!!」
「そうですよ」

フェリシアーノは必死に弁解をするが、警戒心の強いアーサーはいまだにフェリシアーノの後ろに隠れているままだった。

「…何もしませんよ」

だって、あなたはかつて戦友だったフィリアさんの妹なんですから」
「!!!」

「え!? 姉さんの?」

今は亡き姉の名を出され、アーサーはフェリシアーノの背後から出てきた。

「なんで姉さんが!?!」

「あら、知らなかったんですか?」

昔、ジャーマン帝国とブリティッシュランドが協力して少年騎士団を作って私もフィリアさんもその団員だったんですよ?」

エリザベータに騎士団本部に連れてこられた二人は応接室は昔話を

聞いていた。

エリザベータは懐かしそうに一つの本を取り出し、それを二人に見せた。

それは少年騎士団の団員名簿であり、姉の他に見知った名前が載っていた。

「エドワード兄さんも!？」

「ギルベルトやバツシュもいる!!」

「騎士団って言っても、内乱ばかりだけどね」

「騎士団内で喧嘩していたんだ…」

「私もフィリアさんと初対面の時、よく殴り合いの喧嘩したわ」

「ええー!!?!？」

二人はエリザベータの言葉で驚愕した。

「…まあ、フィリアさんはもっと凄かったけど」

「…例えば…?」

「…昔、帝国兵士がフィリアさんにぶつかかった時…その兵士が所属する部隊をボコメキヨに締め上げてたわ」

「怖っ!!!!」

エリザベータが話す昔のエピソードにフェリシアーノは体を震わせた。以前にも少し話を聞いていたがこんなのはかりである。

なので、フェリシアーノの頭の中のアーサーの姉は凄くクレイジーな人だというイメージが定着していった。

「でも、そんな暴力的な所があったけど、とても優しい人だったわ」
「…そうだな」

エリザベータが懐かしそうに目を細めたのを見て、アーサーは微笑

n
e
x
t

s
t
o
r
y

んだ。

59：二人ぼっち（前書き）

セツキーさん、ちはぴーさん、感想ありがとうございます

今回の章ではフェリシアーノとアーサーが大人に成長していく姿を中心にしてみました
どうでしたか？

次回からは新章に入ります

新章『二人の少年』

アルフレッドとフェリシアーノ中心の話になります
そして、親分がもうすぐ登場します！！

あと、新連載つくりました

この連載と交互に更新することにしましたので宜しくお願いします

59：二人ぼっち

とある町の宿のバルコニーにて、天使は一人夜空を見上げていた。そこへ耀がこっそりと顔を出した。

「こんなところにいたら、風邪ひくあるよ」

「…ご主人様」

「ご主人様っていうのはやめるある」

「…だけど…」

「あいつらは我のことなんて知らないある
呼び捨てでいいある」

耀は天使と決して初対面ではないらしく、とても深い関係のように見えた。

耀がにっこりと笑うと、天使は困惑しながらもこくりと頷いた。

そんな天使を見て、耀は憐れみの表情を向けた。

「……真実を言えないのはなんか悔しいあるな」

「……俺はいい」

そもそも、マーリンは俺のせいであなっただから」

「…あまり自分をせめるのはいかんある」

マーリンの話になり、必死に自分を責める天使はマーリンをかばっているようにも見えた。

それを見て、耀は注意したが、天使は決してやめようとしなない。

「…だけど……！！」

そのせいでアーサーまでもが…」

「…お前だつて苦しんでいるあるよ***」
「その名前と呼ぶな!!!」

耀が天使の名を口にしたとき、天使はキツイ声で耀を怒鳴った。天使はすぐにそのことを反省したが、その代わり涙を流しながら話した。

「…もうあの頃には戻れない

もうマーリンと分かり合えることなんてない」

「……」

「真実は覆せないんだ…」

天使の頬を伝う涙は夜風によって何処へと飛んでいってしまった。その涙がどこに飛んでいったのかは風しか知らない。

エリザベータの話聞いた後、フェリシアーノとアーサーはすぐに帝都を出て近くの町へとやってきて、今夜の宿を捜していた。だが。

「は？部屋がいつぱい?!」

「はい、シングルはもういっぱいなんですよ」
「…そんな」

部屋があいていないことにショックを受けたアーサーに宿主は慌てて続きを話した。

「ダブルなら空いていますか…」

アーサーはそれを聞いて、顔を真っ赤にした。

それではフェリシアアーノと同室になってしまう。まだ成人していない男女が同室だなんて…。

アーサーは急に恥じらいだし、口をもごもごと動かした。そんなアーサーの代わりにフェリシアアーノが答えた。

「じゃあ！それでいいです！」

「フェリッツ！！！！！」

ノーテンキなフェリシアアーノは恥じらうアーサーを見て空気を読まずにノーテンキ発言をしたのだった。

アーサーがそれに呆然としている間に、フェリシアアーノは宿主から部屋の鍵を受け取り、アーサーと一緒に部屋へ向かった。

いまだに顔を真っ赤にするアーサーにフェリシアアーノはにこりと笑って、アーサーを安心させるために言った。

「大丈夫だよ！フランスス兄ちゃんみたいなのはしないから！」

「…確かにそうだけどよ」

「まあ、大丈夫だった！」

まあノーテンキなこいつがするわけないだろうなと自己満足に解決している内に、部屋の扉の前についた。

部屋の鍵を明けて、部屋の扉を開けるとそこには。
シンプルなやや狭めの部屋に大きなダブルベッドがあった。

「……って、こっちの方がよー!!」

ベッドが2つあるとばかり思っていたアーサーは内心宿主を恨んだ。
それを見たフェリシアーノは珍しく空気を読んだらしくアーサーに
ベッドで寝るように促した。

「ヴェー……俺はソファァーで寝るよー」

「いや、俺がソファァーで!!」

「いいよ!!アーサーはお姫様なんだし!!」

「でも、お前は朝の修行で疲れているんだろ!!!!」

アーサーもフェリシアーノも負けじと譲り合い、たちまち険悪なム
ードになっていった。

フェリシアーノはそれを何とかしようと考え、良いアイデアを思い
ついた。それは。

「じゃあ、一緒に寝よう!!」

「ん……そうだな………ってまあ!!?」

「アーサーと一緒に寝るなんて嬉しいなあ!!」

とんでもない発言をしてきたフェリシアーノにアーサーはつい了承
してしまい、そのことに気付くと顔を真っ赤にってしまった。

やっぱり今の取り消しとフェリシアーノに言おうとしたが、彼はす
でにその気で楽しそうだった。

結局アーサーは何もいえずにずっと顔を真っ赤にしていた。

「…アーサー、おちるよ?」

「うっ…煩い!!ばかあっ!!!!」

夜になり、二人ともベッドの中へ潜り込んだが、フェリシアーノが真ん中にいるのに対してアーサーはベッドの端にいた。

フェリシアーノの方に背中を向けてわなわな震えている。

フェリシアーノはそれに苦笑しながら、今日の出来事について話し始めた。

「それにしても…帝都が大変なことになっていたなんて…」

「……………そうだな」

思ったより真面目な話をはじめたものだから、アーサーは驚いたがこくりと頷いた。

そして、エリザベータの話を思い出した。

姉や騎士団の話をしてくれた後、エリザベータは帝国の状況を教えてくれた。

『帝国はもうボロボロよ』

ギルが行方不明になった後、ジャックが帝国を牛耳っていて私達騎士団も正直立場が悪いわ…』

『……………そんな』

帝国ではジャック・リップーが政治を牛耳り、帝都の人々を困らせていた。
帝都の人々から多額な税金をとりたて、ジャックが率いる兵士達は帝都で好き勝手やっていた。

アーサーはジャックの行動が信じられなかった。

アーサーが育ったブリティッシュランドでは、女王は貴族や騎士が好き勝手しないように法を作り、貧しき民には生活援助をした。そのおかげでブリティッシュランドでは国民は幸せな日々が遅れた。女王は国民のために政治をしているのである。

政治は自分のためにするものではなく、国民のためにするものである。

だから帝国の状況にアーサーは心が痛んだ。

『…ルートヴィッヒさんがもし皇帝の座についたら、帝国は安定するかもしれませんが』

彼は真正正銘のジャーマン帝国の皇族の血を継ぐ者だから』

エリザベータのその言葉は、帝国を救えるのはルートヴィッヒしかないと言っているようなものだった。

まだ子供であるフェリシアーノもアーサーも彼女の言葉の意味が分かり、考えた。

はたして帝国から家出したルートヴィッヒはどう思うのだろうか。

エリザベータはため息をつく、二人に告げた。

『まあ、とりあえず』

あなた達は帝都から出た方がいいわ』

いまだに指名手配をされている二人に逃げるようにエリザベータは告げた。

昼間の出来事を思い出して、アーサーは口を開いた。

「…不思議だよな

みんな心から平和を願っているのに、平和じゃないなんて」

どこか切なそうに言うアーサーにフェリシアーノは「…うん」と頷いた。

二人はまだ子供だが、確かに大人へと成長しているのだ。

大人は夢を語る子供と違って、現実を受け止めなければならないのだ。

「…やっぱり、みんなで平和を作るのって無理なのか」

「…俺は…違うと思うよ…」

現実を受け止め、半分諦めかけているアーサーにフェリシアーノは異論を唱えた。

「…俺はアーサーが幸せに笑えるために平和な世界を作りたいんだだから、みんなもそういう想い持っているんだと思う」

今はまだ小さいけど、その想いが行動になったら世界を平和することにできると思うんだ」

口では何とでも言えるとアーサーは思った。だがフェリシアーノの意見は正しいとも思った。まだまだ子供な意見だが、フェリシアーノの言葉はアーサーを元気づけてくれた。

「……フェリらしいな」

「……アーティーターだって、そういう想いで平和な世界を作ったんじゃないのかな」

「アーティーター？」

「ほら！天使の女の子だよー！！」

「アーサーに似ているから、アーサーの愛称でアーティーター」

「……勝手につけるなよ」

フェリシアーノの言葉でアーサーは今頃自分達を心配しているであろう仲間達と天使を思い出した。

そのことを思い出すと、アーサーは俺達って『二人ぼっち』だなとフェリシアーノの方を向いて苦笑しながら言った。

それを見て、フェリシアーノはそうだね！と明るい声で返した。

n e x t s t o r y

60・恋敵との再会(前書き)

ちはぴーさん、セッキーさん、感想ありがとうございます!!

新章突入です

60・恋敵との再会

ここはジャーマン帝国西部に位置する森、ヴェヴァーナの森。

魔女が住んでいると噂されている森で、一度入ったら抜け出せない
とまで言われているが、魔力を持つ者ならば抜け出せることができ
る。

そんな森に、マーリンの手がかりを探すフェリシアーノとアーサー
がいた。

「フェリすまない、本当にすまない!!」

「いつ…いいよアーサー…」

悪気があって「

珍しくアーサーが頭を下げて謝る先には、利き腕である右腕を包帯
で巻き、困った顔をしているフェリシアーノがいた。

なぜ、フェリシアーノがこんなことになったかというと、今朝…。

「ん…」

！。 昨晩から二人一緒に同じベッドに寝ていたフェリシアーノとアーサー

朝になってアーサーは寝苦しさから目覚めた。

ゆっくり目を開けると、アーサーはしばらくして顔を紅潮しはじめ
た。そして、あわあわと小さく震え始めたのだ。

なぜなら…。

ベッドの中でフェリシアーノに抱き締められていたからである。フェリシアーノはきつとアーサーを抱き枕かわりにしたのだろう。アーサーの胸にはフェリシアーノの頭があり、大きな胸ならきつと挟まっているだろう。しかしアーサーは貧乳である。絶対に無理な話である。

そして、フェリシアーノの腕はアーサーの腰に回され、フェリシアーノの脚はアーサーの両脚を挟んでいた。

アーサーは急に恥ずかしくなり、フェリシアーノを起こそうとすることが起きない。

「フェリっ…お…起きろ…!!!!」

「ん…ヴェー…アーサー…」

と言いながら、寝ぼけてアーサーの胸に頭をこすりつけるフェリシアーノに、パンク寸前だったアーサーは顔をさらに真っ赤にして混乱した。

「っ…ばかあああああっ…!!!!!!!!」

「うぎゃっ…!!!!」

混乱したアーサーは魔法を暴走させ、風の魔術がフェリシアーノに襲いかかった。

そして、風の魔術がフェリシアーノにヒットしてフェリシアーノは軽く吹っ飛んだ。

幸い魔術が弱かったため魔術による怪我はなかった。だが、吹っ飛んだ時に利き腕をテーブルの角に激しくぶつけてしまった。

そして、朝一にフェリシアーノの悲鳴が宿中に響いたのであった。

そんなことがあって冒頭に至る。

アーサーはいまだに申し訳無さそうに謝っていた。

「アーサー…そこまで謝らなくていいよ、それに治療術で少し楽にしてくれたし…」

「…治療術だって耀みたいな上級治療術じゃなくて、中級治療術しか使えないし…上級治療術が使えればフェリの腕が治せるのにな…」
「アーサー元気だしてえ！！！！ほら！！元気の出るハグ！！！」

いまだに自分を責めて暗くなっているアーサーにフェリシアーノはぽふっと抱きついた。抱きつかれたアーサーは少し口元を緩めて、フェリと漏らした。

「……ありがとう、フェリ」

「えへへー」

アーサーが顔を真っ赤にして微笑んで礼を言うと、フェリシアーノは嬉しそうに笑った。

「たくっ…あの二人どこまで行ったんだい！！？」

その頃、フェリシアーノとアーサーの行方を追っていたアルフレッ

ドは彼らのいるヴェヴァーナの森にいた。

探知用魔法水晶を使って彼らを探しにきたアルフレッドだが、内心フェリシアーノに嫉妬していた。

「くっそー…フェリシアーノめ」

フェリシアーノへの文句をこぼしながら森の中を進んでいくと、どこからか呻き声が聞こえた。魔物の呻き声である。

「！…もしかして…」

今の呻き声のそばにアーサー達がいると思ったアルフレッドはその場所へと走り出した。

「フォトン！！！」

こちらに襲いかかってくる狼の魔物にアーサーは光の魔術で対抗した。

光の塊が魔物に落ち、魔物はその場所に倒れるが、魔物は一匹だけではなく大勢いたために次々襲いかかってきた。

「っ…こいつら、まだ来るよ!!!しかも強いし!!!」

「多分…マーリンの邪悪な力で活性化しているんだと思う」

利き手が使えずに剣を振り回すことしかできないフェリシアーノは今回は圧倒的に役に立たないため、アーサーは率先して魔術で対抗した。

しかし呪文詠唱時間が長い上級魔術は使えずに、ひたすら呪文詠唱時間が短い下級魔術で攻撃をした。

「くそっ…上級魔術ならいつきにぶっ飛ばせるのに」

フェリシアーノも魔物相手にてこずっているために、どうしても上級魔術の詠唱時間が稼げない。

アーサーが残念そうに文句を言ったその時、魔物がアーサーに向かって襲いかかってきた。

「!!!!!!」

「アーサー!!!!!!」

だが魔物はアーサーに到達する前に魔物は飛んできた光の塊に撃ち抜かれて倒れた。

「!!!!!!」

「アーサー!!!何してんだい!!!」

「アル!!!!!!」

アーサーを探しにきたアルフレッドが二丁魔法拳銃を構えてアーサ

ーの後ろに立っていた。

アルフレッドはにいと笑うと、引き金にかけた指に力を込めた。

「時間稼げばいいんだよね？」

「…ああ」

アーサーが頷くと、アルフレッドは二丁魔法拳銃で素早い怒涛の攻撃を魔物に向かって放った。

アーサーはアルフレッドの後ろで上級魔術の呪文詠唱を始めた。

n e x t s t o r y

61・仲違い(前書き)

セッキーさん、ちはぴーさん、感想ありがとうございます!!

61：仲違い

「ふー…、やっと片づいたねー」

「ん…本当だな」

魔物を全て倒し終えた後、アーサーとフェリシアーノは疲れてその場に腰を付いた。

そこへアルフレッドが拗ねたように口を開いた。

「…俺が来なかったら大変だったんだぞ」

「アルのおかげで助かった」

「…ありがとうアル」

「まあ…！俺はヒーローだからね…！」

素直にお礼を言うアーサーにアルフレッドは顔赤くしてそっぽを向いて、反則だよ。とアーサーには聞こえないように呟いた。

「でもここに来たってことはアルフレッドは本当にアーサーが心配だったんだね…！」

「何言っているんだい…！？君らポケ二人が旅に出たら不安だからしょうがなくなってきたんだよ！」

ていうか、フェリシアーノは腕怪我しているじゃないか…！？」

フェリシアーノに凶星をつかれて饒舌になっているアルフレッドは話題を変えようと、包帯が巻かれたフェリシアーノの腕を指差した。

「あ…これ？骨折しちゃったんだあ…」

「骨折！？なんでだい」

「朝にアーサーからベッドから突き落とされちゃってさ」
「……………」

フェリシアーノの言葉でアルフレッドはピシリと固まった。フェリシアーノの言葉もそうだが、彼の隣で顔を紅潮させているアーサーも問題であった。

「…それ、君達は同じベッドで寝たってことかい？」

「？そうだけど」

「ふーん…」

アルフレッドの質問に何食わぬ顔で答えたフェリシアーノに、彼はそっけなく返した。

だが実際はかなり嫉妬をしており、腸が煮えくり返っていた。

アルフレッドと再会して、再び森の中を進み始めたフェリシアーノ達はどこか険悪な雰囲気だった。

「アル？どうしたんだ

拗ねたような顔して」

「拗ねてないよ！」

思いつきり拗ねているアルフレッドは心配するアーサーを冷たくはねのけた。
冷たくはねのけられたアーサーは一瞬悲しそうな顔をしたが、何か
に気付き、持ち物から茶色の袋を取り出した。

「アル！！腹減ってるから不機嫌なんだろう？」
「！！」

袋の中身はダークマター……いや黒焦げのスコーンが入っていた。
王女という身分のせいかわいそうにアーサーは料理が下手なのである。
フェリシアーノはそれを見てうつと口を押さえた。

だが、アルフレッドは躊躇いなく袋の中からスコーンを一つ出して
口の中にいれた。
ゴリゴリという有り得ない音にフェリシアーノは顔を青くするが、
アルフレッドはいたって普通だ。

「相変わらず不味いね
君の料理は」

「わっ……悪かったな！！！！不味いと思うなら食わなきゃいいだろ
！！！！」

「でも、君の料理食える人なんて俺ぐらいだよ」

そう言ってもう一つスコーンを口の中に入れるアルフレッドにアー
サーは少し嬉しそうに笑った。

そんな様子を見ていたフェリシアーノは一人拗ねたような表情をし
ていた。

「？どうしたんだフェリ
お前も腹減ったのか？」

「…違うよ」

「スコーンいるか？」

「いないよ」

「アーサーの料理不味いんだもん」

拗ねた口調でいらないうというフェリシアーノにアーサーは泣きそうな顔したが、アルフレッドがフェリシアーノに言った言葉にアーサーは困惑することとなった。

「何拗ねているんだい君」

「拗ねているのはアルフレッドだよ！」

「違うよ！君だよ！」

「俺は拗ねてないよ！！アルフレッドの方だって！！」

「俺じゃないよ！！フェリシアーノだよ！！！！」

「…おい…二人とも？」

険悪化していくアルフレッドとフェリシアーノの雰囲気嫌な予感を感じたアーサーは止めようとするが、ますます険悪になっていくばかりだった。

「…大体君はアーサーをどうするつもりなんだい？一緒に寝たりしてさ」

「アルフレッドこそ」

「俺達に嫉妬しているじゃないか」

「「きききききき…」」

アーサーを挟んで互いに睨み合う二人を見て、アーサーは大変困った顔のため息をついた。

n
e
x
t

s
t
o
r
y

62：修行（前書き）

セツキーさん、ちはぴーさん、感想ありがとうございます

今回は次男お兄さんと親分登場です

それとアクセス30000打突破！！！！

ありがとうございます！！！！

まさかここまで来るとは！！！！

62：修行

森の中を進んでいくアーサーは自分を挟んで睨み合っている二人に溜め息をついた。

「…二人ともいい加減にしろ」

「アルフレッドが謝るなら許してやってもいいよってアルフレッドに伝えてアーサー」

「フェリシアーノが謝罪するならしようがなく許してやるんだぞってフェリシアーノに伝えるんだぞアーサー」

「…お前ら」

どうやら二人ともお互いと話したくないらしく、アーサーはそんな二人に再び溜め息をついた。

かれこれ30分はこの状態である。大人に成長していると思ったらこういうところは子供である彼らにアーサーは苦笑した。

その時である。

「……！」

茂みが音を立てて揺れ、茂みの奥からは美しい蒼の鱗を持った巨大な竜が現れた。

蒼の竜は翠の瞳が驚愕して立ちすくんでいるアーサー達に向けると、手を伸ばしアーサーを驚掴みにした。

「うあぁっ……！」

「アーサー……！」

「くそつ！！！！」

驚掴みにされたアーサーは高く掲げられ竜の顔付近まで持つてこられた。

それに嫌な予感を感じた急いで武器を構えて竜に攻撃をしようとするが…。

「アルフレッド！！どいてよ！！！！」

「君こそ邪魔だよ！！骨折しているんだからどきなよ！！！！」

二人はアーサーのピンチを前に喧嘩をし始めてしまった。

そんな二人を見て溜め息をついた人物がいた。

それは。

「…はあ…兄さんに聞いた通り本当にガキだな」

「仕方ないやん！まだ子供なんやし」

竜の背中から聞こえたその声にアーサーは聞き覚えがあった。

フェリシアーノとアルフレッドも聞き覚えがあるらしく、アーサーと一緒に声の聞こえた方を見た。

すると、少しウェーブがかった短めの金髪と翡翠の瞳にどこかで見ただことがある眉毛の青年と焦げ茶の髪に小麦色の肌に深緑の瞳の人の良さそうな青年が竜の背中から出て来た。

その二人を見て3人は声をあげた。

「ジエームズ兄さん！！！！アントーニョ！！！！」

「アントーニョ兄ちゃん！！！！」

「ジエームズ！！！！」

それぞれ声をあげた3人に2人は苦笑し久しぶりと言った。

「アーサー久しぶりだな
それとアルフレッドも」

カークランド家の次男でありアーサーの兄であるジエームズはアーサーの頭をくしゃくしゃとなでた。

「いやー、まさかアーサーがフェリちゃんと一緒にいるなんて思わなかったわ」

「アントーニヨ兄ちゃんは昔俺んちの近所に住んでいたんだー
でも今はブリティッシュランドの騎士団の団長やっているなんて驚いたよー」

フランスとは少し違う騎士団の白のジャケットを着たアントーニヨの胸には騎士団団長を表す薔薇と一角獣の紋章があった。

「でもジエームズ兄さんとアントーニヨがここにいるんだ？

ジエームズ兄さんは精霊の研究のために最果ての島にいたんじゃないのか？」

「ああそれはな、兄さん…ロバート兄さんがなお前らが駆け落ちしたから捕獲するように…」

「かつ… 駆け落ちなんかじゃない！！！！」

「冗談だよ… 冗談」

実はな、そのこの2人を鍛えろって言われてんだよ」

「え！？」

「俺達！？」

突然指を指され、フェリシアーノとアルフレッドは目を丸くした。そんな二人にアントーニヨは軽く説明をした。

「ロバートや女王がな、マーリンに立ち向かうにはまだ力が足りないって言っていたんや

だから俺らがここに派遣されたんや」

「… マーリンに立ち向かうには力不足… か」

「… 悔しいけどその通りだよ」

もともとマーリンに立ち向かうには力不足だと薄々感じていた二人はアントーニヨの言葉で自覚した。

自分達の力不足は、世界が滅ぼされアーサーが奪われてしまうということを表しているのも分かっていた。

「分かったよ… 俺達修行するよ」

「… このままじゃアーサーが奪われてしまうからね」

修行をすることに同意を示した二人にアントーニヨとジェームズは満足そうに笑い、アーサーは少し照れたように顔を背けた。

「… だけど！！！！」

とフェリシアーノとアルフレッドは睨み合った。

「こいつより強く鍛えてね!!!」

いまだに対立する二人を見て、
そういえばコイツら喧嘩していたんだとアーサーは思い出して溜め
息をついた。

そんな彼らの様子を遠くから見ているものがいた。

「フェリシアーノ・ヴァルガス…アルフレッド・F・ジョーンズ
そしてブリティッシュランドの天使姫
アーサー・カークランド

見つけた…!!」

その人物はその三人を見るとにやりと怪しく笑った。

n e x t s t o r y

63：アーサーの心情（前書き）

セツキーさん、ちはぴーさん、感想ありがとうございます！！

昨日はバイトがぎっしりあって更新できませんでしたすみません

明日からちよいと香港に旅行に行くので予約更新しておきます

63：アーサーの心情

「ウインドカッター！！！！！」

ジェームズが魔術で風の攻撃をフェリシアーノとアルフレッドの双方にしかけるが、二人はそれを難なくよけた。

「ジェームズ！！そんなんじゃ俺は倒せないぞ！！！」

「言ってるクソガキ

ウインドカッター！！！」

生意気なアルフレッドに挑発されたがジェームズは落ち着いて同じ魔術を次々と彼らにしかけた。

「ヴェー！同じ魔術ばかりじゃ修行にならないよ！！！」

「ジェームズ！！数年見ない内に魔術の腕落ちたのかい？」

ジェームズの魔術を避けて得意気になっている二人はさぞかし油断しているだろう。

そう思ったジェームズはにやりと笑い魔術を使った。

「ウインドカッター！！！」

「また…同じものを」

「…どうだろうな？」

「えっ！！？」

ジェームズがにやりと笑い、すぐ近くの木の枝に乗った途端にフェ

リシアーノとアルフレッドを囲むように立っていた木々は倒れだした。

「……まさか…俺達じゃなくて木を狙って…」

「その通りだ」

お前らはウインドカッターごときの下級魔術に油断させられたんだ」

「……でもこんなの簡単に避けられるぞ……！」

「どうだろうな」

「……！！！」

「イラプシヨン……！！！」

アルフレッドとフェリシアーノが木々を避けてぬけだそうとした瞬間、ジエームズは新たな魔術をしかけてきた。彼が呪文を詠唱し終わると、地面から勢い良くマグマが飛び出てきた。

「……嘘だろ……！！！」

「……って……どいてよ……！！アルフレッド……！！邪魔……！！」

「君こそどいてくれないかい……！！？」

「……お前ら喧嘩している場合じゃないぞ」

修行中でさえもめる二人にジエームズは溜め息をつき、アーサーも苦労してるなと苦笑した。

そしてそのアーサーはというと……。

「すっげー……ここ妖精がいっぱいいるなあ……！！……！」

「ここはブリティッシュランドみたいに魔力が宿った場所らしいで……！！……！」

アントーニョと一緒に森の中を探索していた。

探索途中、アーサーの周りには色とりどりの小さな光がふよふよと浮かび上がっていた。妖精である。

「アーサーは本当に妖精が好きやなあ」

「まあ友達だしな……」

妖精に頬をすり寄せられてふにやりと笑うアーサーにアントーニヨは破顔しそうになりながらも笑った。

だが笑った顔は変態のようだった。ロバートがブリティッシュランドの騎士団は変態ばかりと言っていたがアーサーは知らない。

ふにやりと幸せそうに笑うアーサーに今度は小さな馬がそばに駆け寄ってきた。

その馬には金色の角が生えており、アーサーはその姿を見た途端に嬉しそうに声をあげた。

「ユニコーン!!!!」

嬉しそうなアーサーにユニコーンはすりより、座って自分を撫でてくれるアーサーの膝の上に頭をのせた。

「(ていうか、アーサーはまだ処女やったんやな
外の世界でよく守ってこれたな)」

清らかな乙女にしか見えないユニコーンを嬉しそうに撫でるアーサーを見てアントーニヨはそんなことを思っていた。

「……アーサーは強い子になったで」

「……」

アントーニヨがふと零した一言にユニコーンを撫でてたアーサーは手を止めてアントーニヨを見上げた。

「……俺は強くなんかない
本当はここにいただけでも限界なんだ」

「……………」
「…兄さんから話を聞いたんだろ」
「ああ、聞いたで

フェリちゃんの中に敵さんがいたことも、フェリちゃんの兄ロヴィーノが敵だったことも全部」

「……………」

アントーニヨが兄から全ての事情を聞いていることを確認するとアーサーは溜め息をついた。

「お前は…優しいな」

「アーサーは昔から兄ちゃんやフランスに苛められると姉ちゃんやエドや俺に泣きついていたからな」

「ん…」

でも今回はフェリの方が辛い思いをしているんだ
…だから」

次に紡がれた言葉にアントーニヨは深緑の瞳を見開いた。
ぶわりと嫌な生ぬるい風が吹き、ユニコーンはアーサーの膝から頭を上げて彼女を見た。

n
e
x
t

s
t
o
r
y

64・目覚める力（前書き）

きっと今頃香港エンジョイしているんだろつな私

本家は向こうから見えるから良かった

向こうでも紅白うつるといいな

水樹さーん！

今回は主人公の出番はありません

64：目覚める力

自分は何者なのか、それは自分自身でも分からなかった。
ブリティッシュランドの王女、フランスの婚約者、天使の魂が宿
った巫女、カーランド家の末裔。
どれも肩書きでしかないって分かっていた。

『王女様は一族最高峰の力を持つでしょう』

天使が宿り、ご自身も天使としての力を持つ

ですが

『17の歳に死に至るでしょう』

いつか人は死ぬ。それは変えることができない。俺の場合人より早
いだけ。

だから、どうせ散る命なら。
みんなのために散らせたいと。
例えどんな結果になろうと。

前まではそう思っていた。

ただどマーリンの話聞いて思った。

もし自分が死んでフェリがマーリンのようになってしまっただけ？

アーサーの言葉に目を見開いたアントーニョは、アーサーの言うことが信じられなかった。

その言葉はあまりにも強烈だったのである。

「……アーサー、それ本気なん？」

「……ああ」

「止めても無駄だ」

「…止めるなんてことはせんで、けれど……いや、アーサーにこれ以上言っても無駄やな」

「…」

アーサーの目が本気だということに気づき、彼女を止めることは無駄だと分かった。

代わりににはつと笑い、アーサーの頭を優しく撫でた。

「まあ、アーサーをマーリンとかいう奴から守るのはフェリちゃん達の役目やし、親分はアーサーが変態に狙われないように警護するくらいやで」

「…もう変態がいるんだが」

「…確かに」

今頃アーサーを捜している悪友に心の中で苦笑いしながらも、納得している自分がいた。

アーサーも不安があるのだろう。これからの未来が。だから今の内に笑えるだけ笑っているのだろう。

「アントーニヨ、今言ったことはフェリ達には秘密だからな」

アーサーは人差し指を唇に当てて言うなと真剣な顔で訴えた。

アーサーのその訴えにアントーニヨは当然のように首を縦に振った。

「分かつとるで」

じゃあ、俺達もフェリちゃんここに戻……！！！！」

とアントーニヨは元来た道を振り返ろうとしたその時、目にも止まらぬ速さで背中に背負っていた戦闘用の巨大斧を取り出し構えた。

「早速、変態のお出ましやで」

アントーニヨが何もない宙を睨みつけると、そこはぐにやりと歪み、そこからは真つ黒なフード付きマントを着た人物が出てきた。顔はフードを深く被っているために分からない。

アーサーはその人物を見たときに目から光が消えかけようとした。

「……」

「アーサー逃げた方がええで」

アーサーに対してアントーニヨは逃げるように促すが、アーサーは動かない。

ユニコーンが心配そうにアーサーを見るがアーサーの瞳からは光が消えかけていた。

「……」

「アーサー？」

ユニコーンが心配そうに見ていることにアーサーの様子が変だということに気付いたアントーニヨはふとアーサーの名を呼んだ。

するとアーサーの瞳に一気に光が戻り、アーサーは正気に戻った。

「気をそらしたらあかんで」

「…分かつてる」

アントーニヨに注意をされたアーサーはこっそりと杖を構え、いつでも呪文詠唱ができるように後ろへと下がった。

相手から距離をとれば上級魔法が使える。アーサーはそう思ったか

らである。

距離をとると、アーサーはフードの人物を睨んだ。

「お前何者だ

まさかマーリンの一味じゃないだろうな」

ここで一番襲つてきそうなのはマーリン関係であると思ったアーサーはフードの人物を睨みながら訪ねた。
するとフードの人物はくつくつと笑った。

「…マーリンの一味？

そんなのはもう昔の話だ」

「昔の…！？」

「あのエルフは馬鹿だ

世界を壊すよりも支配した方が素晴らしいのに」

「…」

「だから私は決めた！！あの男の代わりに世界を支配しよう！！」
「！」

野心的な意見を言つてマーリンを否定するフードの人物はばさりと顔を隠していたフードを脱いだ。

その顔にアーサーは見覚えがあった。

アルフレッドと数年ぶりに再会したあの街で己を誘拐し、他の仲間を皆殺しにしようとした男であった。

「…！！…お前は…あの時の…」

驚いて目を丸くするアーサーを見て、フードの人物はにやりと笑った。

「…あの時はあのガキ共に邪魔されたが、今回はそうはいかない

確か…マーリンは貴様を欲しているのだな
ということとは貴様を手に入れ人質とすればマーリンは私の言いなり
になり、世界征服に手を貸してくれるということだな」

自分を狙う者がマーリンだけではなく人間にもいたとなるとアーサー
はどこか心が痛まずにはいらなかった。

そんなアーサーを庇うようにアントーニヨが斧を男に向けた。

「何言っとなのこイツ」

アントーニヨのその深緑の目は本気で騎士として威風堂々とした強
さが秘められていた。

「…俺の前でそんなことを言ったらあかんで」

「ブリティッシュランドの魔法騎士団の団長アントーニヨ・フェル
ナデス・カリエドか」

「へえ、知っとなん」

「世界トップクラスの騎士団の団長だしな」

男の言葉でアントーニヨはへへっと少し嬉しそうに笑ったが気は緩
んではない。

そういう所はさすが騎士団長である。

「なら話は早いで」

今すぐアーサーの前から消え去れ

さもなければ、お前をボコメキヨにするで」

温厚なアントーニヨが睨むと男の顔から汗が垂れた。

若くして世界一の騎士団を束ねるアントーニヨである。真っ向から

勝負して勝てる者などあまりいないであろう。

「…なるほど、確かに勝てやしないだろうなだが、これがあればどうだろうな」

男は懐から真つ黒な水晶を取り出した。

その水晶は色だけでなく纏うオーラさえも禍々しい黒であった。

「魔法水晶？」

「そうみたいだな…」

二人も何かしかけると思い、武器を持つ手に力をこめるが、魔法水晶は彼等ではなくユニコーンに向かつていった。

アーサーがユニコーンの危機だと分かった時にはすでに遅く、魔法水晶はユニコーンの体に触れ、強烈な黒の光を放った。

「…!! なっ…なんだよあれ!!! ユニコーンが!!!」

黒い光はユニコーンを包み込んで肥大化した。

そして禍々しい光が薄れていくと、そこには巨大化したユニコーン。

「………っ…あんなのって…」

「…ユニコーンって…聖獣やなかったっけ?…でもこれじゃあ…まるで魔獣みたいやん」

ユニコーンには先ほどのような清らかさは残っておらず、体は真つ黒に染まり、アーサーを見ていた優しそうな瞳は凶悪な光を放つ血のような赤い瞳となり、毛並みもどこか禍々しいオーラを纏っており、聖獣としての面影は残っていなかった。

「この魔法水晶は魔力を持つ生き物ならなんでも取り込んで禍々しい操り人形へと変えることができる」

「…そんなことのためにユニコーンを…!!!」

自らのためにユニコーンをあんな姿に変え、操ろうとしているこの男にアーサーは怒りを感じた。

ただの怒りではない。奥から憎悪が沸いてくるようなものであった。アーサーの瞳からは再び光が消えようとした。

「…アーサー!?」

「……許さ……ない」

「アーサー!!!??しっかり!!!!!!」

アントーニヨがアーサーの様子がおかしいことに気づき、慌ててアーサーのそばに駆け寄ろうとした。

だが近づくにつれてアーサーからは強い魔力を感じた。

肌に焼け付くような強い魔力が。

アーサーの瞳は光が消えて虚ろなものとなり、冷たい眼光を放っていた。

優しさや愛情など一切知らないようなものだった。

「…殺して…やる…」

「…アーサー!!!」

「なんだ!!!?」

アーサーがそう呟いた途端、彼女の周りを聖なる光が包んだ。そして強い光を周りに放った。

その威力は絶大なものでアントーニヨや男だけでなく周りの木々さえも吹き飛ばすほどであった。

「っ…アーサー！！？一体何が…」

かなりの距離を吹き飛ばされたアントーニヨはゆっくりと立ち上がり、惨状ともいえる周りの景色からアーサーを探した。すぐに見つけることができた。

だが、アントーニヨはアーサーの姿を見て目を丸くした。

「はは…嘘やろ

まさか魔獣に続けて…」

天使が現れるなんて…」

アーサーの背中には純白の翼が生え、彼女は先ほどよりも強い魔力を放っていた。

n e x t s t o r y

65：天使の力（前書き）

すみません、間が空いてしまって

帰国したあとに体調崩してしまって更新できませんでした
体調が回復したので更新していこうと思います

しばらくは、この連載のみを更新していこうと思います

なんか久しぶりなのでグダグダですが

65：天使の力

静かなはずの森にて突如轟音が響き、修行をしていたフェリシアノ達は目を見開き音がした方向を見た。

「!!!なんだ!?!?」

「…今の魔力の感じは…アーサーか…」

今の轟音からアーサーの強い魔力を感じとったジェームズが零した言葉にフェリシアノとアルフレッドは肩を震わせて音がした方向へ走り出した。

「……!!!」

「おい!!!お前ら!!!」

止めようとしたが、走って行ってしまった二人にジェームズは軽く舌打ちをして再び轟音のした方向を見た。

「……それにしても…なんだこの魔力は…」

感じとった魔力はアーサーのものだったが、それはどこか冷たく膨大な力だと思ったジェームズは嫌な汗を流した。

先ほどの力でアーサーを中心に巨大なクレーターができ、クレーター
の周りには樹がしっちゃんかめっちゃんかに倒れていた。
クレーターの真ん中にいるアーサーは純白の翼を背中から生やし、
冷たい瞳で目の前にいる男を見ていた。

「アーサー……」

「はっ……天使姫が本物の天使みたいになるとは……一体どんなしかけ
があるんだ」

男の言葉をアーサーは返さず、ポーカーフェイスを崩さずにただ男
を見ていた。

その顔に表情などなかった。

「アーサー……!!どうしたんや!!アーサー……!!」

彼女が心配になったアントーニョが呼びかけをしても、アーサーは
反応を一切見せない。

しばらく、この状態が続くとアーサーはやっと唇を動かした。
だが、それは男へ返す罵声でもアントーニョへの言葉でもなく、魔
術の呪文だった。

「『その御名のもと
この穢れた魂に裁きの光を降
らせたまえ』」

聞き覚えのない呪文詠唱をするアーサーの周りには金色の光が舞い、
アーサーはどこか神々しかった。

「『ジャツジメント』」

アーサーが最後の呪文を呟くように詠唱し終えると、天は少し薄暗
い雲に覆われ、曇ったと思えば空が光り、大きな光線が地に向かっ
て落ちてきた。

「っ…!!!!」

「ぐあっ…!!!!」

それは広範囲に落ちてきたため、男だけではなくアントーニヨまで
もが食らってしまう結果となり、森には先ほどよりも強い轟音が響
く。

「…何て力や…アーサーはこんな力を持つとんたかい」

さっきの魔術の影響で倒れた木の下敷きとなったアントーニヨは自
分を覆い被さっている木をどけて周りを見渡した。

相変わらずアーサーは立ちすくんでいるのが見えた。

彼女のもとへ行こうと思ったが、さっきの魔術のダメージが災いし
て右足が骨折してしまってた。

「っがはっ…」

こんな力を持っていたのか…

これは素晴らしい……！！！！」

一番まともに食らっていた男はぼろ雑巾のように倒れていた。そのそばには同じくぼろ雑巾のように倒れているユニコーンがいた。ユニコーンがすでに虫の息で今すぐにも事切れそうだった。

「貴様もこの魔法水晶で操ればマーリンの力無くとも世界を簡単に支配……」

「黙れ外道」

アーサーを操ろうと例の禍々しい水晶を取り出した男に、アーサーは容赦ない魔術攻撃をした。

そして男が再び這いつくばったのを見ると、またあの呪文を詠唱しようとした。

「アーサー……！！またそんなことしたらユニコーンが死んでしまうで……！！！！」

アーサーが何をするか察知したアントーニヨは彼女を止めようとしたが、アーサーはかまわずに続ける。

「『その御名のもと……』」

感情を出さないアーサーには命を大切にする心も慈しむ心もない。

「アーサー……！！やめい……！！！！」

「……こんな時に足がいつてもうた……！！……くそっ……！！！！」

骨折したために歩くことはおろか立ち上がることもできないため、アントーニヨは悔しそうに地面を握り締めた拳で何度も叩いた。

「『この穢れた魂に裁きの光を降らせたまえ…』」

あと少しで呪文詠唱が終わってしまふ。終わってしまったえばまたあの魔術が発動してユニコーンやこの男はもちろんアントーニヨだって助からないであろう。

もしかしたら死ぬかもしれない。

アーサーに人を殺めることなどしてほしくなかった。

だが、その想いをあざ笑うかのようにアーサーの詠唱は終わりを迎えた。

『ジャッジ…』

もう駄目だ。とアントーニヨが思ったその時。

「アーサー!!!!!!!!!!」

「っ!!!!!!!!!!」

突然何かかアーサーに飛びかかってくのが見えた。

何かはアーサーを巻き込むように倒れ、それに怯んだアーサーは魔術発動を止めてしまった。

その何かとはフェリシアーノである。

そんなフェリシアーノに続くようにアルフレッドが現れ、アーサーを後ろから羽交い締めにして身動きがとれないようにした。

「やめろっ！！！！！！離せっ！！！！！！人間風情が！！！！！！」

無感情だったアーサーはヒステリックに暴れ出し、その様子をフェリシアーノは悲しそうに見つめていた。

「……アーサー」

「馴れ馴れしく我が名を口にするな！！！！！！」

「……アーサー」

冷たい眼光を放つアーサーの名を何度も呼ぶフェリシアーノは骨折していない方の手でアーサーの肩をゆっくりと掴んだ。

「……もう……やめよ」

「……こんな君は見たくない」

フェリシアーノはそう言うとアーサーは暴れ出すのを止め、それを見たアルフレッドはそっとアーサーを解放した。

解放されたアーサーは力なく地面に膝をつくと、覚束無い瞳で周りを見渡した。

「……」

アーサーの瞳は光を取り戻しており、普段通りの彼女に戻っていた。

「……俺……こんなことしか出来ない」

周りを見渡した後、アーサーは下を向いてぽつりと言葉を漏らした。その言葉をフェリシアーノとアルフレッドはただ静かに聞いていた。

「人を傷つけることしか……」

「アーサー…」

「ユニコーンも…こんなことに…」

アーサーはゆっくりと立ち上がると覚束無い足取りでアントーニョとユニコーンに近づき、彼らの傷を魔術で癒やした。

「…ユニコーンがあいつに変な姿にされて…それが許せなくて…もしたらこんなことに…」

彼らを癒やし終えたアーサーにフェリシアーノは近づき彼女の頭を優しく撫でた。

「…俺…本当に傷つけてばかりだな…」

「…アーサー」

涙が混じった声で自分を責めるアーサーにフェリシアーノは名前を呼ぶことしかできなかった。

そんな彼らの背後から誰かが近付いてきた。

ジエームズだった。だがジエームズの後ろには騎士団の人間が何人かついており、ジエームズの手には鎖付きの手枷が握られていた。

「その通りだアーサー」

「…ジエームズ兄さん」

ジエームズに名前を呼ばれ、真っ青な顔でそちらを向いたアーサーの瞳は不安げに揺れていた。

next story

次回作予定表

あと30話〜40話でこの連載が終わるので、次回作を決めたいと思います

ヘタリア オブ シンフォニア

(米英・RPGパロ)

ティルズ オブ シンフォニアのパロではありません。ただ主人公が小西繫がりなだけでタイトルをパロっただけです。

《あらすじ》

世界は魔力が枯渇し滅びの道を歩んでいた。だが世界を統一している帝国はそのことを公表せずに隠していた。そんな中、世界を仲間と旅をしている少年アルフレッドは、ある日変な男達に終われる少女を助けた。それからアルフレッド達は世界を巻き込む事件に巻き込まれていくのであった。

《解説》

パーティーは連合のみです。枢軸はパーティーに入りません。カプは王道の米英でいきたいと思います

またまたアーサーは見た目そのままな女体化です
なぜなら、貧乳ネタにはまってしまったからです
敵として、この連載のオリキャラがでるか

マーリンさんは出ません
やっぱりアーサー総受け

クレイジー・ボーイ
(伊英・裏社会パロ)

《あらすじ》

貴族の令嬢であるアーサーはイタリアの別荘で過ごしていた。彼女は昔母親をマフィアに殺されて以来裏社会の人間を嫌っていた。だがある日別荘の前に倒れていた傷だらけの青年フェリシアーノを助けて別荘で介抱した。アーサーとフェリシアーノは仲を深めていくが、実はフェリシアーノは裏社会の二大勢力の一つであるマフィアの若きボスだった。

《解説》

ベタですね

王道ラブロマンスです

やっぱりアーサーは見た目そのままな女体化です

理由は上記と同じです

イタリア＝マフィアなのは復活の影響

今回は連合(アーサー除く)VS枢軸です

やっぱりアーサー総受け

タイトル未定

(英総受け)

《あらすじ》

英国の女学院に通う生粋の処女アーサーはある日父の仕事の都合で他国へ渡ることになった。アーサーは父の知り合いの運営する私立学園に転入することになったが、なんとそこは元男子校で女子の数は極端に少なかった。そんな中アーサーは生徒会長に気に入られてしまった

《解説》

完全な逆ハーです少女漫画です

絶対アーサーがお色気キャラになるやつですね

絶対アーサーがセクハラに遭うパターンですね

生徒会長はアメリカさんです

生徒会は連合の皆さんです

アーサーはまたもや見た目そのままn（ry

処女だからセクハラにパニクるアーサーを書きたいだけです

ていうか、悪友連載と同じくシリーズですね

というのが予定です

新年なのに煩惱だらけですね

66：別れの言葉

鎖付きの手枷を握るジエームズからアーサーを庇うようにアルフレッドは彼の前に立ちふさがった。

「君、アーサーに何をやる気だい」

レンズの奥から蒼い瞳をギロリと自分を見るアルフレッドにジエームズは冷静な態度のまま言った。

「お前達も見ただろ？アーサーの力を」

「……………」

ジエームズがそう言うのとアーサーはびくりと肩を震わせて顔を下げた。

だが、そんなアーサーにかまわずにジエームズは続けた。

「まさかアーサーがあんな力を持っているなんて予想外だった

…あの力は危険すぎる

だからアーサー、わかるよな？」

アルフレッドの背後にいるアーサーを睨みつけるように見れば、彼女は顔を真っ青にしてまた肩を震わせてゆっくりと立ち上がって、アルフレッドの横を通り過ぎてふらふらとジエームズの前まで歩いて言った。

「…はい」

顔を真っ青にしたアーサーは生気の無い返事をしたのを聞くとジェームズは持っていた手枷でアーサーの両手首を拘束した。ガチャリという金属音が聞こえたと同時にフェリシアーノは叫ぶようにジェームズに言った。

「……！何をしているんだよ……！！アーサーになんで手枷を……！！」

「……これはただの手枷じゃねえよ魔法封じがされている手枷だ」

冷静な表情でフェリシアーノに言葉を放つジェームズの声は冷たく氷のようだった。

ジェームズという言葉に驚愕したアルフレッドは急に黙り、フェリシアーノだけが理解出来なかった。

するとジェームズは踵を返すと、手枷の鎖を軽く引つ張りアーサーに歩くように促すと彼女と同時に背を向けて歩き出した。

アーサーは抵抗などせずただ素直に歩いていった。

「……じゃあな」

「待つてよ……！！……！！アーサー……！！……！！」

ジェームズは自分達に手を軽く振ったのを見てフェリシアーノはアーサーに向かって歩き始めた。

アーサーはフェリシアーノが近付いてきていることに気が付くと足を止めた。アーサーが足を止めるとジェームズも止まった。

アーサーはフェリシアーノの方には振り向かず小さく口を動かした。

「…今までありがとう」

その言葉でフェリシアーノは瞳を大きく見開いてアーサーを見た。フェリシアーノはショックのあまり地面に膝をついてしまい、言葉が上手く出せずにただアーサーと呟いた。

また歩き出しどこかへ連れて行かれてしまうアーサーを追いかけることができなかつた。

もしかしたらもう二度とアーサーと会えないかもしれない。そんな予感がしたが手足は動いてくれなかつた。

だが口だけは動き、フェリシアーノは力を込めて精一杯叫んだ。

「アーサー！！！！！！！！！！」

森の中に響く頃にはもうアーサーの姿を見えなくなつた。フェリシアーノはようやく動いてくれた手足を駆使し追いかけてよつとしたが、今まで黙っていたアントーニヨに腕を掴まれて止められてしまつた。

「フェリちゃん……やめたほうがええで」

「なんでだよ…アーサーが連れて行かれてんだよ！！！！」

普段な穏やかなフェリシアーノとは違い、血相を変えて今にでも暴走しそうなフェリシアーノに内心驚きながらもアントーニヨは言いたいことをしっかりと伝えようとした。

「仕方のないことなんや」

「……フェリちゃん…よく聞くんやで」

フェリシアーノの方もアントーニヨが重要なことを言うのだと気づき、彼の言葉に耳を傾けた。その傍らではアルフレッドが暗い顔をしていた。

アントーニヨはフェリシアーノの鳶色の瞳を見ながら静かな声で言った。

「アーサーには…もう二度と会えんかもしれへん」

その言葉は何よりも残酷で、フェリシアーノに大きな衝撃を与えた。

n e x t s t o r y

67：二人の英雄（前書き）

セツキーさん、ちはぴーさん、感想ありがとうございます

体調良くなりました！！完治しました！！

浪川さんのブログに浪川さんとのんたんのツーショットが！！！！
伊英かコンチクショウ！！！！！！大感謝祭いきたかったああ！！
！！
とりあえず、折笠レディは女神！！！！ナイス！！！！DVD楽し
みだ！！！！！！

この前の予定連載はあくまで予定です

でも米英RPGパ口は連載すると思います

シンフォニア！！！！主人公が同じ小西なのに価値観が真逆！！

そういえば、最近ツイッター始めました！！良かったらフォローよ
ろしく願います！！

[http://twitter.jp/user/witchtea/s
tatus](http://twitter.jp/user/witchtea/s
tatus)

たまに頭に思いついたネタを呟きます

67：二人の英雄

「…アーサーに会えないってどういうこと」

アントーニヨの言葉から暫く沈黙が続いた後フェリシアーノは静かな声で彼に聞き返した。

「アーサーの力見たやろ……………あれは天使の力って言うんや」「天使の力…」

アントーニヨがアーサーの力について話す中、今まで黙っていたアルフレッドが口を開いた。

「…天使の力を持つ人間は…力が目覚め始めると代償として感情がなくなり、ただ自分の周りの人間を殺すことしかできない殺戮兵器になる……………だろ」

いつもとは正反対の暗い口調で話すアルフレッドの顔はどこか暗かった。

殺戮兵器。そんなものにアーサーがなりかけている。

フェリシアーノは天使の力について理解出来なかったがアーサーが大変な状態であることはわかった。

「…そんなのって……………」

「……………でも見たやろ……………アーサーはさっき感情を失っていた無差別に攻撃しようとしたやろ？」

先程無差別に攻撃しようとしたアーサー。
当然フェリシアーノもその姿を見た。冷たく光の無い瞳に、冷めた無表情。全て記憶としてフェリシアーノの脳裏に刻まれていた。

アルフレッドはもう一度口を開くと恐る恐る言葉を放った。

「…そして、目覚めてしまった者は…危険とみなされ…処刑される」
「……?」

フェリシアーノは信じられないという顔でアルフレッドを見たがアルフレッドは顔を青くしたまま彼から視線を外した。

「……アーサーが…処刑されちゃうの?」

琥珀色の瞳を揺らしながら、震える小さな言ったフェリシアーノはアルフレッドと同じく顔を青くした。
アルフレッドもアントーニヨも彼と目が合わないように彼の姿を見た。

アーサーは処刑される。その理由は2人とも分かっているがフェリシアーノには分からなかった。

「…アーサーは生まれてきた時から天使の力を持っていた
今まで目覚めたことなんてなかったんだ
多分、あの天使が抑えてくれてたんだと思うよ」

「……っ!?!?!?!」

アーサーについて淡々と話すアルフレッドの話が終わると、フェリ

シアーノは拳を握りしめアーサー達が消えていった方へと走り出した。

「フェリシアーノ!!!どこ行くんだい!!!」

「アーサーを助けるんだ!!!」

少し走ったフェリシアーノはアルフレッドの言葉で立ち止まり彼の方を見た。

そしてフェリシアーノは骨折し包帯が巻かれた腕を軽く掴みながら言った。

どうしてもアーサーを助けに行く。そんなフェリシアーノにアルフレッドは反論を言った。

「馬鹿かい!!!?君は!!!」

「だって、アーサーが殺されるなんて…おかしいよ!!!」

「俺は一人で助けに行く!!!」

フェリシアーノはそれだけ言うと踵を返して再び走り出した。

その後にアルフレッドが「あー、もう!」と言ってフェリシアーノを追いかけ、アントーニヨは2人を追いかけようと使えない脚の代わりに使い魔の牛を召還してそれに乗って追いかけた。

その頃、ブリティッシュランドの宮殿の上の人間達にはアーサー処刑の事について伝えられていた。

「なんてことでしょう…」

ブリティッシュランドの宮殿の女王の間にて、女王陛下は右手の手のひらで顔を覆い隠して、目の前にいるロバートに言った。

「…アーサーが天使に覚醒してしまうなんて…」

「…今はジェームズがアーサーをジャーマン帝国にある塔に幽閉しているそうです」

冷静に事を伝えるロバートとは逆に女王陛下はアーサーの事について悲しんでいた。幼い頃母を亡くしたアーサーは自分の姪であると同時に娘でもあった。

「……あなた方には辛いことになりましたが、アーサーは処刑しなければいけません」

「…わかってます」

「では…手配をお願いします」「はい」

だが、民を守るためには殺戮兵器になりかけているアーサーは殺さなければならぬ。民を守る。それが国を纏める女王の役割であるから。

女王陛下は泣く泣くアーサーの処刑の決定についてロバートに伝え

た。

ロバートは躊躇いなく了承すると女王の間から出て行った。出るとエドワードが待ち構えていた。

エドワードからは普段の温厚さは感じられず、ただ目の前のロバートを睨んでいた。

「…妹が処刑されるのに凄く冷静だな」

「…エド」

「妹の命乞いしないのかよ」

「できるんだろ」

「…決まりは決まりだ」

ロバートとは逆にエドワードはアーサーの処刑について反対だった。エドワードにとっては初めての年下の兄弟であるアーサーはとても大切な存在である。自分の片割れが亡くなってからは、自分がアーサーを守ると誓った。

だから、エドワードは許せなかった。妹の処刑について冷静に判断した兄達が。

いつもと違い血気盛んなエドワードを冷たい瞳で見下ろすと彼の隣を通り抜けて歩いていった。

「余計なことはするなよ…エド」

「さあ？俺より奴らを心配すればいいだろ」

きつと何かをやらかす。そう判断したロバートはエドワードに釘を刺したが、エドワード本人はにやりと笑って言い返した。奴らとは、誰かというのはロバートには分かっていた。

エドワードはロバートの後ろ姿が見えなくなると、近くにある大き

な窓の外に赤いドラゴンのモーガンを召還した。モーガンは召還されると翼を羽ばたかせてエドワードに背に乗るように促した。

「アーサー」

アーサーを助けるためには自分やフェリシアーノ達では戦力が足りない。

そう思ったエドワードはモーガンの背に乗り、大きな窓からどこかへ飛び立っていった。

フェリシアーノの後を追いかけていた二人はフェリシアーノの背中を発見し、背後から声をかけた。

「フェリシアーノ!!!」

「フェリちゃん!!!止まったって!!!」

「止めても無駄だよ!!!」

だが、いくら呼びかけてもフェリシアーノは立ち止まらずしばらくは追いかけてこしなからの会話が続いた。

「君さ…俺がアーサーを見捨てると思ったかい？そんなわけないだろ」

「え…でも…アルフレッドは…」

「いくら天使に覚醒したってアーサーはアーサーだろ！」

「…それはアーサーに言うべきだよ」

フェリシアーノはアルフレッドが自分に同意したことに驚いた。

ブリティッシュランドの人間という立場からアーサーを助けることができないアルフレッドは自分とは真逆の意見を持っていると思っただが、全く違っていた。

「俺もアーサーを助けるよ！」

「…アルフレッド」

「俺達はもう喧嘩なんかしてる場合じゃないだろ！！」

「そうだよね…！！！」

喧嘩して険悪なムードだった二人だが色々騒動があったせいで喧嘩している場合ではないとお互いが思い、二人は再び手を組んでアーサーを助けることにした。

「でも、アーサーは譲らないぞ」と後から付け足すアルフレッドにフェリシアーノは好戦的な笑みで「俺も」と返した。

「親分も…もちろん協力するで！！！！いくら騎士団長でも筋は通すつもりや！！！」

「さすがアントーニョ兄ちゃん！！！！！」

アルフレッドの後ろから使い魔の牛に乗ったアントーニョが自ら協力をすると言い、フェリシアーノは一気に心強くなった。

「バツシユみたいな強力な移動系魔術を使える奴は騎士団にはいいはずだからブリティッシュランドには行けない、だから多分アーサーは森から出たところにある塔に幽閉されてると思うんだぞ」

「…そこにアーサーが」

「…アーサーはすぐには処刑されないはずだよ！きっと明後日ぐらいいだ！でも急いでいかないと！！」

森を出るには時間がかかるが、早くしなければアーサーが危ない。フェリシアーノは骨折している方の腕に力を込めた。

「…っアーサー…待っててね」

n e x t s t o r y

68・兄の行動（前書き）

セツキーさん、ちはぴーさん、感想ありがとうございます

お待たせしました！！！！やっと更新です！！

今回は兄貴達中心の話です！！

最近、小説書いている子は小学生や中学生前半が多いですね

高校生の私はかなりオバハンですね

来週から修学旅行で5日間いませんので今のうちに小説ためとかんといけんわ

もう米英RPGもプロット作らないと…

本当はデステニー2パロがやりたいけど…米英にしたらキャステイングしづらなんだよ

伊英にしたら大体は埋まる

だから、米英RPGはシンフォのようなハーツのような…まあよく分かりません

68・兄の行動

森から少し離れた高い城壁に囲まれた石造りの塔。その最上階の部屋にアーサーはいた。

周りの壁は分厚く、そこにはめ込まれたようにある扉がギギッと開くと部屋中にその音が反響した。

部屋にあるベッドの上で手足を繋がれているアーサーは起きあがらずに扉の方を見た。

「…兄さん」

入ってきたのがロバートだと確認するとゆっくりと上半身を起こした。

ロバートはアーサーに近づかずに、この部屋に取り付けられている唯一の窓の側に寄って窓の外を見た。

「……………命乞いしないんだな

お前」

「…決まりは決まりだから」

どこか虚ろな瞳で宙を見つめるアーサーの姿はどけか弱々しかった。彼女に背を向けているロバートもアーサーが弱りかけていることを知っていた。

「それに俺には罪がある」

アーサーが静かに呟いたその言葉にロバートは一瞬目を見開いたが、すぐにいつも通りの冷静な表情に戻して言葉を返した。

「フランスやアルフレッドのことか」

「俺は…あの二人の幸せを奪ってしまった」

だから、どんな形であろうと償わないといけないんだ」

未だに自分を責めていたのか。とロバートは奥歯を噛み締めた。全ては四年前に起きたことに関係あると知っているロバートはどうしようもなく眉間に皺を寄せた。

「死んで償うってわけか」

四年前に起きた事件でアーサーは生きることにはしがみつかなくなり、自己犠牲心が生まれた。

アーサーはきつと自分が死ぬことに抵抗など無いのだろう。

「…あのガキはどうすんだ」

ロバートがそう質問した途端、アーサーの瞳が揺らいたが、ロバートに察知されないように落ち着いて答えた。

「…フェリには感謝している…出会ってくれたことも…一緒にいてくれたことも」

マーリンも…フェリが倒して世界を救出してくれるって信じてるから…」

アーサーの声は震えており、内心不安があるのだろうとロバートは思った。アーサーの姿は弱々しく可哀想だったが、決まりは決まりでロバートは自らがアーサーを処刑するつもりだった。

兄である自分がこの手で自分の妹を。

「…そうだな」

ロバートは冷静な表情のまま相槌を打つと部屋から出て行った。

その頃、エドワードはモーガンに乗ってジャーマン帝国の帝都近郊にある騎士団本部へとやって来た。

「…ローデリヒ」

「お待ちしていましたエドワード」

騎士団長であるローデリヒに迎えられたエドワードはそのまま騎士団本部の奥にある部屋へと案内された。

その部屋は近付くにつれて強大な魔力を感じるようになり、強大な魔力を持つエドワードと騎士団長であるローデリヒも冷や汗をかい

た。

「あの方はこちらの部屋にいます」
「……………」

エドワードはゆっくりと部屋の扉に手をかけた。部屋の重厚な扉はゆっくりと開き真つ暗な室内が見えてきた。

「……………」

その真つ暗な部屋に浮かぶような白いフード付きローブを着た人物。

「…何しにきたのですか」

「…占術で分かっているんだろ」

「…もちろん」

どうやらエドワードは白いローブの人物と知り合いらしい。

その人物はエドワードの方を向くと落ち着いた口調で言った。

「リヒ・ツヴィンクリを呼びなさい」

「じゃあ…」

「…もちろん」

リヒを呼べと言った白いローブの人物にエドワードは希望ができたように嬉しそうな口調になった。

「…でも、まだ私が出るわけにはいかない」

黒く細く重い杖を持つと、白ローブの人物はフードをとった。さらりと金髪が小さく揺れる。

「アーサーは大丈夫
英雄の孫がついているから」

微笑みながら言った言葉にエドワードは心底安心した。

n e x t s t o r y

69：友情（前書き）

お久しぶりです
復活しました
アーサー愛してる

というわけで69話です

これの次が米英RPGで連合パーティーなのでもう設定でホクホク
しています

連合は動かしやすいなー

あと、捏造UK兄弟の名前を変更しようかなと思います

名前を国名と近くしようと考えています

そしたら

スコ兄 スコット（そのまま）
アイルさん アイル（そのまま）
北威 ウェリン（短縮形がウェルとか）
南威 ウィリア（大して変わったらんがな）

69：友情

石造りの塔の頑丈な要塞にかこまれた中庭にたてられた十字架を悲しげな瞳をしている兵士達が見守っていた。

「……っ」

その十字架に磔にされているのは当然アーサーで、鉄の鎖できつく縛られた手足から痛みを感じていた。

「…お前の処刑は俺がする」

そんなアーサーの前には鞘に収められた剣を持ったロバートがやってきた。

「…言いたいことはあるか？」

「………」

そう聞いてくるロバートにアーサーは無言で彼の顔を眺め、暫くすると小さく首を横に振った。

「…ない」

「そうか…なら」

アーサーが無いと言うとロバートは兵士達やジェームズの方を向いて高らかに宣言した。

「今から、アーサー・カーランドの死刑を執行する」

その場にいる多くの者はアーサーについて憐れみ、悲しそうな表情を見せた。ロバートは分かっていた。誰もアーサーの死を望まないのだと。

だが決まりは決まり。もう後には引き返せない。

「悪いなアーサー」

ロバートは再びアーサーの方を向き、剣の柄を利き手で握り締め鞘からゆつくりとギリリと鋭く光る白刃を抜いた。

アーサーはそれを見て体を少し震わせるが、ロバートはそれを見てみぬふりをした。

「これは決まりなんだよ」

黙ったまま自分を見るアーサーの胸に向かって白刃を構え、柄を強く握る。

「…じゃあな」

勢いよくアーサーの胸に向かって突かれようとした白刃は、飛んで

きた小さな光玉により粉々に砕け散った。
粉々に砕け散った金属が地に落ちるのをその場にいた人間は全員目を丸くして見ていた。

「……！！！！」

ロバートは地に落ちた金属を見ると、光玉が飛んできた方向を見た。

「誰だっ！！！！！！」

その場にいた人間全員もロバートと同じ方向を向く。そちらを向いたアーサーは目を見開き小さく声を上げた。

「……やっぱりお前らか」

全員が向いたその先には、塀の上に立ち二丁拳銃をこちらに向けたアルフレッドとフェリシアーノがいた。

「アーサーは処刑させない！！！」

「……フェリ」

意地でもアーサーを救おうとするフェリシアーノにロバートは刃がなくなつた剣の柄を強く握り締め、柄には小さな罅が入る。

「……無理言つなよ小僧」

本当はマーリンの血を継ぐお前も処刑の対象なんだよ！！！！」

彼の手から崩れ落ちる柄だった欠片を見てフェリシアーノ達は驚愕したが、かかつてこいと言わんばかりの顔で武器を構えた。

「お前ら邪魔者は片付ける！！！！！！」

フェリシアーノに挑発について堪忍袋の緒が切れたロバートはこの場所に待機していた騎士達に命令を下した。

命令を受けた騎士達は一瞬戸惑ったが、すぐに慌てて剣を抜いてフェリシアーノ達に向かってきた。

「来たよ！！アルフレッド！！」

「ワオ！凄い人数だね！でも……」

アルフレッドはこちらに襲い来る騎士達を見てにやりと笑うと二丁拳銃を構えた。

「こんなに的多けりや絶対に当たるんだぞ！！！！」

容赦ない怒涛の銃撃が騎士達を襲い、かなりの数の騎士達は地面に倒れた。

だが、騎士としての誇りがある彼らはすぐに立ち上がり、二人に向かって魔法攻撃をしかけた。

炎の魔法攻撃をギリギリで避けた二人は冷や汗をかいた。

「おいおいフェリシアーノ

俺ら魔術なんて使えないんだぞ！！」

「えー…ブリティッシュランドの人間なのに使えないの！？」

いつものペースで話す二人に容赦ない魔法攻撃がしかけられた。だが、二人はそれに気づくのが、もう時はすでに遅し。

炎の塊が目の前まで迫っていた。

「ってヤバ！！！！」

「よけてよけて!!!」

よけることが間に合わず、衝撃を覚悟して目をつぶった途端、ジュワリと熱気が顔に当たった。

二人は異常を感じゆっくりと目を開くと、自分達の目の前には半分溶けた氷の塊。そして騎士団のジャケットを着た人物。

「…たくっ…お前らは無理しすぎだっつーの」

その人物はゆっくりと二人の方を振り向くと、わざとらしく溜め息をついた。

それを見て、二人は驚いたように声をあげた。

そう、その人物とはフランススだった。

「フランスス兄ちゃん!!!」

「はい!みんなのお兄さんだよ!」

「なんで…ここに」

きっとこの氷の塊はフランススの魔術で炎の魔術を中和したのだからとアルフレッドは思った。

だが、それよりも驚いたのは何故彼がここにいるからである。アルフレッドの問いにフランススはニヒルに笑いながら答えた。

「そりゃあ、大事な大事な愛しいお姫様の危機なんだから当たり前前でしょ

ちなみにお兄さんだけじゃないよ!」

「えっ…!?!」

フランススの言葉に目を丸くすると、刑場の方から轟音や金属音が聞こえた。

三人が一斉にそちらを向くと、そこには仲間達がいた。

「フェリシアーノ！！ちゃんと寝相よく寝ていたか！」

「ルート！！！」

大剣を扱い荒々しい攻撃ではなく確実に敵を倒すルートヴィッヒ。フェリシアーノはそれを見るところか安心した。

すると、他の仲間達もこちらに向かって叫ぶように言った。

「私達もいますよ！」

「たくつ…お前らは無茶しすぎあるよ！！！」

「でもそこが良いところなんだよねー！」

「菊！耀！イヴァン！」

ブリティッシュランドで別れたはずの仲間が今ここに集結して、アーサーを救うために戦ってくれている。

フェリシアーノはそれを見て感動を覚え、剣の柄を力強く握り締めた。

そんなフェリシアーノの背後から優しい声が話しかけてきた。

「…みんな…急いできてくれたんだ」

アーサーと瓜二つの顔で儂げだが優しい雰囲気漂わせる天使にフェリシアーノは微笑んだ。

「…アーティー」

その名前を聞いて天使は一瞬驚いたように目を見開くがすぐにその名前を受け入れたように微笑んだ。

「それ：彼女の名前かい？」

「だって、名前分かんないから！」

「まあお兄さんも天使ちゃんって呼んでたけどさ」

天使の名前について抗議が少しあったが、今はそんな状況ではないことを思い出し、三人は武器を構えた。

「さあ：お兄さんもいくか！！！」

フランスはレイピアを構え戦場へ飛び込んで行った。

「：フェリシアーノはアーサーを助けにいつてくれ」

「アルフレッド：」

二丁拳銃を構えてアーサーのもとへ行くように促すアルフレッドにフェリシアーノは目を丸くする。

「俺は後方支援だから：仕方なくだよ」

「……ありがとう」

少し不機嫌そうに言うアルフレッドは自分がアーサーを助けたかったのである。だが、自分ではアーサーを助けることが難しいと判断したアルフレッドはフェリシアーノに託した。

フェリシアーノはアルフレッドに軽くお礼を言うと剣を握り締めてアーサーのもとへと走って行った。

70・迷惑かけてないかな(前書き)

ちはびーさん、感想ありがとうございます

バレンティノー小説書きたいなあ

70：迷惑かけてないかな

戦場ともいえるこの場所から少し離れた場所にアーサーは拘束され
たままそこにいた。

こちらに向かって走ってくるフェリシアーノを虚ろな瞳で見つめ瞬
きをした。

「アーサー!!」

「……」

近付いてきたフェリシアーノは剣でアーサーを咎めている鎖を斬り
彼女を解放してやった。

「大丈夫!？」

「……」

解放した途端倒れてきたアーサーの体を両腕で支えてやると、アー
サーはフェリシアーノの背中に手を回して彼の服を握った。

「?…アーサー…ねえアーサー?」

「…っ」

「!?!?…どうしたのアーサー?!」

今まで虚ろな瞳で黙ってフェリシアーノを見ていたアーサーは突然
涙で瞳を潤ませた。

突然泣き出したアーサーにフェリシアーノは驚き慌て出すがどうす
ることもできなかった。

するとアーサーはゆっくり口を開いた。

「…フェリ…俺…生きてて…いいのか…？」

「…アーサー？」

「…俺…みんなに…迷惑じゃないのか…？」

アーサーがこんなこと言うのには理由があつた。自分のせいで人が傷ついたり死んでいくのを見ていられないのである。つまり自分が他人を不幸にしていると思つている。

「…そんなことないよ」

フェリシアーノは自分の思つていることをそのまま口にした。それは、他人を不幸にしているのはアーサーのせいじゃない。や、誰もアーサーが悪いとは思つていない。などの意味も含んでいるが、単に彼女を安心させるための言葉であつた。

「…でも…俺のせいで…こんな…」

「…だから死んで償うんだろ？アーサー」

青白い顔で自分を責めるアーサーと彼女を抱きしめるフェリシアーノに低く冷たい声が聞こえた。

目の前から聞こえたその声の主は翡翠の瞳を細めてこちらを見ていた。

「…！！…ロバート兄さん」

「……………」

片手に長剣を握り締めて今にもアーサーを殺さんとばかりの瞳をしているロバートからアーサーを逃すようにフェリシアーノは彼女を解放し、剣を持って彼女を庇うようにロバートと相對した。

「アーサーは殺させない!!!」

「……ほう、おもしろいなあ

俺もお前と一戦交えてみてえと思ってたんだよな」

好戦的に笑うロバートは剣を構えてフェリシアーノに向かって攻撃をしかけた。

金属の交わる音に、目を虚ろにしていたアーサーは正気に戻って目を見開いた。

「!!!!!!……て……」

剣を交わらせながら争うフェリシアーノとロバートを目の当たりにしたアーサーは何かを叫ぼうとしたが、上手く声が出ない。

「っ……!!!!!!」

「俺は今回魔術は使わねえよっ!!!!!!」

力強いロバートの剣技にフェリシアーノは圧倒されそうになるがどうにか持ちこたえた。もし魔術を使われたらきつとフェリシアーノは圧倒されていただろう。

ロバートの力強い攻撃をフェリシアーノは軽やかによけて一太刀を決めようとしたがロバートが剣を盾にしてそれを塞ぐ。

剣技の技術は互角。

どちらが勝ってもおかしくはなかった。

「……やめ……」

二人が剣を交えているのを顔を真っ青にしていたアーサーは震える手を二人に向かって伸ばしたが届かなかった。アーサーは気付いて

しまった。このまま二人が戦い続ければどちらかが瀕死になるかもしれないと。

「…あんま長期戦になると面倒だな
次で決めようや」

「…わかった…!!」

長い闘いで疲れが出た二人は最後の一太刀で決着をつけるために剣を握り直し構える。

お互いの剣の鋭い光がお互いの瞳に移る。

もちろんアーサーの瞳にも二つの鋭い光が映った。

「…やめて……」

鋭い光が移るアーサーの翡翠は潤み光が滲んだ。

どンドン近づく鋭い光。それにつれて滲んでいく。

「やめっ…!!…!!…!!」

悲痛な叫びと共に肉を裂く鈍い音が聞こえ、紅い雫が宙に舞った。

n e x t s t o r y

71・兄妹の想い（前書き）

ちはぴーさん、感想ありがとうございます

話が進まない…なぜ!!? ?

今月から新連載の準備せんとな

71：兄妹の想い

乾いた地面に垂れ落ちる真っ赤な雫はすぐに地面に染み込み赤黒い染みを作った。

フェリシアーノとロバートは目を丸くしながら肩で息をした。だが肩は震えて全身から力が抜けていくようだった。

「…なんで…」

フェリシアーノは震えている口でゆっくりと発声した。声もやはり震えていた。フェリシアーノから血は流れておらず目立った傷もない。それはロバートも同じだった。

確かに手応えはあった。

だがそれは目の前の敵からではなかった。

二人の間に割って入ったアーサーからだった。

「…なんでだよ！！アーサー！！」

2つの剣に胸部を貫かれたアーサーは胸部や口から血を流しながら立っていた。

実は二人が決着をつけようとした時、アーサーが二人の間に割り込み止めに入った。

だがアーサーは二人から剣を刺される羽目になりこのようになってしまった。

荒い息を上げるアーサーはそのまま横に倒れたアーサーの血が二人に飛びかかった。

「アーサー！……！」

「！……！」

アーサーの血がかかった途端、二人は正気に戻り、急いでアーサーの近くへ寄り添い体を抱えた。

今まで闘いを繰り返していた者達も手を止めてこちらを見た。

「ふえ……り……にい……さん」

アーサーは涙を流しながら小さく開いた口でゆっくりと喋った。

だが息はすでに虫の息でアーサーは瀕死の重傷で非常に危険な状態である。

「喋っちゃ駄目だよ……！」

「チツ……ファーストエイド……！」

フェリシアーノはアーサーの体に負担がかからないように優しく抱えてロバートは彼女に初級治療術をかけた。

だが傷口が少し塞がる程度で出血を止めるまでいたらなかった。

それを見てこの場にいる人間はサアと顔を青くした。

「なんで……こんなこと」

「……いや……だ……」

フェリシアーノが瞳から涙を流しながら傷ついたアーサーを抱きしめていると彼女は小さな声で喋り始めた。

「…ふ…たりには…きず…ついて…ほしく…ない…っ！！！」

辛そうに涙を流すアーサーに二人は目を丸くした。そして気付いた。アーサーは自分達が傷つくのが見たくなかったのだと。

アーサーは何度も自分達を止めようとしてくれた。だが自分達は…。

「…アーサー」

アーサーがこうなってしまったのは全て自分達の愚かな行いのせいだった。

フェリシアーノは自分に腹が立ち、アーサーを見た。

アーサーは動かなかった。

「…アーサー？…アーサー！！！！！」

「…くそっ！！！！！」

フェリシアーノはアーサーの心臓に手をやった。

心臓は静止していた。

それを見て二人は顔をさらに青くした。

「くそっ…俺のせいだ…！！！！！」

ロバートは悔しそうに地面を握り締めて奥歯を噛み締めた。

「決まりは決まりだとばかり言っ……結局は妹を救うことはおるか……殺そうとしちまうなんて……！！！！！」

「……ロバートさん」

「俺は……アーサーに何一つ兄らしいことして……ない……！！！！！」

俯いてそう言うロバートは自分を責めていた。

ロバートも本当はアーサーを心から思い大切にしていた。アーサーの幸せを心から願っていた。

アーサーが天使の力に目覚めた時も本当は処刑なんてしたくなかった。だがこのままではアーサーは世界のためにならないし、アーサーに辛い思いをさせるかもしれないと思ってしまった。良かれと思ってやったことが全て裏目に出てしまった。

「俺はっ……本当に駄目な兄貴だ……！！！！！」

ぼたりと紅い染みのある乾いた地面が濡れた。

血で濡れた両手には砂が付き汚れてしまった。

フェリシアーノはアーサーからロバートに目を移し、手のひらでアーサーの頬を触った。

そこに2つの影が落ちた。

「……悔いてる場合じゃないだろっ！！！」

突然いれられた濁に二人は顔を上げた。顔を上げた先にはエドワードが眉を釣り上げて怒鳴る姿があった。その後ろにはエドワードが連れてきたのであろう、必死な表情をしたリヒの姿があった。

「…エドワード…！リヒ…！」

「…どいてください…！」

リヒは早足で瀕死のアーサーのもとにかけよるとしやがんでアーサーの傷を見た。

「っ…酷い…傷が深いです…」

アーサーの傷の深さは予想以上であり、治療術のスペシャリストであるリヒさえも驚愕した。

リヒが驚愕するということは治せる確率が低いことを示しているわけ、それを知るロバートの瞳は不安げに揺れた。

だがリヒは両手をアーサーの体にかざし、こちらを振り向かずと言った。

「でも大丈夫です！治します…！」

リヒはまだ幼さが残る小さな少女だがその言葉は何よりも頼もしかった。

フェリシアーノとロバート、この場所にいる全員もリヒの言葉にほっと胸を撫で下ろしてリヒの治療風景を見た。

全員にはどこか安心した笑顔があった。

n e x t s t o r y

72・兄妹の絆（前書き）

ちはびーさん、感想ありがとうございます

今回から終盤に入るので文体がキャラ語りになります

主にフェリちゃんがね

72：兄妹の絆

リヒちゃんのおかげでアーサーは一命を取りとめることができた。でも意識はまだ戻らなくて休ませて安静させないといけなかった。でも俺は安心していた。

それはみんなも同じ。もちろんロバートさんも。

「……………」

「…ロバートさん」

「なんだよ……………」

俺は、治療を終え医療室のベッドの上で寝かされているアーサーを少し離れた所で立ちすくんで見ているロバート参戦に声をかけた。するとロバートさんはそっけなく俺を見る。

「…俺も兄ちゃんがいるんだ…今はちょっと仲違いしているんだけど……………」

俺はえへへと笑いながらそう言うけど、内心とても苦しかった。

仲違い。確かにそうだけど、そんな可愛いものじゃない。だって兄ちゃんが俺の敵になってしまっただけで、アーサーやみんなを苦しめたりしているから。けれど。

「…でも、そんな兄ちゃんでも俺にとっては大切な尊敬できる兄ちゃんなんだよ……………」

敵だとしても、俺は兄ちゃんを嫌うことができない。だって世界でたった一人の兄ちゃんだから。どんなことがあるうと、それは変わらない。それはアーサーも同じだと思う。

「アーサーもきつとそうだと思うよ」

「…冷たく接したことしかなくともか…」

ロバートさんが昔アーサーに意地悪していたのはフランスス兄ちゃんから聞いていた。

きつとロバートさんはアーサーと仲良くしたかったんだと思う。でもこの人、アーサーより不器用だからなあ。

けれどアーサーは、そんなロバートさん達が好きなんだと思う。

「うん！…だってロバートさん達の話をするアーサーは凄く嬉しそうだから！！」

俺は絶対的な自信を持ってそう言った。

だって、前にアーサーが自分の家族の話をしてくれたことがあった。アーサーは本当に嬉しそうに話してくれたんだから。

「…そうか」

ロバートさんは少し顔を赤くしてそっけなく言った。

ああ、やっぱりこの人不器用なんだね。そういうところはアーサーとそっくり。

「おやー？ロバート顔赤いけど？」

「可愛い可愛い妹に慕われてるってのが嬉しいんだよ！」

「ばっ…そんなんじゃないやねえよ…!!!」

いつの間にか現れたフランシス兄ちゃんとアルフレッド（と他の仲間みんな）がにやにやと面白いものを見るようにロバートさんを見ながら彼を弄る。

ロバートさん顔真つ赤だなあ。本当にアーサーが大好きなんだね。

そんな騒ぎのせいなのか、ベッドの上で眠っていたアーサーはゆっくり瞼を開けた。

アーサーが起きたことはまだ俺以外は気づいてなくて、俺はアーサーのそばによるとこっそりとアーサーに耳打ちをした。

内容はお兄さんに話しかけてというもので。

アーサーはそれを聞くと驚いたように目を丸くしたが、俺は大丈夫だよとアーサーを安心させて話しかけるように促した。

「……兄さん」

「……」

少しふるえているアーサーの声が聞こえて、ロバートさんはアーサーの方を勢いよく見た。

「……アーサー」

「……その…迷惑かけて…ごめんなさ…!!!」

俯いて少し泣きそうに謝罪しようとするアーサーをロバートさんは勢いよく抱き締めた。その瞬間、アーサーの翡翠の瞳は真ん丸になつて。

「……っ!!!」

「無事で良かった……！！！！」

アーサーを抱きしめるロバートさんは本当にアーサーが大切なんだ
なと思った。やっぱりどの兄ちゃんも同じなんだ。

普段はそっけない兄ちゃんも、昔怪我して泣いていた俺を抱きしめ
てくれた時の顔は今のロバートさんと同じだった。

「……良かったねアーサー」

俺は抱きしめられて嬉しそうにしているアーサーを昔の俺と重ねな
がら呟いた。

n e x t s t o r y

73・騎士団の到着（前書き）

ちはびーさん、感想ありがとうございます

73：騎士団の到着

あのアーサー処刑騒動から次の日。

アーサーの処刑は結局は取り消しになった。

ロバートさんが取り消しにすると女王様に伝えようとしたら、エドワードさんが伝えていたらしい。それにはみんなビックリしていた。エドワードさんには最初からこうなるって分かっていたみたいで。

「…そういえばエドワード

お前あの時リヒちゃんを連れてきたけど、アーサーが重傷になるって分かっていたのか」

フランス兄ちゃんが気になっていたことをエドワードさんに言うてみた。するとエドワードさんはやりと笑って「さあ？」と答えた。

前から思ったけど、エドワードさんって不思議な人だよな。

前に初めて会ったときも、俺達が船に乗れなくなったのを最初から分かってたみたいで。

「なんだよ！！それー！！」

「まあアル、エド兄さんだって色々あるんだと思っぞ」

「色々？」

アルフレッドを宥めるアーサーの表情は以前より柔らかくなっていった。ロバートさんとのわだかまりも解けたからだね。

それをみていたエドワードさんは俺に向かって口を開いた。

「そういえばフェリシアーノ

そろそろジャーマン帝国の騎士団がここに到着するんじゃないのか
「ああ！！そういえば！！！！」

………ってあれ？なんでエドワードさんが知ってるの？」

「さあな」

「ヴェー??」

「フェリシアーノ、騎士団が来るって本当か？」

「うん、そうだよー」

おかしいなあ。騎士団のみんながここに来るってこと知ってるのは
俺とアルフレッドだけなのに。

「なんで騎士団がここに？」

「それは騎士団がきてからの楽しみだよー！」

前に帝国でエリザベータさんから聞いた帝国の状況。

それを聞いて思いついたことがあって今こうして俺は騎士団を待つ
ている。

でもこれは俺とアルフレッドが立てた計画でまだみんなには内緒。

みんなが訳が分からずに困惑する中、俺はアルフレッドと目が合う
とにんまりと2人して笑った。

しばらく待っていると空間がぐにやりと歪んで光と共にバツシュと
アントーニヨ兄ちゃんが現れて、その後ろにはジャーマン帝国の騎
士団が現れた。

「！！バツシュ！？アントーニヨ！？」

「あと…ジャーマン帝国の騎士団…！！！！」

アントーニヨ兄ちゃんにはアーサーを救出する前に騎士団のところ

に行ってもらった。(なぜかバツシユもいるけど多分つき合わされ
たんだね)

現れた騎士団を見たたん、みんなは騎士団を睨みつけて警戒した。
それもそうだよ。ちよつと前には騎士団と一悶着あったから。

「ヴェー…みんな大丈夫だよー騎士団のみんなは良い人達ばかりだ
から」

「でも、こいつらはアーサーを」

「落ち着け兄さん、騎士団がアーサーを狙っていたのは俺の依頼で
アーサーを保護するように言っていたんだ」

「…そうだったのか？」

まあ、俺達もこの話はい最近になってエリザベータさんから聞い
ただけだね。

「…あの時は仕方なかったんですよ

あなた方に任せては王女は浚われてしまいますからね」

「…バツサリ言うな」

バツサリとはつきりと本音を口にするローデリヒさんに地味に傷つ
けられたけど、紛いもない事実だった。

あの時は本当に自分の力不足を痛感していた。

「でも…少しは強くなっているようですね」

「当たり前なんだぞ…!!!」

「そっだよ!!」

あの時から毎朝早く起きて剣を振るうようになったし、ジヨギング
もするようになった。これは本当に凄いことなんだよね。俺は早起
き苦手だし修行なんて爺ちゃんが死んでからろくにやっていなかっ

たもん。

これも全部、アーサーを守るためにやったことなんだね。なんか、改めてそう思うと照れちゃうな。

ヴェヘへとにやにやと嬉しそうに笑う俺にルートは話しかけづらそうに話しかけてきた。

「で、一体何をするんだ？騎士団と」

ルートの質問にみんなが俺に注目した。なんか照れちゃうみんなに注目されるって。

ルートの質問の答えを俺は元気よく言った。

「帝国を救うためだよ！」

さすがに俺のこの発言にはみんなフリーズしてしまった。するとアルフレッドが俺に続くように言った。

「みんなも知ってるだろう！皇帝が失踪した後にあのジャック・リッパーが帝国を牛耳ってみんなを苦しめてるって！！こんなのほっとけないだろう！！」

「…アル」

アルフレッドの言葉は子供っぽくて単純だけど、どこか胸を打たれたようだった。俺もアルフレッドもまだまだ子供だけど自分なりの正義はちゃんと持っている。

「……それって国を取り返すんだろ？」

「！アーサー」

「なら、ちゃんとした指導者ぐらい用意しろよばか」

「！」

俺達よりしっかりしているアーサーに言われて少し言葉に詰まってしまった。確かに俺達は指導者も計画も何も準備していない。しまった！とうなだれる俺とアルフレッドにアーサーは仕方ないなといった。

「で、作戦はどうするんだ？」

「…ヴェ？」

「ほら、早く考えるぞ」

やることいっぱいあるんだからな」

「！！アーサー」

アーサーは口角を上げて首を縦に振った。他のみんなも同じ動作をした。菊もフランシス兄ちゃんも耀もイヴァンもロバートさん達や騎士団や魔法騎士団のみんなも。

…みんな協力してくれるんだ。

みんなが協力してくれることに俺は嬉しくなって思わず嬉し泣きしそうになったけれど、ここは我慢。簡単に泣いたらアーサーにっかりされて溜め息をつかれてしまうからね。

「よーし！！！！やるぞ！！！！ね！ルート！！！」

「っ！！！！！」

「ほら、帝国取り返さないとー！」

バシバシとルートの肩を叩いても、ルートはフリーズしたままで何も反応しない。それどころか小刻みに震えだした。ルートのおかしい様子を俺は疑問に思いルートの様子を伺おうとしたその時。

「俺はやらないからな!!!」

「え!!!?」

怒鳴るようにそう宣言したルートに俺は恐怖を抱きながら目を見開いた。

ルートの言ったことは俺の予想とは違ったからだ。

「なんでだよ!!!ルート!!!」

「……とにかくやらないからな!!!」

「ルート!!!」

ルートは眉間に皺を寄せてどこかへ走り去ってしまった。

俺にはルートがなぜやりたがらないか理由が分からないけれど、去り際のルートの顔がとても悲しい顔をしていたことが分かった。

「!?!?フェリシアァー」

だから俺はルートの真意を知るためにルートが走って行った方向へ走って行った。

n e x t s t o r y

0 I : 温泉へ行こう！ (前書き)

番外編です

01：温泉へ行こう！

今日は戦いの前に休むために温泉地がある場所へ向かっているんだ。でも道のりが遠いから疲れちゃうね。

「ヴェー…まだなのー？」

「まだだ」

「もう歩き疲れたんだぞー！！！！」

「わがまま言うなアルフレッド」

歩いたせいで疲れがたまっている俺とアルフレッドはブーブー文句を言うがルートに簡単にあしらわれてしまう。くそー。

「そもそもなんで歩きなんだい！？」

今、俺もそう思っていた。バツシユの移動魔法を使ったり、エドワードさんのドラゴンで乗せていってもらえばいいのに。すると、ルートは溜め息をついて答えた。

「アーサーが歩きが良いって言ったんだ」

「まあ、アーサーさんは箱入り娘…いや箱入り姫なのであまり世間を知らないんで歩き回って色んな景色が見たいのですよ」

「ていうか、もう危険な目にはいっばいあうほど色んな景色見てるでしょ」

あの世間知らずな眉毛は「

「お前が一番最初に賛成したじゃねえあるか

お前、アーサーを甘やかし過ぎある」

「でも結局は賛成している僕達もアーサー君を甘やかしているけどね」

前から思っているけど、みんなはアーサーを甘やかしすぎだと思う。俺が言えることじゃないけど……ていうか俺が一番甘やかしているけど。

「結局、みんなアーサーが好きなんだろ」

白い翼で飛びながら話すアーティーを見上げながら俺達は啞然としていた。

なんで飛ぶんだろ。まあアーティー曰わく飛ぶのも大量がいるから歩くことと同じらしいけど。

でもアーティーの言うことは合っている。実際、俺はアーサー大好きだし。もちろんみんなもアーサー大好きなんだろうけど、俺の大好きは菊達とは違う。恋愛的な意味で大好きってことだから。

「……ていつか、よく考えれば歩くことの疲れなんて吹っ飛ぶよな」
「……だいたい想像できるけど」

「なんでだい？」

「だって、温泉つていえばエロスなイベントが待っている……」

「発言が予想通り過ぎるぞ君……!!」

ちなみにこの会話はアーサーとアーティーには聞こえないようにしている。聞こえてしまったら命が危ないからね。フランスス兄ちゃんのだ。

「……アーティーの胸見てみるよバインバインの巨乳だぞ……!!」ア

「サーはつるべただが、発展途上の女の子の身体はいいぞー!!」
「…何言ってるんだろこの人」

「なんだよ、アルフレッド!! 本当はアーサーと一緒に風呂入りたいんだろー!？」

「ちっ違う!!!」

アルフレッド、顔が真っ赤だよ。本当は入りたいたいだね。俺も気持ちが悪く分かるよ。
凄く、ね。

湯煙がたつ白濁色の温泉の中に俺とアーサーは浸かっていた。
俺は当然真っ裸だけど、アーサーは恥ずかしいからって温泉マナーを無視して体にバスタオルを巻いていた。

『ヴェー…温泉気持ちいいねアーサー』

『ん…そうだな』

アーサーの顔は真っ赤で湯気のせいで火照っているのかなって思ったけど、それだけじゃないみたい。

『ヴェー、アーサー顔真っ赤だね!』

『うっ…うるさい!!こっち見るな!!』

『ヴェヴェー、可愛い!』

『ひゃあっ!!!!』

素直に誉めてもアーサーは素直に受け入れずにそっぽを向いてしまった。だから俺は悪戯する気持ちで背後からアーサーに抱きついた。するとアーサーは甲高い声をあげて肩を跳ねさせた。俺の手のひらには小さいが柔らかな何かがあたっていた。

『!!!!ヴェっどうしたの!?!』

『っ…フェリの手が胸に…!!!!』

小さく柔らかい何かはアーサーの胸でバスタオルの中に俺の手が入り込んでいた。

少し手を動かせば、アーサーは顔を真っ赤にして目をぎゅっと瞑った。

『あー!!ごめん!!殴らないで!!!!』

『ん…』

『あれ?アーサー?』

普段のアーサーなら間髪入れずに俺を殴っているのに、今回は違った。いつもとはアーサーの様子が違った。

すると、じっと俺の方を見て頬を赤らめ上目遣いで言った。

『……フェリならいい』

『えっ……何が?!』

『……フェリなら、別に身体触られても良い』

なんて爆弾発言。ついにアーサーのデレ期が!!!

アーサーはすつと立ち上がって俺を見た。バスタオル越しからでもやっぱりアーサーは胸がなかった。けれど身体の形は綺麗で、すつきりとしたくびれや柔らかさそうな太股やすらりとした手足が魅力的だった。頬はほんのり桃色で。なんかエロい。

『え……ヴェえええ!!!?』

……いつ……いいの!?!』

『ん……触って……フェリ』

アーサーは勢いよくバスタオルをはいだ。バスタオルは真つ逆様に温泉へと落ちていった。

「うわああああ!!! フェリシアーノが半笑いで鼻血と涎垂らしてる!!!……恐ええ!!!」

「フェリシアーノ……!? しっかりしろ……!」

「……絶対妄想したあるな」

「……だな」

おわれ

74・ルートの苦悩(前書き)

ちはぴーさん、感謝ありがとうございます

テイルズとヘタリアがまさかのコラボレーションですね!!

今日はマイソロ3発売ですね

74：ルートの苦悩

「…あの馬鹿走ってどこか行きやがった」

ルートヴィヒは何故か自分の祖国を救うことに参加せずにどこかへ走って行ってしまった。そしてフェリはルートヴィヒを追って…。

最初は自分も追うべきかと思ったが、俺がつっこむ問題じゃないと思えばフェリに任せて追うことはしなかった。

「…まあ、いい」

こっちにはすることが色々あるからな」

「すること？」

「ああ、だろ？アーティー」

エドワード兄さんが言い出した言葉に俺は首を傾げた。

すると兄さんはアーティーの方を向いてアーティーはこくりと頷いた。

「時間は無駄には出来ない

だからアーサーは俺と天使の力をコントローलする簡単な修行をしてもらう」

「えっ…天使の力を!？」

「あんなのコントロールできるのかい!？」

「ああ、天使の力はコントロール出来ない和自我を失ってしまう恐ろしい力だからな」

「女王にアーサー処刑の中止を願い出た時も天使の力をコントロールできるようにすることを条件にしたからな」

「…そういうえば、エドワード兄さんが俺の処刑の中止を願い出てくれてたんだよな。」

「アーティーと兄さんはそこまで考えていてくれていたんだ。」

「…簡単な修行って言っても危険なものだ」

「少しでも気を抜いたら死ぬかもしれないぞ」

「…死ぬ…」

「アーティーの言葉に俺は冷や汗を流し息をのんだ。」

「簡単な修行だが気を抜いたら死ぬほど危険なもの…。たしかにあんな強大な力だ、コントロールするためには危険な修行が必要だろう。」

「…そんな危険なものなら別の方法でやればいいんじゃないの？」

「…そういうわけにはいかないんだ」

「他の方法なんて無い」

「アーサー…それでもやるか？」

「アーティーはジツと俺を見る。俺と瓜二つの顔だがアーティーの顔は今までの修羅場や修練をくぐりぬけてきたことが分かるほど真剣な表情だった。」

「アーティーの問いへの答えは決まっていた。」

「…やるに決まっているだろ！！」

「俺の答えにアーティーは表情を緩めて「じゃあ始めるか」と言った。」

「ルート……!!何やってるの……!!」

俺はあの塔から大分離れた丘まで走った後、丘のふもとから頂上を見上げたらムキムキで敵つい人がいた。間違いなくルートだった。俺はルートを見つけると丘の急な斜面を駆け上がっていった。丘の頂上まで行くのはとても体力使うから俺もう疲れちゃったよ。ルートは走るのが早すぎるよ。

「はあ……ルートー」

ようやく頂上まで来た俺は立ちすくんで空を見上げているルートに後ろから声をかけた。だけどルートは黙ったままでこっちを向いてくれない。

「……ルートは……良い奴だね」

「……………」

「こんなことになるまで俺たちの旅に付き合ってくれたんだもん」

最初は俺がアーサーのために始めた旅だった。

けれどルート迷惑かけられるとわかっていながらもここまで付き合ってくれた。だからルートにはとても感謝してる。

「…ねえ、帝国を取り返そうよ」

感謝しているからこそ、ルートには苦しんで欲しくない。

俺はわかっているんだよ。

ルートにとって帝国は自分の家みたいなものだということも。

ギルベルトが守ってきた帝国を守りたいと思ってることも。

ルートは帝国の話を出されたせいか、こちらを振り向かずにくっくりと口を開いた。

「……………俺も取り返したい……………」

「なら…！」

「でも、無理なんだ」

「…なんでなんだよ！」

ルートの拳は力が込められ小刻みに震えていた。

俺はそれを見て、嫌な予感を感じた。

「……………俺には帝国を守る権利がない」

「…もしかして、ギルベルトに酷いこと言っちゃったこと気にしているの？」

「それも…あるが」

「でも、ギルベルトもルートに帝国を守って欲しいんだよ…！」

俺はてつきり兄であるギルベルトに酷いことを言ってしまったことを気にしているからかと思っていた。
なぜなら、和解する前にギルベルトは消息を絶ってしまったのだから。
でも、本当の理由はそれではないらしい。

「…………俺は兄さんの弟じゃないからだ！！！」

ルートの一言に俺は目を丸くした。

「え…！？」

冗談だと思ったけど、こういう場所で冗談なんか言わないだろう。ましてやあの堅物で真面目すぎるルートなら。
だから今のルートの言葉が必死過ぎて、俺はつい聞き返してしまった

た。

「……俺は……偽物だ……」

こちらを向いたルートの顔がとても悲しすぎて、俺は何も言つことが出来なかった。

n e x t s t o r y

0 J : 料理クライシス (前書き)

やっぱり番外編

このネタはやっておきたかった

0J：料理クライシス

なにこれ、殺戮兵器！！？

戦闘後

フェリ「ヴェー…、お腹すいたねえ」

ルー「そうだな」

フラ「じゃ、お兄さんが今から作ってあげますか」

アサ「その必要はないぞ」

フラ「ええっ！！？」

アサ「俺が作ったから」

フラ「げえっ！！？」

フェリ「えっ…！？アサの料理！？食べたーい！！」

アサ

I love

フラ「おいっ！！！！！！」

ルー「気が利くなアサは」

フラ「おい待て！アサの料理は…！！！！！！」

アサ「ウインドカッター」

フラ「ぎゃあああああ！！！！！！」

フェリ「じゃあいただきます！！！！！！」

【その後フェリシアノ達の行方を知る者はいなかった】

なんで食えるんだよ!!!

アサ「飯できたぞ」

フェリ「……」 被害者

ルート「……」 被害者

フラ「……」 料理食べてないけど被害者

アサ「?どうしたんだよ」

フェリ「(料理が下手っていう自覚がないんだ……)」

フラ「(悪気がないのが余計質が悪い……)」

アサ「どうしたんだよ?お前ら、菊はもう食べてるぞ」

フラ「はああ!!?」

菊「……(死)」チーン

ルート「菊うつうつうつ!!!!」

フラ「ライフボトル!!ライフボトルを使えええ!!!!」

フェリ「ライフボトルがきれてるよ!!!!」

フラ「じゃあレイズデッドだ!!!!菊にレイズデッドをかけるんだ

!!!!そして蘇生させるんだアサー!!!!」

アサ「は?菊は満腹になって眠くなって寝ているだけだろ!?!」

フラ「天然だ!!この子天然だ!!」

アル「たく、モグモグもう君達ムシャムシャご飯中ぐらいパクパク

静かにしてモグモグくれないかい」

フラ「お前は普通に食事していたのかよ!!」

フェリ「アルフレッドはアサの料理食べても平気なんだね」

二の舞だね！

耀「飯できたあるよ〜」

イヴァ「わあ！さすが耀くんだね！美味しそう」

アサ「俺も…耀の料理の添え物作ってみたんだが」

フェリ「！！！」 被害者

ルート「！！！」 被害者

フラ「！！！」 とぼっちり食らった被害者

菊「！！！」 前回死んだ被害者

アル「えー…またかい」 平気な顔して食ってた奴

菊「あ…あのー…アーサーさん…それは…」

アサ「ん？」

ルート「えっと、なんというか」

アサ「なんだよお前ら」

フェリ「…食べたら、死んじゃうというか…死んじゃうというか…」

皆「空気読め！！！！フェリシアーノ！！！！！！」

アル「まあ、不味いつてことだよ」

皆「お前はもつと空気読め！！！！」

アサ「え……………」

皆「えっ！！！」

アサ「……………（うるっ）」

フェリ「なっ…泣かないでアーサー！！！！！！！！」

アサ「なっ…泣いてねえよっばかっ…うっ…」

フラ「泣いてんじゃん！！！」

菊「泣き顔萌えー！！！！！！！！」

耀「お前は自重しろある」

ロバ「アーサー泣かした奴は誰だゴルア！！！！！！」

フラ「恐いお兄さん来ちゃった！！！！！」

罰だよ罰

菊「アーサーさん、フェリシアーノ君とフランシスさんとアルフレッドさんがアーサーの料理食べたと言っていました！！是非作ってあげて下さい」

3人「嫌あああああ！！！！！！！！！！」

アサ「わかった！今すぐ作る」

フェリ「なんで俺達なのー！？」

フラ「アルフレッドだけでいいだろ！」

アル「やだよ！食べることができても不味さは分かるんだからさ！」

フラ「くっ…アーサーの風呂を覗いたのが運の尽きだったな」

アル「もう！フランシスが萌えー！！とか叫ぶからだよ！！」

フェリ「しかも、菊が怖かったし」

【その後フェリシアーノ達の行方を知る者はいなかった】

おわれ

OK： オツケーじゃないよ！（前書き）

くだらねえ駄文です

OK： オツケーじゃないよ！

反省会

フェリ「みんな全員集合ー！！」

アサ「？どうかしたのかフェリ」

フェリ「今から反省会をします！」

皆「反省会！？」

ルート「なんで反省会など」

フェリ「睦月（作者）は思った…」

あれ？なんかみんなキャラ崩壊してね？

…と

菊「今更ですか今更」

耀「まあ、一番崩壊しているのはお前ある」

フェリ「だから今から反省会して罰を受けてもらいます」

イヴァ「うっわあ、良い度胸してるね」

アル「ていうか罰って何かい罰って」

フェリ「それも話し合えって」

フラ「なんか楽しそうだなオイ」

アサ「…嫌な予感が」

フェリ「じゃあ、まずはアーサー！」

アサ「！！びくっ」

フラ「アーサーはあれだよな

攫われすぎ」

アサ「うっ…」

アル「3回も攫われているんだぞ」

イヴァ「もうピ 子姫だね」

フェリ「あ、アーサーが攫われるのはヒロインだから仕方なあーい

「！！！！」

耀「なんだそれ！！！！」

フェリ「だって俺主人公なんだよ！絶対的な最高権力なんだよ！」
ルート「笑顔で言うことか…？」

菊「私はアーサーさんについては反省することなんてありませんよ」
耀「甘やかしすぎある！！」

フラ「じゃあお色気！！パーティーキャラ以外にお色気晒したこと
！！」

アル「確かにパンチラやセクハラや拘束 レイがあつたね！」

今回下ネタは自重しています。

菊「ギルベルトさんにスカートめくられていましたしね」

フラ「それに傷だらけで拘束プ イがあつた上にレ プされそうに
なつたしな！あとセクハラされてるし！」

アサ「っセツ…セクハラはお前らが悪いんだろ！！！！」

フェリ「これはアーサーにお仕置…じゃなくて罰を与えなきゃいけ
ないね！」

アサ「はああ！！？」

「ひっ…やっ…やだあっ」

「無理だよ」

アーサーには罰として俺達を気持ちよくしないとイケないから」

「あう…んあ／／／」

「パーティー、アーサー以外みんな男だよ？」

「ん、ひああああっ！！！！／／／／／」

フラ「とかいう罰が良いと思いまーす」

アサ「そうか、取りあえず帰れ」

菊「はい！猫耳ミニスカメイドがいいと思います！！」

フェリ「企画会議？」

次回の連載を決めるやつですよ
あとアーサーはメイド服のまま

アサ「はあっ!!?」

反省会企画会議をしよう!

フェリ「3月いっぱいには終わる予定か」

半年だよ、連載したの」

菊「頑張りましたね私達」

アル「アーサーなんてお色気キャラ(ヒロイン)だもんね」

イヴァ「今更ながら名残惜しいよね」

耀「まだ2月ある」

終わってねえある」

フラ「とにかく企画会議だ企画会議」

アサ「どうせまたRPGものだろ？」

アル「じゃあ今度はガチなテイルズパロしようよ!!」

ルート「これはテイルズパロじゃないのか」

アル「話オリジナルは嫌だよもう」

菊「どうせヒロインの座はアーサーさんですしね」

アサ「最悪だ」

アル「じゃあ!!シンフォニア!!シンフォニアにしよう!!」

耀「そういえば中の人がテイルズ主人公だったあるなお前」

フラ「俺の中の人も出演しているけどね」

アル「これなら、ヒロインの肌の露出も無いしいいだろ!!!!!!」

アサ「俺はヒロインのコスプレするのが前提なのか!!!!」

フェリ「じゃあデステイニ―2！！！！また俺が主人公！！！！」
アル「何言っているんだい！！！！シンフォニアだろ！！そして俺が
ヒーロー（主人公）さ！！！！」
フェリ「何言ってるんだコノヤローめが！！！！」
アル「んだとコラ」
フラ「こいつらの喧嘩恐い！！！！」
イヴァ「やっぱり企画会議なんて無理だったね」
菊「本当ですね」

おわれ

75：儂い涙

「うわぁ…アーサーお前どんだけ過酷な修業してたんだよ」

青あざや火傷痕だらけの俺の体を見てフランスはうわぁと声を上げた。
ていつか…。

「今は着替え中だ馬鹿あああ！！！！！！」

「ぐほあっ！！！！！！」

下着姿の俺はフランスにめがけて渾身の跳び蹴りを食らわせた。
ちなみに俺の蹴りはフランスの顔にクリーンヒットした。

「フランススくん！生きてるー？」

俺は屍となったフランスをつついているイヴァンを後目に塔から出て行った。

なんとなく、外の空気を吸いたかった。

アーティーの修業はやはりそんなに甘くなく、俺の体は傷つかずにはいられなかった。

でも今はそんな事よりルートヴィツヒのことが心配だった。フェリが追いかけたのだから大丈夫だとは思うが……。少しだけ心配だった。いくら親友同士と言えど、簡単におさまりそうないと思う。その時は彼らになんと声をかければいいのか…。

「……………」

「！…フェリ」

しばらく外で夜風を感じると、フェリはふらふらと「ちら」に向かって歩いてきた。どこか様子がおかしい。

「…フェリ…？」

「……………アーサー」

「…どうしたんだよ」

フェリはふらふらと俺のすぐ側までやってくると、ゆっくりと口を開いた。

「…なんでもないよ」

嘘だ。

そう思ったが、口に出すことはできなかった。

嘘だということがまるわかりだった。

そんな顔を見れば。

「…聞いたりはしない……………でも」

「うん……………帝国は絶対に取り戻すよ…絶対に…」

これは嘘じゃない。

フェリの目を見るだけでわかった。

俺はフェリの言葉にこくりと頷くと周りを見渡した。

周り…というかこの塔は小さな林に囲まれていた。

だからこの高い塔はかなり存在感があった。

今夜は満月で金色の光が辺りを照らしていた。

ふいに満月を背景にしている塔のてっぺんを見ると人影があった。

「……！」

「あれ……」

その人影の周りはきらきらと小さな光が飛び散っているようでとても綺麗だったがどこか儚かった。

「……アーティー？」

その人物はアーティーで、何故か空を見上げて涙を流していた。

「みんな……辛い過去があるんだな……」

「……うん」

俺が思わず零した言葉にフェリは優しく頷いて俺の手を優しく握りしめてくれた。

それがとても嬉しくて、勇気をもらった。

だから俺はすぐに決断した。

「……フェリ、お前に俺の過去を知ってほしい」

今まで、誰にも話すことができなかった。

それは自分が過去の悲しみを思い出して傷つきたくなかっただけ。

だけど、今なら……フェリになら話せる。

俺からの思いがけない言葉にフェリは目を丸くしたが、すぐに手を強く優しく握ってくれた。

n e x t s t o r y

76：昔話（前書き）

お久しぶりです

JUKENSEIIなんで資格やら模試やらと何ヶ月も更新できませ
んでした

皆さんにご迷惑をおかけしました
すみません

これからは少しずつ更新できるのでよろしく願います

76・昔話

「誰かにこんなこと話すなんて…俺もよっぽど…」

アーサーは暗い顔で自嘲したように笑った。

「……」

アーサーはゆっくりとフェリシアーノを見ると、疲れ切った笑みを浮かべて過去を語り始めた。

「俺…昔、人の大切なもの奪ってしまったんだ」

「……」

いきなり、衝撃的な発言をした。フェリシアーノはそれに目を丸くしながらもアーサーの話聞いた。

「…昔、フランススが俺の専属騎士になって自分の隊を持ち始めた頃そのフランススの隊には女が一人いたんだ」

「……」

「そいつの名前はジャンヌ」

優しくて強くて美しくて素敵な人だった
ジャンヌはフランスのことが好きだった
多分、フランスも……」

「兄ちゃん、そんな人がいたんだ……」

「その頃は誰もが大切な人がいて幸せを感じていた
アルもその頃は俺の側にいてくれて嬉しかったんだ」

前にフランスから少しアーサーの過去話を聞いたことがあるフェ
リシアーノだが、あの時よりも胸が痛くなるほどの悲しみを感じた。

「……けれどな、幸せはそんな長くは続かなかった」

そう言った瞬間アーサーの声が沈んだ。

だがアーサーは語り続けた。
自分の過去を。

昔、魔術を暴走させ、たくさんの人を死なせてしまったこと。そし
てその中にフランスの最愛の人ジャンヌとアルフレッドの母親も
含まれていたこと。

フェリシアーノは黙って聞いていてくれたが、アーサーは話し続け
る度に昔の記憶が蘇り意識が飛びそうになった。

『化け物だな…』

『…天使じゃなくて…悪魔だろっ!!』

自分を罵倒する人々。

『…アーサーなんか嫌いだっ!!!』

『…アーサー…お前には…人の痛みが分からないのかっ!!!』

フランスは二度と俺に笑いかけようとしなかった。

アルは俺を憎んで、俺の前から姿を消した

…それから、俺は部屋に閉じこもった

誰も関わらないように、誰も苦しめないように

そんなときに姉さんが死んだんだ

わかったんだ

生きてても悲しみしかないって

一通り話し終えたアーサーの瞳からは涙が一筋流れた。

「…そう、だよな……俺は生まれた時に死の宣告をされたからな
17年しかない人生だって」

黙っていたフェリシアーノは急にアーサーの肩を掴み問いただした。

「…それって……！！！」

その後の言葉には声がつかなかった。

大きなショックのあまり、口がうまく動かなかった。

アーサーの寿命のタイムリミットはすぐ近くにあった。

「…そんなの嘘だよ……！！！！！」

「……フェリ」

自分の両肩を力強く掴んで揺さぶるフェリシアーノに対してあまり
何も言わないようにした。

「だって……アーサーは生きていんじゃないの!？」

「……」

たとえ彼がなんと言おうと、自分の気持ちや本音を押しさえ続けないといけない。

「…俺はアーサーに生きてほしい」

絶対、出しては行けない。

「アーサー!!!」

…絶対に。

その時、突然この空間に一瞬歪みが生じた。

突然の出来事にフェリシアーノは戸惑いですが、アーサーはまぶたを閉じて冷静に歪みを探知した。

「……………」

アーサーはすぐにそれを探知することができた。
ゆっくりと瞳を開くと信じられないと言つような顔でフェリシアー
ノを見た。

「今…世界の魔力が乱れた…？」

アーサーが感じ取った歪みはこの空間だけではなく、世界にも発生
していた。

それはとんでもない事態が起きていることを示す。

世界の中で最も魔力が高い場所。そこに異変が起きたのだ。

「…え…どういふ……」

フェリシアーノは意味が分からず首を傾げると、エドワードがこち
らに近付いてきた。

「アーサー……！」

「兄さん……今……」

エドワードも異変に気づいているようで、少しだけ取り乱していた。
それでフェリシアーノはやっと気付いた。

「ブリティッシュランドが襲撃された
…帝国にな」

「!!」

歪みはブリティッシュランドから発生していたのだった。

n e x t s t o r y

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6181i/>

TALES OF HETALIAN

2011年5月14日05時43分発行